

HP Business Service Management

Windows, Linux オペレーティング・システム用

ソフトウェア・バージョン : 9.20

BSM プラットフォーム管理ガイド

ドキュメント・リリース日 : 2012 年 8 月 (英語版)

ソフトウェア・リリース日 : 2012 年 8 月 (英語版)



ご注意

保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピュータ・ソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HP からの有効な使用許諾が必要です。商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211 および 12.212 の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© Copyright 2005-2012 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標について

Adobe® および Acrobat® は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

AMD および AMD Arrow ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

Google™ および Google Maps™ は、Google Inc. の商標です。

Intel®, Itanium®, Pentium®, および Intel® Xeon® は、米国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

iPod は Apple Computer, Inc. の商標です。

Java は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

Microsoft®, Windows®, Windows NT®, Windows® XP, および Windows Vista® は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

謝辞

本製品には、Apache Software Foundation(<http://www.apache.org/>) (英語サイト)によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、JDOM Project(<http://www.jdom.org/>) (英語サイト)によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、MX4J Project(<http://mx4j.sourceforge.net>) (英語サイト) によって開発されたソフトウェアが含まれています。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメント・リリース日は、ドキュメントが更新されるたびに更新されます。
- ソフトウェア・リリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかの確認には、次のサイトをご利用ください。

<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>

このサイトを利用するには、HP Passport への登録とサインインが必要です。HP Passport ID の取得登録は、次の Web サイトから行なうことができます。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>(英語サイト)

または、HP Passport のログイン・ページの[**New users - please register**]リンクをクリックします。

適切な製品サポート・サービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HP の営業担当にお問い合わせください。

サポート

次の HP ソフトウェアのサポート Web サイトを参照してください。

<http://support.openview.hp.com>

HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧ください。

HP ソフトウェア・オンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。HP ソフトウェア・サポート Web サイトのサポート範囲は次のとおりです。

- 関心のある技術情報の検索
- サポート・ケースとエンハンスメント要求の登録とトラッキング
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア・カスタマとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport ID を登録するには、以下の Web サイトにアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>(英語サイト)

アクセス・レベルに関する詳細は、以下の Web サイトにアクセスしてください。

http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp

目次

BSM プラットフォーム管理ガイド	1
目次	6
プラットフォーム管理の概要	15
BSM へのアクセスと操作	16
BSM の管理	17
BSM の起動方法と停止方法	18
プロセスおよびサービスのステータスの表示方法	19
Windows のスタート・メニュー	20
BSM へのログイン	21
LW-SSO を使用した BSM へのログイン	22
ログインの詳細オプション	23
特定のページにリンクする	24
JMX コンソールの使用	25
BSM ログイン・フロー	26
ログインとログアウトの方法	27
ログインの詳細オプションの使用	28
JMX パスワードの変更方法	30
キースタア証明書の作成方法	31
ログイン試行およびログインしているユーザの追跡方法	32
セキュリティに関する注意事項と予防策	33
BSM ユーザ・インタフェースへのログイン	34
BSM ログイン・ページ	34
[このページにリンク] ウィンドウ	34
トラブルシューティングおよび制限事項	36
BSM の移動および使用	40
ユーザ・インタフェースの拡張機能	43
マストヘッド・タイトルおよびロゴのカスタマイズ方法	45

BSM を表示するためのクライアント要件	46
メニューおよびオプション	48
セットアップと保守	52
ダウンロード	53
タスク	54
UI コンポーネント	55
ライセンス管理	57
タスク	58
UI の説明	59
ヒント / トラブルシューティング	61
サーバ・デプロイメント	62
詳細	63
タスク	64
UI の説明	66
トラブルシューティングおよび制限事項	69
データベース管理	70
データベースの履歴データのパーティショニングとページ	72
プロファイル・データベースからの不要データの削除	74
Microsoft SQL Server でのプロファイル・データベースの設定方法	75
Oracle サーバでのユーザ・スキーマの設定方法	76
ページ・マネージャの操作方法	77
再集計のみのオプションを有効にする方法	79
BSM で受信するデータの 1 分あたりのイベント数を決定する方法	80
データ・マーキング・ユーティリティ設定のカスタマイズ方法	81
データベース管理のユーザ・インタフェース	82
[データベース管理] ページ	82
[データ・マーキング・ユーティリティ] ページ	82
[プロファイル・データベースプロパティ - MS SQL Server] ページ	85
[プロファイル・ユーザスキーマプロパティ - Oracle サーバ] ページ	86
[ページ・マネージャ] ページ	88
トラブルシューティングおよび制限事項	91
インフラストラクチャ設定	92

インフラストラクチャ設定 マネージャを使用したインフラストラクチャ設定の変更方法	93
ping の時間間隔の変更方法	94
一時画像ファイルの場所と有効期限の変更方法	95
一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法	96
複数のゲートウェイ・サーバ・マシンによる一時ディレクトリへのアクセス方法	97
BSM が一時画像ファイルを保持する期間の変更方法	100
一時画像ファイルが削除されるディレクトリの変更方法	103
UI の説明 - [インフラストラクチャ設定 マネージャ] ページ	104
監査ログ	105
詳細	106
タスク	108
UI の説明	109
BSM サーバ時間の同期	111
BSM サーバ時間の表示方法	112
英語以外のロケールの操作	113
インストールとデプロイメントに関する問題	114
データベース環境に関する問題	116
管理に関する問題	117
サービス状況に関する問題	118
サービス・レベル管理に関する問題	119
レポートの問題	120
Business Process Monitor に関する問題	121
SiteScope に関する問題	122
Real User Monitor に関する問題	123
エンド・ユーザ管理での管理に関する問題	124
データ・フロー管理に関する問題	125
多言語の問題	126
多言語ユーザ・インタフェース(MLU) のサポート	127
注意事項および制限事項	128
BSM ログ	130
ログ・ファイルの場所	131
ログの重大度レベル	132

ログ・ファイルのサイズと自動アーカイブ	133
JBoss ログとTomcat ログ	134
変更ログ・レベルの変更方法	135
イベントのデバッグ・トレース・ログを有効にする方法	136
Logging Administrator	137
ポートの用途	138
ポートを手動で変更する方法	139
BSM の受信トラフィック	141
BSM の送信トラフィック	142
BSM のローカル・トラフィック	143
ファイルのバックアップに関する推奨事項	146
データ・エンリッチメント	148
ロケーション・マネージャ	149
詳細	150
タスク	151
UI の説明	156
コンテンツ・パック	165
コンテンツ・パックの定義	170
コンテンツ・パックの依存関係	171
コンテンツ・パックのエクスポート	174
コンテンツ・パックのインポート	175
コンテンツ・パックの作成方法と管理方法	176
コンテンツ・パックを公開するためのチェックリスト	180
コンテンツ・パック・マネージャのユーザ・インタフェース	183
[コンテンツ パック] ページ	183
[コンテンツ パック定義の新規作成] ウィザード	185
[一般] ページ	186
[コンテンツ] ページ	187
[依存関係] ページ	190
[サマリ] ページ	191
[コンテンツ パックのインポート] ダイアログ・ボックス	192
コンテンツ・パック・マネージャのコマンドライン・インタフェース	193

使用法	193
コンテンツ・パックを自動的にアップロードするコマンドライン・インタフェース	196
使用法	196
トラブルシューティングおよび制限事項	199
ダウンタイム管理	200
CI のダウンタイムの作成方法と管理方法	202
ダウンタイム REST サービス	204
1 回 かぎりのダウンタイム・スケジュールの例	206
週次ダウンタイム・スケジュールの例	207
月次ダウンタイム・スケジュールの例	207
[ダウンタイムの管理] ユーザ・インタフェース	208
[ダウンタイムの管理] ページ	208
新規ダウンタイム・ウィザード	210
[プロパティ] ページ	211
[CI の選択] ページ	211
[スケジュール設定] ページ	212
[アクション] ページ	214
[通知] ページ	216
[プレビュー] ページ	217
トラブルシューティングおよび制限事項	218
春 (標準時間から夏時間へ)	218
秋 (夏時間から標準時間へ)	219
ダウンタイムに影響する DST の変更 — 各例のサマリ	220
ユーザ, 権限, および受信者	222
ユーザ管理	223
権限	225
権限のリソースについて	225
ロール	227
操作	228
セキュリティ担当者	228
グループとユーザ階層	229
ユーザ・メニューのカスタマイズ	231

ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー	232
ユーザおよび権限の設定方法 — 使用例のシナリオ	234
権限の割り当て方法	240
グループとユーザ階層の設定方法	241
JMX コンソールを使用してセキュリティ担当者のステータスを削除する方法	244
JMX コンソールを使用したユーザ情報のエクスポートおよびインポート方法	245
ユーザ・メニューのカスタマイズ方法	247
ユーザ・メニューのカスタマイズ方法 — 使用例のシナリオ	249
カスタム・ページャまたは SMS サービス・プロバイダの追加方法	252
BSM 全体に適用するユーザ管理ロール	254
スーパーユーザ	254
管理者	254
システム変更者	262
システム閲覧者	267
カスタム・スーパーユーザ	270
カスタム管理者	276
BPM 閲覧者	281
BPM 管理者	281
RUM 管理者	282
RUM 閲覧者	282
特定のコンテキストに適用するユーザ管理ロール	284
ユーザ管理操作	288
ユーザ管理のユーザ・インタフェース	308
[グループの作成]ダイアログ・ボックス	308
[ユーザの作成]ダイアログ・ボックス	308
[カスタマイズ]タブ(ユーザ管理)	309
[一般]タブ(ユーザ管理)	310
[受信者]タブ(ユーザ管理)	312
[階層]タブ(ユーザ管理)	312
[権限]タブ(ユーザ管理)	314
リソース・ツリー表示枠	314
[ロール]タブ	317

[操作]タブ	317
ユーザ管理のメイン・ページ	318
[グループ/ユーザ]表示枠	319
[グループのマッピング]ダイアログ・ボックス	321
受信者管理	324
受信者の設定および管理方法	325
カスタム・ページまたはSMS サービス・プロバイダの追加方法	326
[受信者管理]ユーザ・インタフェース	328
[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックス	328
[受信者]ページ	328
[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス	330
[電子メール]タブ	334
[SMS]タブ	335
[ページ]タブ	337
個人設定	339
BSM のメニューおよびページのカスタマイズ方法 - ワークフロー	340
BSM メニューおよびページのカスタマイズ方法 — 使用例のシナリオ	341
[個人設定]ユーザ・インタフェース	343
[ユーザアカウント]ページ	343
[メニューのカスタマイズ]ページ	344
[受信者]タブ	345
認証方法	346
SSO 認証方法の設定	347
LDAP 認証の設定	348
BSM の認証モード	349
[認証方法]ユーザ・インタフェース	350
[認証方法]ページ	350
認証ウィザード	351
[シングルサインオン]ページ	351
[SAML2 設定]ダイアログ・ボックス	354
[LDAP の全般設定]ページ	356
[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックス	359

[LDAP ユーザの同期設定] ページ	360
[サマリ] ページ	361
ライトウェイト・シングル・サインオン方法	363
複数ドメインおよびネストされたドメインをインストールするための LW-SSO 設定	364
[未知のユーザ処理モード] の設定方法	365
JMX コンソールを使用した LW-SSO パラメータの変更方法	366
クライアント側の認証証明書を使用して BSM へのユーザ・アクセスを保護する方法 ..	367
外部認証ポイントを使用して BSM へのユーザ・アクセスをセキュリティ保護する方法 ..	368
トラブルシューティングおよび制限事項	369
Identity Management Single Sign-On の認証	370
IDM-SSO での BSM リソースのセキュリティ保護	371
トラブルシューティングおよび制限事項	373
LDAP 認証およびマッピング	374
グループのマッピング	375
ユーザの同期	376
以前のバージョンの BSM からアップグレードした後のユーザの同期	378
標準設定のユーザ権限割り当てに対する微調整の実行	379
グループのマッピング方法とユーザの同期方法	380
以前のバージョンの BSM からアップグレードした後にユーザを同期する方法	382
BSM へのログインに使用される属性の変更方法	383
SSL による LDAP サーバと BSM サーバ間のセキュリティで保護された通信方法	384
使用されなくなったユーザの削除方法	385
トラブルシューティングおよび制限事項	386
LW-SSO 認証 - 一般的な参照情報	387
LW-SSO のシステム要件	388
LW-SSO セキュリティ警告	389
トラブルシューティングおよび制限事項	390
レポート管理と警告管理	392
レポート・スケジュール管理	393
レポート・スケジュール管理のメイン・ページ	394
警告配信システムの設定	396
警告およびダウンタイム	398

効果的な警告スキーマの計画	399
警告配信システムの設定方法	400
警告のカスタマイズ方法	403
警告ログ	410
警告の詳細レポート	413
トラブルシューティングおよび制限事項	415
EUM 警告通知テンプレート	416
クリア警告通知テンプレート	417
EUM 警告の通知テンプレートの設定方法	418
クリア警告通知のテンプレートの設定方法	419
EUM 警告通知テンプレートのユーザ・インタフェース	420
[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックス	420
[通知テンプレート]ページ	424
トラブルシューティング	426
トラブルシューティングおよび制限事項	427

プラットフォーム管理の概要

本書では、HP Business Service Management(BSM)を開く方法と、設定および管理方法について説明します。

本書は、次の各部に分かれています。

- **BSM へのアクセスと操作** : BSM を起動する方法、アプリケーションへのログインの方法、ユーザ・インタフェースの概要について説明します。
- **セットアップと保守** : インフラストラクチャの設定や、タイム・ゾーン、言語、ログ、バックアップなどの基本的な設定オプションについて説明します。
- **データ・エンリッチメント** : この部分は、次の各セクションで構成されています。
 - **ロケーション・マネージャ** - 複数の地理的場所を扱う方法を説明します。
 - **コンテンツ・バック** - BSM が監視するコンテンツ・バックに含まれるオブジェクトまたは CI の定義方法を説明します。
 - **ダウンタイム管理** - システムのダウンタイムの管理方法を説明します。
- **ユーザ、権限、および受信者** : BSM へのユーザ・アクセスの管理方法を説明します。
- **レポート管理と警告管理** : レポートのスケジュールと警告の設定方法を説明します。
- **トラブルシューティング** : システムの一般的な問題や制限事項を説明します。

第1部分

BSM へのアクセスと操作

第1章

BSM の管理

本項では、BSM の起動方法、プロセスおよびサービスのステータスの表示方法、Windows の[スタート]メニューのオプションについて説明します。

BSM の起動方法と停止方法

Windows で BSM を起動または停止するには、次の手順を実行します。

[スタート] > [プログラム] > [HP Business Service Management] > [Administration] > [Enable HP Business Service Management]/[Disable HP Business Service Management] を選択します。分散環境を有効にする場合は、まずデータ処理サーバを有効にし、次にゲートウェイサーバを有効にします。

Linux で BSM を起動または停止するには、次を実行します。

```
/opt/HP/BSM/scripts/run_hpbsm start | stop
```

デーモン・スクリプトを使用して BSM を起動、停止、再起動するには、次を実行します。

```
/etc/init.d/hpbsmd {start| stop | restart}
```

注: BSM を停止しても、BSM サービスは Microsoft の[サービス]ウィンドウからは削除されません。BSM サービスは、BSM をアンインストールした後にのみ、[サービス]ウィンドウから削除されます。

プロセスおよびサービスのステータスの表示方法

BSM サービスと High Availability Controller によって実行されるプロセスおよびサービスのステータスは、BSM サーバ・ステータス HTML ページで表示できます。

プロセスおよびサービスのステータスを表示するには、適切な手順を実行します。

- Windows : [スタート] > [プログラム] > [HP Business Service Management] > [Administration] > [HP Business Service Management Status] を選択します。
- Linux : `opt/HP/BSM/tools/bsmstatus/bsmstatus.sh` を実行します。
- リモート・コンピュータからの場合 : Web ブラウザで URL `http://<サーバ名>:8080/myStatus/myStatus.html` を入力します。

制限事項 :

- このページをリモートから使用するには、JBoss アプリケーション・サーバが起動している必要があります。
- SSL による基本認証を使用する JMX-RMI が SYSTEM ユーザを使用して設定されている場合、このページにはデータが表示されません。詳細については、『BSM Hardening Guide』の「Securing JMX-RMI Channel Used for Internal BSM Communications」を参照してください。

Windows のスタート・メニュー

Windows 環境に BSM をインストールしているときに、BSM 用のメニューが BSM がインストールされたマシンのスタート・メニューに追加されます。

BSM メニューにアクセスするには、[スタート] > [プログラム] > [HP Business Service Management] を選択します。

このメニューには、次のオプションがあります。

Administration

[Administration] メニュー・オプションには、次のサブオプションがあります。

サブオプション	説明
Configure BSM	セットアップおよびデータベース設定ユーティリティが実行されます。これにより、Microsoft SQL サーバまたは Oracle サーバ上の管理データベース、RTSM データベース、RTSM 履歴データベース、アプリケーション・データベースまたはユーザ・スキーマの作成と接続を行えます。詳細については、『BSM インストール・ガイド』の「サーバ・デプロイメントおよびデータベース・パラメータの設定」を参照してください。
Disable BSM	特定のマシン上の BSM を停止し、そのマシンの起動時における BSM の自動実行をオフにします。
Enable BSM	特定のマシン上の BSM を起動し、そのマシンの起動時に BSM が自動的に実行されるように設定します。
BSM Server Status	BSM サービスと High Availability Controller によって実行されるサービスのステータスを表示できます。この HTML ページの詳細については、『BSM インストール・ガイド』を参照してください。

Documentaion

[Documentation] メニュー・オプション(ゲートウェイ・サーバのみで利用可能)には、次のサブオプションが含まれています。

サブオプション	説明
BSM Documentation Library	Web ブラウザで BSM Documentation Library のホーム・ページを開きます。

Open BSM

Web ブラウザで BSM アプリケーションのログイン・ページを開くには、このオプションを選択します。

第2章

BSM へのログイン

BSM へのアクセスは、BSM サーバにネットワーク接続 (イントラネットまたはインターネット) されている任意のコンピュータから、サポートされている Web ブラウザを使用して行います。ユーザに許可されるアクセス・レベルは、ユーザ権限によって異なります。ユーザ権限の許可の詳細については、[240ページ「権限の割り当て方法」](#)を参照してください。

標準設定では、BSM はライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO)で設定されます。LW-SSOでは、BSMにログインすると、設定済みの他のアプリケーションへのアクセスが自動的に許可されます。それらのアプリケーションにログインする必要はありません。BSM へのログインに対して LW-SSO がどのように影響するかについては、[22ページ「LW-SSOを使用した BSM へのログイン」](#)を参照してください。

Web ブラウザの要件や BSM を正しく表示するための最低要件の詳細については、『BSM システム要件とサポート・マトリックス』を参照してください。

注: HPSoftware-as-a-Service カスタマは、[HPSoftware-as-a-Service support Web site \(portal.saas.hp.com\)](https://portal.saas.hp.com) (英語サイト) を使用して BSM にアクセスします。

LW-SSO を使用した BSM へのログイン

ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO) 認証サポートが有効になっている場合、シングル・サインオン環境の他のアプリケーションで LW-SSO が有効であり、同じ initString を操作していることを確認する必要があります。

BSM にシングル・サインオンが必要でない場合は、LW-SSO を無効にすることをお勧めします。LW-SSO は、次のいずれかのユーティリティを使用して無効にできます。

- **認証方法ウィザード**。認証方法ウィザードの使用の詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。
- **JMX コンソール**。JMX コンソールを使用した LW-SSO の無効化の詳細については、[36ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」](#)を参照してください。

LW-SSO が無効になると、標準設定の BSM 認証サービスが自動的に有効になります。LW-SSO が無効であるか、Identity Management Single Sign-On(IDM-SSO) または Lightweight Directory Access Protocol(LDAP) 認証方法が有効である場合は、BSM ログイン URL (<http://<サーバ名>.<ドメイン名>//HPBSM>) に構文 [.<ドメイン名>](#) を入力する必要はありません。

IDM-SSO または LDAP のいずれかの認証方法の実装の詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。

BSM へのログイン要件の詳細については、[27ページ「ログインとログアウトの方法」](#)を参照してください。

ログインの詳細オプション

ログインの詳細オプションでは、ログインの自動化、直接ログイン機能の使用、ログイン・アクセスの制限、BSM の特定のページへのリンクを設定できます。

次のログインの詳細オプションがあります。

- **自動ログイン** : 最初のログイン後、ログイン名とパスワードを入力する必要なしに、そのユーザーに設定された標準設定ページが自動的に開くように、BSM を設定できます。詳細については、28 ページ「ログイン・ページでの自動ログインの有効化」を参照してください。
- **直接ログイン機能** : 別のユーザーを BSM の特定のターゲット・ページに移動させることができます。詳細については、29 ページ「[このページにリンク] オプションを使用して特定のページを開く」を参照してください。
- **ログイン・アクセスの制限** : 同じログイン名で BSM にアクセスできるマシン数を制限できます。詳細については、29 ページ「同じログイン名による異なるマシンからのアクセスの制限」を参照してください。
- **特定のページへのリンク** : ユーザー名、パスワード、ターゲット・ページに関する情報を含む URL を作成することで、BSM の特定のターゲット・ページに別のユーザーを移動させることができます。詳細については、24 ページ「特定のページにリンクする」を参照してください。

特定のページにリンクする

ユーザ名、パスワード、ターゲット・ページに関する情報を含む URL を作成することで、BSM の特定のターゲット・ページに別のユーザを移動させることができます。

[このページにリンク] オプションの使用方法に応じて、受信者は次のいずれかを使用してページにアクセスします。

- ユーザ名 およびパスワード
- ユーザ名 およびパスワードで暗号化された URL
- 別のユーザのユーザ名 およびパスワードで暗号化された URL

暗号化された URL を使用する場合、URL でユーザ名 およびパスワードの情報が提供されるため、受信者の BSM ログイン・ページはバイパスされます。

URL で送信されるユーザ名は、ターゲット・ページにアクセスできる十分な権限のあるアカウントである必要があります。アカウントに十分な権限がないと、受信者はターゲット・ページではなく、その上のページに送信されます。

たとえば、受信者を [インフラストラクチャ設定] ページに送信する場合には、通常のユーザ [インフラストラクチャ設定] を表示する権限のないユーザ) の [資格情報を使用] を選択して [このページにリンク] オプションを設定するとします。受信者がこの URL を使用すると、[セットアップと保守] ページに送信され、[インフラストラクチャ設定] にアクセスできません。

[このページにリンク] オプションでは、URL で送信されるユーザ名 およびパスワードは検証されません。検証は、受信者がターゲット・ページにアクセスしようとしたときのみ行われます。ユーザ名 およびパスワードが正しくない場合や、ユーザ・アカウントが削除されている場合、受信者は BSM ログイン・ページに送信され、通常どおりにログインします。ログインしても、受信者はターゲット・ページに進めません。ログインに失敗した理由についての情報メッセージは表示されません。

サードパーティ・ポータルでサービス状況 または MyBSM のページを表示するには、[このページにリンク] ウィンドウの [埋め込まれたリンク] チェックボックスを選択します。生成した URL は、サードパーティ・ポータルで使用できるため、特定のページのみを表示して、すべての BSM アプリケーションおよびメニューを表示しないようにできます。

注: サードパーティ・ポータルでは、1 つのサービス状況 または MyBSM ページのみを各ポータル・ページに埋め込みます。より多くの情報を確認する必要がある場合は、タブ付きコンポーネントを使用したページを作成します。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「MyBSM ワークスペースのセットアップ方法」を参照してください。

[このページにリンク] オプションのユーザ・インタフェースの詳細については、34 ページ「[このページにリンク] ウィンドウ」を参照してください。

RTSM でのダイレクト・リンクの作成

Run-time Service Model (RTSM) の [ダイレクト リンク] 機能を使用して、特定のターゲット・ページへのリンクを作成できます。ダイレクト・リンクの詳細については、Modeling Guide の「Generate a Direct Link - Overview」を参照してください。

JMX コンソールの使用

JMX コンソールは BSM に組み込まれており、次の操作を行うことができます。

- 管理操作の実行
- プロセスのパフォーマンスの表示
- BSM に関する問題のトラブルシューティング

JMX コンソールにアクセスするには、まず関連する URL (<http://<ゲートウェイ・サーバまたはデータ処理サーバの名前>:8080/jmx-console/>、ゲートウェイ・サーバまたはデータ処理サーバの名前は BSM が実行されているマシンの名前です) を入力し、JMX コンソールの認証資格情報を入力します。

JMX コンソールにアクセスするための資格情報は、BSM のインストール時や、セットアップおよびデータベース設定ユーティリティの実行時に設定されます。パスワードは変更できますが、ユーザ名は変更できません。JMX パスワードの変更の詳細については、[30ページ「JMX パスワードの変更方法」](#)を参照してください。

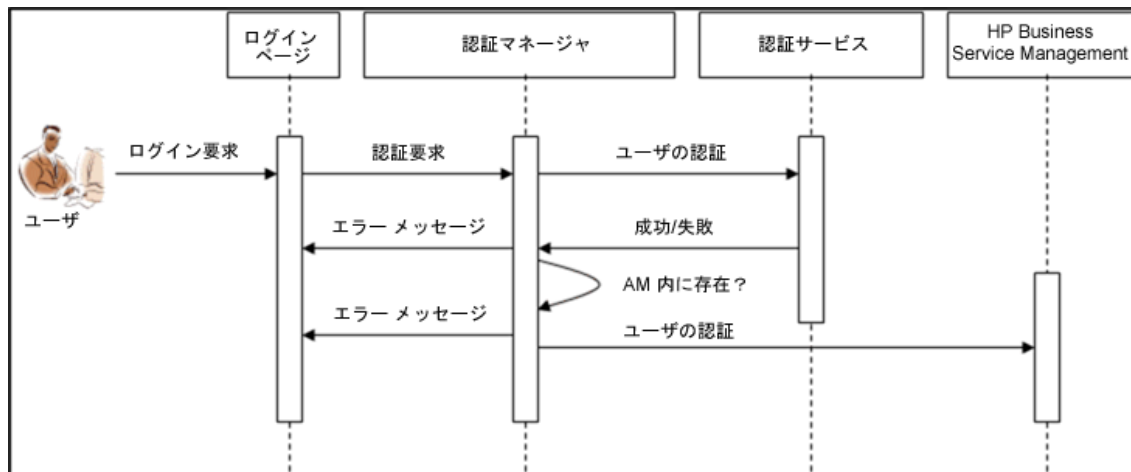
注: ログイン名は変更できません。

BSM システムの可用性は、HP Business Service Management のサーバ・ステータス HTML ページで監視できます。詳細については、[19ページ「プロセスおよびサービスのステータスの表示方法」](#)を参照してください。

SSL で操作したり、JMX データを暗号化してセキュリティ強化したりするように JMX コンソールを設定できます。詳細については、『BSM Hardening Guide』の「Configuring the Application Server JMX Console to Work with SSL」を参照してください。

BSM ログイン・フロー

本項では、BSM の一般的な認証フローについて説明します。



1. ユーザは、ログイン・ページにアクセスしてプリンシパル(ログイン名)と資格情報(パスワード)を入力し、ログイン要求を送信します(この場合、[ログイン]をクリックします)。
2. 方法名、プリンシパル、資格情報とともに要求がBSM 認証マネージャに転送されます。認証方法ウィザードで認証方法を設定します。詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。
3. 認証マネージャによって方法名が読み取られ、関連する認証方法に要求がディスパッチされてユーザが検証されます。
4. 関連する認証方法で要求が受け入れられて、要求の認証サービスに対してユーザが認証されます。
5. 認証が承認されると、選択した方法に応じてBSM によってユーザが検証されます。

注: BSM でユーザを作成している場合、そのユーザ名と、関連する方法のデータベースのユーザ名が一致していることを確認します。ユーザ名が一致していないとユーザはBSM にログインできません。

6. 前の手順に成功すると、認証されたユーザとみなされます。Web ブラウザにBSM の[サイト マップ]ページ(または、標準設定ページとして定義されたページ)が表示されます。

いずれかの手順に失敗した場合、ユーザに通知されます(ページとエラー・メッセージがWeb ブラウザに送信されます)。ページの内容とエラー・メッセージは、実装している方法によって異なります。

ログインとログアウトの方法

ログイン・ページから BSM にログインします。

セッションが完了したら、不正な侵入を防ぐためにログアウトすることをお勧めします。

BSM ログイン・ページにアクセスしてログインするには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザで、URL `http://<サーバ名>.<ドメイン名>/HPBSM` を入力します。<サーバ名> および <ドメイン名> は、BSM サーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を表します。サーバが複数ある場合、または BSM が分散アーキテクチャにデプロイされている場合は、必要に応じて、ロード・バランサまたはゲートウェイ・サーバの URL を指定します。
2. BSM システムで定義されているユーザのログイン・パラメータ (ログイン名とパスワード) を入力して、**[ログイン]** をクリックします。ログインすると、ページの右上 (上部のメニュー・バーの下) にユーザ名が表示されます。

初回アクセスは、セットアップおよびデータベース設定ユーティリティに指定した管理者のユーザ名 (「admin」) とパスワードを使用して取得できます。

注意:

- システムのスーパーユーザは、不正な侵入を防ぐためにこのパスワードをすぐに変更することをお勧めします。ユーザ・インターフェースでパスワードを変更する方法の詳細については、310 ページ「[\[一般\] タブ \(ユーザ管理\)](#)」を参照してください。
- ログイン名は変更できません。

ユーザ・インターフェースで BSM システムのユーザを作成する方法の詳細については、308 ページ「[\[ユーザの作成\] ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。

BSM で使用できるログイン認証方法に関する詳細については、346 ページ「[認証方法](#)」を参照してください。

ログインのトラブルシューティング情報については、36 ページ「[トラブルシューティングおよび制限事項](#)」を参照してください。

注: BSM に安全にアクセスする方法の詳細については、『BSM Hardening Guide』を参照してください。

BSM からログアウトするには、次の手順を実行します。

ページ上部の**[ログアウト]** をクリックします。

注: **[ログアウト]** をクリックすると、自動ログイン・オプションがキャンセルされます。ユーザがログアウトすると、次にユーザがログインするときに**[ログイン]** ページが開き、ユーザはログイン名とパスワードを入力する必要があります。これは、別のユーザが異なるユーザ名とパスワードを使用して同じマシンにログインする必要がある場合に便利です。

ログインの詳細オプションの使用法

BSM のログインの詳細オプションを有効にできます。詳細については、23ページ「ログインの詳細オプション」を参照してください。

ログイン・ページでの自動ログインの有効化

このタスクでは、BSM への自動ログインを有効にする方法について説明します。

1. BSM のログイン・ページで、**[ログイン名とパスワードを 14 日間記憶する]**を選択します。

注意: これにはセキュリティ上のリスクが伴う可能性があるため、慎重に使用してください。

2. セッションを完了する場合、ブラウザのウィンドウを閉じます。ページ上部の**[ログアウト]**をクリックしないでください。

[ログアウト]をクリックすると、自動ログイン・オプションが無効になり、再度 BSM にアクセスするときログイン名とパスワードの入力が求められます。

注: ログイン・ページで自動ログインが有効になっていて、ユーザが BSM にアクセスする URL を入力した場合、次のように動作します。

- ログイン・ページは表示されません。
- ログイン名とパスワードを入力する必要はありません。
- ユーザに対して表示するように設定した標準設定のページが自動的に開きます。

自動ログイン設定の変更(任意)

必要に応じて、設定済みの自動ログインを変更できます。

1. **[管理]** > **[プラットフォーム]** > **[セットアップと保守]** > **[インフラストラクチャ設定]** に移動します。
2. **[ファウンデーション]** > **[セキュリティ]** を選択します。このコンテキストで、次を実行できます。

- **[ログインを記憶する日数]** の値 (標準設定値は **14**) を希望の日数に変更することで、このオプションを有効にする日数をカスタマイズできます。
- **[自動ログインの有効化]** (標準設定値は **true**) の値を **false** に設定することで、ログイン・ページで自動ログイン・オプションを非表示にできます。
- **[ログイン名ごとの最大マシン数]** の値 (標準設定値は **0**) を変更することで、同じログイン名で BSM に同時にアクセスできるマシン数を設定できます。値が 0 の場合、ログイン数は無制限です。

[インフラストラクチャ設定] ページの使用の詳細については、92ページ「インフラストラクチャ設定」を参照してください。

自動ログイン URL メカニズムの使用

いくつかのパラメータ(ログイン名 やパスワード など)を含む特殊な URL を使用して、BSM にアクセスして自動的にログインできます。

注意: この方法は便利ですが、パスワードは URL で暗号化されないため安全ではありません。

Web ブラウザで、次の URL を入力します。

```
http://<サーバ名>.<ドメイン名>/<HPBSM のルート・ディレクトリ>/TopazSiteServlet?  
autologin=yes& strategyName=Topaz&requestType=login&userlogin=  
<ログイン名> &userpassword=<パスワード> &createSession=true
```

説明:

- <サーバ名> は、BSM サーバの名前です。
- <ドメイン名> は、ネットワーク設定に応じたユーザのドメイン名です。
- <ログイン名> および <パスワード> は、BSM で定義したログイン名とパスワードです。

BSM に直接入力できるようにするには、自動ログイン URL をブックマークします。

[\[このページにリンク\] オプションを使用して特定のページを開く](#)

[このページにリンク] オプションを使用して、別のユーザを BSM の特定のターゲット・ページに移動させることができます。[このページにリンク] では、ユーザ名、パスワード、ターゲット・ページに関する情報を含む URL を作成します。

[このページにリンク] ダイアログ・ボックスでパラメータを設定した方法に応じて、受信者は自身のユーザ名とパスワードを使用するか、設定者のユーザ名とパスワードまたは別のユーザのユーザ名とパスワードを含む暗号化された URL を介してターゲット・ページにアクセスします。この URL は、電子メールまたは SMS で別のユーザに送信できます。暗号化された URL を使用してページにアクセスする場合、URL にユーザ名とパスワード情報が含まれるため、受信者には BSM ログイン・ページが表示されません。詳細については、34 ページ「[このページにリンク] ウィンドウ」を参照してください。

[同じログイン名による異なるマシンからのアクセスの制限](#)

異なるマシンから同じログイン名を使用して BSM にアクセスできます。同じログイン名で BSM にアクセスするマシン数は、[インフラストラクチャ設定] ページを使用して制限できます。

[インフラストラクチャ設定] で [ログイン名ごとの最大マシン数] の値を変更するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。
2. [ファウンデーション] を選択します。
3. [セキュリティ] を選択します。
4. [ログイン名ごとの最大マシン数] のエントリを特定し、この値を同じログイン名で BSM にアクセスできるマシン数に変更します。標準設定値はゼロ(0)で、この場合は無制限にログインできます。

ユーザが BSM へのログインを試みたときに最大値に達している場合、そのユーザにはログインできないことを示すメッセージが表示されます。

この機能の制限事項については、36 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

[URL を使用してアプリケーション・ページを開く](#)

URL を使用して、特定の BSM ページをブラウザで直接開くことができます。詳細については、24 ページ「特定のページにリンクする」を参照してください。

JMX パスワードの変更方法

このタスクでは、JMX パスワードを変更する方法について説明します。

1. BSM ゲートウェイまたはデータ処理サーバを停止します。
2. ゲートウェイまたはデータ処理サーバで **HPBSM のルート・ディレクトリ** > `\tools\jmx\changeCredentials.bat` ファイルを実行します。

パスワードの変更ダイアログ・ボックスが開きます。ここで、新しいパスワードを入力して確認します。ゲートウェイまたはデータ処理サーバでパスワードの変更が登録されて暗号化されます。

3. BSM を再起動します。

注: ログイン名は変更できません。

キーストア証明書の作成方法

このタスクでは、キーストア証明書を持たない場合の作成方法について説明します。

1. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開くために、**cmd.exe** を実行します。
2. 次のコマンドを実行して、キーストア・ファイルを生成します。

```
keytool -genkey -dname "CN=YourName,OU=yourDepartment,O=yourCompanyName,  
L=yourLocation,S=yourState,C=yourCountryCode" -alias <別名> -keypass changeit -  
keystore "<キーストアの場所>" -storepass changeit -keyalg "RSA" -validity 360
```

例：

```
keytool -genkey -dname "CN=John Smith, OU=FND, O=HP, L=Los Angeles,  
ST=Unknown, C=USA" -alias john -keypass mypassword -keystore  
"D:\HPBSM\JRE\lib\security\cacerts" -storepass changeit -keyalg  
"RSA" -validity 360
```

3. キーストア証明書が、
-keystore パラメータで指定した場所に生成されます。
4. BSM を再起動します。

ログイン試行およびログインしているユーザの追跡方法

システムへのログインを試行したユーザを追跡するには、次の手順を実行します。

<HPBSM ルート・ディレクトリ> \log\EJBContainer\UserActions.servlets.log を参照します。

このファイルのアペンダは、<HPBSM ルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j\EJB\topaz.properties にあります。

現在システムにログインしているユーザのリストを表示するには、次の手順を実行します。

1. このマシンで JMX コンソールを開きます (詳細については、[25ページ「JMX コンソールの使用」](#)を参照)。
2. [Topaz] セクションで、**service=Active Topaz Sessions** を選択します。
3. `java.lang.String showActiveSessions()` オペレーションを起動します。

セキュリティに関する注意事項と予防策

本項では、直接ログインを使用して BSM にログインする場合のセキュリティに関する注意事項と予防策について説明します。

- URL 内のユーザ名とパスワードは暗号化されているため、ログイン情報が公開されることはありません。
- メールシステムは妨害される可能性があるため、暗号化された情報を電子メールで送信してもセキュリティリスクが伴います。電子メールが不正に取得されると、BSM へのアクセスが未知の利用者に付与されます。
- 直接ログインの URL を Web ページでリンクとして使用しないでください。
- 受信者は、URL で与えられたユーザ名のすべての権限を所有します。受信者がターゲット・ページにアクセスすると、そのユーザに対して許可されているすべてのアクションを BSM 内の任意の場所で実行できます。

BSM ユーザ・インタフェースへのログイン

本項の内容

- 34ページ「BSM ログイン・ページ」
- 34ページ「[このページにリンク]ウインドウ」

BSM ログイン・ページ

このページでは、BSM にログインできます。

アクセス方法	Web ブラウザで、URL <code>http://<サーバ名>.<ドメイン名>/<HPBSM ルート・ディレクトリ></code> を入力します。<サーバ名> は、BSM サーバの名前または IP アドレスで、<ドメイン名> は、ネットワーク設定に応じたユーザのドメイン名です。
重要な情報	ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO)が無効になっている場合、ログインURLに.<ドメイン名> 構文を追加する必要はありません。
関連タスク	27ページ「ログインとログアウトの方法」
関連情報	22ページ「LW-SSO を使用した BSM へのログイン」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ログイン名	BSM にアクセスするための関連するログイン名を入力します。
パスワード	BSM にアクセスするための関連するパスワード名を入力します。
ログイン名とパスワードを 14 日間記憶する	BSM でログイン名とパスワードを 14 日間記憶できるようにする場合に選択します。このオプションを選択すると、今後のログイン・セッションでログイン資格情報が自動的に入力されます。

[このページにリンク]ウインドウ

このウインドウでは、別のユーザを BSM の特定のターゲット・ページに移動させることができます。

注: 標準設定では、管理者のみがこの機能にアクセスできるセキュリティ権限を持っています。

アクセス方法	[管理]> [このページにリンク]を選択します。
関連タスク	28ページ「ログインの詳細オプションの使用方法」
関連情報	23ページ「ログインの詳細オプション」 『Modeling Guide』の「Generate a Direct Link User Interface」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
キャンセル	このページへのリンク操作をキャンセルします。
リンクを作成	ユーザがブラウザに入力すると指定した BSM ページが表示される URL を作成します。 注: [資格情報なし]または[資格情報を使用](独自の資格情報以外の資格情報を使用)を選択した後にこのオプションを選択し, URL を作成したローカル・マシンでそのログイン URL を呼び出す場合, 最初に BSM からログアウトする必要があります。
パスワードの確認	[パスワード]フィールドに入力したパスワードを再入力します。
クリップボードにコピー	[リンク]フィールドのコンテンツをクリップボードにコピーします。 注: Firefox ブラウザを使用している場合, このオプションを有効にするにはセキュリティ設定を変更する必要があります。ブラウザの検索ウィンドウで「about:config」と入力し, signed.applets.codebase_principal_support オプションを見つけて true に設定します。
埋め込まれたリンク	サービス状況と MyBSM にのみ表示されます。 すべての BSM アプリケーションおよびメニューを非表示にして特定のページのみが表示されるように, サード・パーティ・ポータルで使用できる URL を作成する場合にこのチェックボックスを選択します。
HTML を生成	指定された BSM ページの HTML ページを生成します。 注: [資格情報なし]または[資格情報を使用](独自の資格情報以外の資格情報を使用)を選択した後にこのオプションを選択し, HTML ページを生成したローカル・マシンでその HTML ページを使用してログインする場合, 最初に BSM からログアウトする必要があります。
リンク	指定された BSM ページへのアクセスに受信者が使用する URL。
ログイン名	指定されたページへのアクセスに受信者が使用する URL 内で暗号化されるログイン名。実際のユーザのログイン名を使用する必要があります。
私の資格情報	ログイン名とパスワードでリンクを暗号化する場合に選択します。
資格情報なし	リンクで指定されたページにアクセスするために受信者が独自のユーザ名とパスワードを使用する場合に選択します。
パスワード	指定されたページへのアクセスに受信者が使用する URL 内で暗号化されるパスワード。実際のユーザのパスワードを使用する必要があります。
資格情報を使用	別のユーザのログイン名とパスワードでリンクを暗号化する場合に選択します。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、BSM へのログインに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

ログインのトラブルシューティング

エラー警告ダイアログ・ボックスに表示されるエラー番号を使用して、考えられるログイン・エラーの原因を参照します。トラブルシューティング情報の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報を参照してください。

エラー番号	問題 / 考えられる原因	解決策
LI001	BSM からゲートウェイ・サーバで実行されている JBoss アプリケーション・サーバに接続できない。次のような原因が考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> JBoss サーバがダウンしている BSM サービスに問題がある アプリケーション・サーバから要求されたポートが別のアプリケーションで使用されている 	<p>解決策 1: ゲートウェイ・サーバ・マシンのすべてのアプリケーションを終了して、マシンを再起動します。</p> <p>解決策 2: ゲートウェイ・サーバ・マシンで実行されているほかのアプリケーション(スタートアップ・ディレクトリから実行されるアプリケーション、JBoss の別のインスタンス、MSDE または Microsoft SQL Server、その他のプロセスなど)でこのポートが使用されていないことを確認します。</p>
LI002	ゲートウェイ・サーバで実行されている JBoss アプリケーション・サーバが応答しない、または適切にインストールされない。	BSM アプリケーションを再起動します。
LI003	管理データベースが壊れている(ユーザ・レコードが誤ってデータベースから削除された場合など)	別のユーザとしてログインするか、BSM 管理者に新しいユーザを作成してもらいます。
LI004	RMI(Remote Method Invocation) 例外が原因で Tomcat サーブレット・エンジンと JBoss アプリケーション・サーバ間の接続に失敗する。これは、JBoss への RMI 呼び出しの問題に原因があると考えられます。	<p>どの JBoss ポートも別のプロセスで使用されていないことを確認します。また、RMI ポートがバインドされていることも確認します。</p> <p>ポートの詳細については、138ページ「ポートの用途」を参照してください。</p>

エラー 番号	問題 / 考えられる原因	解決策
LI005	<p>BSM ログインに失敗またはハングする。次のような原因が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ログイン名 / パスワードの組み合わせが正しくない ● 管理データベースに接続できない ● 現在のユーザにプロファイルへのアクセス権がない ● 認証方法が適切に設定されていない 	<p>解決策 1: ユーザが正しいログイン名 / パスワードの組み合わせを入力していることを確認します。</p> <p>解決策 2: 管理データベースへの接続が良好であることを確認します。これを行うには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Web ブラウザで http://<ゲートウェイまたはデータ処理サーバの名前>:8080/jmx-console を入力して、JMX 管理コンソールに接続します。 2. リンク[System] > [JMX MBeans] > [Topaz] > [Topaz:service=Connection Pool Information] をクリックします。 3. java.lang.String showConfigurationSummary() を特定して、[Invoke] ボタンをクリックします。 4. [Active configurations in the Connection Factory] で、管理データベースの該当する行を見つけます。 5. 管理データベースの列 [Active Connection] や [Idle Connection] の値が 0 よりも大きいことを確認します。 6. データベースへの接続に問題がある場合、データベース・マシンが起動して実行されていることを確認し、必要に応じてセットアップおよびデータベース設定ユーティリティを再実行します。 <p>解決策 3: ユーザに BSM にアクセスするための適切な権限があることを確認します。ユーザ権限の詳細については、225ページ「権限」を参照してください。</p> <p>解決策 4: 認証方法が適切に設定されていることを確認します。認証方法の詳細については、346ページ「認証方法」を参照してください。</p>

エラー 番号	問題 / 考えられる原因	解決策
LI006	<p>BSM ログインに失敗する。次のような原因が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Web ブラウザのクッキー設定が正しくない • BSM サーバを実行しているマシンの名前にサポートされていない文字がある 	<p>解決策 1: BSM サーバからのクッキーを許可するようにクライアントの Web ブラウザが設定されていることを確認します。</p> <p>解決策 2: BSM サーバを実行しているマシンの名前にアンダースコア文字(_)がないことを確認します。アンダースコア文字がある場合、マシンにアクセスするときにサーバ名を変更するか、サーバの IP アドレスを使用します。たとえば、BSM にアクセスするには http://111.222.33.44/<BSM ルート・ディレクトリ> を使用します。 これは http://my_server/<BSM ルート・ディレクトリ> に代わるものです。</p>
LI007	<p>BSM ログインに失敗する。これは、同じログイン名を使用して BSM にアクセスしている各マシンの最大同時ログイン数に達したことが原因です。</p>	<p>解決策 1: 各マシンから同じログイン名を使用してログインしている BSM のインスタンスからログアウトします。最大数に達しなくなったら、ログインを再試行できます。</p> <p>解決策 2: 別のログイン名を使用してログインします(利用可能な場合)。</p> <p>解決策 3: 管理者は、インフラストラクチャ設定を編集して、制限を削除したり、同じログイン名を使用した各マシンからの最大同時ログイン数を増やしたりできます。</p> <p>この設定を編集するには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. [管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。 2. [ファウンデーション]>[セキュリティ]を選択し、[セキュリティ-ログイン]テーブルの[ログイン名ごとの最大マシン数]エントリを見つけます。 3. 必要に応じて値を変更します。 <p>標準設定値は 0 で、ログイン数は制限されなくなります。</p>

同じログイン名を使用した各マシンによるアクセスの制限

複数のクライアントがデフォルト・ゲートウェイまたはプロキシ・サーバを介して 1 箇所に集まるネットワーク設定では、BSM に対して解決される IP アドレスは、クライアントの IP アドレスではなく、ゲートウェイまたはプロキシ・サーバの IP アドレスになります。そのため、BSM では、各クライアントが同じ IP アドレスからきたものとして扱われます。同じマシン(IP アドレス)からのログイン数は制限されていない

ため、すべてのクライアントは BSM にログインできます。

SSL を使用するように JMX コンソールを設定する場合の制限

SSL を使用するように JMX コンソールを設定したら、\< BSM ルート・ディレクトリ> \AppServer\webapps\myStatus.war\myStatus.html ページにアクセスして、BSM の可用性を表示することができなくなります。

JMX コンソールを使用した LDAP / SSO 設定のリセット

LDAP または SSO が適切に設定されていない場合、BSM にアクセスできなくなることがあります。これが発生したら、BSM に付属するアプリケーション・サーバの JMX コンソールを使用してリモートから LDAP または SSO 設定をリセットする必要があります。

第3章

BSM の移動および使用

BSM は、Web ブラウザで実行されます。次に示す移動機能を使用して BSM を移動できます。

- **サイト・マップ**：[アプリケーション]メニューまたは管理コンソールのすべてのトップレベル・コンテキストにすばやくアクセスできます。標準設定では、BSM にログインすると、[サイト マップ] ページが最初に開きます。ログイン後に標準設定ページを変更した場合、トップ・メニューまたは[ヘルプ]メニューの[サイト マップ]リンクをクリックしてサイト・マップにアクセスできます。
- **メニュー・バー**：アプリケーション、管理コンソールのページ、ヘルプ・リソース、サイト・マップへのリンクに移動できます。

MyBSM アプリケーション ▾ 管理 ▾ ヘルプ ▾ サイト マップ

現在のページを全画面表示するには、[フルスクリーン ビュー]リンクをクリックします。[フルスクリーン ビュー]を選択すると、タスク・アシスタント(表示されている場合)、メニュー・バー、ブレッドクラム、タブが非表示になります。ページを標準表示に戻すには、[標準表示]をクリックするか、キーボードの Esc キーを押します。

また、ページの右上角には[ログアウト]ボタンもあります。

ログアウト

- **タブ**：BSM の特定の領域内のさまざまなコンテキスト(アプリケーション内の各種レポート、レポート内のビュー、管理コンソール内の管理機能など)に移動できます。特定のコンテキストでは機能を区別するためにタブが使用され、ほかのコンテキストでは論理的に類似している機能をグループ化するためにタブが使用されます。
- **タブのメイン・メニュー**：タブのフロント・ページからそのタブに関連するさまざまなコンテキストに移動できます。複数のコンテキスト(レポート・タイプや管理設定など)を含むカテゴリを表すタブを選択すると、タブのメインメニューが表示されます。タブのメイン・メニューには、タブの各コンテキストの説明とサムネイル・イメージが含まれます。


The screenshot shows the BSM interface with several tabs: 'セットアップと保守' (selected), 'レポート スケジュール', '場所', 'コンテンツパック', and 'ユーザおよび権限'. Below the tabs, there are two main sections:

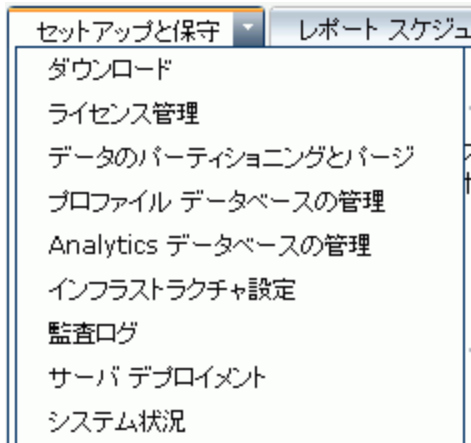
- ダウンロード** (with a help icon):
エンタープライズ モニタリングおよびビジネス プロセスの記録のためのツールを含む、HP Business Service Management コンポーネントをダウンロードします。
An inset image shows a list of downloadable components.
- ライセンス管理** (with a help icon):
ライセンス情報を表示および更新します。
An inset image shows a license management table with columns for Name, License Key, and License Info.

- **タブのコントロール**：タブに関連するコンテキストからそのタブのほかのコンテキストに移動しやすくな

ります。タブのメイン・メニューを開くには、タブ名をクリックします。



タブに関連する別のコンテキストにすばやく移動するには、タブの上にポインタを置いて下矢印  をクリックし、タブのドロップダウン・メニューを開きます。タブのメニュー・オプションをクリックすると、そのコンテキストに移動します。



- **移動ボタン:**



ウィンドウの左上角にある[進む]および[戻る]ボタンを使用して、表示したページ間を移動できます。最も最近に表示したページに戻ることや、[戻る]ボタンをクリックする前に表示していたページに進むことができます。

- **履歴:**



現在履歴に保存されているページのドロップダウン・リストから選択できます。これは、[進む]および[戻る]移動ボタンの横にある下矢印を選択すると有効になります。この履歴は、最近表示したコンテキストで構成されています。最大 20 ページまで表示できます。


履歴に保存されているページは、BSM がそのサーバに保存したページです。以前に表示したページに戻ると、そのページを抜けたときとまったく同じ状態(以前に選択したフィルタや条件がある状態)でページが開きます。これは、すべてのレポートに該当します。

以前に表示したページのコンテキストや選択が保存されていない場合があるため、そのページに戻ったときには必要に応じて再度選択を行います。たとえば、[インフラストラクチャ設定]の特定のコンテキストで作業していて、履歴オプションを使用して[インフラストラクチャ設定]ページに戻ると、コンテキストは保存されずに、標準設定の[インフラストラクチャ設定]ページに戻ります。

ヒント: 履歴に保存するページ数(標準設定では 20)を変更するには、ファイル< HPBSM ルート・ディレクトリ> \confsettings\website.xml にアクセスして、**history.max.saved.pages** フィールドの値を変更します。この変更はサーバで行われるため、すべてのユーザに影響します。

- **ブレッドクラム**: 適切なページ・レベルをクリックして、複数レベルのコンテキスト内で以前のページに戻ることができます。たとえば、次のブレッドクラム・トレイルの場合、[ブレイクダウン サマリ]をクリックすると、ブレイクダウン・サマリ・レポートに戻ります。

ビジネスプロセス > ブレイクダウン サマリ > トランザクションブレイクダウン処理前のデータ > 場所ごとの Web トレース

ブレッドクラムが画面幅よりも長い場合、ブレッドクラムの後部のみが表示されます。ブレッドクラムの左側にある[表示]  アイコンをクリックすると、現在のタブのブレッドクラムが非表示になっている部分が表示されます。

ヒント: BSM では、Web ブラウザの[戻る]機能はサポートされていません。[戻る]機能を使用すると、現在のコンテキストが以前のコンテキストに戻らない場合もあります。以前のコンテキストに移動するには、BSM 内の移動ボタンまたはブレッドクラム機能を使用します。

ユーザ・インタフェースの拡張機能








BSM インタフェースには、ユーザ・エクスペリエンスを強化する多数の機能が含まれています。以下が対象になります。

- **第 508 条への準拠** : BSM は、米国連邦政府電子情報技術責任法案(「第 508 条」)で規定された身体障害者のためのアクセシビリティおよびユーザビリティ標準に準拠しており、JAWS® スクリーン・リーダをサポートしています。

JAWS ユーザは、[ユーザのアクセシビリティ]を false から true に変更する必要があります。これを行うには、次の手順を実行します。

- [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定]を選択します。
- [ファウンデーション]を選択します。
- [Business Service Management のインタフェース]を選択します。
- [Business Service Management Interface - 表示]領域で、[ユーザのアクセシビリティ]を見つけます。値を[true]に変更します。
- **パーソナライズ** : BSM では、あるセッションのパーソナライズは、テーブルへの次の調整(列幅、列の表示など)まで保持されます。パーソナライズは、さまざまなアプリケーションや機能(受信者管理、レポート管理、レポート、レポート・スケジュールなど)で行うことができます。

注: 複数のユーザが同じ資格情報で同時にログインすると、パーソナライズされた設定が BSM で保持されない可能性があります。

- **テーブル機能** : 多くの方法で BSM のテーブルを操作できます。各種コントロールで次のような操作ができます。
 - **フィルタ** : BSM テーブルには、各種フィルタ・オプションが含まれています。フィルタを詳細に編集するには、 をクリックします。
 - **並べ替え** : 列で並べ替えるには、列見出しをクリックします。並べ替え順序(昇順と降順)は、列見出しを押すたびに切り替わります。
 - **列の選択** : 表示する列を選択するには、 をクリックします。
 - **列幅の変更** : 列幅を変更するには、列見出しの境界を左右にドラッグします。列幅を元の状態にリセットするには、 をクリックします。
 - **列順序の変更** : 列順序を変更するには、列見出しを左右にドラッグします。
 - **ページング** : テーブルの最初のページ、前のページ、次のページ、最後のページに移動するには、ページ・コントロール  のボタンを使用します。
 - **エクスポート** : テーブルを別の形式(Excel , PDF , CSV ) にエクスポートするには、適切なボタンをクリックします。

レポートのテーブル機能の詳細については、「Common Report and Page Elements」を参照してください。

注: 一部のテーブルでサポートされていないテーブル機能もあります。

- **マストヘッド・タイトルおよびロゴのカスタマイズ**: BSM ウィンドウの左上角に表示されるアプリケーション・タイトルのヘッダ・テキストやマストヘッド・ロゴ(標準設定では HP ロゴ)をカスタマイズできます。この変更はサーバ側で行われ、BSM にアクセスしているすべてのユーザーに影響します。詳細については、[45ページ「マストヘッド・タイトルおよびロゴのカスタマイズ方法」](#)を参照してください。
- **セッションの有効期限**: 標準設定では、**Keepalive セッション**と呼ばれる、サーバへの ping メカニズムにより、アクティブに使用されていない場合でも BSM セッションがタイムアウトしないようになっています。Keepalive セッションを無効すれば、セッションの有効期限が自動的に切れず。

Keepalive セッションを無効するには、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定]を選択します。

- [ファウンデーション]を選択します。
- [Business Service Management のインターフェース]を選択します。
- [Business Service Management Interface - 時間設定]領域で、[Keepalive セッションの有効化]を見つけます。値を[false]に変更します。

マストヘッド・タイトルおよびロゴのカスタマイズ方法

ヘッダ・テキストおよびロゴを変更するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。
2. [ファウンデーション] コンテキストを選択します。
3. リストから [Business Service Management のインターフェース] を選択します。
4. [Business Service Management のインターフェース - カスタマイズ タイトル] テーブルで、次を変更します。
 - [カスタマイズ マストヘッド アプリケーション タイトル] で、アプリケーションのタイトルとして使用するテキストを入力します。このフィールドに値が定義されていない場合、標準設定で「Business Service Management」と表示されます。HTML コードでテキストを入力できますが、スクリプトは使用しないでください。HTML を使用する場合、保存する前にその有効性を確認します。
 - [カスタマイズ マストヘッド ロゴ URL] で、ウィンドウの上部に表示するロゴが含まれるファイルの URL を入力します。このフィールドに値が定義されていない場合、標準設定で HP のロゴが表示されます。高さが 19 ピクセルの画像を使用することをお勧めします。画像の高さがこれを超える場合、マストヘッドに正しく表示されません。

これらの設定の変更後、ブラウザを更新すると変更が反映されます。

BSM を表示するためのクライアント要件

次の表に、BSM を表示するための最小および推奨されるクライアント・システム要件を示します。

ディスプレイ	最低要件 : 256 色以上のカラー・パレット設定 推奨 : 32,000 色以上のカラー・パレット設定
解像度	<ul style="list-style-type: none">• 1280x1024 以上 (サポート)• 1400x1200 以上 (推奨)
対応ブラウザ	<ul style="list-style-type: none">• Microsoft Internet Explorer(IE) 9.0• Microsoft Internet Explorer(IE) 8.0• Microsoft Internet Explorer(IE) 7.0• Mozilla Firefox ESR 10.0 <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none">• すべてのクッキーを受け入れるようにブラウザを設定する必要がある。• JavaScript の実行が有効になるようにブラウザを設定する必要がある。• ブラウザがポップ・アップ・ウィンドウをサポートしている必要がある。HP Business Service Management は、お使いのブラウザでポップ・アップ・ウィンドウをブロックする設定の Web アプリケーションを使用している場合、正常に動作しない。• Internet Explorer ユーザは、保管したページのより新しいバージョンがないか、自動的にチェックできるようにブラウザ・キャッシングを設定する必要がある。
Flash Player	Adobe Flash 10.1 以降
フォント	次のフォントをクライアント・システムにインストールする必要があります。 <ul style="list-style-type: none">• MS Gothic(日本語ローケル)• Gulim(韓国語ローケル)• SimSun(簡体中国語ローケル)• Arial(ほかのすべてのローケル)

Java プラグイン(アプレット表示用)	<p>推奨 : バージョン 6 アップデート 31</p> <p>サポート : バージョン 6 アップデート 26 以降, またはバージョン 7</p> <p>注 : Java の以前のバージョンではすべての HP Business Service Management アプレットを表示できない場合があります。Java のダウンロード・サイト (http://java.com/ja/download/manual.jsp) から最新のバージョンをダウンロードしてインストールする必要があります。ダウンロード後に以前のバージョンを無効にする必要がある場合もあります。</p> <p>これを Internet Explorer で行うには, 次の手順を実行します。[ツール]>[インターネット オプション]>[詳細設定]タブを選択し, [Java(Sun)] 項目から適切な Java バージョンのチェック・ボックスを選択して[OK]をクリックし, ブラウザをいったん閉じてから再び開きます。</p> <p>Mozilla Firefox で Java バージョンを確認する方法の詳細については, Mozilla Firefox のドキュメントを参照してください。</p>
文書ライブラリの表示	<p>文書ライブラリは Internet Explorer で最適に表示されます。</p> <p>文書ライブラリは, Java をサポートするブラウザで最適に表示されます。お使いのブラウザが Java をサポートしていない場合は, Sun の Java Web サイト (http://java.com/ja/) から Java プラグインをダウンロードしてください。Java がサポートされていない環境では, 文書ライブラリは JavaScript 実装を使用して自動的に開きます。JavaScript 実装は, 提供する基本的な機能は Java 実装と同じですが, ナビゲーション枠で[お気に入り]タブを使用することはできません。</p> <p>文書ライブラリを開く際に JavaScript エラーが起きる場合は, Java コンソールで[例外ダイアログボックスの表示]を無効にし, もう一度ヘルプを開いてください。</p>

Java アプレットを開くときに問題が発生する場合のヒント :

Java アプレットをユーザ・インタフェースで開くときに問題が発生する場合は, 次のいずれかまたは両方を試してください。

- Internet Explorer を使用している場合は, [ツール] > [インターネット オプション] > [接続] > [ローカル エリア ネットワーク (LAN) の設定] を選択します。オプション [設定を自動的に検出する] と [自動構成スクリプトを使用する] をクリアします。
- [コントロール パネル] > [Java] > [基本] タブ > [ネットワーク設定] の順に選択し, 標準設定のオプション [ブラウザの設定を使用] ではなく [直接接続] オプションを選択します。

メニューおよびオプション

トップ・メニュー・バーでは、次のアプリケーションおよびリソースに移動できます。

MyBSM

MyBSM アプリケーション(個々のユーザに関連するキー・コンテンツが表示されるようにカスタマイズできるポータル)が開きます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「MyBSM の使用」を参照してください。

ビジネス・ユーザ・アプリケーション

BSM には、次に示すビジネス・ユーザ・アプリケーションが備わっています。[アプリケーション]メニューから MyBSM 以外のすべてのアプリケーションにアクセスします。このアプリケーションは、トップ・メニュー・バーからアクセスします。

メニュー・オプション	説明
サービス状況	サービス状況 アプリケーション(ビジネスの視点からパフォーマンスおよび可用性のメトリックスを表示するリアルタイム・ダッシュボード)が開きます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「サービス状況の概要」を参照してください。
CI ステータス	CI ステータス・レポートのインターフェースが開きます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「CI ステータス・レポートのユーザ・インターフェース」を参照してください。
サービス・レベル管理	ビジネスの視点からサービス・レベルを先行して管理するためのサービス・レベル管理アプリケーションが開きます。サービス・レベル管理では、IT 業務の担当チームやサービス・プロバイダにツールを提供します。このツールを使用すれば、サービス・レベルを管理することや、分散環境の複雑なビジネス・アプリケーションで、サービス・レベル・アグリーメント(SLA)への準拠に関するレポートを作成することができます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「サービス・レベル管理アプリケーションの概要」を参照してください。
エンド・ユーザ管理	エンド・ユーザの視点からアプリケーションを監視して、パフォーマンスの問題の最も可能性の高い原因を分析するエンド・ユーザ管理アプリケーションが開きます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「エンド・ユーザ管理レポートの概要」を参照してください。
オペレーション管理	サービスを復元してサービスの中断を最小化するためにビジネスの視点からイベントを先行して管理するオペレーション管理アプリケーションが開きます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「オペレーション管理の説明」を参照してください。
トランザクション管理	データ収集やレポート表示を行うためのトランザクション・トポロジおよびインフラストラクチャが表示されます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「トランザクション管理のレポートとトポロジの概要」を参照してください。
システム可用性管理	システムおよびインフラストラクチャの監視やイベント管理を行うシステム可用性管理アプリケーションが開きます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「システム可用性管理の使用の概要」を参照してください。

メニュー・オプション	説明
Service Health Analyzer	異常が発生した CI の表示を行う Service Health Analyzer アプリケーションが開きません。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「Service Health Analyzer の概要」を参照してください。
ユーザ・レポート	組織のアプリケーションおよびインフラストラクチャ・リソースのパフォーマンスについて特定の局面に焦点を当てることができるユーザ・レポート(ユーザ定義のデータおよび形式を含むカスタマイズ・レポート)を作成および保存するレポート・マネージャが開きません。レポート・マネージャの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「レポートの概要」を参照してください。

管理コンソール

管理者は、管理コンソールを使用して BSM プラットフォームおよびアプリケーションを管理します。管理コンソールは、複数のセクションで構成されており、機能別に編成されています。各機能の領域には、[管理]メニューからアクセスします。次のメニュー・オプションから選択します。

メニュー・オプション	説明
サービス状況	CI への主要管理指標 (KPI) のアタッチ、カスタム・マップおよび地理マップの定義、リポジトリのカスタマイズを行う[サービス状況管理]ページが開きます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「サービス状況管理 - 概要」を参照してください。
サービス・レベル管理	サービス・アグリーメント (SLA, OLA, UC) の作成や、サービス・レベル管理によって収集されるデータにリンクするサービスの構築を行うサービス・レベル管理の[管理]ページが開きます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「サービス・レベル管理の概要」を参照してください。
オペレーション管理	オペレーション管理の[管理]ページが開きます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「セットアップ」を参照してください。
エンド・ユーザ管理	Business Process Monitor と Real User Monitor のデータ・コレクタの設定および管理や、トランザクションの順序、色、レポート・フィルタの設定を行う[エンドユーザ管理]ページが開きます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「エンド・ユーザ管理での管理」を参照してください。
システム可用性管理	SiteScope データ・コレクタの設定および管理を行うシステム可用性管理の[管理]ページが開きます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「SAM 管理の概要」を参照してください。
RTSM 管理	Run-time Service Model (RTSM) の IT ユニバースのモデルの構築および管理を行う[RTSM 管理]ページが開きます。[RTSM 管理]から、データフロー管理、IT ユニバース・モデルに構成アイテム (CI) を設定するためのアダプタ・ソース、CI を作成するためのテンプレート、BSM アプリケーションで CI を表示するためのシステム表示を使用します。手動で CI を作成してモデルに追加することもできます。詳細については、『Modeling Guide』を参照してください。

メニュー・オプション	説明
Business Service Management for Siebel 管理	[Application Management for Siebel 管理] ページが開きます。
プラットフォーム	完全なプラットフォーム管理および設定機能が備わっている[プラットフォーム管理] ページが開きます。
統合	次の管理ができる BSM 統合管理領域が開きます。 <ul style="list-style-type: none"> サードパーティ・システムから BSM にデータをキャプチャして転送するための BSM コネクタの統合。 CI と Operations Orchestration ラン・ブック間のマッピング。 関連データおよび監視ツールの設定をエクスポートするためのアプリケーション・ライフサイクル管理の統合。 廃止済みの統合方法 - Integrations Adapter および EMS 統合。 <p>詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「ほかのアプリケーションとの統合 - 概要」を参照してください。</p>
このページにリンク	[このページにリンク] 機能にアクセスする場合に選択します。この機能を使用すると、BSM の特定のページに直接アクセスできる URL を作成できます。詳細については、34 ページ「このページにリンク」ウィンドウを参照してください。 <p>注: 標準設定では、管理者のみがこの機能にアクセスできるセキュリティ権限を持っています。</p>
個人設定	[個人設定] タブにアクセスする場合に選択します。このタブでは、BSM のさまざまな側面 (メニューやパスワードなど) をパーソナライズできます。[個人設定] はどのユーザでも使用できます。詳細については、339 ページ「個人設定」を参照してください。

[ヘルプ]メニュー

BSM の[ヘルプ]メニューから次のオンライン・リソースにアクセスします。

メニュー・オプション	説明
このページのヘルプ	現在のページまたはコンテキストを説明するトピックへの Documentation Library が開きます。
Documentation Library	Documentation Library のホーム・ページが開きます。ホーム・ページには、主なヘルプ・トピックへのクイック・リンクがあります。

メニュー・オプション	説明
Diagnostics ヘルプ	Diagnostics サーバがBSMに接続されている場合、Diagnostics ヘルプが開きます。
トラブルシューティングと技術情報	トラブルシューティングのランディング・ページ(HP Passport のログインが必要)に直結するHP ソフトウェア・サポート Web サイトが開きます。この Web サイトの URL は、 http://support.openview.hp.com/troubleshooting.jsp です。
HP ソフトウェア・サポート	HP ソフトウェア・サポート Web サイトが開きます。このサイトでは、ナレッジ・ベースの参照や記事の追加ができます。また、ユーザ・ディスカッション・フォーラムへの投稿や検索、サポート依頼の送信、パッチや更新されたドキュメントのダウンロードなども行えます。この Web サイトの URL は、 http://support.openview.hp.com です。
HP ソフトウェア Web サイト	HP ソフトウェア製品およびサービスに関する情報やリソースが含まれるHP ソフトウェア Web サイトが開きます。この Web サイトの URL は、 http://www.hp.NET/go/software です。
タスク・アシスタント	タスク手順をリストして、各手順に関連するヘルプ・トピックへのリンクを提供することで、特定のタスクの実行をサポートするタスク・アシスタントが開きます。
サイト マップ	[アプリケーション]メニューまたは管理コンソールのすべてのトップレベル・コンテキストにすばやくアクセスできるサイト・マップが開きます。 注：サイト・マップは、BSMにログインするときの標準設定の開始ページです。[個人設定]タブを開いて別の開始ページを選択するには、サイト・マップの[標準設定ページの変更]をクリックします。[個人設定]の設定の詳細については、339ページ「個人設定」を参照してください。
新機能	新機能のドキュメントが開きます。これには、該当のバージョンの新機能と拡張機能が記載されています。
HP Business Service Management について	バージョン、ライセンス、パッチ、サードパーティの通知情報が記載された[HP Business Service Management のバージョン情報]ダイアログ・ボックスが開きます。

第2部分

セットアップと保守

第4章

ダウンロード

BSM用のサーバをインストールした後、いくつかのコンポーネントをダウンロードする必要があります。これらのコンポーネントには、企業の監視およびビジネス・プロセスの記録を行うツールが含まれています。

BSMのインストール後に[ダウンロード]ページでコンポーネントを表示してダウンロードするには、データ・コレクタ・セットアップ・ファイルをインストールする必要があります。詳細については、『BSMインストール・ガイド』の「コンポーネント・セットアップ・ファイルのインストール」を参照してください。

タスク

コンポーネントのダウンロード方法

このタスクでは、[コンポーネントのダウンロード] ページでコンポーネントをダウンロードする方法について説明します。

1. ダウンロードするコンポーネントをクリックします。
2. コンポーネントのセットアップ・ファイルをコンピュータに保存します。
3. コンポーネントのセットアップ・ファイルを実行してコンポーネントをインストールします。




UI コンポーネント

[コンポーネントのダウンロード] ページ

このページには、ダウンロードできる BSM コンポーネント (企業の監視やビジネス・プロセスの記録を行うツールなど) がリストされます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [ダウンロード] を選択します
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ダウンロード可能なコンポーネントをカテゴリまたはシステムでフィルタできます。 一部のファイルはクリックしてダウンロードするとすぐに実行されるため、ダウンロードするファイルを右クリックして [Save Target As] を選択し、ファイルの保存場所を選択します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	テーブルの列の幅が標準設定にリセットされます。テーブルの列の幅は、列の左右どちらかの境界をドラッグすることで、調整できます。
	[カラムの選択] ダイアログ・ボックスが開き、テーブルに表示する列を選択できます。
	<p>データ・テーブルが複数のページに分割されます。該当するボタンをクリックすると、ページ間を移動できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ほかのレポートを表示するには、[次のページ] または [最後のページ] をクリックします。 リストの前のレポートを表示するには、[前のページ] または [最初のページ] をクリックします。

UI 要素	説明
カテゴリ	<p>ダウンロード可能なコンポーネントのカテゴリ。使用可能なカテゴリは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Business Process Insight : BSM で Business Process Insight コンポーネントをインストールおよび実行できるダウンロード可能なファイル。 ● Business Process Monitor : BSM で Business Process Monitor コンポーネントをインストールおよび実行できるダウンロード可能なファイル。 ● Data Flow Probe : BSM で Data Flow Probe コンポーネントをインストールおよび実行できる Data Flow Probe のダウンロード可能なファイル。 ● Diagnostics :Diagnostics コンポーネントをインストールおよび実行できるダウンロード可能なファイル。 ● その他 :その他のアプリケーションのダウンロードに使用されます。このカテゴリにアプリケーションがリストされていない場合は、使用できるアプリケーションはありません。 ● Real User Monitor : Real User Monitor コンポーネントをインストールおよび実行できるダウンロード可能なファイル。 ● SiteScope : SiteScope コンポーネントをインストールおよび実行できる SiteScope のダウンロード可能なファイル。 <p>注 :オペレーティング・システムに対応するファイルを選択していることを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● TransactionVision : TransactionVision コンポーネントをインストールおよび実行できるダウンロード可能なファイル。 ● TransactionVision or Diagnostics : HP Diagnostics / TransactionVision Agent for Java ファイルをインストールおよび実行できるダウンロード可能なファイル。
詳細	特定のダウンロード可能なファイルの説明。
ドキュメント	<p>コンポーネントの説明が記載された PDF へのリンク。</p> <p>注 :一部のコンポーネントでは、対応する PDF ドキュメントを使用できません。</p>
ファイル名	ダウンロードできる特定のファイルの名前。
システム	BSM コンポーネントが実行されるオペレーティング・システム。

第5章

ライセンス管理

モニタとランザクションを実行し、BSM のさまざまな内蔵アプリケーションを使用するには、有効なライセンスが必要です。

BSM ライセンスでは、事前に設定された数のモニタとランザクションを指定された期間内に同時に実行できます。同時に実行できるモニタとランザクション数、実行できる特定のアプリケーション、ライセンスの有効期限のすべては、組織が HP から購入したライセンスによって異なります。

最初のライセンスは、インストール・プロセス中の設定ウィザードでのみインストールできます。

ライセンスの有効期限の 15 日前に、Web サイトのログイン・ページの後に BSM によってライセンスの有効期限リマインダが表示されます(管理者のみ)。

多数の BSM アプリケーションでは追加ライセンスが必要です。これらのアプリケーションを使用するには、HP からライセンスを入手し、BSM でそのライセンス・ファイルをアップロードする必要があります。Operations Manager i(OMi) ライセンス構造固有の情報については、『BSM ユーザ・ガイド』の「ライセンス」を参照してください。

アクセス方法

[ライセンス マネージャ] ページを開くには、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [ライセンス管理] を選択します。

ライセンスのステータスを確認するには、[管理] > [プラットフォーム] > [ライセンス管理] を選択します。

タスク


新しいライセンスの追加

新しいライセンスでデプロイメントを更新するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [ライセンス管理] を選択します。
2. [ファイルからライセンスを追加] をクリックし、関連する .dat ファイルを検索できる [ライセンスの追加] ダイアログ・ボックスを開きます。クライアント・マシンから BSM サーバにファイルがアップロードされます。
3. [ライセンス管理] ページの下部にある [サーバデプロイメント] リンクをクリックします。

UI の説明

[ライセンス マネージャ] ページ

UI 要素	説明
	<p>ライセンスの追加 : [ライセンスの追加] ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>このダイアログ・ボックスを使用して、ライセンス・ファイルをアップロードします。ライセンス・ファイルの場所を指定する必要があります。これらのファイルはデータ・ファイルで、拡張子は .DAT です。</p>
名前	ライセンスされた機能名。機能がバンドルされていた製品リソースへの関連付けが含まれます。
ライセンスのタイプ	<p>次の3つのライセンス・タイプがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 評価 : 試用期間として最高で60日間有効なライセンス。 <p>このライセンス・タイプを利用できるのは、時間ベースのライセンスまたは永久ライセンスの購入前までです。購入後は、試用期間は直ちに終了します。</p> <p>注 : 評価ライセンスは、更新できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 時間ベース : 時間ベースの有効期限があるライセンス • 永久的 : 有効期限のないライセンス。
残り日数	<p>ライセンスを継続して使用できる日数が表示されます。</p> <p>緑の場合は有効期限待ちで、赤の場合はライセンスの期限が切れています。</p>
有効期限	<p>ライセンスの約定有効期限が表示されます。</p> <p>この日付は、時間ベースのライセンスにのみ表示されます。</p>
キャパシティ	<p>ライセンスがキャパシティ・ベースの場合、利用可能なキャパシティ量と使用済みのキャパシティ量がステータス・バーで表示されます。</p> <p>利用可能条件 :</p> <p>この機能は、ライセンスがキャパシティ・ベースの場合にのみ使用できます。ライセンスがキャパシティ・ベースでない場合、[キャパシティ]列に「適用外」と表示されます。</p>
キャパシティの詳細	<p>ライセンスがキャパシティ・ベースの場合、利用可能なキャパシティ量と使用済みのキャパシティ量が比率で表示されます。</p> <p>利用可能条件 :</p> <p>この機能は、ライセンスがキャパシティ・ベースの場合にのみ使用できます。ライセンスがキャパシティ・ベースでない場合、[キャパシティ]列に「適用外」と表示されます。</p>

UI 要素	説明
[サーバデプロイメント]リンク	<p>ライセンスをBSMに追加する場合、[サーバデプロイメント]ページでそのアプリケーションを有効にする必要があります。これには、デプロイメントの物理リソースが追加アプリケーションを処理できるかどうかの確認も含まれます。</p> <p>詳細については、62ページ「サーバ・デプロイメント」を参照してください。</p>

ヒント / トラブルシューティング

手動によるライセンスのアクティブ化

一部のライセンスは、インストール時に自動的にアクティブ化されません。これらのライセンスは、特定の使用目的でアクティブ化する必要があります。常に実行されるわけではありません。このようなライセンスをアクティブ化するには、[ライセンス マネージャ] 表示枠の下部にある[サーバ デプロイメント]リンクをクリックします。

インストール済みライセンスとサーバ・デプロイメント

特定のライセンスがインストールされている場合でも、そのライセンスの一部の機能が利用できないことがあります。BSM での機能の設定方法が原因でこれが生じる可能性があります。[ライセンス マネージャ] 表示枠の下部にある[サーバ デプロイメント]リンクをクリックするか、BSM セットアップおよびデータベース構成ユーティリティを実行することでアクセスできる、[BSM サーバ デプロイメント] ページでこれらの機能を設定できます。詳細については、『BSM インストール・ガイド』の「サーバ・デプロイメントおよびデータベース・パラメータの設定」を参照してください。

ヒント: 有効にしたアプリケーションが常にインストール済みライセンスと一致することを確認してください。

第6章

サーバ・デプロイメント

本項では、最適な BSM サーバ・デプロイメントの決定方法と設定方法について説明します。

アクセス方法

[管理]> [プラットフォーム]> [セットアップと保守]> [サーバデプロイメント]を選択します。

詳細

サーバ・デプロイメントの概要

は、ハードウェアおよびソフトウェア・リソースを消費する多くのアプリケーションとサブシステムで構成されます。さまざまなユース・ケースに対応するアプリケーションを利用できますが、すべてのユーザがすべてのアプリケーションを必要としているわけではありません。BSM サーバのデプロイメントを社内のビジネス要件に合わせて調整できます。

の[サーバデプロイメント]ページでは、社内で必要なアプリケーションのみをデプロイするメカニズムを利用できます。特定のデプロイメントに必要なキャパシティに応じて、必要なハードウェアを決定できます。サーバ・デプロイメント機能では、デプロイメントで必要となる正確なハードウェアのキャパシティを表示し、未使用のリソースを解放できます。

[サーバデプロイメント]ページには、BSM サーバのインストール後に実行されるセットアップおよびデータベース設定ユーティリティ、およびBSM インタフェースの[プラットフォーム管理]領域の両方からアクセスできます。このページでは、デプロイメントの更新、アプリケーションの有効化または無効化が可能です。インストールの完了後にBSM デプロイメントへの調整が必要な場合はいつでもデプロイメントのキャパシティを調整できます。デプロイメントで不要なリソースを使用しないように、必要に応じてアプリケーションを有効または無効にできます。

キャパシティ・カリキュレータ

キャパシティ・カリキュレータ Excel シートを使用すると、BSM デプロイメントの範囲およびサイズを判別できます。実行中のアプリケーション数、ユーザ数、予測データなど、デプロイメント範囲に関する情報を入力すると、必要なメモリとCPU コアが計算され、デプロイメントのサイズが判別されます。デプロイメントに変更を加える場合(アプリケーションのライセンスの追加など)、キャパシティ・カリキュレータの情報を使用して、ハードウェア要件とデプロイメント設定を判別します。

データを保存したファイルを[サーバデプロイメント]ページに直接アップロードできます。これにより、Excel シートに入力したデータがページ内のフィールドに自動的に入力されます。

最初にBSM をインストールしたときにこのファイルを使用した場合、デプロイメントに変更を加える必要がある場合は常にその保存したバージョンを使用します。保存したバージョンがない場合、このファイルは、メイン BSM インストールDVD の[**Documentation**]フォルダ内にあります。最新バージョンは、HP ソフトウェア製品マニュアル Web サイト (<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>)。

ファイルの[**Deployment Calculator**]シートにデプロイメントに関する情報を入力します。[**Capacity Questionnaire**]列にアプリケーションやサイズなどの情報を入力すると、[**Output**]テーブルでハードウェアおよびソフトウェア要件が自動的に計算されます。[サーバデプロイメント]ページにアップロードできる場所にファイルを保存していることを確認してください。更新する前に毎回ファイルのコピーを作成することをお勧めします。

キャパシティ・カリキュレータを更新した時点では、デプロイメントは変更されません。キャパシティ・カリキュレータは[サーバデプロイメント]ページの値の更新に使用します。[サーバデプロイメント]ページの値を変更して[**保存**]をクリックした場合にのみ、デプロイメントが実際に更新されます。

タスク

BSM のライセンス、アプリケーション、またはデプロイメント範囲の更新方法

このタスクでは、サーバ・デプロイメントに変更を加える方法について説明します。

1. キャパシティ・カリキュレータを使用してデプロイメントの変更に必要なキャパシティを判別

BSM デプロイメントに変更(アプリケーションのライセンスの追加など)を加える前に、キャパシティ・カリキュレータ Excel ファイルを使用して、現在のサーバがキャパシティの要件を満たしているかどうかを判別することをお勧めします。

BSM のインストール前に使用して保存したバージョンのキャパシティ・カリキュレータを変更することをお勧めします。インストールの前後で独自のバージョンのキャパシティ・カリキュレータを保存しなかった場合、このカリキュレータは、メイン BSM インストール DVD の[**Documentation**]フォルダ内にあります。最新バージョンは、HP ソフトウェア製品 マニュアル Web サイト (<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>) からダウンロードできます。

[サーバデプロイメント]ページにアップロードできる場所に、現在の要件を満たすファイルを保存していることを確認してください。

2. 新しいライセンスの追加(省略可能)

デプロイメントを新しいライセンスで更新する場合にこの手順を実行します。

[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [ライセンス管理]を選択します。

[ファイルからライセンスを追加]をクリックし、関連する .dat ファイルを検索できる[ライセンスの追加]ダイアログ・ボックスを開きます。クライアント・マシンから BSM サーバにファイルがアップロードされます。

[ライセンス管理]ページの下部にある[サーバデプロイメント]リンクをクリックします。

3. [サーバデプロイメント]ページでのデプロイメントの更新

[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [サーバデプロイメント]を選択します。

- **入力テーブル:** [参照] ボタンをクリックして、保存したバージョンのキャパシティ・カリキュレータ Excel ファイルをアップロードします。アップロードするファイルを選択すると、デプロイメントの正しい情報でキャパシティ・カリキュレータ・ファイルに入力した値が[サーバデプロイメント]ページに自動的に入力されます。

または、上のテーブルに必要な情報を手動で入力することもできますが、入力した値に基づいてキャパシティを計算してデプロイメントの範囲を判別できるように、キャパシティ・カリキュレータを使用することをお勧めします。

- **サーバステータス・テーブル:** 下のテーブルはサーバのステータスを示し、必要なメモリがサーバで検出されたメモリを超えないようにします。検出されたメモリを超える場合、選択したアプリケーションを削除するか、キャパシティ・レベルを変更するか、サーバ上のメモリを増やす必要があります。

4. BSM の再起動

[サーバデプロイメント]ページの[保存]をクリックした後に、BSM を無効にして再度有効にする必要があります。

[スタート] > [プログラム] > [HP Business Service Management] > [Administration] > [Disable HP Business Service Management]/[Enable HP Business Service Management]を選択します。

5. 結果

デプロイメントにアプリケーションを追加した場合、そのアプリケーションがBSMメニューに表示されます。たとえば、システム可用性管理アプリケーションを有効にした場合、[管理]および[アプリケーション]メニューの両方にそのメニュー・オプションが表示されます。

逆に、デプロイメントからアプリケーションを削除した場合、そのアプリケーションは該当するメニューに表示されなくなります。

UI の説明

[サーバデプロイメント] ページ

このページでは、デプロイメントを更新し、変更するメモリの要件をハードウェアが満たすかどうかを判別できます。このページへの変更を保存したら、その変更を反映させるためにBSMを再起動する必要があります。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されま

UI 要素	説明
<<キャパシティ・カリキュレータのファイル名 >>	[参照] ボタンを使用し、保存したキャパシティ・カリキュレータ Excel ファイルを指定してアップロードします。 キャパシティ・カリキュレータに値を入力していない場合、このページを変更する前に値を入力することをお勧めします。キャパシティ・カリキュレータ・ファイルは、メイン BSM インストール DVD の[Documentation] フォルダ内にあります。最新バージョンは、HP ソフトウェア製品 マニュアル Web サイト (http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals) からダウンロードできます。

UI 要素	説明
<<キャパシティ・テーブル>>	<p>ページの上のテーブルには、デプロイメントとアプリケーションに関する現在の情報が表示されます。キャパシティ・カリキュレータ・ファイルをアップロードすると、このテーブルがキャパシティ・カリキュレータの情報で自動的に更新されます。</p> <p>デプロイメントの次のキャパシティ・レベルを変更できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Users : ログイン・ユーザ数。 ● モデル : モデルの設定項目数により、モデルが small, medium, large, extra-large のいずれであるかが判別されます。 ● メトリック・データ : 監視対象のアプリケーション、トランザクション、ロケーション、ホストの数により、メトリック・データの負荷が small, medium, large のいずれであるかが判別されます。 <p>アプリケーションと機能を有効 / 無効にし、そのキャパシティ・レベルを変更することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● エンド・ユーザ管理 ● TransactionVision ● Diagnostics ● Business Process Insight ● OMi. <ul style="list-style-type: none"> ■ TBEC : OMi にイベントを相関処理するために使用するトポロジベースのイベント相関処理。 ■ カスタム・ルール : イベント処理のカスタマイズに使用します。たとえば、イベント・エンリッチメントのカスタマイズやイベント・ブラウザへのカスタム・アクションの実装に使用します。ユーザがカスタム・ルールを使用するかどうか不明な場合は、OMi が有効になっている場合にこの機能を有効にします。 ● システム可用性管理 ● サービス・レベル管理 ● Service Health Analyzer ● ベースライン化 <p>[保存]をクリックして BSM を再起動した後の動作</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 以前は選択されていなかったアプリケーションを選択した場合、そのアプリケーションには BSM と該当するメニューからアクセスできます。 ● 以前に選択されていたアプリケーションをクリアした場合、そのアプリケーションにはアクセスできなくなります。

UI 要素	説明
<<サーバ・ステータス・テーブル>>	<p>下のテーブルには、BSM を実行するすべてのサーバと次の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ステータス: マシンが起動して実行されているかどうか。 ● 調整済み: マシンが現在のデプロイメント設定で調整されているかどうか。変更が加えられた後にこのマシンで BSM が再起動された場合のみ調整されます。このページで設定が変更された後にこのマシンで BSM がまだ再起動されていない場合、マシンは調整されていません。 ● マシン: サーバの名前。 ● インストール済み: マシンにゲートウェイ、処理、両方(ゲートウェイとデータ処理が同じマシンにある場合の一般的なインストール)のいずれのタイプの BSM サーバがインストールされているか。 ● アクティブ化済み: ゲートウェイ、DPS(データ処理サーバ)のいずれのタイプの BSM サーバがマシンで現在アクティブ化されているか。 ● 検出済み: マシンで検出された空きメモリ。 ● 必要な容量: 上のテーブルに表示されたアプリケーションとキャパシティ・レベルに基づく、各タイプのサーバで必要なメモリ。 <p>必要な容量のメモリが[検出済み]列のメモリよりも大きい場合、次のいずれかを実行する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デプロイメントのキャパシティ・レベルを変更(例: 利用可能なアプリケーションのリストからアプリケーションをクリア)。 ■ 物理マシンにメモリを追加してデプロイメントを再度更新。
マシンを無効化するには	<p>インストール済みの BSM のコンポーネントがシステムの現在の動作状況に関連しないサーバ・マシンを無効にできるページへのリンク。マシンを無効にする前に、BSM サーバ・アーキテクチャの一部として動作していないことを確認してください。ここを無効化した後で再度有効化するには、そのマシンでセットアップおよびデータベース設定ユーティリティを実行する必要があります。</p>

トラブルシューティングおよび制限事項

トラブルシューティング

- BSM インタフェースにアプリケーションが表示されない場合は、[サーバデプロイメント]ページを使用してアプリケーションをアクティブ化します。
- アプリケーションがアクティブ化されていても BSM インタフェースにアプリケーションが表示されない場合は、すべての BSM サーバを再起動します。
- キャパシティ・カリキュレータでアプリケーションを選択しても[サーバデプロイメント]ページにインポートされない場合は、このアプリケーションに対して有効なライセンスがあることを確認します。

第7章

データベース管理

これらのページは HP Operations で管理されます。ユーザに対してインタフェースは表示されません。

監視データの格納用に BSM で使用するデータベースを保守および管理できます。プロファイル・デバイススペースの作成と管理は、プラットフォーム管理で直接行うことができます。パーティションとページ・マネージャを使用して、組織のニーズに合わせてデータベース内のデータを定期的にパージできます。

監視環境を設定する前に、監視データの保存先となるデータベースを設定する必要があります。プロファイル・データベースには、異なるタイプのデータ・ソース(Business Process Monitor, SiteScope) のデータを格納できます。すべてのデータに対して1つのデータベースを作成したり、専用データベース(データ・タイプ別など)を作成したりできます。

注: データベースという用語は、Microsoft SQL Server データベースを指します。ユーザ・スキーマという用語は、Oracle Server データベースを指します。

BSM は 2 種類のデータベースをサポートしています。

- **Microsoft SQL Server** : このデータベースは Windows オペレーティング・システムでのみ動作します。Microsoft SQL Server でのデータベースの設定方法については、[75ページ「Microsoft SQL Server でのプロファイル・データベースの設定方法」](#)を参照してください。
- **Oracle Server** : このデータベースは BSM でサポートされる任意のオペレーティング・システムで動作します。Oracle Server データベースはユーザ・スキーマと呼ばれます。Oracle Server ユーザ・スキーマでのデータベースの設定方法については、[76ページ「Oracle サーバでのユーザ・スキーマの設定方法」](#)を参照してください。

[管理]> [プラットフォーム]> [セットアップと保守]からアクセスする[プロファイル データベースの管理]ページでは、次のデータベース管理タスクを実行できます。

- **データベースの新規作成** : BSM は新しいデータベースを自動的に作成し、プロファイル・テーブルを入力します。
- **標準のプロファイル・データベースの割り当て**。BSM で次のタイプのデータを収集するには、標準のプロファイル・データベースを割り当てる必要があります。
 - サービス・レベル管理 データ
 - SOA データ
 - Real User Monitor および Business Process Monitor のデータ
 - サービス状況 で使用するデータ
 - Diagnostics データ
 - 永続カスタム・データ

注: [データベース管理] ページに追加された最初のデータベースが自動的に標準設定のプロファイル・データベースとして指定されます。

- **既存の空のデータベースへのプロファイル・テーブルの追加。** BSM は、データベース・サーバで手動で作成された空のデータベースに接続し、プロファイル・テーブルを入力します。
- **プロファイル・テーブルが入力された既存のデータベースへの接続。** BSM は、手動で作成されプロファイル・テーブルが入力されたプロファイル・データベース、またはプラットフォーム管理で以前に定義されたプロファイル・データベースに接続します。

組織固有の環境に合わせてプロファイル・データベースを Microsoft SQL Server または Oracle Server でデプロイするには、『BSM Database Guide』の「Introduction to Preparing the Database Environment」に記載されている手順を参照してください。プロファイル・データベースの管理タスクを実行する前に、BSM Database Guideの関連箇所を確認することをお勧めします。

注: BSM データ・コレクタは、パフォーマンス・データを収集し、ゲートウェイ・サーバに送信します。ゲートウェイ・サーバは、ローダ・メカニズムを使用してデータをプロファイル・データベースに送信します。データは、タイムスタンプとともにデータベースに挿入されます。BSM コンポーネントのクロックは、BSM データベースをホストするデータベース・サーバのホスト・マシンのクロックと同期されます。このため、データベースに挿入された各測定値のタイムスタンプは、測定値の収集時点におけるデータベース・サーバの時計のタイムスタンプになります。

データベースの履歴データのパーティショニングとパージ

注: これらのページは HP Operations で管理されます。ユーザに対してインタフェースは表示されません。

パーティションとパージ・マネージャは、プロファイル・データベースと SHP データベースの履歴データを後で削除するために、自動的にパーティショニングするようプラットフォームに指示するために使用します。

プロファイル・データベースと SHP データベースのデータ収集テーブルは、サイズがかなり大きくなる場合があります。長期的には、システム・パフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。

BSM のパーティションとパージ・マネージャは、短期間で拡大する表を、定義した期間で複数のパーティションに分割します。定義した期間が経過すると、パーティション内のデータは、BSM レポートで使用できなくなります。最大 2 時間が経過すると、パーティションがプロファイル・データベースからパージされます。

パーティションとパージ・マネージャは、プロファイル・データベースまたは SHP データベースごとにアクティブ化され、データベース・テーブルで定義された期間に応じて、履歴データのパーティショニングと以降のパージを処理します。各パーティションのサイズは、[パージ・マネージャ] ページに表示される EPM (1 分ごとのイベント数) によって決まります。標準設定の EPM 値は、指定したデータベース・テーブルの適切なレベルに応じて事前設定されます。必要に応じて、EPM 値を調整してもかまいません。

- データ・パーティションが大きすぎる(累積が 100 万行を大幅に上回る)場合は、EPM 値を増加して新しいパーティションの作成頻度を増やします。
- データ・パーティションが小さすぎる(累積が 100 万行を大幅に下回る)場合は、EPM 値を減少して新しいパーティションの作成頻度を減らします。

注: パーティションとパージ・マネージャのパーティショニング方法は、ネイティブ・パーティショニングです(このリリースでサポートされている SQL SERVER および Oracle Enterprise 版については、リリース・ノートのデータベース・サポート・マトリクスを参照してください)。Oracle データベースでは、Oracle のパーティショニング・オプションを有効にしておく必要があります。Oracle パーティショニング・オプションが利用できない場合、パーティションとパージ・マネージャはデータのパーティショニングまたはパージを行いません。パーティショニングまたはパージに失敗すると、パフォーマンスに関する重大な問題となる可能性があります。

パーティションとパージ・マネージャを使用して、履歴データを削除するための特定の期間(テーブルごと)を設定することもできます。このタスクを実行するユーザ・インタフェースの詳細については、[88 ページ](#)「[パージ・マネージャ] ページ」を参照してください。

パーティションとパージ・マネージャは 1 時間ごとに実行され、新しいデータ・パーティションを作成する必要があるか、またテーブルごとに定義された保存期間より古いデータをパージする必要があるかがチェックされます。

注: 標準設定では、パーティションとパージ・マネージャはデータをパージしません。パーティションとパージ・マネージャの管理画面を使用して、データ・サンプルのパージ・ポリシーを設定してください。

パーティションとパージ・マネージャの使用に関するガイドラインおよびヒントについては、[73 ページ](#)「パーティションとパージ・マネージャの使用に関するガイドラインとヒント」を参照してください。

[パーティション管理] ページは、次のタブに分かれています。

- **テンプレートおよび複数データベース** : テンプレートの設定、および複数データベースでのデータベースの設定を変更するために使用します。後から追加したデータベースには、テンプレートの設定が適用されます。

変更を行った場合、テンプレートには変更を加えず特定のデータベースの設定を手動で変更した場合でも、[テンプレートおよび複数データベース] タブに表示される設定がテンプレート設定に残ります。手動による変更が適用されると、表示された設定がテンプレート設定に戻ります。特定のデータベースに加えた設定の変更を確認するには、[データベース固有] タブに移動して該当するデータベースを選択します。

- **データベース固有** : 指定したデータベースの設定を表示します。

パーティショニングとパーティションの高度な機能の詳細については、『BSM Database Guide』の「Data Partitioning and Purging」を参照してください。

パーティションとパーティション管理の使用に関するガイドラインとヒント

本項では、パーティションとパーティション管理の使用に関するガイドラインとヒントについて説明します。

- パーティションとパーティション管理は、未処理データが集計されて BSM にレポートされる前にパーティションされないように追加のチェックを実行してからパーティションを行います。

特定のデータセットのパーティションがスケジュールされていても、その未処理データがまだ集計されていない場合、パーティションとパーティション管理はそのスケジュールどおりにデータをパーティションしません。パーティションとパーティション管理は、データの集計が完了した後でのみ次の1時間ごとの実行で自動的にデータをパーティションします。

たとえば、データのパーティションが日曜の8:00にスケジュールされているが、データの集計が日曜の10:00に予定されている場合、パーティションとパーティション管理は8:00にデータをチェックしてデータをパーティションしません。データの集計が完了した日曜の10:00の後でのみ次の1時間ごとの実行でデータを自動的に削除します。

- パーティションとパーティション管理で設定されたスケジュールどおりにデータがパーティションされておらず、プロファイルデータベースが大きくなり過ぎている場合、集計が適切に実行されていることを確認し、データ処理サーバの <HPBSM サーバのルート・ディレクトリ> \log\pmanager.log にあるパーティションとパーティション管理ログを参照します。
- 未処理データおよび集計データのパーティションを定義する場合、原則として集計データの1日のチャンクを保持する時間、集計データの1時間のチャンクを保持する時間、未処理データを保持する時間の順に短くなるようにします。
- [テンプレートおよび複数データベース] タブで行われた変更は、システムで作成される新しいプロファイルデータベースの標準設定の期間に影響します。[テンプレートおよび複数データベース] タブで期間を変更した後で新しいプロファイルデータベースが作成された場合、この新しいプロファイルデータベースのテーブル(すべてのテーブル)にデータが保持されるときに[テンプレートおよび複数データベース] に現在リストされている期間が使用されます。

プロフィール・データベースからの不要データの削除

注: 本項は、HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様には該当しません。

データ・マーキング・ユーティリティでは、スーパーユーザのセキュリティ権限のある BSM ユーザがプロフィール・データベース内の特定のデータ・セットを不要としてマークできます。これにより不要なデータが除外され、指定した期間の最も関連性の高いデータのみを BSM で表示できます。ユーティリティで指定したデータを利用不可としてマークすると、BSM は選択した期間の残りの未処理データを自動的に再集計します。

データ・マーキング・ユーティリティでは、不要な Business Process Monitor および SiteScope データも削除できます。

指定した期間の特定のデータ・セットを不要としてマークすると、マークされたデータが表示されないようにするため、BSM はその期間の残りの未処理データを再集計します。また、データ・マーキング・ユーティリティを使用して、定義済みのデータ・セットを利用不可としてマークせずに再集計することもできます。詳細については、79ページ「再集計のみのオプションを有効にする方法」を参照してください。

インストール時に、BSM によってゲートウェイ・サーバにデータ・マーキング・ユーティリティがインストールされます。ユーティリティはマークされたデータをデータベースから物理的に削除しませんが、マークされたデータにデータベースで[利用不可]のステータスを割り当てることで、レポートとアプリケーションにそのデータは利用不可と表示します。

データ・マーキング・ユーティリティはパーティションをサポートします。そのため、パーティションとページ・マネージャを実行しているユーザもデータ・マーキング・ユーティリティを使用できます。

Microsoft SQL Server でのプロファイル・データベースの設定方法

このタスクでは、Microsoft SQL server で1つ以上のプロファイル・データベースを設定する方法について説明します。

1. 前提条件

開始する前に、データベースサーバに対して次の接続パラメータがあることを確認してください。

- a. **サーバ名**。Microsoft SQL Server がインストールされているマシンの名前。標準設定でない Microsoft SQL Server インスタンスに動的モードで接続する場合は、次の形式でサーバ名を入力します。

<host_name>\<instance_name>

- b. **データベース・ユーザ名とパスワード**。Microsoft SQL Server で管理者権限を持つユーザのユーザ名とパスワード (SQL Server 認証を使用している場合)。
- c. **サーバ・ポート**。Microsoft SQL Server の TCP/IP ポート。標準設定のポート 1433 が自動的に表示されます。次のいずれかのインスタンスで、ポート番号を変更する必要があります。
 - 標準設定の Microsoft SQL Server インスタンスは、1433 以外のポートをリッスンします。
 - 標準設定でない Microsoft SQL Server インスタンスに静的モードで接続します。
 - 標準設定でない Microsoft SQL Server インスタンスに動的モードで接続します。この場合は、ポート番号 1434 を入力します。

必要に応じて、組織の DBA に相談にしてこの情報を取得します。

2. データベースの追加

- a. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [プロファイル データベースの管理] にある [データベース管理] ページにアクセスします。
- b. ドロップダウン・リストから [MS SQL] を選択して、[追加] をクリックします。
- c. [プロファイル データベース プロパティ - MS SQL Server] ページで、データベースのパラメータを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、85 ページ「[プロファイル データベース プロパティ - MS SQL Server] ページ」を参照してください。

Oracle サーバでのユーザ・スキーマの設定方法

このタスクでは、Oracle サーバで1つ以上のプロファイル・ユーザ・スキーマを設定する方法について説明します。

1. 前提条件

開始する前に、必ず次の作業を実行してください。

- プロファイル・ユーザ・スキーマ専用の標準設定の表領域(および必要に応じて専用の一時表領域)を作成します。
- セキュアでない接続でデータベース管理者の接続パラメータを送信することを避ける場合は、セキュアなネットワーク接続を使用します。Web ブラウザを使用したデータベース管理者の接続パラメータの送信を完全に避けるには、プロファイル・ユーザ・スキーマを手動で作成し、[データベース管理]ページからそのスキーマに接続します。

2. 接続パラメータの収集

データベース・サーバに次の接続パラメータが含まれていることを確認します。

- ホスト名** :Oracle サーバがインストールされているマシンの名前。
- SID** :使用される Oracle データベースのインスタンスを一意に識別する Oracle インスタンス名(標準設定値 **orcl** とは異なる場合)。
- ポート** :Oracle リスナ・ポート(標準設定値 **1521** とは異なる場合)。
- データベース管理者のユーザ名とパスワード** :Oracle サーバでの管理権限を持つユーザの名前とパスワード。これらのパラメータは BSM ユーザの作成に使用され、システムには保存されません。
- デフォルトの表領域** :プロファイル・ユーザ・スキーマ専用で作成した標準設定の表領域の名前(専用表領域の作成の詳細については、『BSM Database Guide』の「Oracle Server のデプロイメントの概要」を参照してください)。専用の標準設定表領域は不要で作成していない場合、別の表領域を指定します。標準設定の Oracle 表領域名は **users** です。
- 一時表領域** :プロファイル・ユーザ・スキーマ専用で作成した一時表領域の名前。専用の一時表領域は不要で作成していない場合、別の表領域を指定します。標準設定の Oracle 一時表領域名は **temp** です。

必要に応じて、データベース管理者に連絡してこの情報を取得してください。

3. ユーザ・スキーマの追加

- [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [プロファイル データベースの管理]にある[データベース管理]ページにアクセスします。
- ドロップダウン・リストから[Oracle]を選択し、[追加]をクリックします。
- [プロファイル データベース プロパティ - Oracle サーバ]ページのユーザ・スキーマのパラメータを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、86ページ「[プロファイル ユーザ スキーマ プロパティ - Oracle サーバ]ページ」を参照してください。

プロファイル・データベースが Oracle Real Application Cluster(RAC)の一部である場合は、『BSM Database Guide』の「Support for Oracle Real Application Cluster」を参照してください。

ページ・マネージャの操作方法

このタスクでは、ページ・マネージャの操作方法について説明します。

このタスクには次のトピックが含まれています。

- 77ページ「前提条件」
- 77ページ「データベース・テンプレートの変更」
- 77ページ「複数のデータベースの設定の変更」
- 78ページ「個々のデータベースの設定の変更」

1. 前提条件

BSM システムに、少なくとも1つのプロファイル・データベースが設定されていることを確認します。Microsoft SQL Server でのプロファイル・データベースの設定方法については、75ページ「Microsoft SQL Server でのプロファイル・データベースの設定方法」を参照してください。

Oracle Server でのユーザ・スキーマの設定方法については、76ページ「Oracle サーバでのユーザ・スキーマの設定方法」を参照してください。

2. データベース・テンプレートの変更

データベース・テンプレートの設定を変更するには、次の手順を実行します。

- a. [ページ マネージャ] ページの[テンプレートおよび複数データベース]タブにアクセスします。
- b. 変更する設定の横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のチェック・ボックスを一度に選択できます。
- c. [データの保存期間]および[EPM へ変更]フィールドで指定の設定を適宜変更し、[適用]をクリックします。
- d. [適用]リンクをクリックし、適切なテンプレート(ネイティブ・パーティショニング・データベースの場合は[エンタープライズ]、ビュー・パーティショニング・データベースの場合は[標準])が選択されていることを確認します。
- e. [OK]をクリックして、変更内容をテンプレートに登録します。

注: 変更を行った場合、テンプレートには変更を加えず特定のデータベースの設定を手動で変更した場合でも、[テンプレートおよび複数データベース]タブに表示される設定がテンプレート設定に残ります。手動による変更が適用されると、表示された設定がテンプレート設定に戻ります。特定のデータベースに加えた設定の変更を確認するには、[データベース固有]タブに移動して該当するデータベースを選択します。

3. 複数のデータベースの設定の変更

複数のデータベースの設定を一度に変更するには、次の手順を実行します。

- a. [ページ マネージャ] ページの[テンプレートおよび複数データベース]タブにアクセスします。
- b. 変更する設定の横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のチェック・ボックスを一度に選択できます。
- c. [データの保存期間]および[EPM へ変更]フィールドで指定の設定を適宜変更し、[適用]

をクリックします。

- d. [適用]リンクをクリックし、適切なデータベースが選択されていることを確認します。変更内容をテンプレートに適用しない場合は、テンプレートの横にあるチェック・ボックスを選択解除します。
- e. [OK]をクリックして、選択したデータベースに変更内容を登録します。

注: データベースに加えた変更は、[プロフィール データベースを選択]ドロップダウンで該当するデータベースを選択した後で、[データベース固有]タブにのみ表示されます。

4. 個々のデータベースの設定の変更

個々のデータベースの設定を変更するには、次の手順を実行します。

- a. [ページ マネージャ]ページの[データベース固有]タブにアクセスします。
- b. 変更する設定の横にあるチェック・ボックスを選択します。
- c. [プロフィール データベースを選択]フィールドで、変更内容を適用するプロフィール・データベースを選択します。
- d. [データの保存期間]および[EPM へ変更]フィールドで指定の設定を適宜変更し、[適用]をクリックします。

再集計のみのオプションを有効にする方法

標準設定では、データ・マーキング・ユーティリティは、データ・マーキング・プロセスを常に行った後で再集計プロセスを実行します。必要に応じて、再集計のみを実行するようにBSMに指示する機能を有効にすることができます。これは、データ・マーキングに成功しても再集計に失敗した場合に必要となることがあります。あるいは、データが集計済みで後から到着したデータがデータベース内の未処理のデータ・テーブルに挿入された場合は、この機能を使用して、定義済みの一連のデータを使用不能にせず再集計することができます。

再集計のみのオプションを有効にするには、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタで<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \tools\dataMarking\dataMarking.NET ファイルを開きます。
2. **true** の値を設定した **DadvanceMode** プロパティを **SET SERVICE_MANAGER_OPTS** 行に追加します。例：

```
SET SERVICE_MANAGER_OPTS=-DhacProcessName=%PROCESS_NAME % -  
DadvancedMode=true
```

3. ファイルを保存します。次回にデータ・マーキング・ユーティリティを開くと、**[詳細設定]** ボタンが表示されます。

この機能を有効にすると、**[開始]** ボタンをクリックしたときにデータの再集計プロセスのみを実行するようデータ・マーキング・ユーティリティに指示できます。

データの再集計プロセスのみを実行するには、次の手順を実行します。

1. 74ページ「プロファイル・データベースからの不要データの削除」の説明に従って、再集計する一連のデータを定義します。
2. **[詳細設定]** ボタンをクリックします。**[詳細設定]** ウィンドウが開きます。
3. **[再集計のみ実行]** チェック・ボックスを選択します。
4. 再集計するデータのカテゴリを選択し、**[OK]** をクリックして選択内容を確定します。
5. **[開始]** をクリックします。

BSM で受信するデータの 1 分あたりのイベント数を決定する方法

BSM で受信する 1 分あたりのデータ量を決定できます。[ページ マネージャ] ページの上部にある [EPM へ変更] ボックスにこの数値を入力します。

選択したデータ・タイプの 1 分あたりのイベント数を決定するには、次の手順を実行します。

1. 次の場所にあるファイルを開きます。

<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \log\db_loader\LoaderStatistics.log

2. 選択したデータ・サンプルにある次の行を見つけます。

Statistics for: DB Name: <データベース名> Sample: <サンプル名> - (collected over <期間>):

3. データ・サンプルの統計セクションにある次の行を見つけます。

Insert to DB EPS (MainFlow)

選択した数値は、1 秒あたりのイベント数を表します。この数値に 60 をかけると 1 分あたりに受信するイベント数になります。

サンプルが属するパーティション・マネージャのデータ・テーブルを決定するには、『BSM Extensibility Guide』の「[Generic Reporting Engine API](#)」の手順に従ってください。結果のリストには、サンプル名の横にデータ・テーブルが括弧で囲まれて表示されます。適切なテーブルの EPM の数値を入力できます。

複数のゲートウェイ・サーバがある場合、各サーバから取得する値を合計する必要があります。

データ・マーキング・ユーティリティ設定のカスタマイズ方法

各データ・マーキングの実行の最長継続時間を設定できます。現在の標準設定は6時間59分です。

最長継続時間を設定するには、次の手順を実行します。

1. <ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \tools\dataMarking\dataMarking.bat ファイルをテキスト・エディタで開きます。
2. **SET SERVICE_MANAGER_OPTS** 行に **DmaximumDuration** プロパティを追加し、最長継続時間の値(時間単位)を指定します。

たとえば、最長継続時間を23時間59分に変更するには、次のように指定します。

```
SET SERVICE_MANAGER_OPTS=  
-DhacProcessName=%PROCESS_NAME%  
-Dlog.folder.path.output=%PROCESS_NAME% -DmaximumDuration=24
```

3. ファイルを保存して閉じます。

データベース管理のユーザ・インタフェース

本項の内容


- 82ページ「[データベース管理]ページ」
- 82ページ「[データ マーキング ユーティリティ]ページ」
- 85ページ「[プロファイルデータベースプロパティ - MS SQL Server]ページ」
- 86ページ「[プロファイルユーザスキーマプロパティ - Oracle サーバ]ページ」
- 88ページ「[パージ マネージャ]ページ」

[データベース管理]ページ

このページでは、BSM で監視データの保存に使用するデータベースを保守、管理できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [プロファイル データベースの管理]を選択します。
重要な情報	[データベース管理]ページに追加された最初のデータベースが自動的に標準設定のプロファイル・データベースとして指定されます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	データベースまたはユーザ・スキーマを切断します。 注：標準設定のプロファイル・データベースまたは使用中のデータベースは削除できません。
追加	ドロップダウン・データベース・リストで指定された Microsoft SQL Server データベースまたは Oracle サーバ・ユーザ・スキーマを追加します。
データベース名	データベースの名前。
データベースタイプ	データベースのタイプ (Microsoft SQL または Oracle)。
サーバ名	データベースを実行しているサーバの名前。

[データ マーキング ユーティリティ]ページ

このページでは、Business Process Monitor データのアプリケーション別または場所別、および SiteScope の SiteScope ターゲット・マシン別に、削除するデータ・セットを選択できます。

アクセス方法	ゲートウェイ・サーバで、<HPBSM ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \tools\dataMarking\dataMarking.bat ファイルをダブルクリックします。コマンド・プロンプト・ウィンドウが開き、続いてデータ・マーキング・ユーティリティのログイン・ダイアログ・ボックスが開きます。superuser 権限を持つ BSM ユーザのユーザ名とパスワードを入力します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> データ・マーキング・ユーティリティの複数のインスタンスを同時に実行しないでください。これを行うと再集計プロセスに影響する可能性があります。 ページ・データ(パーティションとページ・マネージャを使用して削除されたデータ)を含む期間のデータ・セットはマークしないでください。これを行うと再集計プロセスに影響する可能性があります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 74ページ「プロファイル・データベースからの不要データの削除」 91ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アプリケーション	古いデータとしてマークできるアプリケーションのリスト。
ビジネス・トランザクション・フロー	古いデータとしてマークできるビジネス・トランザクション・フローのリスト。 注: このフィールドは、[アプリケーション]ビュー([表示]ドロップダウンで[アプリケーション]を選択)でのみ表示されます。
継続時間	ユーティリティでデータを利用不可としてマークする、指定開始時間から始まる期間を選択します。 注: 各データ・マーキングの実行の継続時間は最長 6 時間 59 分まで設定できます。この値のカスタマイズの詳細については、81ページ「データ・マーキング・ユーティリティ設定のカスタマイズ方法」を参照してください。
情報の取得	データ・マーキング・ユーティリティの実行前にクリックすることで、マークされるデータ行の数を表示できます。詳細については、82ページ「[データ・マーキング・ユーティリティ]ページ」を参照してください。
場所	古いデータとしてマークできる場所のリスト。
古いデータとしてマークします	フィルタされた条件(アプリケーション、ビジネス・トランザクション・フロー、トランザクション、場所、または SiteScope ターゲット)を古いデータとしてマークします。
有効なデータとしてマークします(古いデータのマークを元に戻す)	古いデータとしてマークされた後に、選択したデータを再度利用可能にします。
進行状況	データ・マーキング・プロセスおよび再集計プロセスの進行状況を表示します。

UI 要素	説明
SiteScope ターゲット	古いデータとしてマークできる SiteScope ターゲット・マシン(SiteScope で監視するマシン) のリスト。 注: このフィールドは, [SiteScope ビュー] ([表示] ドロップダウンで [SiteScope ビュー] を選択) でのみ表示されます。
開始	データ・マーキング・ユーティリティを有効にして, 古いデータとしてマークします。
開始時間	データを利用不可としてマークする開始日時を選択します。
トランザクション	古いデータとしてマークできるトランザクションのリスト。 注: このフィールドは, [アプリケーション] ビュー ([表示] ドロップダウンで [アプリケーション] を選択) でのみ表示されます。
表示	データ・マーキング・ユーティリティに表示される表示タイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> アプリケーション 場所 SiteScope ターゲット

データ・マーキング情報ウィンドウ

このウィンドウには, データ・マーキング・ユーティリティによって古いデータとしてマークされるデータが表示されます。

アクセス方法	[データ マーキング ユーティリティ] ページで [情報の取得] ボタンをクリックします。
重要な情報	[データ マーキング情報ウィンドウ] の下部には, マークされたデータによって影響を受ける SLA が表示されます。[管理] > [サービスレベル管理] の [アグリーメント マネージャ] タブで, 影響を受ける SLA を再計算できます。詳細については, 『BSM アプリケーション管理ガイド』の「SLA の再計算」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 74ページ「プロファイル・データベースからの不要データの削除」 91ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
アプリケーション名	古いデータとしてマークされるアプリケーション名。
更新する行数	古いデータとしてマークされるデータ行数。
更新する総行数	古いデータとしてマークできる行の総数。この数には, [更新する行数] フィールドとは異なる値を指定できます。

[プロファイル データベース プロパティ - MS SQL Server] ページ

このページでは、Microsoft SQL Server で新規または既存のプロファイル・データベースを設定できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [プロファイル データベースの管理] を選択し、ドロップダウン・データベース・リストから [Microsoft SQL] を選択して [追加] をクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> MS SQL Server データベースを手動で設定してから、[データベース管理] ページで接続することをお勧めします。MS SQL Server データベースの手動による設定の詳細については、『BSM Database Guide』の「Overview of Microsoft SQL server Deployment」を参照してください。 データベースの作成には数分かかることがあります。
関連タスク	75ページ「Microsoft SQL Server でのプロファイル・データベースの設定方法」
関連情報	70ページ「データベース管理」

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベースとテーブルの作成	<p>必要に応じて選択または選択解除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しいデータベースを作成するか、既存の空のデータベースに接続してプロファイル・テーブルを入力するには、チェック・ボックスを選択を選択します。 プロファイル・テーブルが入力済みの既存のデータベースに接続するには、チェック・ボックスを選択解除します。
データベース名	<ul style="list-style-type: none"> 新しいデータベースを設定している場合は、データベースのわかりやすい名前を入力します。 以前に作成されたデータベースに接続している場合は、既存のデータベースの名前を入力します。
切断	<p>データベースを BSM から切断します。</p> <p>注：このボタンは、[データベース管理] ページで [データベースの切断] ボタン  をクリックした後にのみ表示されます。</p>

UI 要素	説明
このプロファイル データベースを標準設定にする (カスタム データタイプでは必須)	<p>必要に応じて選択または選択解除します。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> サービス状況, Real User Monitor, HP Diagnostics(インストールされている場合), サービス・レベル管理, SOA, 永続カスタム・データを収集している場合には, この設定が必須です。 このチェック・ボックスを選択すると, 既存の標準設定のプロファイル・データベースが上書きされます。
パスワード	<ul style="list-style-type: none"> Windows 認証を使用している場合は空のまま残します。データベース・サーバで認証された Windows ログインとして設定されている Windows ユーザが BSM サービスを実行することを確認します。 SQL Server 認証を使用している場合は, Microsoft SQL Server で管理者権限を持つユーザのパスワードを入力します。
ポート	<p>次の場合にポート番号を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 標準設定 (1433) と異なるポートで動作するように, Microsoft SQL Server の TCP/IP ポートが設定されている。 静的モードで標準設定以外のポートを使用する。 動的モードで標準設定以外のポートを使用する。この場合は, ポート 1434 を入力します。
サーバ名	<p>Microsoft SQL Server がインストールされているマシンの名前を入力します。動的モードで標準設定以外のインスタンスを使用している場合は, <my_server\my_instance> の形式でサーバ名を入力します。</p>
SQL Server 認証	<p>Microsoft SQL Server で SQL Server 認証を使用している場合に選択します。</p>
ユーザ名	<ul style="list-style-type: none"> Windows 認証を使用している場合は空のまま残します。 SQL Server 認証を使用している場合は, Microsoft SQL Server で管理者権限を持つユーザのユーザ名を入力します。
Windows 認証	<p>Microsoft SQL Server で Windows 認証を使用している場合に選択します。</p>


[プロファイル ユーザ スキーマ プロパティ - Oracle サーバ] ページ

このページでは, Oracle Server で 1 つ以上のプロファイル・ユーザ・スキーマを設定できます。

アクセス方法	<p>[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [プロファイル データベースの管理] を選択し, ドロップダウン・データベース・リストから [Oracle] を選択して [追加] をクリックします。</p>
--------	---

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> Oracle Server ユーザ・スキーマを手動で設定してから、[データベース管理] ページで接続することをお勧めします。Oracle Server ユーザ・スキーマの手動による設定の詳細については、『BSM Database Guide』の「Overview of Oracle Server Deployment」を参照してください。 ユーザ・スキーマの作成には数分かかることがあります。作成プロセスが完了する前に、ブラウザがタイムアウトになることがあります。ただし、作成プロセスはサーバ側で続行します。 <p>確認メッセージが表示される前にタイムアウトになった場合は、ユーザ・スキーマ名が[データベース管理] ページのデータベース・リストに表示されることを確認し、ユーザ・スキーマが正常に作成されたことを確認します。</p>
関連タスク	76ページ「Oracle サーバでのユーザ・スキーマの設定方法」
関連情報	70ページ「データベース管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベースとテーブルの作成	<p>必要に応じて選択または選択解除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しいユーザ・スキーマを作成するか、既存の空のユーザ・スキーマに接続してプロファイル・テーブルを入力するには、チェック・ボックスを選択します。 プロファイル・テーブルが入力済みの既存のユーザ・スキーマに接続するには、チェック・ボックスを選択解除します。 <p>注：このチェック・ボックスを選択解除すると、ページ内のデータベース管理者の接続パラメータとテーブルスペースの各フィールドが無効になり、Oracle Server マシンへの接続時にこれらのフィールドの情報を無視するようにプラットフォームに指示されます。</p>
データベース管理者のパスワード	<p>Oracle Server で管理者権限を持つユーザのパスワードを入力します。</p> <p>注：このフィールドは、[データベースとテーブルの作成] チェック・ボックスを選択した場合にのみ、有効です。</p>
データベース管理者のユーザ名	<p>Oracle Server で管理者権限を持つユーザのユーザ名とパスワードを入力します。</p> <p>注：このフィールドは、[データベースとテーブルの作成] チェック・ボックスを選択した場合にのみ、有効です。</p>
デフォルト テーブルスペース	<p>プロファイル・ユーザ・スキーマで使用するために指定されたデフォルト テーブルスペースの名前を入力します。</p> <p>標準設定値：ユーザ:</p>
切断	<p>ユーザ・スキーマを BSM から切断します。</p> <p>注：このボタンは、[データベース管理] ページで [データベースの切断] ボタン  をクリックした後にのみ表示されます。</p>

UI 要素	説明
ホスト名	Oracle Server がインストールされているマシンの名前を入力します。
このプロファイル データベースを標準設定にする (カスタム データタイプでは必須)	<p>必要に応じて選択または選択解除します。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> サービス状況, Real User Monitor, HP Diagnostics(インストールされている場合), サービス・レベル管理, SOA, 永続カスタム・データを収集している場合には, この設定が必須です。 このチェック・ボックスを選択すると, 既存の標準設定のプロファイル・データベースが上書きされます。
ポート	必須の Oracle リスナ・ポートを入力するか, 標準設定値を受け入れます。
パスワードの確認入力	ユーザ・スキーマのパスワードを再入力します。
SID	必須の Oracle インスタンス名を入力するか, 標準設定値を受け入れます。
一時テーブルスペース	<p>プロファイル・ユーザ・スキーマで使用するために指定された一時テーブルスペースの名前を入力します。</p> <p>標準設定値: temp</p>
TNS 名	ゲートウェイ・サーバ・マシンの tnsnames.ora ファイルで指定された Oracle クライアントの TNS 名を入力します。これは, <ORACLE ホーム>\network\admin ディレクトリにあります。
ユーザスキーマ名	<ul style="list-style-type: none"> 新しいユーザ・スキーマを設定している場合は, ユーザ・スキーマのわかりやすい名前を入力します。 以前に作成されたユーザ・スキーマに接続している場合は, 既存のユーザ・スキーマの名前を入力します。
ユーザスキーマパスワード	<ul style="list-style-type: none"> 新しいユーザ・スキーマを設定している場合は, ユーザ・スキーマにアクセスできるパスワードを入力します。 以前に作成されたユーザ・スキーマに接続している場合は, 既存のユーザ・スキーマのパスワードを入力します。 <p>注: Oracle Server で BSM 用に作成するユーザ・スキーマごとに一意のユーザ・スキーマ名を指定する必要があります。</p>

プロファイル・データベースが Oracle Real Application Cluster(RAC)の一部である場合は、『BSM Database Guide』の「Support for Oracle Real Application Cluser」を参照してください。

[ページ マネージャ] ページ

このページでは, データのパーティショニング・プロセスを開始または停止するよう BSM に指示するパーティションとページ・マネージャを有効または無効にします。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[データのパーティショニングとパージ]を選択します
重要な情報	パーティションとパージ・マネージャのパーティショニング方法は、ネイティブ・パーティショニングです。Oracle データベースでは、Oracle のパーティショニング・オプションを有効にしておく必要があります。Oracle データベースからのデータのパーティションの詳細については、『BSM Database Guide』の「About Data Partitioning and Purging」を参照してください。
関連情報	72ページ「データベースの履歴 データのパーティショニングとパージ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
適用	[テンプレートおよび複数データベース]タブの設定内容を適用するデータベースとテンプレートを選択するために使用します。すべてのデータベースをクリアして、選択したテンプレートに対してのみ変更を加えることができます。
EPM へ変更	BSM に到着するよう設定された 1 分あたりのデータ量。 注: 既存の EPM 値を保持するには、このフィールドを空にします。 この値の決定の詳細については、80ページ「BSM で受信するデータの 1 分あたりのイベント数を決定する方法」を参照してください。
データベース固有	個々のプロファイル・データベースごとにテーブル内のデータをパージする時間範囲を変更するには、このタブを選択します。
説明	対応するデータベース・テーブルについて説明します。
EPM 値	BSM に到着する 1 分あたりのデータ量。この値の決定の詳細については、80ページ「BSM で受信するデータの 1 分あたりのイベント数を決定する方法」を参照してください。
データの保存期間	チェック・ボックスが選択されているデータベース・テーブルにデータを保持する時間範囲。この要素は次のように表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 選択フィールド。 ページ上部で、選択したデータベース・テーブルにデータを保持する期間を設定します。 • 列見出し。 データベース・テーブルごとにデータを保持する時間範囲を表示します。この値は、ページ上部の[データの保存期間]選択フィールドで設定されます。 <p>注: [データの保存期間]フィールドで設定した期間は、データが少なくとも指定期間だけ保存されることを示し、データのパージ時期を示すものではありません。標準設定では保存期間は無限であり、パージは設定されません。</p>

UI 要素	説明
データベース内のテーブル名	<p>データベース内のテーブルの名前。</p> <p>データベース・テーブルは、データの収集元であるデータ・コレクタ別に表示されます。次のデータ・タイプを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 警告 • BPI • ビジネス・ロジック・エンジン • Business Process Monitor • Diagnostics • Real User Monitor • SOA • サービス・レベル管理 • SiteScope • TV • UDX(カスタム・データ) • Webトレース
プロファイルデータベースを選択	<p>データをパージするための時間範囲設定を変更するプロファイル・データベースを選択します。</p> <p>注: このフィールドは、[データベース固有]タブでのみ表示されます。</p>
テンプレートおよび複数データベース	<p>このタブは、次の操作を行う場合に選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 複数のプロファイル・データベースに対してパーティショニングとパージのパラメータを変更する。 • 将来追加する新しいデータベースで採用されるパラメータに対してデータベース・テンプレートを変更する。 <p>注: 変更を行った場合、テンプレートには変更を加えず特定のデータベースの設定を手動で変更した場合でも、[テンプレートおよび複数データベース]タブに表示される設定がテンプレート設定に残ります。手動による変更が適用されると、表示された設定がテンプレート設定に戻ります。特定のデータベースに加えた設定の変更を確認するには、[データベース固有]タブに移動して該当するデータベースを選択します。</p>

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、データベース管理のトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

本項の内容

- 91ページ「データ・マーキング・ユーティリティのエラーのトラブルシューティング」
- 91ページ「データ・マーキング・ユーティリティの制限事項」

データ・マーキング・ユーティリティのエラーのトラブルシューティング

データ・マーキング・ユーティリティの使用中に、さまざまなタイプのエラーが発生する可能性があります。通常、エラーの発生時にユーティリティに次のエラー・メッセージが表示されます。

内部エラーが発生したため、データ・マーキング・ユーティリティはシャットダウンされます。詳細については、次を参照してください。 <HPBSM <ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \log\datamarking.log

ユーティリティでこのエラーが表示される場合は、次の原因が考えられます。

- データベース・サーバまたはプロファイル・データベースへの接続エラー。
- 集計サーバとデータベース間の通信エラーなどによる、データ・マーキング・プロセスの完了エラー。
- BSMによる定義済みデータ・セットの未処理データの再集計エラー。

エラーが発生した場合は、<HPBSM ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \log\datamarking.log ファイルでエラー情報を確認してください。

データ・マーキング・ユーティリティの制限事項

データ・マーキング・ユーティリティに関する制限事項を次に示します。

- このユーティリティでは、遅延到着データの削除はサポートされていません。

たとえば、特定の期間のデータ・セットが削除にマークされていて、BSMがその期間より後にデータを受信(Business Process Monitorが一時的にゲートウェイ・サーバに接続できなかったために遅れて到着)した場合、遅延到着データはレポートには使用できません。遅延到着データを確認するには、[情報の取得]ボタンを使用します。ゼロ以外の値を含む行が表示される場合、必要に応じてユーティリティを再実行し、遅れて到着したデータを削除します。

- このユーティリティでは、データ・マーキング・プロセス中の到着データの削除はサポートされていません。

たとえば、特定の期間のデータ・セットが削除にマークされていて、その期間内のユーティリティの実行中にデータが到着してプロファイル・データベースに入力された場合、新しく到着したデータの行は削除としてマークされないため、削除されません。この場合は、ユーティリティの実行完了後に[情報の取得]ボタンを使用し、選択した期間のデータのすべての行が削除されているかどうかを確認します。行が表示されている場合、必要に応じてユーティリティを再実行し、実行中に到着したデータを削除します。通常、今後終了する期間ではなく過去の期間のデータをマークするため、このシナリオはまれです。

- ユーティリティでのデータの実行または削除中は、その期間に生成されたレポートに正確な結果が表示されない可能性があります。そのため、BSM使用のオフピーク時に実行することをお勧めします。

第8章

インフラストラクチャ設定

プラットフォームおよびそのアプリケーションに関する組織の仕様に合わせて、BSM 設定を構成できます。ほとんどのインフラストラクチャ設定は、管理コンソール内で直接行います。

BSM では、BSM とそのアプリケーションの実行方法を決定する多くの設定の値を変更できます。

注意: 特定の設定を変更すると、BSM のパフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。最初に HP ソフトウェア・サポート または HP サービス担当者に相談してから変更することを強くお勧めします。

インフラストラクチャ設定 マネージャでは、設定を表示および編集する異なるコンテキストを選択できます。これらのコンテキストは、次のグループに分割されます。

- **アプリケーション:** このリストには、BSM 内で実行される各種アプリケーションの動作を決定するコンテキストが含まれています。サービス状況 アプリケーション、MyBSM、サービス・レベル管理などのコンテキストが表示されます。
- **ファウンデーション:** このリストには、BSM ファウンデーションの異なる領域の実行方法を決定するコンテキストが含まれています。RTSM(Run-time Service Model) やLDAP 設定などのコンテキストが表示されます。

個々の設定の説明は、[インフラストラクチャ設定] ページのテーブルの[詳細]列に表示されます。

ほとんどのインフラストラクチャ設定の構成の詳細については、93ページ「インフラストラクチャ設定 マネージャを使用したインフラストラクチャ設定の変更方法」を参照してください。

一部のインフラストラクチャ設定は、インフラストラクチャ設定 マネージャ外で行います。詳細については、94ページ「ping の時間間隔の変更方法」および95ページ「一時画像ファイルの場所と有効期限の変更方法」を参照してください。

インフラストラクチャ設定マネージャを使用したインフラストラクチャ設定の変更方法

このタスクでは、インフラストラクチャ設定マネージャを使用したインフラストラクチャ設定の変更方法について説明します。

インフラストラクチャ設定マネージャを使用してインフラストラクチャ設定を変更するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。
2. 表示するコンテキストのグループを選択します。選択肢は[アプリケーション], [ファウンデーション], [すべて]です。
3. ドロップダウン・ボックスから特定のコンテキストを選択します。
4. そのコンテキストに関連する設定可能なすべてのインフラストラクチャ設定が、それぞれの説明と現在の値とともに表示されます。[設定の編集] ボタンをクリックし、特定の設定の値を変更します。

ping の時間間隔の変更方法

注: このインフラストラクチャ設定タスクは、インフラストラクチャ設定 マネージャの外部で実行されます。

BSM がサーバを ping してセッションを更新した後の時間間隔を変更できます。

ping の時間間隔を変更するには、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタで <ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \conf\settings\website.xml ファイルを開きます。
2. **user.session.ping.timeinterval** パラメータを検索します。
3. ping の時間間隔の値 (標準設定は 120) を変更します。この値は、セッション・タイムアウト期間 (**user.session.timeout** パラメータ) に指定された値の半分未満である必要があります (3 分の 1 未満を推奨)。
4. ゲートウェイ・サーバ・マシンで BSM を再起動します。
5. 複数のゲートウェイ・サーバ・マシンが存在する場合は、すべてのマシンでこの手順を繰り返します。

一時画像ファイルの場所と有効期限の変更方法

注: このインフラストラクチャ設定タスクは、インフラストラクチャ設定マネージャの外部で実行されます。

BSM アプリケーションでレポートを生成する場合、またはBSM で自動的にレポートを生成して定期レポート・メカニズムを使用して送信する場合、画像(グラフなど)が作成されます。BSM によって、画像が生成されたゲートウェイ・サーバ・マシンの一時的ディレクトリにこれらの画像が一定期間保存されます。

これらの画像に関する次の設定を変更できます。

- **一時画像ファイルが保存されるディレクトリへのパス**

詳細については、96ページ「一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法」を参照してください。

- **一時画像ファイルの共有場所の設定**

詳細については、97ページ「複数のゲートウェイ・サーバ・マシンによる一時ディレクトリへのアクセス方法」を参照してください。

- **削除する前にBSM で画像ファイルを保持する期間**

詳細については、100ページ「BSM が一時画像ファイルを保持する期間の変更方法」を参照してください。

- **一時画像が削除されるディレクトリ**

詳細については、103ページ「一時画像ファイルが削除されるディレクトリの変更方法」を参照してください。

一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法

定期レポートで使用する生成された画像を BSM が保存するディレクトリへのパスを変更できます。たとえば、ゲートウェイ・サーバがインストールされているパーティション/ドライブ/マシンよりも容量の大きい、異なるディスク・パーティション、ハード・ドライブ、またはマシンに生成された画像を保存できます。

一時画像ファイルを保持するディレクトリへのパスを変更するには、次の手順を実行します。

1. ファイル<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \conf\topaz.config をテキスト・エディタで開きます。
2. パラメータ `images.save.directory.offline` を探します。
3. `#images.save.directory.offline=` で始まる行からコメント・マーカ(#)を削除し、値を必要なパスに変更します。

注: Windows 環境では、パスの定義に UNC パス構文 (\\server\path) を使用します。
Solaris 環境では、パスの定義に円マーク(/)ではなくスラッシュ(/)を使用します。

4. `topaz.config` ファイルを保存します。
5. ゲートウェイ・サーバ・マシンで BSM を再起動します。
6. 上記の手順をすべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで繰り返します。
7. 画像を含む新しく定義されたディレクトリを、すべてのゲートウェイ・サーバ・マシン上の Web サーバの仮想ディレクトリにマップします。詳細については、97ページ「複数のゲートウェイ・サーバ・マシンによる一時ディレクトリへのアクセス方法」を参照してください。

複数のゲートウェイ・サーバ・マシンによる一時ディレクトリへのアクセス方法

BSM レポートが仮想 IP を使用してゲートウェイ・サーバ・マシンにアクセスする場合、ロード・バランサがゲートウェイ・サーバ・マシンに要求を送信する可能性があります。そのため、すべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで設定された共通の場所に画像ファイルを置き、サーバ間で共有する必要があります。通常、BSM アーキテクチャのロード・バランサのバックグラウンドで複数のゲートウェイ・サーバ・マシンが実行されている場合にこれが該当します。

Windows 環境で一時画像の共有場所をサポートするには、次の設定をお勧めします。

- すべてのゲートウェイ・サーバ(およびゲートウェイ・サーバとは異なるマシンで共有画像ディレクトリが定義されている場合はそのマシン)を同じ Windows ドメインに含めます。
- IIS 仮想ディレクトリは、ドメイン・ユーザ・グループのメンバーであるアカウントの資格情報を使用するように設定します。
- 仮想ディレクトリのアカウントには、共有画像ディレクトリへの読み取り/書き込み権限を付与します。

注: サーバの構成上、異なる Windows ドメイン構成にサーバを配置する必要がある場合は、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

images.save.directory.offline パラメータ(詳細については、「96ページ「一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法」」を参照してください)で定義した、一時画像へのカスタム・パスを設定する場合、すべてのゲートウェイ・サーバ・マシン上の Web サーバの仮想ディレクトリに、画像を含む物理ディレクトリをマップする必要があります。

IIS で仮想ディレクトリを設定するには、次の手順を実行します。

1. ゲートウェイ・サーバ・マシンで、一時定期レポート画像を含む標準設定の物理ディスクの名前を変更します。
たとえば、次のように名前を変更します。
<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \AppServer\webapps\site.war\Imgs\chartTemp\offline
変更後
<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \AppServer\webapps\site.war\Imgs\chartTemp\old_offline
2. ゲートウェイ・サーバ・マシンの IIS インターネット・サービス・マネージャで、[既定の Web サイト]> [Topaz]> [Imgs]> [ChartTemp]に移動します。
名前を変更したオフライン・ディレクトリが右側のフレームに表示されます。
3. 右側のフレームで右クリックし、[新規作成]> [仮想ディレクトリ]を選択します。仮想ディレクトリの作成ウィザードが開きます。[次へ]をクリックします。
4. [仮想ディレクトリエイリアス]ダイアログ・ボックスで、[エイリアス]ボックスに「offline」と入力して新しい仮想ディレクトリを作成します。[次へ]をクリックします。

5. [Web サイトのコンテンツのディレクトリ] ダイアログ・ボックスで、**images.save.directory.offline** パラメータ(詳細については、「96ページ「一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法」」を参照してください)で定義した、一時画像を含む物理ディレクトリのパスを入力または参照します。[次へ]をクリックします。
6. 一時画像を含む物理ディレクトリがローカル・マシンにある場合、[アクセス許可] ダイアログ・ボックスで[読み取りおよび書き込み] 権限を指定します。
一時画像を含む物理ディレクトリがネットワーク上のマシンにある場合、[ユーザ名とパスワード] ダイアログ・ボックスで、そのマシンへのアクセス権のあるユーザ名とパスワードを入力します。
7. [次へ]と[完了]をクリックし、仮想ディレクトリの作成を完了します。
8. ゲートウェイ・サーバ・マシンで BSM を再起動します。
9. 上記の手順をすべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで繰り返します。

Apache HTTP Web サーバで仮想ディレクトリを設定するには、次の手順を実行します。

1. ゲートウェイ・サーバ・マシンで、一時定期レポート画像を含む標準設定の物理ディスクの名前を変更します。
たとえば、次のように名前を変更します。
<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \AppServer\webapps\site.war\Imgs\chartTemp\offline
変更後
<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \AppServer\webapps\site.war\Imgs\chartTemp\old_offline
2. Apache の<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ> \WebServer\conf\httpd.conf 設定ファイルをテキスト・エディタで開きます。
3. 次の行をファイルに追加することで、共通ディレクトリの物理的場所に「**offline**」という仮想ディレクトリをマップします。
Alias /Imgs/chartTemp/offline <shared_temp_image_directory>
<shared_temp_image_directory> は、**images.save.directory.offline** パラメータ(詳細については、「96ページ「一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法」」を参照してください)で定義した、一時定期レポート画像を含む物理ディレクトリへのパスです。
4. ファイルを保存します。
5. ゲートウェイ・サーバ・マシンで BSM を再起動します。
6. 上記の手順をすべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで繰り返します。

Sun Java System Web サーバで仮想ディレクトリを設定するには、次の手順を実行します。

1. ゲートウェイ・サーバ・マシンで、一時定期レポート画像を含む標準設定の物理ディスクの名前を変更します。
たとえば、次のように名前を変更します。

< ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクト

リ> \AppServer\webapps\site.war\Imgs\chartTemp\offline

変更後

< ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクト

リ> \AppServer\webapps\site.war\Imgs\chartTemp\old_offline

2. Sun Java System Web サーバ設定ファイル< Sun Java System Web サーバのインストール・ディレクトリ> \server\<サーバ名>\config\obj.conf をテキスト・エディタで開きます。
3. <Object name=default> ディレクティブ内(存在する場合は **NameTrans fn=document-root root="\$docroot"** 行の前で **NameTrans fn="pfx2dir" from="/Imgs" dir="ProductDir/Site Imgs/"** 行の後)に次の行を追加します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/topaz/Imgs/chartTemp/offline"  
dir="<shared_temp_image_directory>"
```

<shared_temp_image_directory> は、**images.save.directory.offline** パラメータ(詳細については、「96ページ「一時画像ファイルが保存されるディレクトリの変更方法」」を参照してください)で定義した、一時定期レポート画像を含む物理ディレクトリへのパスです。

4. ファイルを保存します。
5. ゲートウェイ・サーバ・マシンで Sun Java System Web サーバを再起動します。
6. 上記の手順をすべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで繰り返します。

BSM が一時画像ファイルを保持する期間の変更方法

定義された一時ディレクトリから削除する前に、ゲートウェイ・サーバ・マシンで生成された一時画像ファイルを BSM が保持する期間を制御する設定を変更できます。<HPBSM ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ>\conf\topaz.config ファイルで、次のディレクトリの設定を変更できます。

ディレクトリ設定	説明
remove.files.0.path= ../../AppServer/webapps/site.war/lmgs/chartTemp/offline	レポートの生成時に作成された画像へのパス
remove.files.1.path= ../../AppServer/webapps/site.war/lmgs/chartTemp/online	BSM アプリケーションでのレポートの生成時に作成された画像へのパス
remove.files.3.path= ../../AppServer/webapps/site.war/snapshots	エラー発生時スナップショット・メカニズムで作成されてエラー・サマリ・レポートに表示される画像へのパス

上記の一時画像ディレクトリの場合、次の設定を変更できます。

- **remove.files.directory.number=<ディレクトリ数>**

設定を定義するディレクトリの総数を指定します。

- **remove.files.<num_of_path>.path=<ディレクトリへのパス>**

削除するファイルを含むディレクトリへのパスを指定します。一時画像ファイルを削除する標準設定のディレクトリの場合、これらの値は **images.save.directory.online** および **images.save.directory.offline** パラメータと一致する必要があり、topaz.config ファイルで定義されている必要もあります。

注: Windows 環境では、パスの定義に UNC パス構文 (\\server\path) を使用します。
Solaris 環境では、パスの定義にスラッシュ (/) のみを使用します。

- **remove.files.<num_of_path>.expirationTime=<ファイルの有効期間(秒)>**

BSM がファイルを指定ディレクトリに保持する時間(秒)を指定します。たとえば、「3600」(1時間の秒数)と指定した場合、1時間以上経過したファイルは削除されます。

BSM で最大サイズの条件(以下を参照)のみを使用する場合は、この設定を空のままにします。

- **remove.files.<num_of_path>.maxSize=<ディレクトリの最大サイズ(KB)>**

BSM によってファイルが削除される前に、定義したディレクトリを拡大できる合計サイズ(KB)を指定します。たとえば、「100000」(100 MB)と指定した場合、ディレクトリが 100 MB を超えると、ディレクトリ・サイズを 100 MB に削減するために最も古いファイルが削除されます。

remove.files.<num_of_path>.expirationTime パラメータにも値を定義している場合、BSM は最初に期限切れになったファイルを削除します。それでも最大ディレクトリ・サイズ制限を超過している場合、BSM はその他の最も古いファイルから削除します。有効期間を過ぎたファイルがない場合、BSM は最大ディレクトリ・サイズの条件のみに基づいてファイルを削除します。

このパラメータは、`remove.files.< num_of_defined_path > .deletePercents` パラメータ(以下を参照)と組み合わせて使用されます。これにより、`remove.files.< num_of_path > .maxSize` パラメータを使用して削除されるファイルに加えて、指定したパーセンテージのファイルを削除するようにBSMに指示します。

BSMで有効期間の条件のみを使用する場合は、このパラメータと`remove.files.< num_of_defined_path > .deletePercents` パラメータの設定を空のままにします。

- `remove.files.< num_of_path > .deletePercents=< 削除するパーセント >`

ディレクトリ・サイズが最初に`remove.files.< num_of_path > .maxSize` パラメータに従って削減された後に、BSMが追加でディレクトリ・サイズを削減する量を最大許容ディレクトリ・サイズのパーセンテージで指定します。BSMは最も古いファイルを最初に削除します。

BSMで有効期間の条件のみを使用する場合は、このパラメータと`remove.files.< num_of_path > .maxSize` パラメータの設定を空のままにします。

- `remove.files.< num_of_path > .sleepTime=< スレッドのスリープ時間(秒) >`

定義した作業を実行するメカニズムをBSMが実行する頻度を指定します。

例:

次の作業を30分ごとに実行するようにBSMに指示します。BSMは最初に1時間以上経過したファイルが存在するかどうかを確認し、存在する場合はそのファイルを削除します。次に、BSMは合計ディレクトリ・サイズが250MBを超えているかどうかを確認し、超えている場合は最も古いファイルを削除してディレクトリ・サイズを250MBに削減します。最後に、BSMは最も古いファイルを削除することで、合計ディレクトリ・サイズを50%に削減します。その結果、BSMは合計125MBのファイルをディレクトリ内に残します。

1時間(3600秒)以上経過したファイルを削除

```
remove.files.0.expirationTime=3600
```

フォルダ・サイズを250MBに削減

```
remove.files.0.maxSize=250000
```

さらに最大フォルダ・サイズの50%(125MB)を削除

```
remove.files.0.deletePercents=50
```

30分(1800秒)ごとに作業を実行

```
remove.files.0.sleepTime=1800
```

ヒント: 任意の定義済みディレクトリからファイルを削除するようにファイル削除メカニズムを設定できます。パラメータを定義してインデックスを増分します。たとえば、一時ディレクトリを空にするには、`remove.files.directory.number` パラメータのディレクトリ数で5の代わりに6を指定します。次に、パラメータの`num_of_path` セクションにインデックス値4を使用して、ディレクトリのパスと設定を定義します(0~4は標準設定ですで使用されているため)。このメカニズムを使用してファイルを削除する場合は、必ず最初にHPソフトウェア・サポート 担当者に相談してください。

標準設定を変更するには、次の手順を実行します。

1. ファイル<HPBSM ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ>\conf\topaz.config をテキスト・エディタで開きます。
2. 値を変更する前に、標準設定値を参照できるようにファイルをバックアップするか、標準設定の行をコメント・アウト(#を使用)します。
3. 必要に応じて設定を変更します。
4. **topaz.config** ファイルを保存します。
5. ゲートウェイ・サーバ・マシンでBSMを再起動します。
6. 上記の手順をすべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで繰り返します。

一時画像ファイルが削除されるディレクトリの変更方法

標準設定では、一時画像ファイルは指定したディレクトリのルート・パスから削除されます。ただし、指定したパスのサブディレクトリから一時画像ファイルを削除するように BSM を設定することもできます。

サブディレクトリから一時画像ファイルを削除するように BSM を設定するには、次の手順を実行します。

1. ファイル<ゲートウェイ・サーバのルート・ディレクトリ>\conf\topaz.config をテキスト・エディタで開きます。
2. 指定したパスのほかの設定(前の項で説明)の後に、次の行を挿入します。





```
remove.files.<num_of_path>.removeRecursively=yes
```
3. **topaz.config** ファイルを保存します。
4. ゲートウェイ・サーバ・マシンで BSM を再起動します。
5. 上記の手順をすべてのゲートウェイ・サーバ・マシンで繰り返します。

UI の説明 - [インフラストラクチャ設定マネージャ] ページ

このページでは、BSM とそのアプリケーションの実行方法を決定する多くの設定の値を定義できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します
重要な情報	特定の設定を変更すると、BSM のパフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。最初に HP ソフトウェア・サポート または HP サービス担当者にご相談してから変更することを強くお勧めします。
関連情報	70ページ「データベース管理」

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
すべて	[アプリケーション] および [ファウンデーション] のすべての設定を表示する場合に選択します。
アプリケーション	いずれかの BSM アプリケーションを編集する場合に選択します。
詳細	特定のインフラストラクチャ設定について説明します。 注: このフィールドは、[インフラストラクチャ設定マネージャ] ページと、関連する設定の横にある [設定の編集]  ボタンをクリックした後の [設定の編集] ダイアログ・ボックスの両方に表示されます。
ファウンデーション	いずれかの BSM ファウンデーションを編集する場合に選択します。
名前	設定の名前。 注: このフィールドは、[インフラストラクチャ設定マネージャ] ページと、関連する設定の横にある [設定の編集]  ボタンをクリックした後の [設定の編集] ダイアログ・ボックスの両方に表示されます。
標準設定の復元	設定の標準設定値に復元します。 注: このボタンは、関連する設定の横にある [設定の編集]  ボタンをクリックした後の [設定の編集] ダイアログ・ボックスの両方に表示されます。
値	特定の設定の現在の値。 注: このフィールドは、[インフラストラクチャ設定マネージャ] ページと、関連する設定の横にある [設定の編集]  ボタンをクリックした後の [設定の編集] ダイアログ・ボックスの両方に表示されます。

第9章

監査ログ

監査ログは、システムの利用者が実行したさまざまなアクションを特定のコンテキストに応じて追跡するために使用します。

アクセス方法

[管理]> [プラットフォーム]> [セットアップと保守]> [監査ログ]を選択します。

詳細

監査ログについて

監査ログは、システムのユーザが実行したさまざまなアクションを特定のコンテキストに応じて追跡するために使用します。

- **警告管理** :警告の作成および管理に関連するアクションが表示されます。
- **CI ステータス警告管理** :構成アイテム(CI) ステータス警告の警告スキーマの作成に関連するアクションが表示されます。
- **データ・コレクタの保守** :Business Process Monitor および SiteScope の削除に関連するアクションが表示されます。
- **データベース管理** :プロファイル・データベースのユーザおよびパスワードの作成、削除、変更やパージ・マネージャのステータスの変更に関連するアクションが表示されます。
- **削除されたエンティティ** :エンド・ユーザ管理の[管理]からのデータ・コレクタ(ビジネス・プロセス・プロファイル, Real User Monitor エンジン, SiteScope モニタ)の追加および削除に関連するアクションが表示されます。
- **ダウンタイム / イベント・スケジュール** :ダウンタイムやスケジュールしたイベントの作成および変更に関連するアクションが表示されます。
- **エンド・ユーザ管理 アプリケーション** :イベントベースの警告の追加、編集、更新、無効化、削除や警告の受信者の登録および登録抹消に関連するアクションが表示されます。
- **IT ワールド設定** :IT ユニバース・マネージャ・アプリケーションで実行されたCI および関係の編集、更新、削除などのアクションが表示されます。
- **ロケーション・マネージャ** :ロケーション・マネージャ・アプリケーションで実行された場所の追加、変更、削除に関連するアクションが表示されます。
- **通知テンプレート管理** :オープン・チケットの情報、チケット設定、クローズ・チケット、チケット・テンプレート、サブスクリプションの情報、通知タイプ(場所や一般的なメッセージ)、受信者の変更に関連するアクションが表示されます。
- **オペレーション管理** :オペレーション管理に関連するアクション(コンテンツ・バック、イベント・ルール、通知の作成および編集など)が表示されます。
- **権限管理** :ユーザやユーザ・グループへのリソースの権限、役割、権限操作の割り当てに関連するすべてのアクションが表示されます。
- **受信者管理** :監査ログの受信者についての情報の変更に関連するアクションが表示されます。
- **定期レポート管理** :レポート方法やレポートされたイベントのスケジュールの変更に関連するアクションが表示されます。
- **サービス状況** :サービス状況アプリケーションに関連するアクションが表示されます。
- **サービス状況管理** :サービス状況の[管理]で作成された設定に関連するアクションが表示されます。
- **サービス・レベル管理設定** :サービス・レベル管理アプリケーションで実行されたサービス・レベル・アグリーメントに関連するアクションが表示されます。
- **SLA警告管理** :SLA 警告の作成、変更、削除に関連するアクションが表示されます。


- **システム可用性 マネージャ** :システム可用性 や SiteScope に関連するアクションが表示されます。
- **ユーザ定義レポート** :カスタム・レポートの作成および変更に関連するアクションが表示されます。
- **ユーザ/グループ管理** :ユーザおよびユーザ・グループの追加, 変更, 削除に関連するアクションが表示されます。
- **ビュー・マネージャ** :KPI に関連するアクション(KPI の追加, 編集, 削除など)が表示されます。また, [選択した CI に対する経過時間ごとの KPI データの保存] および [変更を監視する] オプションの変更に関連するアクションも表示されます。



タスク

監査ログの使用方法

このタスクでは、プラットフォーム管理の[セットアップと保守]メニューの[監査ログ]ページにある監査ログにアクセスする方法について説明します。

監査ログを使用するには、次の手順を実行します。

1. [管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[監査ログ]を選択します。[監査ログ]ページが開きます。
2. コンテキスト・フィルタを使用してコンテキストを選択します。
3. 必要に応じて、リストからプロファイルを選択します。BSMによって、関連する情報でテーブルが更新されます。
4. 任意で、[監査フィルタ]リンクをクリックして[監査フィルタ]表示枠を開き、フィルタ条件を指定します。次のフィルタを使用できます。
 - **ユーザ**: システムのユーザを指定し、そのユーザが実行したアクションのみを表示します。
 - **次のテキストを含む**: 表示するアクションに含まれるテキスト文字列を指定します。
 - **次以後 / 次以前**: 開始時刻と終了時刻の期間を指定し、その期間のアクションのみを表示します。[詳細]  ボタンをクリックして、日付を選択できる[カレンダー]ダイアログ・ボックスを開きます。
5. [適用]をクリックします。BSMによって、関連する情報でテーブルが更新されます。

必要に応じて、[前のページ]の矢印  を使用して[監査ログ]の前のページに移動するか、[次のページ]の矢印  を使用して[監査ログ]の次のページに移動します。

監査ログのログ・ファイルのカスタマイズ方法

監査ログでは、Apache log4j ログ記録ユーティリティを使用します。


ログ・ファイルのカスタマイズするには、<HPBSM ルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j\EJB\auditlog.properties にあるその設定ファイルを編集します。このファイルでは log4j 設定構文が使用されています。ログ・レベルは INFO 以上に設定されています。アペンダ名 com.mercury.topaz.tmc.bizobjects.audit.AuditManager.writeAudit は変更しないでください。

UI の説明

[監査ログ] ページ




このページでは、システムの利用者が実行したさまざまなアクションを追跡できます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
	[監査ログ]の前のページまたは次のページに移動します。
<監査ログ・テーブル>	監査ログの内容が表示されます。
<EUM アプリケーション>	実行されたアクションを表示する<EUM アプリケーション>を選択します。 注:このフィールドは、[エンド ユーザ管理 アプリケーション]のコンテキストを選択した場合にのみ表示されます。
監査フィルタ	フィルタ条件を指定するには、[監査フィルタ]ヘッダをクリックします。
コンテキスト	表示するコンテキストを選択します。
対象ユーザ	[監査フィルタ]表示枠で指定した、監査ログにアクションが表示されるユーザが表示されます。 標準設定値:すべて
SiteScope	実行されたアクションを表示する SiteScope を選択します。 注:このフィールドは、[システム可用性 マネージャ]のコンテキストを選択した場合にのみ表示されます。
期間	[監査フィルタ]表示枠で指定した、監査ログにアクションが表示される期間が表示されます。 標準設定値:すべて

[監査フィルタ]表示枠

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	日付を選択できる[カレンダー]ダイアログ・ボックスが開きます。
	[監査フィルタ]表示枠が展開されます。
	[監査フィルタ]表示枠が折りたたまれます。
適用	選択したフィルタが適用されます。

UI 要素	説明
キャンセル	フィルタリングがキャンセルされて、[監査フィルタ]表示枠が閉じます。
すべてクリア	フィルタがクリアされて、すべてのログ項目が表示されます。
次のテキストを含む	テキスト文字列を指定して、このテキスト文字列を含まないすべてのアクションを除外します。
次以前	アクションを表示する終了時刻を指定します。
次以後	アクションを表示する開始時刻を指定します。
ユーザ	ユーザを選択し、そのユーザが実行したアクションのみを表示します。

監査ログ・テーブル

重要な情報	EUM 警告管理の監査ログの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「警告ログ・レポート」を参照してください。
-------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アクション	指定のユーザが実行したアクションが表示されます。
追加情報	該当する場合は、追加情報が表示されます。
更新日	指定のアクションが実行された日時が表示されます。
更新者	指定のアクションを実行したユーザが表示されます。

第10章

BSM サーバ時間の同期

BSM サーバ・クロックが正確であり確実に同期されるようにするため、標準設定では BSM サーバで 20 分ごとに NTP サーバに突き合わせてシステム・クロックがチェックされます。

いくつかの NTP サーバは標準設定により設定されますが、設定ファイルに手動で追加することもできます。

<BSM ホーム> \conf\settings\mtime\mtime.xml

到達可能な NTP サーバが存在しない場合は、データベース・クロックを代わりに使用して同期が行われます。

BSM サーバ時間の表示方法

現在のBSM サーバ時間は、次のURL から表示できます。

UNIX 時間をプレーン・テキストで表示するには、次のURL を使用します。

http://<BSM サーバ>/topaz/services/technical/time?alt=text/plain

結果の例：

1314089070858

現在の時間をXML 形式で表示するには、次のURL を使用します。

http://<BSM サーバ>/topaz/services/technical/time

結果の例：

```
<entry xmlns="http://www.w3.org/2005/Atom">
<id>timeService:1</id>
<title type="text" xml:lang="en">Time service.</title>
<summary type="text" xml:lang="en">The time is 2011-08-23 08:44:30,
858</summary>
<published>2011-08-23T11:44:31.382+03:00</published>
<content type="text">1314089070858</content>
</entry>
```

この機能のログを確認するには、次のファイルを使用します。

<BSM ホーム> \logs\topaz_all.ejb.log

第11章

英語以外のロケールの操作

本項では、英語以外の言語を操作するようにBSMを設定する方法、およびラテン文字セット以外を使用する場合に発生するいくつかの問題について説明します。

インストールとデプロイメントに関する問題

- ブラウザでCJK言語を使用する場合、BSMを実行しているゲートウェイ・サーバ・マシンに東アジア言語がインストールされていることを確認する必要があります。BSMゲートウェイ・サーバがインストールされているマシンで、[コントロールパネル]>[地域と言語のオプション]>[東アジア言語のファイルをインストールする]を選択する必要があります。
- 英語以外のWindowsオペレーティング・システムでBSMをインストールした場合は、WindowsとOEMのコード・ページが異なるためコマンド・ライン・ツールの出力が正しく表示されないことがあります。多くのアジア言語システムではこの問題はありませんが、英語以外のヨーロッパ言語システムではこの問題がよく発生します。

これを修正するには、TrueTypeフォントが使用されOEMとWindowsのコード・ページが同じになるようにWindowsコマンド・プロンプトを設定する必要があります。

Windowsの[コマンドプロンプト]ウィンドウ(cmd.exeを実行)でタイトルバーを右クリックし、[プロパティ]を選択して[フォント]タブを開きます。フォントをラスタ・フォントからTrueTypeフォントに変更し、必要に応じてフォント・サイズを変更します(Lucida Console, 12ptを選択するなど)。プロンプトが表示されたら、ショートカットを変更してフォントの変更をグローバルにします。

注: PowerShell または Cygwin Bash などの他のコマンド・ライン・ツールを使用する場合は、フォントの変更をツールごとに個別に行う必要があります。

システムのコードセットを変更するには、レジストリ・エディタ(regedit)を開き、Computer\HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Nls\CodePageに移動します。ACPとOEMCPの値が異なる場合は、OEMCPをACPと同じ値に編集し、システムを再起動します。

注: システムのOEMコード・ページの変更が許容されない場合は、新しく開いた[コマンドプロンプト]ウィンドウごとに `chcp < ACP 値 >` コマンドを使用してコード・ページの値を変更します。

- Business Process Monitor とゲートウェイ・サーバは、ロケールがデータと同じであるオペレーティング・システムでインストールする必要があります。
- Business Process Monitor のインストール時には、ホスト名と場所にラテン文字以外は使用できません。[管理]>[エンドユーザ管理]>[設定]で、インストール後に必要に応じて、ラテン文字以外を含む名前に変更できます。
- BSM のすべてのコンポーネントのインストール・パスには、ラテン文字以外を含めることはできません。
- コンテンツ・パックが複数言語で使用できる場合は、ホスト・オペレーティング・システムの現在のロケールに応じて、BSM のインストール時にコンテンツ・パックの言語が自動的にロードされます。現在のロケールと一致するコンテンツ・パックが存在する場合は、それがインストールされます。ローカライズされたコンテンツ・パックがロケールにない場合は、英語のコンテンツ・パックが使用されます。別の言語のコンテンツ・パックは、後から手動でアップロードできます。

ゲートウェイ・サーバを起動するたびに、次のディレクトリの内容が確認されます。< HP BSM のルート・ディレクトリ > /conf/opr/content/ < サーバのロケール >

まだロードされていないパッケージは、未解決のパッケージ依存関係(未ロードで、同じフォルダ内に存在しないパッケージへの参照)がなければ、起動中にロードされます。

続いて、次のディレクトリが確認されます。< HP BSM のルート・ディレクトリ > /conf/opr/content/en_US

最初の場所からアップロードされなかったコンテンツ・パックがアップロードされます。このアップロードによって、コンテンツに複数の言語が混在する場合があります。

パッケージは標準インポート・モードでロードされ、既存のアイテムに変更は加えられません。新しいアイテムのみが追加されます。

注: 管理バックエンド・ログ・ファイルで進捗を確認できます。処理はバックグラウンドで実行されるため、ユーザのログイン時に処理がまだ進行中の可能性があります。コンテンツ・パッケージは複数と同時にロードできません。

データベース環境に関する問題

- ラテン文字以外の言語のBSM環境で作業する場合、Oracle サーバ・データベースまたは Microsoft SQL Server データベースのいずれかを使用できます。Microsoft SQL Server データベースを使用する場合、BSM サーバで使用するのと同じエンコーディングを使用する必要があります。Oracle サーバ・データベースを使用する場合、ラテン文字以外の言語と複数言語の両方をサポートする UTF-8 または AL32UTF-8 もデータベースのエンコーディングに使用できます。サポートされているテスト済みデータベース・サーバのリストについては、『BSM システム要件とサポート・マトリックス』を参照してください。
- Oracle データベースに新しい Oracle インスタンスを作成するときに、インスタンスの文字セットを指定する必要があります。データ・ディクショナリ内のデータを含むすべての文字データは、インスタンスの文字セット内に保存されます。Oracle データベースの操作の詳細については、『BSM Database Guide』の「Deploying and Maintaining the Oracle Server Database」を参照してください。サポートされている認定 Oracle 文字セットについては、『BSM Database Guide』の「Oracle Summary Checklist」を参照してください。
- SiteScope データベース・クエリ・モニタは Oracle データベースに接続できますが、Oracle ユーザ名とパスワードにはラテン文字のみを使用する必要があります。

管理に関する問題

- ISO-2022-JP エンコーディングで送信された電子メール警告は、Windows プラットフォームで実行されている SMTP サーバでのみサポートされています。エンコーディングの使用は、すべての BSM サーバに影響します。
- ユーザによる BSM へのログインの認証に標準設定の認証方法であるライトウェイト SSO を使用している場合、ユーザ名とパスワードにラテン文字以外も使用できます。
- BSM データベースでラテン文字以外をサポートするには、データベースのエンコーディングを UTF-8 または AL32UTF-8(Oracle のみ)に定義するか、特定の言語に設定する必要があります。
- ログ・ファイルでラテン文字以外をサポートするには、log4j 設定ファイルで log4j エンコーディング・プロパティを設定します。

UTF-8 エンコーディングで特定のログを書き込むには、次の手順を実行します。

- **conf/core/Tools/log4j** の log4j 設定で、特定のログ名を検索します。
- このログ・ファイルが設定されているプロパティ・ファイルで、次のプロパティを追加します。

log4j.appender.<アペンダ名>.Encoding=UTF-8

たとえば、jboss_server.log の設定は次のようになります。

```
#####  ### define appender:
#####  ### define appender:
jboss.appender ### ##### #
jboss.appender is set to be a FileAppender which outputs to
log/jboss_server.log
log4j.appender.jboss.appender=org.apache.log4j.RollingFileAppender
log4j.appender.jboss.appender.File=${merc.home}/${log.file.path}
/jboss_server.log
log4j.appender.jboss.appender.MaxFileSize=${def.file.max.size}
log4j.appender.jboss.appender.Encoding=UTF-8
log4j.appender.jboss.appender.MaxBackupIndex=${def.files.backup.co-
unt}
log4j.appender.jboss.appender.layout=org.apache.log4j.PatternLayout
t
log4j.appender.jboss.appender.layout.ConversionPattern=${msg.layou-
t}
```

サービス状況に関する問題

[サービス状況 Top View]にラテン文字以外を表示できるようにするには、いくつかの手順の実行が必要な場合があります。

[サービス状況 Top View]にラテン文字以外を表示するには、次の手順を実行します。

1. 非西欧 Windows システムに JRE をインストールする手順に従っていることを確認します。この手順は、[Sun Microsystems site\(http://java.sun.com/j2se/1.5.0/jre/install-windows.html\)](http://java.sun.com/j2se/1.5.0/jre/install-windows.html) で確認できます。
2. 確認事項：
 - Microsoft Windows 2000 および XP に J2SE Runtime Environment をインストールするための管理者権限が付与されている。
 - (非西欧 32ビット・マシンに JRE をインストールしているユーザの場合) [カスタム] セットアップタイプを選択している。カスタム・セットアップの機能 2([Support for Additional Languages]) で、 [この機能はローカルハードドライブにインストールされます。] を選択している。
3. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択して [アプリケーション] をクリックし、 [サービス状況アプリケーション] を選択して、 [サービス状況アプリケーション - トップビューのプロパティ] テーブルの [トップビューのフォント名] エントリを見つけます。値を [Arial Unicode MS] に変更します。

注意: [トップビューのフォント名] エントリの値が [標準設定] の場合、 [トップビューのフォント名] プロパティの値は自動的に Arial Unicode MS になるため、この手順を実行する必要はありません。

4. Web ブラウザのすべてのインスタンスを閉じます。
5. BSM にログインし、 [サービス状況 Top View] にアクセスします。中国語または日本語が正しく表示されることを確認します。

サービス・レベル管理に関する問題

サービス・レベル管理では、50文字を超えるマルチバイト文字を含むサービス名はサポートされていません。

レポートの問題

- BSM では、50 マルチバイト文字を超えるカスタム・レポート名はサポートされていません。
- ページ・コンポーネント・ブレイクダウン・レポートでは、マルチバイト文字を含む URL はサポートされていません。ブレイクダウンの実行元となる URL と場所を指定する場合、[URL] ボックスにはラテン文字を入力する必要があります。
- 簡体字中国語のオペレーティング・システムで実行されている BSM に Excel レポートをアップロードする場合、ラテン文字のファイル名にする必要があります。Excel レポートを表示するには、[アプリケーション] > [ユーザレポート] > [レポート マネージャ] を選択します。
- BSM から Excel にダウンロードしたレポートは、データの言語とは異なる言語のオペレーティング・システムでは正しく表示されません。

BSM が英語のマシンにインストールされている場合にマルチバイトを含む Excel ファイルをダウンロードするには、<HPBSM ルート・ディレクトリ> \AppServer\resources\strings.properties ファイルの `user.encoding` エントリを正しいエンコーディングに設定します。

Business Process Monitor に関する問題

- Business Process Monitor (BPM) のログ・ファイルにラテン文字以外のデータが含まれている場合、BPM 管理コンソールの [BPM ファイルの表示] ウィンドウからではなく、UTF-8 形式を解析できるビューア (メモ帳など) で開く必要があります。

BPM 管理コンソールがインストールされているサーバの標準設定のエンコーディングでログ・ファイルが保存されている場合、[BPM ファイルの表示] ウィンドウで正常に表示されます。

- すべての BPM インスタンス (アプリケーション、スクリプト、パラメータなど) の名前には、ラテン文字または BPM サーバのロケール文字のみを使用する必要があります。

SiteScope に関する問題

- (複数の文字セットがサポートされる) インターナショナル・バージョンの SiteScope では、モニタ・セットの作成時に表示される[グループに戻る]リンクに、ユーザ定義のグループ名ではなくインデックスベースのグループ名 (**group0** など) が表示されます。
- データベース・クエリ・モニタと Oracle データベースを接続できるのは、Oracle ユーザ名 およびパスワードにラテン文字のみが含まれている場合だけです。
- SiteScope では、ユーザ名 / パスワードにラテン以外の文字を使用できません。
- ユーザ・インタフェースは、複数の言語で表示できます。詳細については、SiteScope ヘルプの「国際化 (I18N) 環境での SiteScope の使用」を参照してください。
- 国際化のテストを行うモニタのリストについては、SiteScope ヘルプの「国際化でサポートされているモニタ」を参照してください。

Real User Monitor に関する問題

- Real User Monitor では、UTF-8 形式のラテン文字以外をサポートしています。Unicode 以外のエンコーディングをサポートする HPReal User Monitor プロブの設定の詳細については、『Real User Monitor Administration Guide』の「Configuring the HP Real User Monitor Probe for I18N」を参照してください。
- Real User Monitor でラテン文字以外をサポートするには、BSM データベースのエンコーディングを UTF-8 として定義するか、特定の言語に設定する必要があります。詳細については、[116ページ「データベース環境に関する問題」](#)を参照してください。
- Real User Monitor プロブの Windows インストール画面は翻訳されず、英語のみで表示されます。Real User Monitor プロブのインストールの詳細については、『Real User Monitor Administration Guide』の「Installing the HP Real User Monitor Probe」を参照してください。

エンド・ユーザ管理での管理に関する問題

- グローバル置換は、ラテン文字以外の言語をサポートしていません。
- エンド・ユーザ管理で[ステータス スナップショット]にアクセスする([アプリケーション] > [エンド ユーザ管理] > [ステータス スナップショット]) する場合、特定の文字が文字化けする可能性があります。これを解決するには、次の手順で東アジア言語用のファイルをローカルマシンにインストールしてください。

[スタート] > [コントロール パネル] > [地域と言語のオプション] > [言語] タブ > [東アジア言語のファイルをインストールする] を選択します。

データ・フロー管理に関する問題

CI インスタンスを PDF ファイルにエクスポートした場合、日本語は PDF ファイルに表示されません。
([データフロー管理] > [ディスカバリコントロールパネル] > [ベーシックモード]。ディスカバリを実行
します。ディスカバリが完了したら、[統計結果]表示枠で CIT を選択します。[インスタンスの表示]
ボタンをクリックします。[Discovered by]ダイアログ・ボックスで、[Export Data to File] > [Export
Displayed CIs to PDF]を選択します。)

多言語の問題

- SNMP 通知方法は多言語テキストをサポートせず、ゲートウェイ・サーバ・マシンの文字セットでの通知のみを送信できます。これは、BSM が多言語データをサポートしない SNMP バージョン 1.0 を使用しているためです。
- 失敗トランザクション・レポートのエラー・メッセージは、BSM が英語のオペレーティング・システムで実行されていて Business Process Monitor が日本語のオペレーティング・システムで実行されている場合は正しく表示されません。失敗トランザクション・レポートにアクセスするには、[アプリケーション]>[エンド ユーザ管理]>[ビジネス プロセス]>[エラー サマリ]を選択します。[一般エラー]テーブルを見つけ、[失敗トランザクション]ウィンドウを開くリンクをクリックします。
- BSM では多言語データを保存できます。ただし、標準実行可能ファイルでは通常はコマンド・ラインで多言語データを使用できません。

次の表に、警告による実行可能ファイルの実行時にコマンド・ラインに多言語データを追加するため、実行する必要がある手順を示します。

プラットフォーム	手順
Windows	<p>多言語データが失われるのを避けるため、main 関数の代わりに wmain 関数でアプリケーションを記述します。または、char 型の代わりに wchar 型のコマンド・ライン・パラメータを使用できる、別の main 型の関数も使用できます。</p> <p>注：SubAlerts コマンド・ライン・オプションを使用した場合、作成される XML ファイルにはエンコーディング属性が含まれず、エンコーディングは標準設定の UTF-8 エンコーディングとは異なります。</p>
Solaris	<p>アプリケーションに渡されるパラメータは UTF-8 でエンコードされる必要があることをアプリケーションの作成者に伝えます。</p>

警告による実行可能ファイルの実行時にカスタム・コマンド・ラインを使用する方法の詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「[実行可能ファイルの実行]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

- 以前のバージョンの BSM 用に作成された実行可能ファイルは、多言語バージョンとの互換性があります。

多言語ユーザ・インタフェース(MLU)のサポート

BSM ユーザ・インタフェースは、Web ブラウザで次の言語を表示できます。

言語	Web ブラウザの言語設定
英語	英語
フランス語	フランス語(フランス)[fr]
日本語	日本語[ja]
韓国語	韓国語[ko]
簡体中国語	中国語(中国)[zh-cn]

次の言語は BSM で使用可能ですが、この言語で表示されるのは Run-time Service Model (RTSM) に関するページのユーザ・インタフェースのみです。

言語	Web ブラウザの言語設定
オランダ語	オランダ語(オランダ)[nl]
ドイツ語	ドイツ語(ドイツ)[de]
ポルトガル語	ポルトガル語(ブラジル)[pt-br]
ロシア語	ロシア語[ru]
スペイン語	スペイン語[es]
イタリア語	イタリア語(イタリア)[it]

BSM の表示方法を選択するには、ブラウザの言語設定オプションを使用します。言語設定の選択は、ユーザのローカル・マシン(クライアント・マシン)だけに影響があり、BSM マシンや、同じ BSM マシンにアクセスしているほかのユーザには影響しません。

特定の言語で BSM を設定、表示するには、次の手順を実行します。

1. ローカル・マシンに適切な言語のフォントがインストールされていない場合は、インストールします。インストールされていないフォントの言語を Web ブラウザで選択した場合、BSM には文字が四角形で表示されます。
2. BSM にログインしている場合、ログアウトする必要があります。BSM ウィンドウ上部の[**ログアウト**]をクリックします。
開いているすべてのブラウザ・ウィンドウを閉じるか、キャッシュをクリアします(BSM が Internet Explorer で実行されている場合)。
3. BSM が Internet Explorer で実行されている場合、ローカル・マシンの Web ブラウザで BSM を表示する言語を選択します([**ツール**] > [**インターネット オプション**])。
 - a. [**言語**] ボタンをクリックし、[言語の優先順位] ダイアログ・ボックスで BSM を表示する言語を強調表示します。

- b. 使用する言語がダイアログ・ボックスにない場合は、[追加]をクリックして言語リストを表示します。追加する言語を選択して[OK]をクリックします。
- c. [上へ]をクリックして、選択した言語を先頭の行に移動します。
- d. [OK]をクリックして設定を保存します。
- e. BSM ログイン・ウィンドウを表示します。
- f. Internet Explorer のメニューから、[表示] > [最新の情報に更新]を選択します。BSM が即座に更新され、ユーザ・インタフェースが選択した言語で表示されます。

注: 異なる言語で記述された Internet Explorer の Web ページの表示の詳細については、「異なる言語で記述されている Web ページを表示する方法」(<http://support.microsoft.com/kb/306872/ja-jp>)を参照してください。

4. BSM を FireFox で表示している場合、ローカル・マシンの Web ブラウザを次のように設定します。
 - a. [ツール] > [オプション] > [詳細]を選択します。[言語設定]をクリックします。[言語]ダイアログ・ボックスが開きます。
 - b. BSM を表示する言語を強調表示します。

使用する言語がダイアログ・ボックスにない場合は、[言語を選択して追加...]リストを拡張して言語を選択し、[追加]をクリックします。
 - c. [上へ]をクリックして、選択した言語を先頭の行に移動します。
 - d. [OK]をクリックして設定を保存します。[OK]をクリックして[言語]ダイアログ・ボックスを閉じます。

注意事項および制限事項

- 言語パックのインストールはありません。翻訳されたすべての言語が BSM 多言語ユーザ・インタフェース(MLU)に統合されています。
- Web ブラウザの言語を変更した場合でも、データは入力時の言語で表示されます。ローカル・マシンで Web ブラウザの言語を変更した場合、ユーザが入力したデータの言語は変更されません。
- サーバのロケールがクライアントのロケールとは異なり、パッケージ名にラテン文字以外が含まれている場合、パッケージはデプロイできません。詳細については、『RTSM Administration Guide』の「Package Manager」を参照してください。
- サーバのロケールがクライアントのロケールとは異なる場合、名前にラテン文字以外が含まれているリソース(ビューや TQL など)を含むパッケージは作成できません。詳細については、『RTSM Administration Guide』の「Package Creation and Deployment in a Non-English Locale」を参照してください。
- モデリング・スタジオでは、ビュー名に 18 文字を超える日本語が含まれている場合は新しいビューを作成できません。新しいビューの作成の詳細については、『Modeling Guide』の「Modeling Studio」を参照してください。
- ロケーション・マネージャでは、選択した UI 言語に関わらず、すべての地域が英語で表示されます。論理的な場所の名前は、選択した言語で付けることができ、後で UI 言語が変更され

てもその言語のままになります。

- BSM サーバステータスのHTML ページは、英語でのみ表示されます。ほかの言語には翻訳されません。詳細については、『BSM インストールガイド』の「デプロイメント後」を参照してください。

第12章

BSM ログ

注: 本章は、HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様には該当しません。

BSM は、さまざまなコンポーネントで実行された手順とアクションをログ・ファイルに記録します。通常、ログ・ファイルは BSM が期待どおりに動作しない場合に HP ソフトウェア・サポート が確認するために使用します。

ログ・ファイルの標準設定の重大度しきい値レベルはログによって異なりますが、通常は「警告」または「エラー」に設定されています。ログ・レベルの定義については、132ページ「ログの重大度レベル」を参照してください。

ログ・ファイルはテキスト・エディタで表示できます。

ログ・ファイルの場所

大部分のログ・ファイルは、<HPBSM ルート・ディレクトリ> \log ディレクトリおよびサブディレクトリにあり、コンポーネント別に編成されています。

ログ・ファイルのプロパティは、<HPBSM ルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j ディレクトリおよびそのサブディレクトリのファイルで定義されています。

分散デプロイメントでのログ・ファイルの場所

1 台のマシンのインストール(コンパクト・インストール)では、すべての BSM サーバとそのログが同じマシンにあります。通常、複数のマシンにサーバがある分散デプロイメントの場合、特定のサーバのログはそのサーバがインストールされているコンピュータに保存されます。ただし、ログを検査する場合、すべてのマシンで行う必要があります。

BSM サーバ・マシンのログとクライアント・マシンのログを比較する場合、ログに記録されている日時は、ログが生成されたマシンから取得されていることに注意してください。サーバ・マシンとクライアント・マシンで時間が異なる場合、別々のタイム・スタンプで同じイベントが記録されているということになります。

ログの重大度レベル

各ファイルは、記録する情報が特定の重大度のしきい値に対応するように設定されます。各種ログはさまざまな情報を追跡するために使用されます。各ログは適切な標準設定レベルに事前設定されています。ログ・レベルの変更の詳細については、135ページ「[変更ログ・レベルの変更方法](#)」を参照してください。

一般的なログ・レベル(最も絞り込まれた範囲から最も幅の広い範囲まで)を次に示します。

- **エラー** :BSM の機能にすぐに悪影響を及ぼすイベントのみがログに記録されます。不具合が発生した場合、エラー・メッセージがログに記録されているかどうかを確認し、その内容を検査してエラーの原因をトレースできます。
- **警告** :このログの範囲には、エラーレベルのイベントに加えて、現在 BSM で補正できる問題や潜在的な将来の不具合を防ぐために通知する必要のあるインシデントが含まれます。
- **情報** :すべてのアクティビティがログに記録されます。通常、これはありふれた情報でほとんど役に立つことはなく、ログ・ファイルはすぐにいっぱいになります。
- **デバッグ** :このレベルは、HP ソフトウェア・サポートが問題をトラブルシューティングするときに使用します。

注: 各種ログ・レベルの名前は、サーバや手順によって若干異なります。たとえば、[Info]は [Always logged] や [Flow] と呼ばれる場合があります。

ログ・ファイルのサイズと自動アーカイブ

ログ・ファイルのタイプごとにサイズの制限が設定されます。ファイルがこの制限に達すると、ファイル名が変更されてアーカイブ・ログになります。その時点で、新しいアーカイブ・ログ・ファイルが作成されます。

多くのログでは、保存されるアーカイブ・ログ・ファイルの数を設定できます。ファイルがこのサイズ制限に達すると、番号拡張子 1 を使用してファイル名が変更されます。拡張子 1 のアーカイブ・ファイルがすでに存在する場合は拡張子 2 で名前が変更され、最も古いアーカイブ・ログ・ファイル(保存する最大ファイル数と一致する数値を持つファイル)が完全に削除されるまで **log.2** は **log.3** となり、同じように繰り返されます。

次の図に、ログ・ファイル **topaz_all.ejb.log** とアーカイブされたコピーの例を示します。



名前	更新日時	種類	サイズ	タグ
topaz_all.ejb.log.5	2012/08/23 14:20	テキスト ドキュメント	85 KB	
topaz_all.ejb.log.4	2012/08/23 14:21	テキスト ドキュメント	68 KB	
topaz_all.ejb.log.3	2012/08/23 14:20	テキスト ドキュメント	85 KB	
topaz_all.ejb.log.2	2012/08/23 14:21	テキスト ドキュメント	49 KB	
topaz_all.ejb.log.1	2012/08/23 14:21	テキスト ドキュメント	15 KB	
topaz_all.ejb.log	2012/08/23 14:20	テキスト ドキュメント	85 KB	

ファイルの最大サイズおよびアーカイブ・ファイルの数は、< HPBSM ルート・ディレクトリ > \conf\core\Tools\log4j にあるログ・プロパティ・ファイルで定義されます。次に例を示します。

```
def.file.max.size=2000KB def.files.backup.count=10
```

JBoss ログと Tomcat ログ

次の<HPBSM ルート・ディレクトリ>\log ディレクトリには, JBoss と Tomcat 関連のログ・ファイルが保持されます。

- **jboss_boot.log**。JBoss プロセスの実行, デプロイメント, 起動ステータス, ビジー状態のポート数などの起動アクティビティが記録されます。
- **jboss_server.log**。JBoss メッセージ, デプロイメントと起動ステータスなどのすべての JBoss アクティビティが記録されます。
- **jboss_tomcat.log**。Tomcat メッセージが記録されます。

注: `http://<HPBSM サーバ>:8080/jmx-console` で JMX コンソールを表示できません。

変更ログ・レベルの変更方法

このタスクおよび関連するフローチャートでは、受信者に警告を配信するようにシステムを設定する方法について説明します。

HP ソフトウェア・サポートから要求された場合、必要に応じてログの重大度のしきい値レベルをデバッグ・レベルなどに変更します。

重大度のしきい値レベルを変更するには、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタでログのプロパティ・ファイルを開きます。ログ・ファイルのプロパティは、<HPBSM ルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j ディレクトリのファイルで定義されています。
2. **loglevel** パラメータを見つけます。次に例を示します。

```
loglevel=ERROR
```

3. レベルを必要なレベルに変更します。次に例を示します。

```
loglevel=DEBUG
```

4. ファイルを保存します。

イベントのデバッグ・トレース・ログを有効にする方法

カスタム属性 `TRACE` を設定して、イベントのデバッグ・トレース・ログを有効にすることができます。任意の値を指定できます。これにより、フロー・トレース・ログがイベントの `INFO` レベルで作成されます。

これは、イベントを送信する HPOM サーバまたはエージェントで設定できますが、後からイベントに追加することもできます。このカスタム属性がイベントに設定されていると、イベントのトレース出力がトレース・ログに表示されます。

- BSMデータ処理サーバ: `log/opr-backend/opr-flowtrace-backend.log`
- BSMゲートウェイサーバ: `log/opr-gateway/opr-flowtrace-gateway.log`

標準設定では、イベント・フロー・トレースのログ・レベルは `INFO` に設定されています。カスタム属性 `TRACE` が設定されているイベントのみが、フロー・トレース・ログ・ファイルに記録されます。すべてのイベントでフロー・トレースを有効にするには、フロー・トレースのログ・レベルを `DEBUG` に設定します。

Logging Administrator

このツールを使用して、BSM ログに表示される情報の詳細レベルの一時的な変更およびカスタム・ログの作成ができます。BSM Logging Administrator ツールを開くには、次の URL を開きます。

<http://<BSM Gateway Server>/topaz/logAdminBsm.jsp>

第13章

ポートの用途

本項では, BSM で使用するポートの設定方法について説明します。

ポートを手動で変更する方法

本項では、異なるポートを手動で変更する方法について説明します。手順は各ポートごとに異なります。

ポート 80 を手動で変更

ポート 80 は、BSM Web サーバで使用されます。このポートを変更するには、BSM サーバでほかのコンポートを再設定して BSM を再起動する必要があります。

1. 仮想ゲートウェイ・サーバ設定の変更
 - a. [管理]タブ> [プラットフォーム]> [セットアップと保守]タブ> [インフラストラクチャ設定]に移動し、[プラットフォーム管理 - ホストの設定]テーブルを見つけます。このテーブルが表示されていない場合、[コンテキストの選択]オプションを[すべて]に設定します。
 - b. アプリケーション・ユーザ URL の仮想ゲートウェイ・サーバを「http://<サーバ名>:<新しいポート>」に変更します。
 - c. [データコレクタ URL の標準設定仮想ゲートウェイサーバ]を「http://<サーバ名>:<新しいポート>」に変更します。
2. ダイレクト・ゲートウェイ・サーバ設定の変更
 - a. 同じテーブルで、[アプリケーション ユーザ サーバ URL のダイレクト ゲートウェイ サーバ]に新しいポートを含めます。
 - b. [データコレクタ URL のダイレクト ゲートウェイ サーバ]に新しいポートを含めます。
3. ローカル仮想ゲートウェイ・サーバ設定の変更
 - a. 同じテーブルで、[アプリケーション ユーザ URL のローカル仮想ゲートウェイ サーバ]に新しいポートを含めます。
 - b. [データコレクタ URL のローカル仮想ゲートウェイ サーバ]に新しいポートを含めます。
4. BSM を開く URL の変更
 - a. BSM ゲートウェイ・サーバにリモートで接続し、[スタート]> [すべてのプログラム]> [HP Business Service Management]を選択します。
 - b. [Open HP Business Service Management]を右クリックし、[プロパティ]を選択します。
 - c. [Web ドキュメント]タブで、[URL]フィールドを「http://<ゲートウェイ・サーバ>:<新しいポート>/topaz」に変更します。
5. Web・サーバ設定の変更

Web・サーバ設定を変更します。この手順は、Windows のバージョンと Web サーバのタイプによって異なります。すべての手順を BSM ゲートウェイ・サーバで実行する必要があります。3 つの異なる Web サーバを使用した Windows Server 2008 の例を次に示します。

Windows Server 2008 での IIS 6.0 の場合 :

- a. [Microsoft IIS Internet Services Manager]で、[既定の Web サイト]を右クリックして[プロパティ]を選択します。
- b. [Web サイト]タブで、[TCP ポート]の値を必要に応じて変更します。

Windows Server 2008 での 7.x の場合 :

- a. [マイ コンピュータ]を右クリックして[管理]を選択し、Microsoft の[コンピュータの管理]ツールを開きます。
- b. [役割] > [Web サーバ]を展開して[インターネット インフォメーション サービス]を選択します。
- c. 右側のパネルにIIS マネージャが表示されます。このパネルの左側([接続])で、現在のマシンの接続を展開して[サイト]ノードを展開します。
- d. [既定の Web サイト]を右クリックして[バインドの編集]を選択します。
- e. ポート 80 をリスンする行を選択し、[編集]をクリックして値を新しいポートに変更します。

Windows Server 2008 での Apache の場合 :

- a. テキスト・エディタで<BSM ゲートウェイ・ホーム>\WebServer\conf\httpd.conf ファイルを開きます。
 - b. Listen で始まる行に移動し、ポートの値を必要に応じて変更します。
 - c. ServerName で始まる行に移動し、ポートの値を必要に応じて変更します。
6. すべてのBSM の再起動とデータ・コレクタの更新

すべてのBSM サーバを再起動して、ポートを変更する前に設定されていたデータ・コレクタ (RUM, BPM, SiteScope など)を更新します。各データ・コレクタで、ゲートウェイ・サーバのアドレスを「<BSM ゲートウェイ>:<新しいポート>」に変更して新しいポートを反映させます。

ポート 1433 と 1521 を手動で変更

これらのポートは、HP BSM とデータベース・サーバ間の通信を制御します。

1. 管理データベース・ポートの変更

セットアップおよびデータベース設定ユーティリティを実行します。管理データベース・ポートが指定されている画面までスキップし、そのポートを必要に応じて変更します。セットアップおよびデータベース設定ユーティリティの詳細については、『BSM インストール・ガイド』を参照してください。

注: この手順を手動で実行するには、すべてのBSM サーバ(ゲートウェイおよびDPS)で、テキスト・エディタを使用して<BSM ホーム>\conf\TopazInfra.iniを開き、dbPort プロパティを必要に応じて変更します。

2. プロファイル・データベース・ポートの変更

[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [プロファイル データベースの管理]に移動し、[データベース プロパティの編集]ボタンをクリックして目的のデータベース設定に新しいポートを含めます。

3. すべてのBSM サーバを再起動します。

BSM の受信トラフィック

注: ここで示すポートは、BSM によって使用されるポートです。ポート割り当てを変更する必要がある場合は、最初に HP ソフトウェア・サポートに相談することを強くお勧めします。

BSM の受信トラフィックには、次の2つのカテゴリがあります。

内部トラフィック

内部トラフィックとは、2つのBSM サーバ間のトラフィックのことです。次の表は、2つのBSM サーバ間でのデータ送信に使用されるポートの一覧を示します。

ポート番号	ポートをリッスンする BSM サーバ	ポートの用途
4444	ゲートウェイ・サーバ、 データ処理サーバ	BSM サーバ間の RMI (Remote Method Invocation) チャンネル
4445	ゲートウェイ・サーバ、 データ処理サーバ	BSM サーバ間の RMI チャンネル
9389	ゲートウェイ・サーバ	分散デプロイメント環境におけるゲートウェイ・サーバ間の通信の TCP ローカル LDAP 接続
2506	データ処理サーバ	データ処理サーバとゲートウェイ・サーバ間の接続用のバス・ドメイン・マネージャ
2507	ゲートウェイ・サーバ、 データ処理サーバ	BSM サーバ間の接続用の主なバス・プロセス
383	ゲートウェイ・サーバ、 データ処理サーバ	Operations Manager からオペレーション管理アプリケーションに発生するイベント

外部トラフィック

外部トラフィックとは、BSM サーバではないクライアントから BSM サーバのいずれかに入ってくるトラフィックのことです。次の表に、外部の BSM クライアント・マシンから BSM サーバへのデータ送信に使用されるポートの一覧を示します。

ポート番号	ポートをリッスンする BSM サーバ	ポートの用途
80/443	ゲートウェイ・サーバ	<ul style="list-style-type: none"> 80: ゲートウェイ・サーバ・アプリケーションへの HTTP/S チャンネル 443: リバース・プロキシ用のポート

BSM の送信トラフィック

注: ここで示すポートは、BSM によって使用されるポートです。ポート割り当てを変更する必要がある場合は、最初に HP ソフトウェア・サポートに相談することを強くお勧めします。

次の表に、外部サーバ(BSM サーバ以外のサーバ)に接続するために、BSM サーバで使用するポートの一覧を示します。

ポート番号	ポートに接続する BSM サーバ	ポートの用途
25	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サーバから SMTP メール・サーバへの SMTP チャンネル
123	ゲートウェイ・サーバ	ゲートウェイ・サーバから NTP サーバへの NTP チャンネル
161	データ処理サーバ	データ処理サーバから SNMP マネージャへの SNMP チャンネル
389	ゲートウェイ・サーバ	認証のためのゲートウェイ・サーバと LDAP サーバ間の接続(任意)。詳細については、 346ページ「認証方法」 を参照してください。
1433	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サーバと Microsoft SQL サーバ間の接続。 これは標準設定のポートです。このポートはインストール中またはそれ以降に変更できます。
1434	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サーバと Microsoft SQL Browser Service 間の接続。 このポートは、名前付きインスタンスの使用時のみ使用されます。
1521	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サーバと Oracle サーバ間の接続 これは標準設定のポートです。このポートはインストール中またはそれ以降に変更できます。
80/443	ゲートウェイ・サーバ	<ul style="list-style-type: none"> ● 80: ゲートウェイ・サーバとデータ・コレクタの間のリモート管理作業用の HTTP/S チャンネル ● 443: リバース・プロキシ用のポート

BSM のローカル・トラフィック

下の表に、同じ BSM サーバ・マシンのコンポーネント間の通信に使用されるポートの一覧を示します。

注: ここで示すポートは、BSM によって使用されるポートです。ポート割り当てを変更する必要がある場合は、最初に HP ソフトウェア・サポートに相談することを強くお勧めします。

ポート番号	ポートに接続する BSM サーバ	ポートの用途
1098	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	JBoss アプリケーション・サーバによって使用される Remote Method Invocation(RMI) 管理チャンネル
1099	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	JBoss アプリケーション・サーバによって使用されるネーミング・サービス
4504	ゲートウェイ・サーバ	ゲートウェイ・サーバによって使用される TCP ローカル LDAP 接続
5001	ゲートウェイ・サーバ	VuGen から Central Repository Service への接続
8009	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	Tomcat AJP13 コネクタ
8010	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	WDE 用の Tomcat AJP13 コネクタ
8080	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	同一マシン上のコンポーネント用の HTTP チャンネル
8083	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	RMI 動的クラス読み込み
8093	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	JBoss アプリケーション・サーバによって使用される TCP JMS OIL/2 および UIL
11020	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サービス用の RMI 管理チャンネル
11021	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サービス用の HTTP チャンネル

ポート番号	ポートに接続する BSM サーバ	ポートの用途
21212	データ処理サーバ	RTSM プロセス用の HTTP チャンネル
21301	データ処理サーバ	バックエンドから EPI サーバ管理サービスへの RMI 通信
21302	ゲートウェイサーバ	コンソール Web アプリケーションから管理 Web アプリケーションへの RMI 通信
21303	ゲートウェイサーバ	同じホスト上で稼働するコンソール Web アプリケーションからカスタム・アクション・スクリプト・サーバへの RMI 通信
29601	ゲートウェイサーバ、データ処理サーバ	JBoss アプリケーション・サーバ用の RMI 管理チャンネル
29602	ゲートウェイサーバ、データ処理サーバ	バス・プロセス用の RMI 管理チャンネル
29603	ゲートウェイサーバ	DB ロード・プロセス用の RMI 管理チャンネル
29604	ゲートウェイサーバ	WDE (Web Data Entry) プロセス用の RMI 管理チャンネル
29608	データ処理サーバ	オフライン BLE プロセス用の RMI 管理チャンネル
29610	データ処理サーバ	パーティションとページ・マネージャ用の RMI 管理チャンネル
29612	ゲートウェイサーバ、データ処理サーバ	RTSM プロセス用の RMI 管理チャンネル
29616	ゲートウェイサーバ	スケジューラ・プロセス用の RMI 管理チャンネル
29620	データ処理サーバ	BPI リポジトリ用の RMI 管理チャンネル
29622	データ処理サーバ	Operations Manager バックエンド・プロセス用の RMI 管理チャンネル
29628	データ処理サーバ	OMi でのパイプライン処理のスクリプト実行用の RMI
29629	ゲートウェイサーバ	OMi のイベント・ブラウザでカスタマイズ可能なコンテキスト・メニューのスクリプト実行用の RMI
29630	データ処理サーバ	RMI
29700	データ処理サーバ	オンライン BLE プロセス用の RMI ポート
29711, 29712, 29713, 29714	データ処理サーバ	オンライン BLE プロセス用の RMI ポート
29720	データ処理サーバ	オンライン BLE プロセス用の RMI ポート
29800	データ処理サーバ	オンライン BLE プロセス用の HTTP ポート

ポート番号	ポートに接続する BSM サーバ	ポートの用途
29807	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	主なバス・プロセスのシャットダウン
29811,29812, 29813	データ処理サーバ	オンライン BLE プロセス用の HTTP ポート
29820	データ処理サーバ	オンライン BLE プロセス用の HTTP ポート
29903	ゲートウェイ・サーバ	DB ロード・プロセス用の HTTP チャンネル
29904	ゲートウェイ・サーバ	WDE(Web Data Entry) プロセス用の HTTP チャンネル
29908	データ処理サーバ	オフライン BLE プロセス用の HTTP チャンネル
29910	データ処理サーバ	パーティションとページ・マネージャ用の HTTP チャンネル
29916	ゲートウェイ・サーバ	スケジューラ・プロセス用の HTTP チャンネル
29922	データ処理サーバ	Operations Manager バックエンド・プロセス用の HTTP チャンネル
29928	データ処理サーバ	OMi でのパイプライン処理のスクリプト実行用の HTTP ポート
29929	ゲートウェイ・サーバ	OMi のイベント・ブラウザでカスタマイズ可能なコンテキスト・メニューのスクリプト実行用の HTTP ポート
29930	データ処理サーバ	HTTP
30020	データ処理サーバ	オンライン・ビジネス・ロジック・エンジン・プロセス用の HTTP ポート
31000-31999; 32000-32999	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	BSM サービス。各範囲内で利用可能な最初のポートが使用されます。
動的ポート	ゲートウェイ・サーバ、データ処理サーバ	一部の動的ポートがコンポーネント間チャンネルとして使用されます。

第14章

ファイルのバックアップに関する推奨事項

主要な設定ファイルおよびデータ・ファイルが収められているBSMの各ディレクトリは、予防的措置として毎日バックアップする必要があります。

次の表は、このようなバックアップを必要とするファイルが収められているBSMのディレクトリの一覧です。すべてのディレクトリは<HPBSM ルート・ディレクトリ>の下にあります。

リソース	コメント
\HPBSM\BLE	ビジネス・ルールの設定。ビジネス・ルールが作成されている場合はバックアップが必要です。
\HPBSM\conf	BSMのさまざまな設定ファイル。
\HPBSM\dat	BSMのさまざまな設定ファイル。
\HPBSM\dbverify\conf	dbverify用の設定ファイル。dbverifyを実行したことがない場合は、このディレクトリをバックアップする必要はありません。
\HPBSM\EJBContainer\bin	BSMの実行に使用されるスクリプトの設定ファイルと環境設定。
\HPBSM\bin	BSMバイナリ・ファイル。インストール時の標準設定に変更を加えた場合は、バックアップする必要があります。
\HPBSM\lib	BSMライブラリ・ファイル。インストール時の標準設定に変更を加えた場合は、バックアップする必要があります。
\HPBSM\AppServer\GDE	レポート用のデータを取得するために使用される、汎用レポート・エンジンの設定ファイル。
\HPBSM\odb\conf	RTSMのメイン設定ディレクトリ
\HPBSM\odb\lib	RTSMライブラリ・ファイル。インストール時の標準設定に変更を加えた場合は、バックアップする必要があります。
\HPBSM\odb\classes	RTSMパッチ・ファイル。パッチが追加された場合は、バックアップする必要があります。
\HPBSM\odb\runtime\fcmdb	RTSMアダプタ・ファイル。
\HPBSM_postinstall	インストール後の設定ファイル。

リソース	コメント
\\HPBSM\opr\bin	オペレーション管理 アプリケーション・バイナリ・ファイル。インストール時の標準設定に変更を加えた場合は、バックアップする必要があります。
\\HPBSM\opr\lib	オペレーション管理 ライブラリ・ファイル。インストール時の標準設定に変更を加えた場合は、バックアップする必要があります。
\\HPBSM\opr\webapps	BSM Web アプリケーション・ファイル。インストール時の標準設定に変更を加えた場合は、バックアップする必要があります。
\\HPBSM\opr\newconfig	BSM のさまざまな設定ファイルおよびライブラリ。
\\HPBSM\AppServer\webapps\site.war\WEB-INF\sam\hi-mapping-monitors.xml	カスタム EMS モニタ・タイプ。カスタム EMS SiteScope モニタが設定されている場合は、バックアップする必要があります。

第3部分

データ・エンリッチメント

第15章

ロケーション・マネージャ

ロケーション・マネージャは、地理的および論理的な場所 CI を定義して、IP アドレス範囲に割り当てるために使用されます。場所 CI は、ほかの CI にアタッチできます。これらは、Business Process Monitor (BPM) エージェントや Real User Monitor (RUM) によって自動的に検出されるページに場所をアタッチする場合などに使用されます。


ロケーション・マネージャにアクセスするには、次の手順を実行します。

[管理] > [プラットフォーム] > [場所] を選択します。

詳細

ロケーション・マネージャの概要

次の操作が可能です。

- [エンド ユーザ管理] からロケーション・マネージャにアクセスする([管理]>[エンド ユーザ管理]>[設定]>[Business Process Monitor の設定]>[BPM エージェント])。エージェントの場所の変更ダイアログ・ボックスを開くには、 をクリックします。
- IT ユニバース・マネージャで場所 CI を表示する([管理]>[RTSM管理]>[モデリング]>[IT ユニバース マネージャ]) 場所 CI を表示するには、[場所] ビューを選択します。

ロケーション・マネージャは、定義済みの管理者またはシステム変更者権限のあるユーザがアクセスできます。権限は、[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限] で設定されます。

場所の詳細および説明

場所エンティティ：世界の特定の位置を示すエンティティ。これは、地理的な場所(国や都市など)または論理的な場所(ビルなど)になります。場所エンティティは、エンド・ユーザやデータ・センターの場所を示す論理 CI およびデバイスに接続できます。

地理的な場所：都市 / 州 / 国の定義済みリストから選択した世界の絶対的な場所で、特定の地理座標に割り当てられています。

論理的な場所：ユーザ定義の仮想的な場所。物理的な空間にある実際の場所に関連する場合もあります。地理座標を論理的な場所に割り当てる場合、これらの座標を変更または削除できます。

注：選択した UI 言語に関係なく、すべての地理的な場所は英語になります。論理的な場所の名前は、選択した言語で付けることができ、後で UI 言語が変更されてもその言語のままになります。

階層：場所は、ほかの場所の下にネストできます。ルートの下に最大 7 レベルの階層ツリーを作成できます。

地理座標：(小数で表される)経度 / 緯度の度数値。座標は個々の場所に割り当てられます。

標準設定コンテナ：Real User Monitor(RUM)によって自動的に検出されるすべての場所の親の場所。標準設定では、標準設定コンテナは **World**(場所のツリーのルート)ですが、ツリーの任意の場所を標準設定コンテナとして設定できます。

IP 範囲：各場所は、一連の IP 範囲に割り当てることができます。IP 範囲は、特定の地域でデバイスを使用するために指定された IP アドレスの範囲です。

タスク

ロケーション・マネージャの入力

ロケーション・マネージャには、さまざまな方法で場所を入力できます。

プラットフォーム管理でのロケーション・マネージャの使用。 ユーザ・インタフェースの詳細については、156ページ「[\[ロケーション・マネージャ\]ページ](#)」を参照してください。

XML ファイルからの一括アップロード。 BSM では、ユーザ・インタフェース外で XML ファイルを使用して、場所 CI を作成および定義できます。一括アップロードはユーザ・インタフェースの代替手段であり、大量の場所を定義する場合に適しています。

詳細については、151ページ「[XML ファイルの作成と操作](#)」を参照してください。

Real User Monitor の使用 (RUM)。 場所が不明な IP アドレスが RUM で検出されると、場所を検出するために、その IP がロケーション・マネージャに入力されます。ロケーション・マネージャは Hexasoft IP2Location リポジトリを検索して、IP アドレスと一致する地理的な場所を見つけます。一致する場所が見つかる、IP アドレスの新しい場所がロケーション・マネージャで作成されます。IP アドレス・リポジトリの情報に応じて、IP アドレスごとに 3 つまでの場所 (国、州、市) を作成できます。

注: エンド・ユーザ管理 (EUM) を無効にした後で有効にすると、場所の自動検出が動作を開始するまでに数時間かかることがあります。これは、IP から場所への情報がデータベースに読み込まれる所要時間です。

XML ファイルの作成と操作

XML ファイルを作成し Java Management Extensions (JMX) コンソールから読み込むことにより、場所の階層を定義できます。(JMX のアクセスと使用の詳細については、25ページ「[JMX コンソールの使用](#)」を参照してください。)

XML は、テキストをサポートする任意のツールで生成および編集できます。独自のファイルを作成しても、JMX コンソールで BSM によって作成された XML ファイルに基づいて作成してもかまいません。後者の場合には、一括アップロード XML ファイルに必要なタグ、要素、属性がすでに含まれています。

XML ファイルの詳細

一括アップロード・ファイルに含まれているすべての XML タグ、要素、属性の詳細については、162ページ「[XML タグの参照](#)」を参照してください。

それぞれの一括アップロード XML ファイルは、次の宣言で開始する必要があります。

- `<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>` これは、UTF-8 文字エンコードを使用した XML ファイルであることを示します。
- `<!DOCTYPE locations_manager SYSTEM "./locations.dtd">` これは、ドキュメント・タイプの宣言です。locations.dtd ファイルは、HPBSM/conf/locations フォルダにあります。locations.dtd へのパスには、XML ファイルの場所に対する相対パスを指定する必要があり、更新を必要とする場合があります。XML ファイルが locations.dtd と同じ場所に保存されている場合は、パスは不要です。

XML ファイルは、locations.dtd ファイルを使用して検証されます。XML 構造が不正な場合は、SAXParseException が表示され、操作に失敗します。DOCTYPE 行で locations.dtd ファイルのパスが正しく参照されていない場合は、検証および操作全体に失敗します。

注: ロケーション・マネージャを XML 経由で入力すると、ロケーション・マネージャで以前に定義されたすべての場所が削除されます。

XML ファイルの例

この例では、カスタマ 1 が XML ファイルをアップロードして、ロケーション・マネージャで次のように場所の階層を作成します。最初の場所である Los Angeles のサイトには、地理的な座標、ISP アドレス範囲、および ISP が含まれます。場所 2 と 3 は最初の場所 (Los Angeles) の下でネストされ、2a と 2b は 2 の下でネストされます。場所 4 は、階層内で Los Angeles と並列です。

ワールド

- Los Angeles の緯度は 34.0396、経度は 118.2661、IPv4 アドレス範囲は 4.38.41.136 ~ 4.38.80.152 (ISP=レベル3 通信)、IPv6 アドレス範囲は 2002:0C19:8B00:0000:0000:0000:0000:0000 ~ 2002:0C19:B28F:0000:0000:0000:0000:0000 (ISP=AT_T WorldNet サービス) です。
 - location_2
 - location_2a
 - location_2b
 - location_3
- location_4

注: ワールドのルート場所を追加する必要はありません。

この階層のアップロードに使用する XML ファイルは、次のとおりです。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<!DOCTYPE locations_manager SYSTEM "conf/locations/locations.dtd">
<locations_manager>
  <customer_hierarchy customer_id="1">
    <locations_list>
      <location location_name="Los Angeles">
        <latitude>34.0396</latitude>
        <longitude>-118.2661</longitude>
        <ip_ranges>
          <ip_range>
            <start_ip>4.38.41.136</start_ip>
            <end_ip>4.38.80.152</end_ip>
            <isp>Level 3 Communications</isp>
          </ip_range>
          <ip_range ip_v6="true">
            <start_
ip>2002:0C19:8B00:0000:0000:0000:0000:0000</start_ip>
            <end_
ip>2002:0C19:B28F:0000:0000:0000:0000:0000</end_ip>
            <isp>AT_T WorldNet Services</isp>
          </ip_range>
        </ip_ranges>
      </locations_list>
```



```
<location location_name="location_2">
  <locations_list>
    <location location_name="location_2a" />
    <location location_name="location_2b" />
  </locations_list>
</location>
<location location_name="location_3" />
</locations_list>
</location>
<location location_name="location_4" />
</locations_list>
</customer_hierarchy>
</locations_manager>
```

各 XML 要素と属性の詳細については、162ページ「XML タグの参照」を参照してください。

ロケーション・マネージャの入力方法

ロケーション・マネージャには、さまざまな方法で場所 CI を入力できます。次の操作が可能です。

- 153ページ「ユーザ・インタフェースを使用した場所の作成」
- 153ページ「XML ファイルを使用したロケーション・マネージャの入力」

ユーザ・インタフェースを使用した場所の作成

ロケーション・マネージャのユーザ・インタフェースを使用して、場所の作成、編集、管理を行い、IP 範囲を割り当てることができます。ユーザ・インタフェースの詳細については、156ページ「[ロケーション・マネージャ] ページ」を参照してください。

XML ファイルを使用したロケーション・マネージャの入力

ユーザ・インタフェース外で XML ファイルを使用して、場所 CI をロケーション・マネージャにアップロードします。一括アップロードはユーザ・インタフェースの代替手段であり、大量の場所をロケーション・マネージャに入力する場合に適しています。

このタスクの詳細については、153ページ「一括アップロードを使用して場所を更新する方法」を参照してください。

一括アップロードを使用して場所を更新する方法

このタスクでは、XML ファイルをロードして、XML で既存の場所の階層を変更し、その結果を表示する方法について説明します。

場所をアップロードする XML ファイルを作成および変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のように場所の ID を使用せずに XML ファイルを作成します。

テキストをサポートする任意のツールでファイルを作成します。作成した XML ファイルを BSM サーバにアクセスできるネットワーク上の場所に保存します。詳細については、151ページ「XML ファイルの作成と操作」を参照してください。XML ファイルの要素や属性の詳細については、162ページ「XML タグの参照」を参照してください。

次の手順に従って、JMX コンソールで現在の階層を XML としてエクスポートします。

2. このマシンで JMX コンソールを開きます(詳細については、25ページ「JMX コンソールの使用」を参照)。

3. [BSM-Platform] セクションで, **service=Locations Manager** を選択します。
4. 現在の階層から XML ファイルを作成する場合, 次の値を入力して **convertLocationsHierarchyToXML** メソッドを呼び出します。

customerId : 標準設定では, **customerID** には 1 が使用されます。HP SaaS カスタマの場合, HP SaaS のカスタマ ID を使用します。

target path : XML ファイルを保存する場所。
5. 保存した XML ファイルを見つけて編集します。
 - a. 既存の場所のリストが正しいことを確認します。この XML ファイルにはルートの場合 World は含まれていません。
 - b. 新しい場所を追加する場合, ID は定義しないでください。
 - c. 場所を変更するには, 実際の ID は変更せずにフィールドを変更します。
 - d. 場所を削除するには, その詳細を XML ファイルからすべて削除します。
 - e. 階層内の場所の位置を変更するには, XML ファイルで実際の ID のある場所を別の位置に移動します。
 - f. 作成した XML ファイルを BSM サーバにアクセスできるネットワーク上の場所に保存します。

ヒント : XML ファイルのドキュメント・タイプ宣言行で別のパスを参照しないで済みように XML ファイルを **locations.dtd** ファイルと同じディレクトリに保存します。**locations.dtd** は, <HPBSM ルート・ディレクトリ> \conf\locations ディレクトリにあります。

6. 編集した XML ファイルをアップロードするには, JMX の **service=Locations Manager** で, **buildLocationsHierarchyFromXML** メソッドを呼び出します。
 - a. **xmlFilePath** に, XML ファイルを保存した場所のパスを入力します。
 - b. **saveInFile** パラメータで, **True** を選択して, 既存の場所の階層をファイル <HPBSM ルート・ディレクトリ> \conf\locations\current_locations_hierarchy.xml に保存します。

注 :

1. XML ファイルは, 次に示すルールに準拠している必要があります。いずれかのルールに違反すると, 場所のモデルが変更される前に **buildLocationsHierarchyFromXML** が中止されます。
 - 同じ階層レベル(同一の親)にある場所に同じ名前は使用できない。customer_hierarchy の直下(ルートの場所 World の直下)にある場所および階層内の別の位置にある場所に同じ名前は使用できません。ただし, あるインスタンスでは地理的な場所を参照していて, ほかのインスタンスでは論理的な場所を参照している場合や, 異なるタイプ(国, 州, 都市)の地理的な場所(国の Mexico と都市の Mexico, 州の New York と都市の New York など)を参照している場合はこのかぎりではありません。
 - 最大 7 レベルの階層を定義できる。
 - 複数の場所で同じ ID は使用できない。

- XML のすべての場所 ID 値は、その ID の既存の場所と一致している必要がある。
 - 複数の IP 範囲の重複は許可されていない。
2. 既存の階層をファイルに保存すると、新しい XML ファイルをロードするのに時間がかかる場合があります。

7. これで場所がロケーション・マネージャにアップロードされました。これらは、ユーザ・インタフェースの場所のツリーおよび JMX コンソールに表示されます。

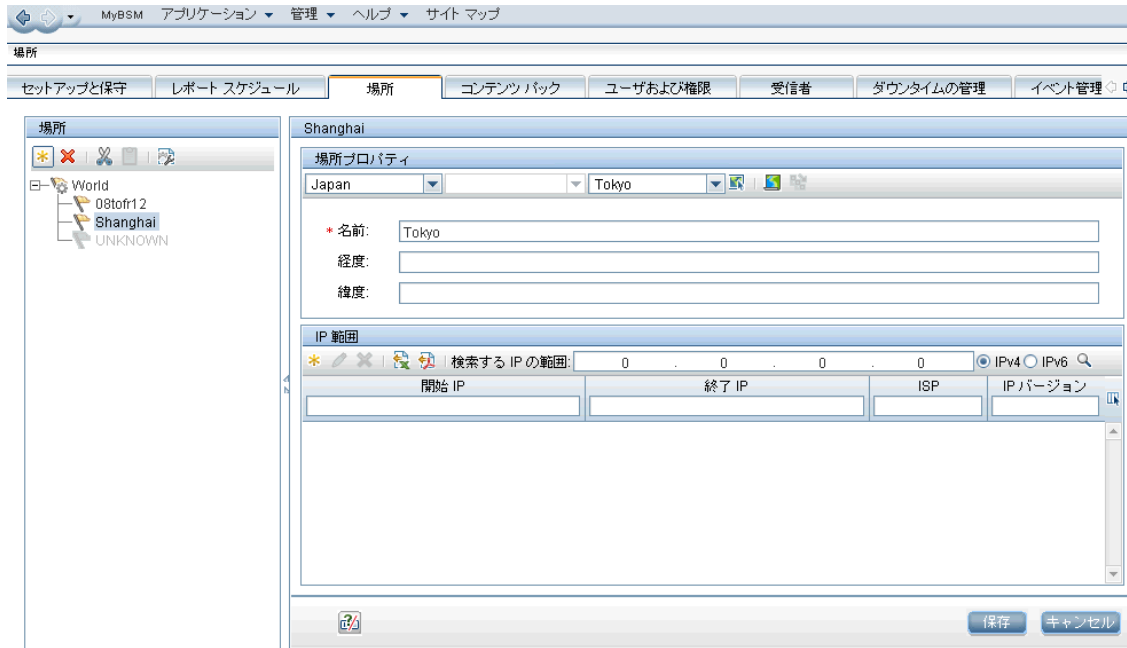
JMX で表示するには、次の手順を実行します。

- **service=Locations Manager** で、**getAllLocations** メソッドを見つけます。
- 該当のカスタマ ID を入力します。標準設定では、**customerID** には 1 が使用されます。HP SaaS カスタマの場合、HP SaaS のカスタマ ID を使用します。
- メソッドを呼び出して、ルートの場合 World を含むすべての場所があることを確認します。

UI の説明

[ロケーション マネージャ] ページ

このページでは、場所の管理や IP 範囲の割り当てを行うことができます。







アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[場所]を選択します。
関連タスク	153ページ「ロケーション・マネージャの入力方法」
関連情報	150ページ「ロケーション・マネージャの概要」

● [場所]領域 — 左側の表示枠

[場所]ページの左側の表示枠にある[場所]領域では、場所を追加、削除、移動できます。また、場所を標準設定コンテナとして設定することもできます。場所はツリー構造で表示され、最大で7レベルの階層になります。このルート(レベル0)は **World** と呼ばれます。


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。また、左側の表示枠にある[場所]領域を右クリックしてショートカット・メニューからこれらのアクションにアクセスすることもできます。

UI 要素	説明
	場所の追加 : 選択した場所の下に新しい場所を追加する場合にクリックします。[場所プロパティ]領域が開きます。

UI 要素	説明
	<p>場所の削除: 場所とその子の場所を削除する場合にクリックします。</p> <p>[確認] ウィンドウが開き、場所を削除するかどうかを確認されます。また、場所がほかの BSM コンポーネントによって使用されている可能性があることや、このアクションは元に戻せないことが警告されます。</p> <p>場所を削除する場合、その場所や子に割り当てられている IP 範囲を親の場所に移動することができます。これを行うには、[確認] ウィンドウの[IP 範囲を親の場所に移動してください] チェック・ボックスを選択します。</p>
	<p>場所の切り取り: 場所を切り取る場合にクリックします。場所はクリップボードにコピーされ、場所のツリーの別の要素の下に貼り付けることができます。</p> <p>注: 場所を切り取っても、別の位置に貼り付けるまでツリーの元の位置にグレー表示されます。別の位置に貼り付ける前に場所の切り取りを選択解除して元の位置に戻すには、[場所の切り取り]を再度クリックします。</p>
	<p>場所の貼り付け: 場所が切り取られていて、ユーザがツリーの別の位置に移動している場合に使用できます。</p> <p>注: 場所は、ほかの場所の下に貼り付けることができます。ルートの下に最大 7 レベルの階層ツリーを作成できます。同じ親を持つ兄弟の場所に同一の名前を割り当てることはできません。World の下にある場所およびツリー内の別の位置にある場所に同じ名前は使用できません。ただし、あるインスタンスでは地理的な場所を参照していて、ほかのインスタンスでは論理的な場所を参照している場合や、異なるタイプ(国, 州, 都市)の地理的な場所(国の Mexico と都市の Mexico, 州の New York と都市の New York など)を参照している場合はこのかぎりではありません。</p>
	<p>標準のコンテキストとして設定: 特定の場所を標準設定コンテナとして設定する場合にクリックします。これは、自動的に検出されるすべての場所の親の場所になります。</p> <p>詳細については、150 ページ「ロケーション・マネージャの概要」を参照してください。</p>




• [場所プロパティ]領域

[場所プロパティ]領域では、国、地域、州、都市の定義済みリストから地理的な場所とその座標を設定できます。また、論理的な場所に名前を付けてその地理座標を設定することもできます。地理的な場所として場所を定義すると、ディスカバリで、検出された IP アドレスをその場所に自動的に割り当てることができます。地理的な場所として場所を定義するには、適切な国 / 州 / 都市を選択し

て(国のみ、国 / 州、国 / 都市を選択することも可能)、 をクリックします。

注: 地理的な場所は、定義済みリストからのみ選択できます。場所の名前を手動で入力する場合、論理的な場所として作成されます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。








UI 要素	説明
<国または地域>/<州>/<都市>	国または地域を選択するには 1 つ目のドロップダウン・コントロール, 都市を選択するには 3 つ目のドロップダウン・コントロールを使用します。国として USA を選択すると, 中央のドロップダウンが使用できるようになり, 特定の州を選択できます。
	地理的な位置を設定します: 選択した国 / 州 / 都市の地理座標 (経度と緯度) を特定して, [場所プロパティ] の適切なフィールドに名前と座標を自動的に入力する場合にクリックします。したがって, 場所は地理的な場所として定義されます。
	場所の座標を選択します: 任意の場所の地理座標を選択できる [地理マップ] ダイアログ・ボックスを起動する場合にクリックします。 地理座標が以前に [経度] および [緯度] ボックスに入力されている場合, これらは [地理マップ] ダイアログ・ボックスに渡されます。そのため, [地理マップ] ダイアログ・ボックスはその場所にピンが配置された状態で開きます。 詳細については, 160 ページ「[地理マップ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	最も近い親から座標を取得します: 座標のある最も近い親の場所から, 選択した場所に地理座標をコピーする場合にクリックします。
名前	[名前] テキスト・ボックスに場所の名前を入力します。 注: <ul style="list-style-type: none"> [名前] フィールドは必須フィールドです。同じ親を持つ兄弟の場所に同一の名前を割り当てることはできません。World の下にある場所およびツリー内の別の位置にある場所に同じ名前は使用できません。ただし, あるインスタンスでは地理的な場所を参照していて, ほかのインスタンスでは論理的な場所を参照している場合や, 異なるタイプ (国, 州, 都市) の地理的な場所 (国の Mexico と都市の Mexico, 州の New York と都市の New York など) を参照している場合はこのかぎりではありません。親が異なっていれば同じ名前を複数の場所に割り当てることができますが, ツリー内の別の場所にすでに同じ名前が定義されていることを示す小さな警告の記号が表示され, この場所の名前を変更することが推奨されます。 地理的な場所の名前を変更しても, 元の地理的な場所との関連付けは維持されます。
経度/緯度	場所の経度と緯度を [経度] および [緯度] テキスト・ボックスに入力します。 国, 州, 都市の定義済みドロップダウン・リストまたは [地理マップ] ダイアログ・ボックスから場所を選択する場合, [経度] および [緯度] ボックスは自動的に入力されます。

• [IP 範囲] 領域

[IP 範囲] 領域を使用して IP 範囲を場所に割り当てることができます。Real User Monitor (RUM) は, これらの範囲を使用して, 新しく検出されたページやほかの CI を特定の場所に割り当てます。


IP 範囲のテーブルには, 何千ものページが含まれる場合もあります。1 つのファイルでテーブルを表示するには, Excel または Adobe Acrobat (PDF) 形式でエクスポートします。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規 IP 範囲 :新しい IP 範囲を作成する場合にクリックします。[新規 IP 範囲]ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>注 :一度に 1 つの場所にのみ特定の IP 範囲を割り当てられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 親 IP 範囲と重複する IP 範囲を割り当てる場合、このアクションで親の場所から IP 範囲が削除されることを警告するメッセージが表示されます。(重複する範囲の領域のみが削除され、親 IP 範囲は適時調整されます)。[親から削除する] をクリックし、重複する IP 範囲を親から削除して選択した場所に再割り当てするか、[キャンセル] をクリックします。 (親以外の)別の場所にすでに割り当てられている範囲で重複する IP 範囲を割り当てようとすると、エラー・メッセージが表示されます。この場合、別の IP 範囲を選択する必要があります。
	<p>IP 範囲の編集 :選択した IP 範囲を編集する場合にクリックします。[IP 範囲の編集]ダイアログ・ボックスが開きます。</p>
	<p>IP 範囲の削除 :選択した 1 つ以上の IP 範囲を削除する場合にクリックします。</p>
	<p>Excel へエクスポート :選択した場所の IP 範囲情報を Excel スプレッドシートにエクスポートする場合にクリックします。</p>
	<p>PDF へエクスポート :選択した場所の IP 範囲情報を Adobe Acrobat ファイルにエクスポートする場合にクリックします。</p>
	<p>表示カラムの変更 : [IP 範囲] 領域に表示する IP 範囲情報の列を選択する場合にクリックします。[表示するカラムの選択]ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>注 :画面に表示されていない列は、Excel または Adobe Acrobat (PDF) ファイルにもエクスポートされません。</p>
<p>検索する IP の範囲</p>	<p>特定の IP アドレスが含まれる既存の範囲を検索するには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 適切なラジオ・ボタンを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> IPv4 (インターネット・プロトコル・バージョン 4) : 4 つの 10 進数の数値 (0 ~ 255) で構成されるアドレスで、各数値はドットで区切られています。 IPv6 (インターネット・プロトコル・バージョン 6) : 8 つの 16 進数の数値 (0 ~ FFFF) で構成されるアドレスで、各数値はコロンで区切られています。 [検索する IP の範囲] ボックスに IP アドレスを入力します。  をクリックします。 <p>IP アドレスが検出された範囲が強調表示されます。</p> <p>注 :現在選択されている場所の IP 範囲のみが検索されます。</p>

UI 要素	説明
開始 IP / 終了 IP, ISP, IP バージョン	<p>IP 範囲 (上限と下限), ISP 名, IP バージョンの特定のテキスト文字列で IP 範囲をフィルタするには, [開始 IP], [終了 IP], [ISP], [IP バージョン] ボックスに文字列を入力します。</p> <p>これらのボックスは相互に組み合わせて使用できます。アスタリスク (*) をワイルドカードとして使用して, 1 つ以上の文字を表すことができます。</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> IPv6 アドレスをフィルタするには, [IP バージョン] ボックスに「6」と入力します。 上限が 0 で終了する IPv4 アドレス範囲をフィルタするには, [開始 IP] ボックスに「*.*.*.0」と入力します。

[新規 IP 範囲] または [IP 範囲の編集] ダイアログ・ボックス

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [場所] を選択して, [IP 範囲] の下にある  をクリックします。
--------	---

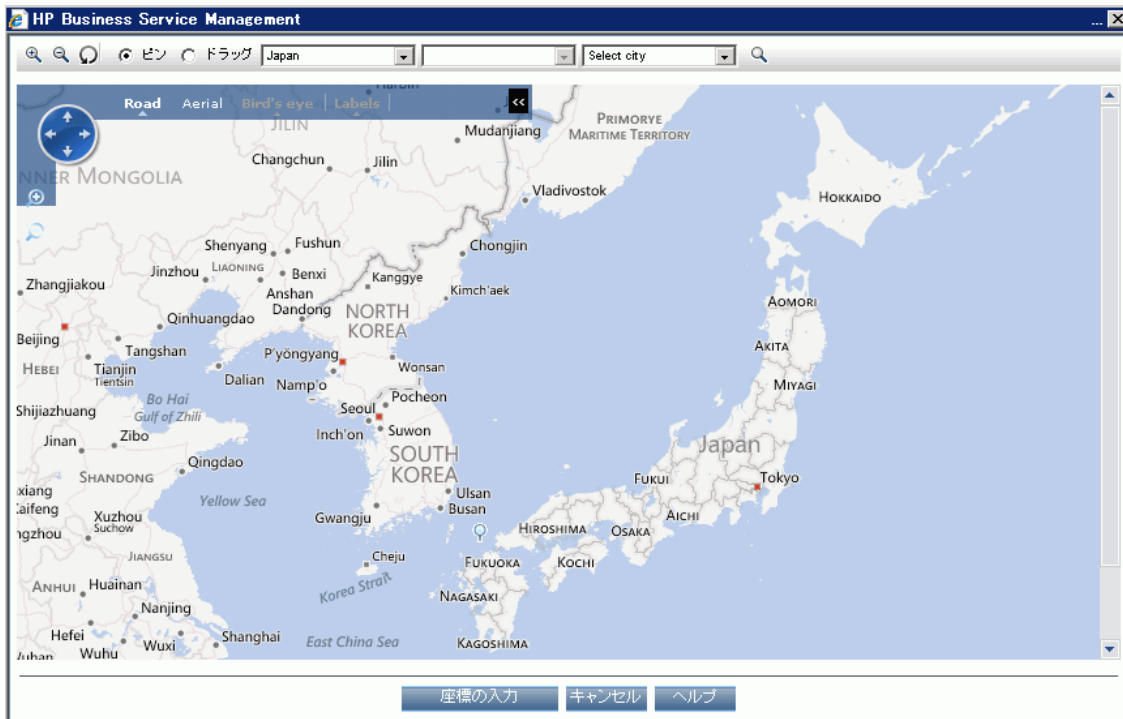
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
IP バージョン	<p>[IPv4] または [IPv6] を選択して, 次の項目を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> インターネット・プロトコル・バージョン 4 (4 つの 10 進数の数値 (0 ~ 255) で構成される IP アドレスで, 各数値はドットで区切られています) インターネット・プロトコル・バージョン 6 (8 つの 16 進数の数値 (0 ~ FFFF) で構成される IP アドレスで, 各数値はコロンで区切られています)
開始 IP / 終了 IP	<p>場所の IP アドレス範囲を設定する場合に [開始 IP] および [終了 IP] ボックスを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> IPv4 の場合, IP アドレスを [開始 IP] ボックスに入力すると, 対応するアドレス (255 で終わるアドレス) が自動的に [終了 IP] ボックスに入力されます。両方のボックスのすべての値は, 許容されている任意の値 (0 ~ 255) に変更できますが, [終了 IP] ボックスのアドレスは [開始 IP] ボックスのアドレスと同じか, それよりも大きくする必要があります。 <p>注: IPv4 範囲は, 50,000,000 個の IP アドレスを超えることはできません。</p> <ul style="list-style-type: none"> IPv6 の場合, IP アドレスを [開始 IP] ボックスに入力すると, 同じアドレスが自動的に [終了 IP] ボックスに入力されます。両方のボックスのすべての値は, 許容されている任意の値 (0 ~ FFFF) に変更できます。[終了 IP] ボックスのアドレスは [開始 IP] ボックスのアドレスと同じにすることも, それより大きくすることも, 小さくすることもできます。
ISP	[ISP] ボックスでは, インターネット・サービス・プロバイダを指定します。

[地理マップ] ダイアログ・ボックス



このダイアログ・ボックスでは, 任意の場所の地理座標を選択できます。




注: インターネットに接続されていないユーザには、このマップの別のバージョンが表示されます。



アクセス方法	[場所] ページの[場所プロパティ] 領域で  をクリックします。
重要な情報	地理座標が以前に[経度] および[緯度] ボックスに入力されている場合、これらは[地理マップ] ダイアログ・ボックスに渡されます。そのため、[地理マップ] ダイアログ・ボックスはその場所にピンが配置された状態で開きます。
関連タスク	153 ページ「ロケーション・マネージャの入力方法」.
関連情報	156 ページ「[ロケーション マネージャ] ページ」.

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	ズーム・イン : マップをズームインする場合にクリックします。 注: このアイコンはツールバーにあります。マップ自体にも、同じ機能を持つ別の [ズーム イン] アイコンが表示されます。
	ズーム・アウト : マップをズームアウトする場合にクリックします。 注: このアイコンはツールバーにあります。マップ自体にも、同じ機能を持つ別の [ズーム アウト] アイコンが表示されます。

UI 要素	説明
	リセット : 特定の座標で地理マップを開いて、ほかの場所にパンした場合、最初の座標がマップの中央にくるように戻すには、[リセット]をクリックします。
[ピン]/[ドラッグ]ラジオボタン	マップ上の任意の場所をクリックしてピンをそこに移動する場合に[ピン]を選択します。場所をダブルクリックすると、ピンが移動してズームインします。 マップをドラッグする場合に[ドラッグ]を選択します。
<国または地域>/<州>/<都市>	国または地域を選択するには1つ目のドロップダウン・コントロール、都市を選択するには3つ目のドロップダウン・コントロールを使用します。国としてUSAを選択すると、中央のドロップダウンが使用できるようになり、特定の州を選択できます。
	マップで場所を見つけます : マップ上で選択した国または地域および都市を探す場合にクリックします。
	任意の方向にパンする : マップ上でパンするには、このコントロールをクリックしてドラッグします。
[Road]ビュー	世界の道路地図を表示する場合にクリックします。
[Aerial]ビュー	世界の航空写真地図を表示する場合にクリックします。
Bird's Eye	鳥瞰的な表示は無効になっています。
ラベル	[Aerial]ビューで、マップのラベルを表示または非表示にする場合にクリックします。これは、[Road]ビューでは無効になっています。
座標の入力	ピンの場所の座標を[場所プロパティ]領域の[経度]および[緯度]ボックスに自動的にコピーする場合にクリックします。

XML タグの参照

次の表に、一括アップロード XML ファイルで使用するすべての要素と属性を示します。

• 要素表

要素	説明	属性
locations_manager	ロケーション・マネージャ・データを含むブロック内の最初の要素	
customer_hierarchy	特定のカスタマの場所の階層に含まれる最初の要素	customer_id
locations_list	場所のリストに含まれる最初の要素	

要素	説明	属性
location	特定の場所の属性を定義するブロック内の最初の要素	location_name
latitude	場所の緯度(度単位)	
longitude	場所の経度(度単位)	
ip_ranges	特定の場所の IP アドレス範囲のリストに含まれる最初の要素	
ip_range	特定の IP アドレス範囲の属性を定義するブロック内の最初の要素	ip_v6
start_ip	IP アドレス範囲の下限 IP アドレス範囲には IPv4 または IPv6 が有効です。ロケーション・マネージャは、次の表記形式をサポートしています。 IPv4 – 4 バイトの数 IPv4 – x.x.x.x 形式の文字列 IPv6 – 16 バイトの数 IPv6 – x:x:x:x:x:x:x:x 形式の文字列 IPv6 – IPv6 の正規表現	
end_ip	IP アドレス範囲の上限。IPv4 および IPv6 の表記形式はサポートしていません。上記の start_ip を参照してください。 注 : IPv4 範囲は、50,000,000 個の IP アドレスを超えることはできません。	
isp	範囲の ISP の名前	

• 属性表

属性	親要素	説明	例
customer_id	customer_hierarchy	数値。一意および必須。場所の階層を作成するカスタマの ID 番号。	<customer_hierarchy customer_id="1">
location_name	場所	文字列。必須。一意ではない(兄弟でない場合、複数の場所に同じ名前を使用できる)。特定の場所の名前。	<location_location_name="Los Angeles">
ip_v6	ip_range	ブール値。特定の範囲の IP アドレスが IPv6 形式の場合は「true」。それ以外の場合は IPv4 形式。	<ip_range ip_v6="true">

• 暗黙的な属性表

次の属性は、現在の階層を XML としてエクスポートするときにエクスポートされますが、XML で新しい

場所を定義するときには必須ではありません。XML を使用して既存の場所を更新する場合、これらの属性を保持する必要はありません。

属性	親要素	説明
original_geo_location_id	場所	地理的な場所の識別に使用します。
location_type	場所	使用可能な値 <ul style="list-style-type: none">• "undefined"(標準設定)• "country"• "state"• "city"
location_id	場所	既存の場所の実際の ID。

例 :

```
<location_name="UNKNOWN" location_type="undefined" location_id="47a3711c334fd8577858c6da60b3e0e6" original_geo_location_id="Unknown_Unknown">
```

第16章

コンテンツ・パック

コンテンツとは、BSMがIT環境で監視対象となるオブジェクトまたは構成アイテムの説明と強化に使用する情報のことです。たとえば、オブジェクトには、ネットワーク・ハードウェア、オペレーティング・システム、アプリケーション、サービス、ユーザなどがあります。

特定の管理領域のコンテンツは、専用のコンテンツ・パックに含めることができます。コンテンツ・パックには、IT環境の管理に役立てるために定義および設定するルール、ツール、マッピング、インジケータ、割り当てなど、コンテンツの一部または全部の完全なスナップショットを含めることができます。コンテンツ・パックは、カスタマイズしたデータをBSMのインスタンス間(たとえば、テスト環境と実運用環境)で交換するために使用されます。

コンテンツ・パック・マネージャは、コンテンツ・データのパックの管理に役立ちます。コンテンツ・パック・マネージャでは、コンテンツ・パックの作成、ファイルへの保存、コンテンツのインストールまたは更新を行うことができます。また、エクスポートおよびインポート機能を使用して、インストールされたBSMインスタンスからコンテンツを取り出して別のインスタンスにアップロードすることもできます。

BSMには、スマート・プラグイン(SPI)などのコンテンツ・パック定義がいくつか用意されています。これは、標準設定で使用するか、必要に応じて、環境のニーズに合わせて修正して使用できます。このようなコンテンツは通常、**定義済み**として指定され、変更が可能です(**定義済み(カスタマイズ済み)**)。変更後のコンテンツは、定義済みの値に戻すことができます。

コンテンツ・パック・マネージャでは、次のタスクを実行できます。

- コンテンツ・パックの内容を定義し、定義を保存する。詳細については、170ページ「**コンテンツ・パックの定義**」を参照してください。
- コンテンツ・パック間の依存関係を管理する。詳細については、171ページ「**コンテンツ・パックの依存関係**」を参照してください。
- コンテンツ・パック(定義と内容)およびその参照データを、コンテンツ・パックと呼ばれるファイルにエクスポートする。詳細については、174ページ「**コンテンツ・パックのエクスポート**」を参照してください。
- コンテンツ・パック(定義と内容)およびその参照データをインポートする。詳細については、175ページ「**コンテンツ・パックのインポート**」を参照してください。

注: 権限を使用すると、コンテンツ・パック・マネージャへのアクセスを付与および制限できます。コンテンツ・パック・マネージャを使用するための権限は、**[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]**にあります。

コンテンツ・マネージャ権限を変更するユーザを選択した後、右側の表示枠で**[権限]**タブを選択します。**[コンテキスト]**表示枠が表示されます。

[オペレーション管理]コンテキスト > [管理 UI] > [コンテンツ パック] を選択します。

コンテンツ・タイプ

コンテンツ・タイプは、次の用語を指します。

• 定義済みのコンテンツ

定義済みのコンテンツは通常 HP または HP パートナから提供され、BSM インストールの初期設定を提供します。定義済みのコンテンツ・パックをインストールした後、環境および管理のニーズに合わせて、これらの初期アイテムを変更できます。変更された定義済みアイテムには、**定義済み(カスタマイズ済み)**というラベルが付けられます。定義済みアイテムは削除できませんが、カスタマイズしたアイテムを元の「定義済み」状態に戻すことはできます。

• カスタム・コンテンツ

カスタム・コンテンツは、カスタムのインハウス・アプリケーションを管理するなどの目的でカスタマが作成したコンテンツであり、**カスタム**というラベルが付けられます。

• カスタマイズ済みのコンテンツ

変更された定義済みアイテムには、**定義済み(カスタマイズ済み)**というラベルが付けられます。カスタマイズしたアイテムは、元の「定義済み」状態に戻すことができます。

コンテンツ・パック・タイプ

コンテンツ・パック・タイプは、次の用語を指します。

• 定義済みのコンテンツ・パック

定義済みのコンテンツ・パックは通常 HP または HP パートナから提供される定義済みのコンテンツの集まりであり、BSM インストールの初期設定を提供します。

定義済みのコンテンツ・パックをインストールした後、環境および管理のニーズに合わせて、これらの初期アイテムを変更できます。変更された定義済みアイテムには、**定義済み(カスタマイズ済み)**というラベルが付けられます。定義済みアイテムは削除できませんが、カスタマイズしたアイテムを元の「定義済み」状態に戻すことはできます。

定義済みのコンテンツ・パックのコンテンツをインポートする際、このコンテンツに**定義済み**というラベルが付けられます。

- 定義済みのコンテンツ・パックには、一意のコンテンツを含める必要があります。定義済みの複数のコンテンツ・パックに同じコンテンツを含めることはできません。これはエクスポート時にチェックされ、適切なエラー・メッセージが表示されます。
- 定義済みのコンテンツ・パックに、参照されるコンテンツを含めることはできません。
- 変更可能なアイテムと異なり、定義済みのコンテンツ・パックは変更または直接削除できません。定義済みのコンテンツ・パックに変更を加える場合は、新しいバージョンを作成する必要があります。定義済みのコンテンツ・パックの新しいバージョンをインポートすると、古いバージョンが上書きされます。

注: 定義済みのコンテンツ・パックを変更するには、**[選択されたコンテンツ パック定義の新しいバージョンを作成する]**を選択し、新しいバージョン番号を指定します。詳細については、176ページ「**定義済みのコンテンツ・パック定義の新しいバージョンの作成**」を参照してください。

定義済みのコンテンツ・パックの削除は、コンテンツ・パック開発モード（[インフラストラクチャ設定]の[オペレーション管理 - コンテンツ マネージャ設定]で有効化）でのみ可能です。

• カスタム・コンテンツ・パック

カスタム・コンテンツ・パックは通常、カスタムのインハウス・アプリケーションを管理するなどの目的で BSM ユーザが作成したコンテンツの集まりです。

カスタム・コンテンツ・パックのコンテンツをインポートする際、このコンテンツに**カスタム**というラベルが付けられます。

カスタム・コンテンツ・パックには、他のカスタム・コンテンツ・パックまたは定義済みのコンテンツ・パックと同じコンテンツを含めることができます。

コンテンツ・パック定義

コンテンツ・パック定義には、次の2つの用途があります。

- コンテンツ・パックが参照するアイテムを含むコンテンツ・パックを作成する。
- システムの定義済みのコンテンツを記述し、定義済みのコンテンツのインベントリとしての役割を果たす。

コンテンツ・パック定義は、その名前とバージョンで識別されます。同じ名前とバージョンを持つ2つのコンテンツ・パック定義は、システム内に存在できません。異なる名前またはバージョンを指定することで、定義を複製できます。新規または複製したコンテンツ・パック定義には、「カスタム定義」というラベルが付けられます。

特定の名前を持つ1つのコンテンツ・パック定義のみを事前に定義できます。同じ名前のコンテンツ・パック定義に基づいて定義済みのコンテンツを持つコンテンツ・パックをインポートしても、既存の定義は置き換えられません。

HP の定義済みのコンテンツを持つコンテンツ・パックは、BSM 製品のインストール時にインポートされます。定義済みアイテムは変更でき、**定義済み(カスタマイズ済み)**としてマークされます。カスタマイズしたアイテムを元の「定義済み」状態に戻すこともできますが、削除はできません。

コンテンツ・パックのエクスポートとインポート

コンテンツ・パックの定義および含まれているコンテンツをエクスポートできます。これには、次の2つのモードがあります。

• 通常モード

エクスポートしたコンテンツ・パックのコンテンツには、「カスタム」というラベルが付けられます。

• コンテンツ・パック開発モード

コンテンツ・パックをエクスポートした場合、エクスポートの基として使用したコンテンツ・パック定義が定義済みまたはカスタムに関係なく、コンテンツを定義済みまたはカスタムとして定義できます。

コンテンツ・パック開発モードは、[オペレーション管理 - コンテンツ マネージャ]の[インフラストラクチャ設定]で有効化されます。

注意: 担当外の定義済みのコンテンツ・パックに新しいバージョンを作成することはお勧めしません。今後のアップグレード・エラーの原因となる可能性があります。

コンテンツ・パックをインポートする場合、コンテンツ・パックのエクスポート方法に応じてコンテンツが定義済みまたはカスタムになります。

コンテンツ・パック・マネージャのインターフェース

コンテンツ・パック・マネージャには次のインターフェースがあります。

- **BSM コンテンツ・パックのユーザ・インタフェース**

BSM コンテンツ・パック・マネージャは、次のメニュー・オプションから起動できます。

[管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック]

[管理] > [オペレーション管理] > [セットアップ] > [コンテンツ パック]

コンテンツ・パックの操作には、次の 2 つのモードがあります。

- **通常** - カスタム・コンテンツ・パックのみが変更およびエクスポートできます。
- **コンテンツ・パック開発** - コンテンツ・パック定義のエクスポート時に、定義済みまたはカスタムのどちらであるかを指定できます。カスタム・コンテンツ・パック定義は変更できます。定義済みのコンテンツ・パック定義は変更できず、必要に応じて、更新済みバージョンと置き換える必要があります。

注意: 担当外の定義済みのコンテンツ・パックに新しいバージョンを作成することはお勧めしません。今後のアップグレード・エラーの原因となる可能性があります。

コンテンツ・パック開発モードは、次の場所の[インフラストラクチャ設定]で有効にすることができます。

[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] > [アプリケーション]。リストを使用して管理コンテキストを[オペレーション管理]に設定し、[オペレーション管理 - コンテンツ マネージャ設定]の下にある[コンテンツ パック開発を有効化]エントリを true に設定します。

詳細については、183 ページ「コンテンツ・パック・マネージャのユーザ・インタフェース」を参照してください。

- **ContentManager コマンドライン・インタフェース (CLI)**

コンテンツ・パック・マネージャの機能には、**ContentManager** コマンドライン・インタフェースを使用してもアクセスできます。**ContentManager** コマンドライン・インタフェースにはシェルで直接アクセスしたり、スクリプトなどでリモートからアクセスできます。

詳細については、193 ページ「コンテンツ・パック・マネージャのコマンドライン・インタフェース」を参照してください。

注: コンテンツ・パック定義の作成には、**ContentManager** コマンドライン・インタフェースは使用できません。

- **ContentAutoUpload コマンドライン・インタフェース (CLI)**

BSM のインストール時には、データ処理サーバ上のコンテンツ・パックの標準の場所から、定義済みのすべてのコンテンツ・パック定義ファイルが自動的にアップロードされます。

< BSM のルート・ディレクトリ > /conf/opr/content/ < ロケール >

ContentAutoUpload を使用して、次の操作を実行できます。

- 標準設定のコンテンツ・パックのアップロードの再トリガ
- コンテンツ・パックのアップロード元となる異なるフォルダの指定

詳細については、196ページ「コンテンツ・パックを自動的にアップロードするコマンドライン・インタフェース」を参照してください。

コンテンツ・パックの定義

コンテンツ・パック定義には、コンテンツ・パックに含まれるデータとデータ間の関係のリストがあります。コンテンツ・パックは、別の BSM インストールにエクスポートできます。

注: コンテンツ・パック定義には、CI タイプ自体は含まれません。CI タイプを交換するには、Runtime Service Model (RTSM) の機能を使用します。

[**コンテンツ パック定義**] 表示枠では、コンテンツ・パック定義を表示および管理できます。たとえば、次のアクションを実行できます。

- コンテンツ・パック定義の作成、変更、保存
- コンテンツ・パック定義の削除
- 既存の定義と参照するデータのエクスポートまたはインポート

コンテンツ・パックの作成プロセスは、2つの手順で構成されています。まず、コンテンツ・マネージャでコンテンツ・パック定義を作成します。次に、この定義を使用して、選択したコンテンツをコンテンツ・パック・ファイルにエクスポートします。

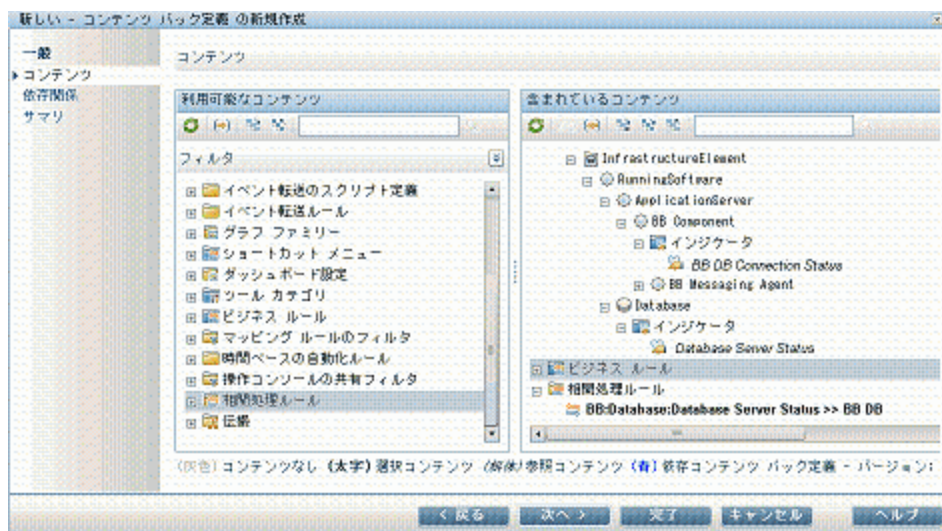
コンテンツ・パックの依存関係

BSM のいくつかのコンテンツは、ほかのコンテンツとの関係や依存関係がある階層の一部である場合があります。コンテンツ・パックに含めるコンテンツを選択する場合、同じコンテンツ・パックの一部としてその依存コンテンツも含める必要があります。または、アップロードされる別のコンテンツ・パックからその依存コンテンツを参照する必要があります。たとえば、KPI の割り当てを含める場合、この KPI の割り当てに必要なインジケータ、KPI、メニュー、ルールも含める必要があります。

自動的に含まれる依存コンテンツ

依存コンテンツのあるコンテンツを選択する場合、依存コンテンツが別のコンテンツ・パックの一部でないと、依存コンテンツは依存コンテンツを必要とするコンテンツとともに自動的にコンテンツ・パック定義に含まれます。

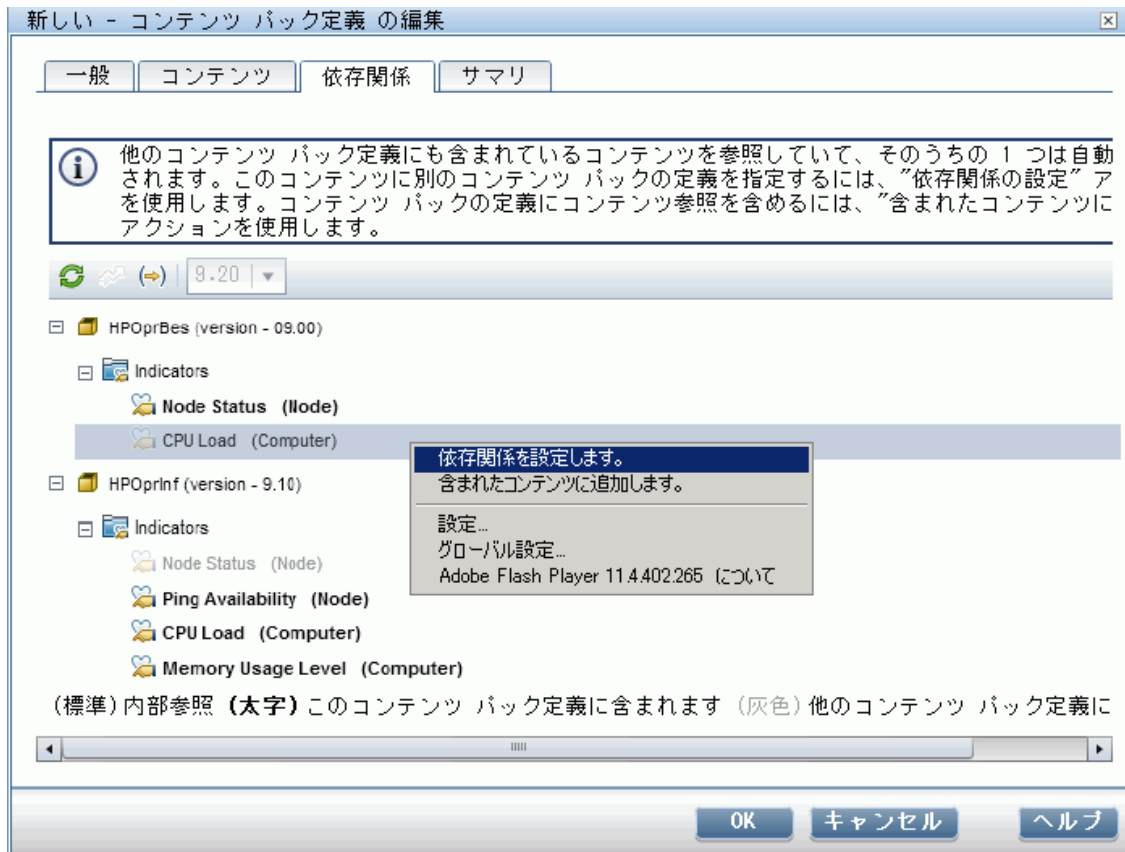
たとえば、相関処理ルール[**BB DB 接続ステータス**]では、BB コンポーネント・インジケータ[**BB DB 接続ステータス**]とデータベース・インジケータ[**データベース サーバステータス**]の2つのインジケータが必要です。相関処理ルール[**BB DB 接続ステータス**]をコンテンツ・パック定義に含める場合、インジケータ[**BB DB 接続ステータス**]および[**データベース サーバステータス**]がほかのコンテンツ・パックに含まれていないと、これらはこのコンテンツ・パック定義に自動的に含まれます。



依存関係の設定

依存コンテンツが複数のコンテンツ・パックに含まれている場合、参照するコンテンツ・パックを選択できません。これは、依存関係の設定と呼ばれます。

たとえば、コンテンツ・パック A とコンテンツ・パック B の両方にインジケータ[**CPU 負荷**]が含まれている場合、コンテンツ・パック C に含める相関処理ルール[**Database Affects WebApp**]([**CPU 負荷**]に依存)を選択すると、コンテンツ・パック A またはコンテンツ・パック B の[**CPU 負荷**]を参照するようにコンテンツ・パック C の依存関係を設定できます。



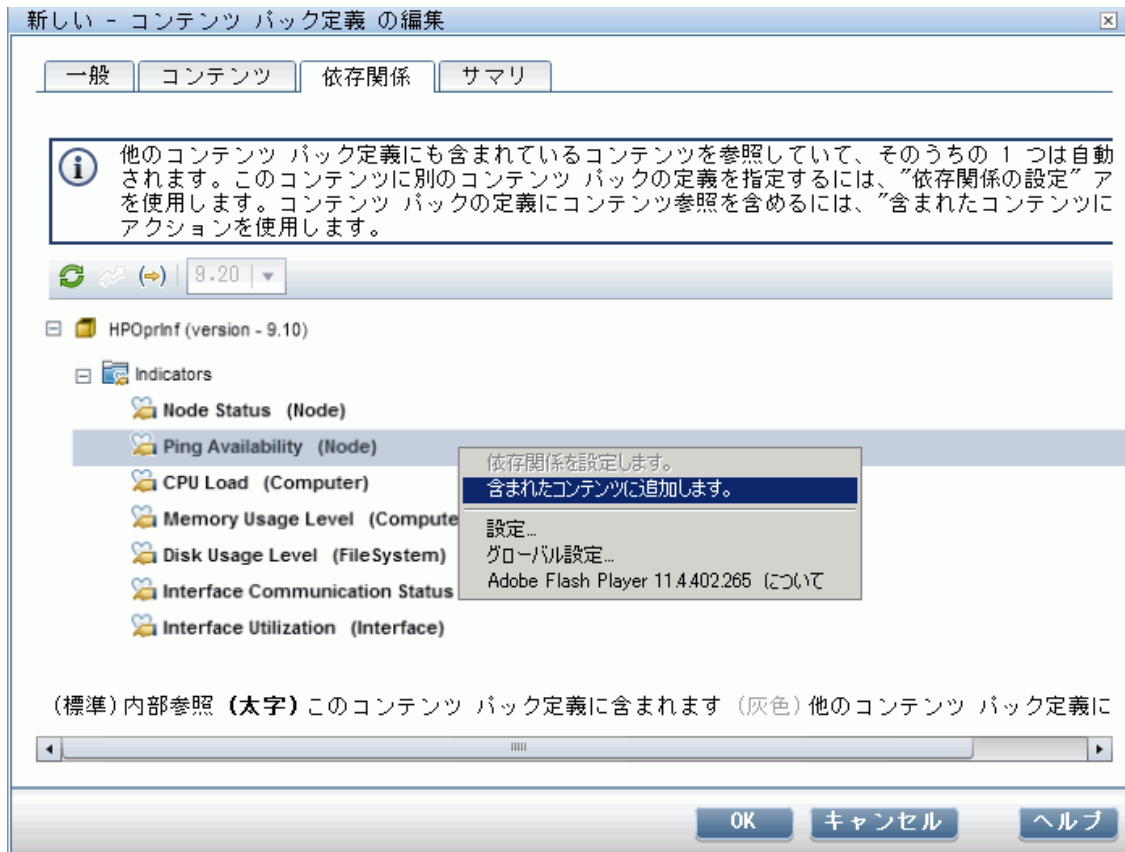
別のコンテンツ・パックに含まれている依存コンテンツの参照

依存コンテンツがすでに別のコンテンツ・パックに含まれている場合、標準設定では、新しいコンテンツ・パックと別のコンテンツ・パックの両方に依存コンテンツが含まれることはなく、新しいコンテンツ・パックで別のコンテンツ・パックに含まれている依存コンテンツが参照されます。ただし、[依存関係] ページを使用して新しいコンテンツ・パックに含まれるコンテンツに追加することもできます。

たとえば、コンテンツ・パック定義 A にインジケータ[**Ping Availability**]が含まれている場合、コンテンツ・パック B に含める相関処理ルール[**Database Affects WebApp**]([**Ping Availability**] に依存) を選択すると、コンテンツ・パック B はコンテンツ・パック A に含まれている[**Ping Availability**]を参照します。

コンテンツ・パック B の[依存関係] ページでは、コンテンツ・パック A の下に[**Ping Availability**]が太字でリストされています。依存関係は自動的に設定されます。[**Ping Availability**]をコンテンツ・パック B に含めるには(この結果、両方のコンテンツ・パックに含まれる)、これを選択して[**含まれたコンテンツに追加します**]をクリックします。

注: 複数のコンテンツ・パックにコンテンツを含めることはお勧めしません。コンテンツ・パック間で依存関係を設定することをお勧めします。



参照コンテンツ・パックの削除

依存コンテンツが含まれている参照コンテンツ・パックを削除すると、これに依存するコンテンツ・パック定義に依存コンテンツが自動的に追加されます。

たとえば、コンテンツ・パック B に相関処理ルール[**Database Affects WebApp**]が含まれていて、コンテンツ・パック A の依存インジケータ[**Extend TS**]を参照している場合、コンテンツ・パック A を削除すると、コンテンツ・パック B に[**Extend TS**]が自動的に含まれます。

注: 依存コンテンツが含まれている参照コンテンツ・パックを削除する場合、ポップアップ・メッセージで警告されます。

依存関係が設定されている参照コンテンツ・パックの削除

依存関係が設定されている参照コンテンツ・パックを削除すると、これに依存するコンテンツ・パック定義に依存コンテンツが自動的に追加されます。別のコンテンツ・パックへの依存関係を手動で設定できますが、自動的には設定されません。

たとえば、コンテンツ・パック A とコンテンツ・パック B の両方にインジケータ[**Extend TS**]が含まれており、コンテンツ・パック C には相関処理ルール[**Database Affects WebApp**]([**Extend TS**]に依存)が含まれていて、コンテンツ・パック A の[**Extend TS**]を参照するように設定されている依存関係がある場合、コンテンツ・パック A を削除すると、コンテンツ・パック C に[**Extend TS**]が自動的に含まれます。コンテンツ・パック B の[**Extend TS**]に依存関係を設定できますが、自動的には設定されません。

コンテンツ・パックのエクスポート

コンテンツ・パック・マネージャを使用して、設定データをファイルにエクスポートできます。コンテンツ・パックには、設定データへの参照および参照データが含まれています。

コンテンツ・パックの設定データは、コンテンツ・パックのエクスポート元であるシステムで使用される Runtime Service Model (RTSM) に保存された構成アイテムを参照します。コンテンツ・パックのインポート先となるシステムで使用される RTSM にこれらの構成アイテムが表示されない場合、コンテンツ・パックの設定データは機能しません。

ヒント: RTSM の機能を使用して、構成アイテムをエクスポートおよびインポートします。

コンテンツ・パックのエクスポートの詳細については、176 ページ「[コンテンツ・パックの作成方法と管理方法](#)」を参照してください。

コンテンツ・パックのインポート

コンテンツ・パックをインポートする場合、通常は既存のデータを上書きして新しいデータを追加します。定義済みのコンテンツ・パックをインポートする場合、定義済みのコンテンツのみが新しいデータで上書きされます。カスタマイズされたコンテンツは変更されません。カスタム・コンテンツ・パックをインポートすると、既存のデータが常に上書きされます。

リストされているデータを実際にインポートせずにインポート操作をテストする場合、[テスト]機能を使用できます。[テスト]機能は、インポートされるコンテンツ・パック定義に含まれる未解決の依存関係(未知のCIタイプへの依存関係など)をリストする便利な方法です。



このタスクの詳細については、176ページ「コンテンツ・パックの作成方法と管理方法」を参照してください。インポート操作で利用できるユーザ・インターフェースおよびオプションの詳細については、192ページ「[コンテンツ・パックのインポート]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

コンテンツ・パックの作成方法と管理方法

次の手順は、コンテンツ・パックを作成、エクスポート、インポートする方法を示します。

コンテンツ・パック定義の作成および編集

コンテンツ・パック定義を作成、編集するには、次の手順を実行します。

- [管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック] を選択してコンテンツ・パック・マネージャを開きます。
 - 新しいコンテンツ・パック定義を作成するには、 ボタンをクリックします。[コンテンツ パック定義の新規作成] ウィザードが開きます。
 - 既存のコンテンツ・パック定義を編集するには、その定義を選択して  をクリックします。[コンテンツ パック定義の編集] ダイアログ・ボックスが開きます。
- ウィザードの[一般] ページ、またはダイアログ・ボックスの[一般] タブで、[表示名]、[名前]、[バージョン] は必須フィールドです。
 - [名前] と [バージョン] の組み合わせは一意である必要があります。
 - [名前] フィールドは、最大 255 文字に制限されています。最初の文字は、文字 (A-Z, a-z) またはアンダースコア (_)。他のすべての文字には、文字、数字、またはアンダースコアを使用できません。先頭または末尾のスペースは使用できません。コンテンツ・パックのエクスポート時にはこれがファイルの標準設定のファイル名となり、**OMi Content Pack -** というプレフィックスが付けられます。
 - [表示名] は [コンテンツ パック定義] リストに表示される名前です。一意である必要はありません。最大長は 255 文字に制限されています。
 - [バージョン] は、フリー・テキスト・フィールドです。[バージョン] を [表示名] と組み合わせて、コンテンツ・パックのリビジョンを管理します。
- ウィザードのページに従って続行するか、ダイアログ・ボックスのタブを編集してコンテンツを選択し、依存関係を設定して、コンテンツ・パック定義のサマリを表示して問題があるかどうかを確認します。

ユーザ・インタフェースとすべての利用可能なオプションの詳細については、185 ページ「[コンテンツ パック定義の新規作成] ウィザード」を参照してください。

定義済みのコンテンツ・パック定義の新しいバージョンの作成

定義済みのコンテンツ・パック定義の新しいバージョンを作成するには、次の手順を実行します。

- [コンテンツ パック展開を有効化] 設定が有効になっていることを確認します。

注意: 担当外の定義済みのコンテンツ・パックに新しいバージョンを作成することはお勧めしません。今後のアップグレード・エラーの原因となる可能性があります。

- [プラットフォーム管理] の [インフラストラクチャ設定] を開きます。
[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定]
- [アプリケーション] を選択し、リストを使用し管理コンテキストを [オペレーション管理] に設定


します。

- c. [コンテンツ マネージャ] 表示 枠で[コンテンツ パック展開を有効化]設定を有効にします。
2. [管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック]を選択してコンテンツ・パック・マネージャを開き、新しいバージョンを作成する定義済みのコンテンツ・パック定義を選択します。
3. ボタンを選択して、[コンテンツ パック定義の新規バージョンの作成]ダイアログ・ボックスを開きます。
4. コンテンツ・パックのバージョン番号を変更し、[OK]をクリックします。
このコンテンツ・パックの新しいバージョンが、カスタム・コンテンツ・パックとして保存されます。
5. コンテンツ・パック定義の新しいバージョンを開き、必要な変更を加えて変更内容を保存します。

ユーザ・インタフェースとすべての利用可能なオプションの詳細については、185ページ「[コンテンツ パック定義の新規作成]ウィザード」を参照してください。

コンテンツ・パックのエクスポート

コンテンツ・パックをエクスポートするには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック]を選択してコンテンツ・パック・マネージャを開きます。
2. [コンテンツ パック定義] 表示 枠で、エクスポートするコンテンツ・パックを選択します。
3. 選択したコンテンツ・パックをファイルにエクスポートするには、 ボタンを選択し、コンテンツ・パックを保存する場所を選択して[保存]を選択します。

ヒント: 標準設定では、BSM はコンテンツ・パック・マネージャを実行しているシステム上のファイル・システムにコンテンツ・パックを保存します。ファイルを別の場所に保存する場合、その場所へのアクセス権があることを確認してください。標準のファイル・タイプは .ZIP です。


事前定義コンテンツ・パックのエクスポート

事前定義コンテンツ・パックをエクスポートするには、次の手順を実行します。

1. [コンテンツ パック展開を有効化]設定が有効になっていることを確認します。

注意: 担当外の定義済みのコンテンツ・パックに新しいバージョンを作成することはお勧めしません。今後のアップグレード・エラーの原因となる可能性があります。

- a. [プラットフォーム管理]の[インフラストラクチャ設定]を開きます。
[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定]
- b. [アプリケーション]を選択し、リストを使用し管理コンテキストを[オペレーション管理]に設定します。
- c. [コンテンツ マネージャ] 表示 枠で[コンテンツ パック展開を有効化]設定を有効にします。
2. [管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック]を選択してコンテンツ・パック・マネージャを開きます。
[コンテンツ パック定義] 表示 枠で、エクスポートするコンテンツ・パックを選択します。

3. 選択したコンテンツ・パックをファイルにエクスポートするには、[コンテンツ パック定義およびコンテンツ(事前定義済み)をエクスポートする]を選択し、 ボタンを選択し、コンテンツ・パックを保存する場所を指定して[保存]を選択します。


ヒント: 標準設定では、BSM はコンテンツ・パック・マネージャを実行しているシステム上のファイル・システムにコンテンツ・パックを保存します。ファイルを別の場所に保存する場合、その場所へのアクセス権があることを確認してください。標準のファイル・タイプは .ZIP です。

コンテンツ・パックのインポート

コンテンツ・パックをインポートするには、次の手順を実行します。

注: SaaS インストールの場合、定義済みのコンテンツ・パックをインポートできるのは、SaaS 管理者(スーパーユーザ)のみです。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック]を選択してコンテンツ・パック・マネージャを開きます。

[コンテンツ パック定義]表示枠で、 ボタンを選択して[コンテンツ パックのインポート]ダイアログ・ボックスを開きます。

2. [コンテンツ パックのインポート]ダイアログ・ボックスで、[参照 (...)]ボタンを使用してインポートするコンテンツ・パックの場所を指定します。コンテンツ・パックは通常 ZIP 形式です。ただし、XML 形式のコンテンツ・パックもインポートできます。

標準設定のコンテンツ・パックの場所は次のとおりです。

< HPBSM ルート・ディレクトリ > \conf\opn\content\ < ロケール >

分散デプロイメントでは、このディレクトリはデータ処理サーバ上にあります。

注: 標準設定では、BSM はブラウザ・セッションを開始したシステム上のファイル・システムにあるコンテンツ・パックを検索します。ブラウザがリモート・システムで実行されている場合、BSM ホストのファイル・システムに移動する必要があります。

3. オプション:[テスト]を選択してインポートをテスト・モードで実行できます。テスト・モードでは変更は実行されないため、実際のインポートを実行する前に問題を確認できます。

注: 通常、同じ ID の既存の項目は上書きされます。

定義済みのコンテンツ・パックをインポートする場合、定義済みのコンテンツのみが新しいデータで上書きされます。カスタマイズされたコンテンツは変更されません。カスタム・コンテンツ・パックをインポートすると、既存のデータが常に上書きされます。

インポートされる定義内の未解決の参照(未知の CI タイプなど)は許可されません。

4. [インポート]を選択してインポートまたはテストを開始します。

注: すでにインポートが実行中の場合、別のインポートは開始できません。

[コンテンツパックのインポート]ダイアログ・ボックスの詳細については、192ページ「[コンテンツパックのインポート]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

コンテンツ・パックを公開するためのチェックリスト

新しく開発したコンテンツ・パックを公開する前に、利用可能なすべてのコンテンツ・パック(少なくともすべてのOOTBコンテンツ・パック)と自分のコンテンツ・パックをインポートするシステムで次のチェックを行う必要があります。

これらのチェックは、コンテンツ・アイテムの所有権を明確にするのに役立ち、アップグレード・シナリオおよび新規コンテンツ・パックの開発に役立ちます。

コンテンツ・マネージャで検出される問題

コンテンツ・マネージャでコンテンツ・パック定義を選択し、[詳細]表示枠の下部に[問題の有無]パネルが表示されるかどうかを確認します。

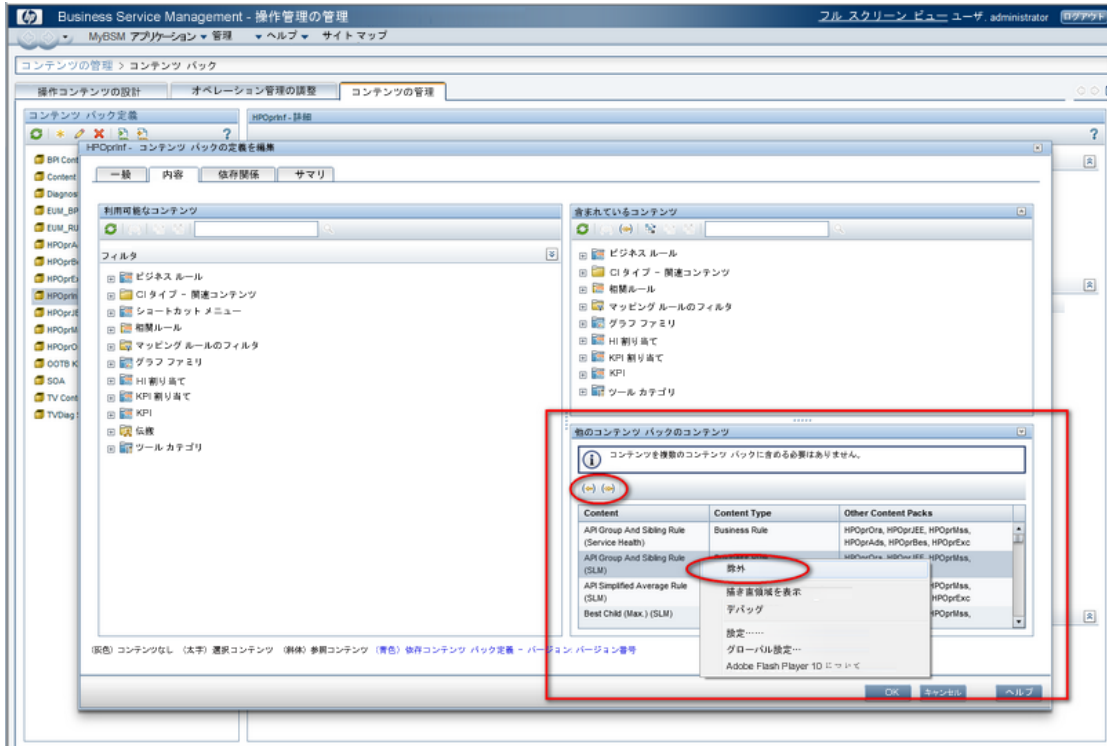
このセクションには通常、自分のコンテンツ・パック定義と利用可能なコンテンツの間の矛盾が報告されます。コンテンツ・パックをエクスポートする前に、報告された問題を解決する必要があります。たとえば、コンテンツ・パック定義で参照するコンテンツまたは依存コンテンツが、システムに存在しないとします。参照コンテンツまたは依存関係をコンテンツ・パック定義から削除するか、参照コンテンツの依存関係が「インストール」されていることを確認します。

The screenshot shows the BlackBerry Enterprise Server management console. The left pane displays a tree view of content packs, with 'BlackBerry Enterprise' expanded to show various packs like 'BPI - Content pack', 'Content pack OMI', etc. The right pane shows the details for 'BlackBerry Enterprise Server - 詳細'. Under the '問題の有無' (Issues) section, a warning icon is present with the following text: 'このコンテンツ パック定義はコンテンツ パック定義 KPI prédéfinis のバージョン 01.10 への依存性がありますが、コンテンツ パック定義 KPI prédéfinis のインストール済みのバージョンは 9.20 です。' (This content pack definition has a dependency on the version 01.10 of the content pack definition KPI prédéfinis, but the installed version of the content pack definition KPI prédéfinis is 9.20.)

他のコンテンツ・パックのコンテンツのチェック

コンテンツ・マネージャでコンテンツ・パック定義を編集用に開き、[コンテンツ]タブを選択します。[他のコンテンツ パックのコンテンツ]というタイトルのセクション([含まれているコンテンツ]表示枠の下部)が表示されているかどうかを確認します。

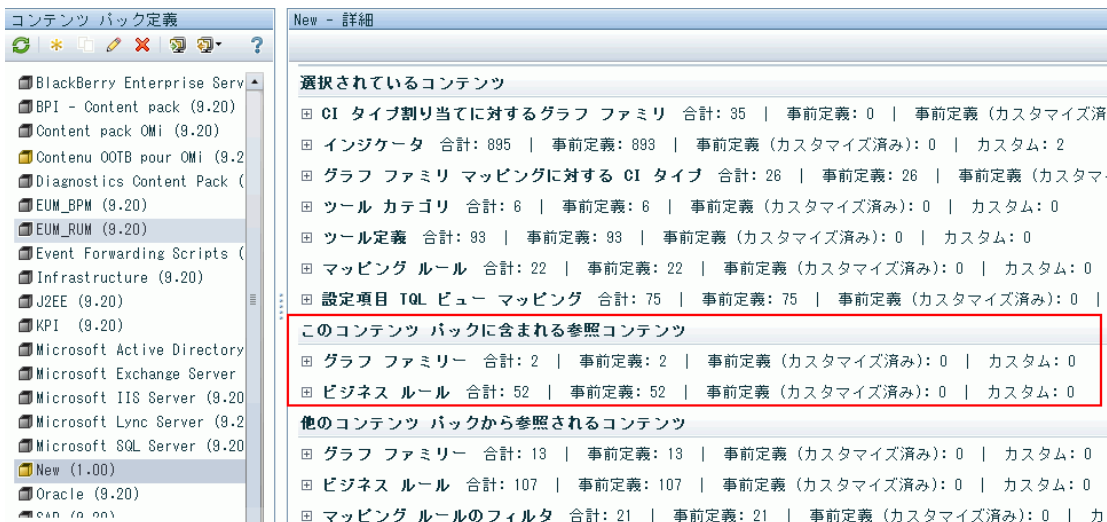
[他のコンテンツ パックのコンテンツ]セクションで、各コンテンツ・アイテムを調べ、コンテンツ・アイテムの所有者であるかどうかを検査します。所有者でない場合は、コンテンツ・アイテムをコンテンツ・パック定義から除外し、所有するコンテンツ・パックに依存関係を設定します。あるいは、他のコンテンツ・パックの所有者に連絡し、コンテンツ・アイテムをその所有者のコンテンツ・パック定義から除外するよう依頼します。



このコンテンツ・パックに含まれる参照コンテンツのチェック

コンテンツ・マネージャでコンテンツ・パック定義を選択し、[詳細]表示枠に[このコンテンツ・パックに含まれる参照コンテンツ]パネルが表示されるかどうかを確認します。

自分のコンテンツ・パック内に参照コンテンツを置くと、コンテンツの所有権が明確でなくなるためお勧めしません。所有者である場合は、参照コンテンツをコンテンツ・パック定義に含めます。あるいは、参照コンテンツを所有するコンテンツ・パック定義に依存関係を設定します。

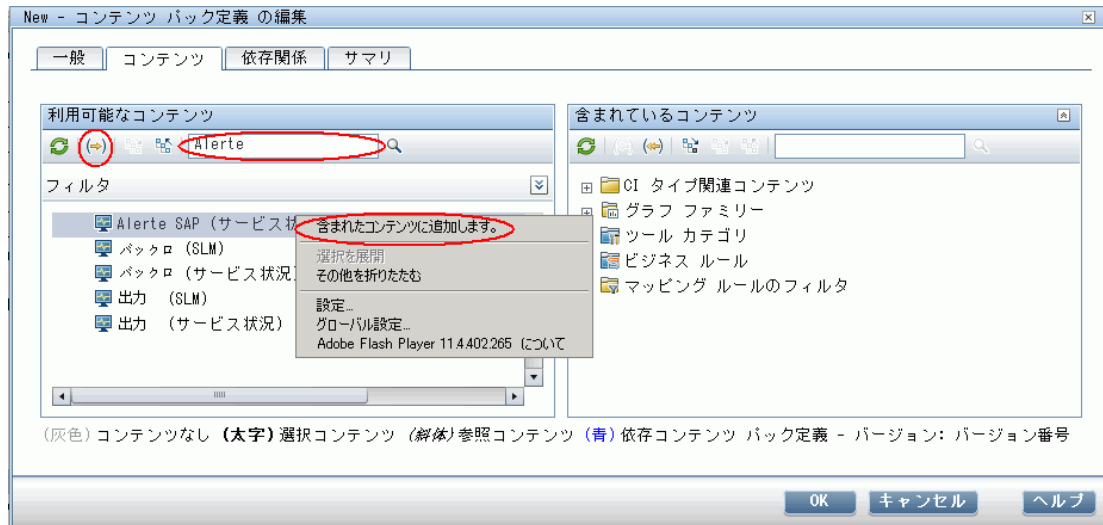


コンテンツ・パック定義に参照コンテンツを含める

コンテンツ・マネージャでコンテンツ・パック定義を編集用に開き、[コンテンツ]タブを選択します。

参照コンテンツを検索し、それをコンテンツ・パック定義に含めます。

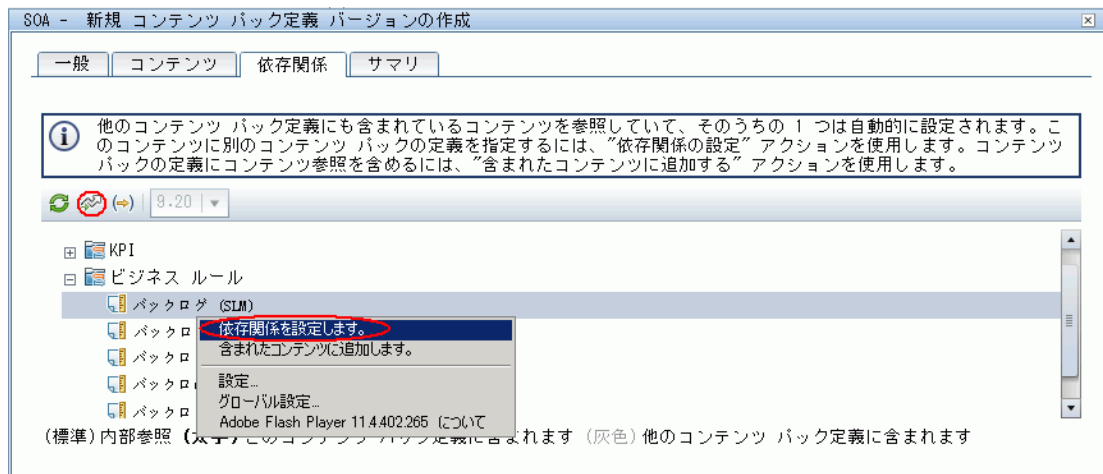
上記の手順が完了済みであることを確認します。



依存関係の設定

コンテンツ・マネージャでコンテンツ・パック定義を編集用を開き, [依存関係] タブを選択します。

通常のフォントで表示されるすべてのコンテンツ・アイテムを検査します。参照コンテンツ・アイテムの所有者であるコンテンツ・パックを選択し, それに依存関係を設定します。[依存関係] タブに通常のフォントで表示されるコンテンツ・アイテムがなくなるようにすることが目的です。



コンテンツ・パック・マネージャのユーザ・インタフェース

[コンテンツ パック] ページ



この領域では、コンテンツ・パック定義を管理できます。コンテンツ・パック定義は、コンテンツ・パックに含まれている項目を説明します。コンテンツ・パックは、BSM で監視している IT 環境内のリソース管理に役立てるために定義した設定データおよび他の項目のスナップショットです。コンテンツ・パック・マネージャには、既知のすべてのコンテンツ・パック定義のリストが表示されます。





アクセス方法	次のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> • [管理] > [プラットフォーム] > [コンテンツ パック] • [管理] > [オペレーション管理] > [セットアップ] > [コンテンツ パック]
重要な情報	BSM には、ボタンまたはメニュー項目を使用したアクションの実行方法がいくつかあります。[コンテンツ パック定義] 表示枠のボタンは、ショートカット・メニューで使用できるオプションと重複しています。
関連タスク	176ページ「コンテンツ・パックの作成方法と管理方法」
関連情報	165ページ「コンテンツ・パック」

[定義] 表示枠

[コンテンツ パック定義] 表示枠には、お使いの環境で使用できるすべてのコンテンツ・パック定義のリストが表示されます。

次の表に、UI 要素を示します。

UI 要素	説明
	更新 : 表示されたリストの内容を更新します。作業中に新しいコンテンツが利用可能になった場合や(コマンドライン・インタフェースなどを使用して)新しいコンテンツをアップロードした場合に使用します。
	新規項目 : [コンテンツ パック定義の新規作成] ウィザードを開きます。ウィザードの詳細については、185ページ「[コンテンツ パック定義の新規作成] ウィザード」を参照してください。

UI 要素	説明
	<p>選択したコンテンツ・パック定義の新しいバージョンの作成: 選択したコンテンツ・パック定義の新しいバージョンを作成できる[コンテンツ・パック定義の新規バージョンの作成]ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>または, [詳細]表示枠のセクションをダブルクリックすると, [コンテンツ・パック定義の新規バージョンの作成]ダイアログ・ボックスで適切なタブが開くか, [定義]表示枠で[コンテンツ・パック定義]が開きます(定義済みでないコンテンツ・パックの場合は無効)。</p> <p>詳細については, 176ページ「定義済みのコンテンツ・パック定義の新しいバージョンの作成」を参照してください。</p>
	<p>項目の編集: [コンテンツ・パック定義の編集]ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスでは, 選択したコンテンツ・パックの名前, バージョン, 説明, 含めるコンテンツ, 依存関係を編集できます。このダイアログ・ボックスは[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザードと同じ画面ですが, タブ形式で表示されます。</p> <p>または, [詳細]表示枠のセクションをダブルクリックすると, [コンテンツ・パック定義の編集]ダイアログ・ボックスで適切なタブが開くか, [定義]表示枠で[コンテンツ・パック定義]が開きます(定義済みのコンテンツ・パックの場合は無効)。</p> <p>詳細については, 185ページ「[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザード」を参照してください。</p>
	<p>項目の削除: 選択したコンテンツ・パック定義(インジケータやKPIなどの参照コンテンツではない)を, 表示された定義リストから削除します。</p>
	<p>コンテンツ・パックの定義とコンテンツをインポートします: [コンテンツ・パックのインポート]ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスでは, インポートする定義詳細を含むファイルを指定または参照できます。</p> <p>まず, 変更内容がコミットされないテスト・モードでインポートを実行できます。インポートされる定義内の未解決の参照(未知のCIタイプなど)は許可されません。詳細については, 192ページ「[コンテンツ・パックのインポート]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>コンテンツ・パックの定義とコンテンツをエクスポートします: [ダウンロード先を選択します]ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスでは, 定義詳細をエクスポートするファイルの場所を指定または参照できます。</p> <p>コンテンツ・パック定義およびコンテンツ(事前定義済み)をエクスポートする: [ダウンロード先を選択します]ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスでは, 定義詳細を定義済みのコンテンツ・パックとしてエクスポートするファイルの場所を指定または参照できます。</p>

[詳細]表示枠


[詳細]表示枠には、選択したコンテンツ・パック定義のプロパティに関する概要、コンテンツ・パック定義に含まれるコンテンツの簡単なサマリ、および問題の有無が表示されます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
一般	選択したコンテンツ・パック定義の名前、表示名、バージョン、依存コンテンツ・パック、説明、およびその発生元(定義済みであるかどうか)を表示します。
サマリ	<p>選択したコンテンツ・パック定義に含まれるコンテンツのサマリを次のサブセクションに分類して表示します。各サブセクションには、リストの項目ごとにコンテンツのリストが含まれ、次の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 合計アイテム数 定義済みのアイテム数 定義済み(カスタマイズ済み)のアイテム数 カスタム・アイテム数 <p>コンテンツ・グループを展開すると、そのグループに含まれるアイテム、アイテムのCIタイプ、アイテムの発生元(定義済み、定義済み(カスタマイズ済み)、カスタム)が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 選択されているコンテンツ: 選択したコンテンツ・パック定義に含めるために選択したコンテンツのリストを、コンテンツ・タイプ別にグループ化して表示します。 このコンテンツ・パックに含まれる参照コンテンツ: このコンテンツ・パック定義に含まれる参照コンテンツのリストを、コンテンツ・タイプ別にグループ化して表示します。 他のコンテンツ・パックから参照されるコンテンツ: 他のコンテンツ・パックから参照される依存コンテンツのリストを、コンテンツ・タイプ別にグループ化して表示します。
問題の有無	選択したコンテンツ・パック定義で検出された未解決の依存関係(選択したコンテンツ・パック定義に含まれていてもBSMに存在しないコンテンツ)などの問題に関する情報を表示します。

[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザード


このウィザードでは、新しいコンテンツ・パック定義の作成、名前、バージョン、説明の指定、含めるコンテンツの選択、依存関係の設定、問題の診断を行うことができます。

アクセス方法	<p>次のいずれかを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> [管理]>[プラットフォーム]>[コンテンツ・パック] [管理]>[オペレーション管理]>[コンテンツの管理]>[コンテンツ・パック] <p>次に  をクリックします。</p>
--------	--

関連タスク	176ページ「コンテンツ・パックの作成方法と管理方法」
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 186ページ「[一般]ページ」 > 187ページ「[コンテンツ]ページ」 > 190ページ「[依存関係]ページ」 > 191ページ「[サマリ]ページ」
関連情報	165ページ「コンテンツ・パック」

[一般]ページ

このウィザード・ページでは、新しいコンテンツ・パッケージの表示名、名前、バージョン、説明を定義できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、185ページ「[コンテンツパック定義の新規作成]ウィザード」を参照してください。 このウィザード・ページは、をクリックすると開く[コンテンツパック定義の編集]ダイアログの[一般]タブとして表示されます。
ウィザード・マップ	185ページ「[コンテンツパック定義の新規作成]ウィザード」には、次のページが含まれています。 [一般]ページ > 187ページ「[コンテンツ]ページ」 > 190ページ「[依存関係]ページ」 > 191ページ「[サマリ]ページ」
関連情報	165ページ「コンテンツ・パック」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ID	アクションは必要ありません。コンテンツ・パックを最初に作成した時点で、コンテンツ・パックIDが自動的に割り当てられます。 注: [ID]フィールドは、[コンテンツパック定義の編集]ダイアログの[一般]タブにのみ表示され、 コンテンツパック定義の新規作成 ウィザードの[一般]ページには表示されません。
表示名	コンテンツ・パック定義リストに表示される名前。この名前は一意である必要はありません。最大長は255文字に制限されています。
















UI 要素	説明
名前	<p>コンテンツ・パック定義の名前であり、最大長は255文字に制限されています。最初の文字は、文字(A-Z, a-z)またはアンダースコア(_)。他のすべての文字には、文字、数字、またはアンダースコアを使用できます。先頭または末尾のスペースは使用できません。</p> <p>注: 名前とバージョンの組み合わせは一意である必要があります。</p> <p>コンテンツ・パックのエクスポート時にはこれがファイルの標準設定のファイル名となり、OMi Content Pack -というプレフィックスが付けられます。</p>
バージョン	<p>フリー・テキストの必須フィールドです。コンテンツ・パックのバージョン管理に使用します。最大長は255文字に制限されています。</p>
説明	<p>[コンテンツ・パック定義]表示枠で追加または選択するコンテンツ・パック定義の簡単な説明(1024文字以下)。[説明]ボックスを使用して、コンテンツ・パックの範囲と内容を他のユーザに示します。</p>
定義済み	<p>定義済みのコンテンツは通常 HP または HP パートナから提供され、BSM インストールの初期設定を提供します。定義済みのコンテンツ・パックをインストールした後、環境および管理のニーズに合わせて、これらの初期アイテムを変更できます。変更された定義済みアイテムには、定義済み(カスタマイズ済み)というラベルが付けられます。定義済みアイテムは削除できませんが、カスタマイズしたアイテムを元の「定義済み」状態に戻すことはできます。</p> <p>注: [詳細]表示枠にのみ表示されます。</p>

[コンテンツ] ページ

このウィザード・ページでは、新しいコンテンツ・パック定義に含めるコンテンツを選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、185ページ「[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザード」を参照してください。 このウィザード・ページは、をクリックすると開く[コンテンツ・パック定義の編集]ダイアログの[コンテンツ]タブとして表示されます。
ウィザード・マップ	<p>185ページ「[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>186ページ「[一般]ページ」 > [コンテンツ]ページ > 190ページ「[依存関係]ページ」 > 191ページ「[サマリ]ページ」</p>
関連情報	<p>165ページ「コンテンツ・パック」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	更新 : 表示されたリストのコンテンツを更新します。作業中に新しいコンテンツが利用可能になった場合や(コマンドライン・インタフェースなどを使用して)新しいコンテンツをアップロードした場合に使用します。
	含まれたコンテンツに追加します : 含めるコンテンツのリストに、選択した項目を追加します。 含めるコンテンツがすでに別のコンテンツ・パックに含まれている場合は、[他のコンテンツ パックのコンテンツ] 表示枠に表示され、作成中のコンテンツ・パックから安全に除外できます。コンテンツを複数のコンテンツ・パックに含める必要はありません。 ヒント : CI タイプを選択すると、CI タイプおよび子 CI タイプに割り当てられたすべてのコンテンツが自動的に選択されます。個々のインジケータまたは KPI などの特定のコンテンツを選択すると、そのコンテンツが関連する CI タイプへの参照が自動的に選択されます。
	選択を展開 : [利用可能なコンテンツ] または [含まれているコンテンツ] リストを展開し、選択したグループに属する項目を表示します。
	その他を折りたたむ : 選択した分岐以外の開いている分岐をすべて折りたたむ。
	展開 : [フィルタ] 表示枠を展開し、利用可能なフィルタを表示します。
	折りたたむ : [フィルタ] 表示枠を折りたたみます。
	選択したフォルダを展開します。
	選択したフォルダを折りたたみます。
	除外 : 含めるコンテンツのリストから、選択した項目を削除します。
	すべて除外 : 含まれているコンテンツのリストから、すべての項目を削除します。
	選択されたすべてのコンテンツ・パック項目を表示します : [含まれているコンテンツ] リストを展開し、コンテンツ・パックに含めるために選択したすべての項目を表示します。
	検索内容 : [検索] フィールドを使用して、[利用可能なコンテンツ] または [含まれているコンテンツ] 表示枠でコンテンツを検索します。検索ボックスに検索文字列を入力し、  をクリックします。指定した文字列と一致する最初のコンテンツが強調表示されます。そのコンテンツが最初に表示されていない場合は、ツリーが展開されて表示されます。指定した文字列と一致する次のコンテンツを検索するには、  を再度クリックします。 検索文字列は少なくとも3文字必要です。3文字目が入力されると検索が自動的に開始され、最初の一致が強調表示されます。この要件により、検索が頻繁に開始され、リソースがブロックされるのが防止されます。名前が3文字未満の場合は  ボタンをクリックすると検索が実行されます。

UI 要素	説明
利用可能なコンテンツ	<p>IT 環境で利用できるコンテンツを表す階層リスト。</p> <p>ヒント: コンテンツ・パック定義にコンテンツを含めるには, [利用可能なコンテンツ] 表示枠から[含まれているコンテンツ] 表示枠にコンテンツをドラッグするか, コンテンツを選択して[含まれたコンテンツに追加します]をクリックします。含める操作の実行時にコンテンツがすでに他のコンテンツ・パックに含まれている場合は, BSM から警告が表示されます。</p> <p>色分け:</p> <ul style="list-style-type: none"> • コンテンツのないフォルダ: 灰色 • 選択されたコンテンツ: 太字 • 参照されるコンテンツ: 斜体 • バージョン番号のある依存コンテンツ・パック定義: 青色
フィルタ: 割り当てられたコンテンツを持つ CI タイプだけを表示します	<p>CI タイプ・ツリーをフィルタして, コンテンツの割り当てがある CI タイプのみを表示します。</p>
含まれているコンテンツ	<p>コンテンツ・パックに含めるために選択したコンテンツのリスト(依存コンテンツも含む)。</p> <p>ヒント: 項目を除外するには, 項目(または項目グループ)を選択して, [除外] ボタンを選択します。</p> <p>色分け:</p> <ul style="list-style-type: none"> • コンテンツのないフォルダ: 灰色 • 選択したコンテンツ: 太字 • 参照されるコンテンツ: 斜体 • バージョン番号のある依存コンテンツ・パック定義: 青色
他のコンテンツパックのコンテンツ	<p>含めるために選択したコンテンツが他のコンテンツ・パックに含まれている場合は, ここに表示され, このコンテンツ・パックから削除できることを示します。同じコンテンツを複数のコンテンツ・パックに含める必要はなく, むしろ含めないことが推奨されます。</p>

ショートカット・メニュー

BSM には多くのショートカット・メニューが備えられています。ショートカット・メニューからは, 選択した要素に関する情報やそれらの要素に対して実行できるアクションに, 迅速かつ直接的にアクセスできます。


ショートカット・メニューは, ユーザ・インタフェースで要素を右クリックして表示します。ショートカット・メニューから使用できる情報とアクションは, 右クリックする要素および要素が存在するコンテキストによって異なります。

[コンテンツ] タブのショートカット・メニューには, 次の要素が含まれます。


UI 要素	説明
含まれたコンテンツに追加します	含めるコンテンツのリストに、選択した項目を追加します。
その他を折りたたむ	選択した分岐以外の開いている分岐をすべて折りたたむ。
選択されたすべてのコンテンツパック項目を表示します	[含まれているコンテンツ]リストを展開し、コンテンツ・パックに含めるために選択したすべての項目を表示します。
除外	含めるコンテンツのリストから、選択した項目を削除します。
すべて除外	含まれているコンテンツのリストから、すべての項目を削除します。
選択を展開	[利用可能なコンテンツ]または[含まれているコンテンツ]リストを展開し、選択したグループに属する項目を表示します。



[依存関係]ページ

このウィザード・ページでは、ほかの複数のコンテンツ・パックに含まれる依存コンテンツの依存関係を設定できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、185ページ「[コンテンツパック定義の新規作成]ウィザード」を参照してください。 このウィザード・ページは、 をクリックすると開く[コンテンツパック定義の編集]ダイアログ・ボックスの[依存関係]タブとして表示されます。
ウィザード・マップ	<p>185ページ「[コンテンツパック定義の新規作成]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>186ページ「[一般]ページ」 > 187ページ「[コンテンツ]ページ」 > [依存関係]ページ > 191ページ「[サマリ]ページ」</p>
関連情報	<p>165ページ「コンテンツ・パック」</p> <p>171ページ「コンテンツ・パックの依存関係」</p>


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	更新 : 表示される依存関係のリストの内容が更新されます。作業中に新しいコンテンツが利用可能になった場合や(コマンドライン・インタフェースなどを使用して)新しいコンテンツをアップロードした場合に使用します。

UI 要素	説明
	<p>依存関係を設定 : 他のコンテンツ・パック定義に参照コンテンツも含まれていると、このことを示すメッセージが表示され、そのうちの1つは自動的に設定されます。</p> <p>このコンテンツに別のコンテンツ・パック定義を指定するには、[依存関係を設定]アクションを使用します。コンテンツ・パック定義に参照コンテンツを含めるには、[含まれたコンテンツに追加します]アクションを使用します。</p> <p>参照されるコンテンツ・パックの依存コンテンツが太字で表示され、依存関係が設定されたことが示されます。</p>
	<p>含まれたコンテンツに追加します : 選択した依存コンテンツがこのコンテンツ・パックに含まれるコンテンツのリストに追加されます。</p>
<色分け >	<p>色分け:</p> <ul style="list-style-type: none"> 内部的に参照されるコンテンツ: 標準 現在選択されているコンテンツ・パック定義に含まれるコンテンツ: 太字 別のコンテンツ・パック定義に含まれるコンテンツ: 灰色
<バージョン・ドロップダウン・ボックス>	<p>参照コンテンツに指定できるコンテンツ・パックのバージョンが複数ある場合は、バージョン・ドロップダウン・ボックスがアクティブになり、選択されたコンテンツ・パックのバージョンが表示されます。代替バージョンを選択して、それに依存関係を設定できます。</p>

[サマリ] ページ

このウィザード・ページでは、新しいコンテンツ・パック定義で検出されたコンテンツ、依存関係、問題に関するサマリ情報を表示できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、185ページ「[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザード」を参照してください。 このウィザード・ページは、 をクリックすると開く[コンテンツ・パック定義の編集]ダイアログ・ボックスの[サマリ]タブとして表示されます。
ウィザード・マップ	<p>185ページ「[コンテンツ・パック定義の新規作成]ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>186ページ「[一般]ページ」 > 187ページ「[コンテンツ]ページ」 > 190ページ「[依存関係]ページ」 > [サマリ]ページ</p>
関連情報	165ページ「コンテンツ・パック」

次の表に、ユーザ・インタフェース要素を示します。

[サマリ]ページには、選択したコンテンツ・パック定義のコンテンツのサマリが表示されます。このページは、次のサブセクションに分かれています。各サブセクションには、リストの項目ごとにコンテンツのリストが含まれ、次の情報が表示されます。

- 合計アイテム数
- 定義済みのアイテム数
- 定義済み(カスタマイズ済み)のアイテム数
- カスタム・アイテム数

コンテンツ・グループを展開すると、そのグループ内に含まれるアイテム、アイテムのCIタイプ(該当する場合)、アイテムの発生元([定義済み]、[定義済み(カスタマイズ済み)]、[カスタム])が表示されず。


たとえば、インジケータやマッピング・ルールでは、CIタイプ(インジケータが割り当てられている構成アイテムのタイプ([アプリケーション]、[ホスト]、[Oracle System]など))も表示されます。

UI 要素	説明
選択されているコンテンツ	選択したコンテンツ・パック定義に含まれる選択コンテンツのリストがコンテンツ・タイプ別にグループ化されて表示されます。
このコンテンツ・パックに含まれる参照コンテンツ	選択したコンテンツ・パック定義に含まれる参照コンテンツのリストがコンテンツ・タイプ別にグループ化されて表示されます。
他のコンテンツ・パックから参照されるコンテンツ	ほかのコンテンツ・パックから参照される依存コンテンツ(各参照コンテンツ・パックの表示名やバージョンを含む)のリストが表示されます。
問題の有無	選択したコンテンツ・パック定義で検出された未解決の依存関係(選択したコンテンツ・パック定義に含まれていてもBSMに存在しないコンテンツ)などの問題に関する情報を表示します。

[コンテンツ・パックのインポート]ダイアログ・ボックス

[コンテンツ・パックのインポート]ダイアログ・ボックスでは、インポートするコンテンツ・パックを検索し、インポートの実行方法を指定できます。

注: コンテンツ・パックには、インポートする項目が含まれています。コンテンツ・パック定義には、コンテンツ・パックに含まれている項目が一覧表示されます。

アクセス方法	次のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> • [管理]>[プラットフォーム]>[コンテンツ・パック] • [管理]>[オペレーション管理]>[セットアップ]>[コンテンツ・パック] 次に  をクリックします。
関連タスク	176ページ「コンテンツ・パックの作成方法と管理方法」

[コンテンツ・パックのインポート]ダイアログ・ボックスには、次の表のUI要素が表示されます。

UI 要素	説明
コンテンツ パック ファイル	インポートするコンテンツ・パック・ファイルの場所を参照できます。
テスト	選択したコンテンツ・パック定義を使用してシミュレートされたインポート操作を実行しますが、BSM への変更はコミットされません。
インポート	指定したコンテンツ・データのインポートを開始し、[コンテンツパックのインポート] ダイアログ・ボックスを閉じます。

コンテンツ・パック・マネージャのコマンドライン・インタフェース

本項では、**ContentManager** コマンドライン・インタフェースで利用可能なオプションおよびパラメータについて説明します。

ContentManager コマンドライン・インタフェースは、ゲートウェイ・サーバおよびデータ処理サーバの次の場所にあります。

< BSM ルート・ディレクトリ > /bin

注: **ContentManager** CLI を実行するユーザには、次のファイルへの読み取りアクセスが必要です。

< BSM ルート・ディレクトリ > /conf/TopazInfra.ini

使用法

ContentManager < 操作 > [接続] < ユーザ資格情報 > [オプション]

操作 (次のいずれか):

インポート操作:

-import < インポートするファイル > [-test]

エクスポート操作:

-snapshot -output < エクスポートするファイル >

-export < 名前 > -output < エクスポートするファイル >

[-contentPackVersion < バージョン >] [-asPredefined]

その他の操作:

-list

-delete < 名前 > [-contentPackVersion < バージョン >]

-version

接続 (次のいずれか):

-url < URL >

-server <ゲートウェイ・サーバ> [-port <ポート>] [-ssl]

ユーザ資格情報 :

-username <ログイン名> [-password <パスワード>]

[-customer <カスタマ ID>]

オプション :

-verbose

ContentManager コマンドで使用できる引数の詳細を次の表に示します。

オプション	説明
-asPredefined	エクスポートしたコンテンツ・パックが定義済みとしてマークされます。
-cpv, -contentPackVersion <バージョン>	コンテンツ・パック定義のバージョン番号
-cu-customer <カスタマ ID>	SaaS 環境のカスタマ ID。 このパラメータが設定されない場合、標準設定値は 1 です。
-d, -delete <コンテンツ・ パック名>	<コンテンツ・パック名> で指定されたコンテンツ・パック定義が削除されます。コンテンツ・パックのコンテンツは削除されません。コンテンツには、イベント・タイプ・インジケータ、状況インジケータ、主要管理指標 (KPI) の計算ルール、トポロジベースの関連処理ルール、ツール定義、ビュー・マッピング、グラフ・ファミリの定義が含まれます。
-e, -export <コンテンツ・ パック名>	-output オプションで指定したファイルに名前付きコンテンツ・パック定義とそのコンテンツがエクスポートされます。
-h, -help	コマンド・オプションのサマリを表示して、終了する。
-i, -import <入力ファイル>	指定したファイルからコンテンツ・パック定義とそのコンテンツがインポートされます。 カスタム・コンテンツ・パックをインポートすると、既存のオブジェクトが上書きされます。定義済みコンテンツ・パックをインポートすると、カスタマイズされていないすべてのオブジェクトが上書きされます。
-l, -list	コンテンツ・パック定義がリストされます。
-o, -output <出力ファイル 名>	コマンドでエクスポート操作をするときの書き込み先となるファイルの名前を指定します。
-p, -port <ポート>	ポート番号を設定します。HTTP の標準設定のポート番号は 80 で、HTTPS の場合は 443 です。-url オプションとともにこのオプションを指定しないでください。
-password <パスワード>	-username オプションで指定したユーザのパスワードが要求されます。このユーザのアカウントが認証に使用されます。

オプション	説明
-server <ゲートウェイ・サーバ>	ホスト名または IP アドレスを使用してターゲットの BSM ゲートウェイ・サーバが設定されます。BSM ゲートウェイ・サーバを指定する必要があります。標準設定は、"{0}" です。 注: -url オプションとともにこのオプションを指定しないでください。
-skipCheck	コンテンツ・パックの一貫性チェックが省略されます。コンテンツ・パックの一貫性チェックでは、別のコンテンツ・パックに含まれていない依存コンテンツが、コンテンツ・パック自体に含まれているのか、すでにインポートされているのかが検証されます。 注意: このオプションは、新しいバージョンのコンテンツ・パックにアップグレードする場合にのみ使用します。
-snapshot	コンテンツ・パック・マネージャで管理できるすべてのコンテンツの snapshots がエクスポートされます。
-ssl	プロトコルが HTTPS に設定されます。標準設定のプロトコルは HTTP です。-url オプションとともにこのオプションを指定しないでください。標準以外のポートを指定する場合に -port オプションを使用しないと、コマンドでは HTTPS のために予約されている標準ポート番号 443 が使用されます。443。
-t, -test	プレビュー・モードでインポートが実行され、結果がすぐに表示されます。データベースへの変更はコミットされません。
-u, -url <URL>	アクセスする BSM ゲートウェイ・サーバの URL を指定します。標準設定値は次のとおりです。 http://<ゲートウェイ・サーバの DNS 名>:<ポート>/opr-admin-server -server オプションとともにこのオプションを指定しないでください。
-username <ログイン名>	アカウントが認証に使用されるユーザの名前。
-v, -verbose	詳細な出力が行われます。
-version	コマンドのバージョン情報が出力されて終了します。

ContentManager コマンドは、要求した処理の終了ステータスを表す次の値を表示します。

終了ステータス	説明
0	正常に完了
1	要求した処理に失敗
300-399	HTTP リダイレクト(300 ~ 399)
400-499	HTTP クライアント・エラー(400 ~ 499)
500-599	HTTP 内部サーバ・エラー(500 ~ 599)

終了ステータスの番号 (300 ~ 599) は、標準 HTTP ステータスのカテゴリ (および番号) を表します。
例: リダイレクト (300-399)。一時的な HTTP のリダイレクトを表す 307 など、特定の HTTP エラー・ステータスに関する詳細な情報については、一般に公開されている HTTP ドキュメントを参照してください。

コンテンツ・パックを自動的にアップロードするコマンドライン・インタフェース

本項では、**ContentAutoUpload** コマンドライン・インタフェースで利用可能なオプションおよびパラメータについて説明します。

ContentAutoUpload コマンドライン・インタフェースはデータ処理サーバの次の場所にあります。

< BSM ルート・ディレクトリ > /bin

注: **ContentAutoUpload** CLI を実行するユーザには、次のファイルへの読み取りアクセスが必要です。

< BSM ルート・ディレクトリ > /conf/TopazInfra.ini

使用法

ContentAutoUpload < 操作 > [オプション]

操作 (次のいずれか):

インポート操作:

-autoUpload [-uploadFolder < ディレクトリ >]

[-forceReload]

その他の操作:

-version

オプション:

-verbose

ContentAutoUpload コマンドで使用できる引数の詳細を次の表に示します。

オプション	説明
-a,- autoUpload	<p>データ処理サーバの標準設定のコンテンツ・パック・ディレクトリからコンテンツ・パック定義ファイルが自動的にアップロードされます。</p> <p>< BSM ルート・ディレクトリ > /conf/opr/content/< ロケール > /</p> <p>Windows : C:\HPBSM\conf\opr\content\< ロケール > \</p> <p>Linux : /opt/HP/BSM/conf/opr/content/< ロケール > /</p> <p>データ処理サーバの別のディレクトリからコンテンツ・パック定義をアップロードする場合、-uploadFolder < ディレクトリ > オプションを使用してディレクトリの場所を指定します。</p> <div style="background-color: #f0f0f0; padding: 5px; border: 1px solid #ccc;"> <p>注: 複数のデータ処理サーバがある場合、どのデータ処理サーバからコンテンツ・パックをインポートするかを指定できないため、コンテンツ・パック・フォルダを同期させておく必要があります。</p> </div> <p>指定したディレクトリのすべての定義済みコンテンツ・パック定義ファイルがその依存関係の順序でインポートされます。コンテンツ・パック定義がすでにリポジトリにアップロードされている場合、再度アップロードされることはありません。</p> <p>インポート・エラーについては、次のログ・ファイルを参照してください。</p> <p>< BSM ルート・ディレクトリ > /log/EJBContainer/opr-webapp.log</p> <p>Windows: C:\HPBSM\log\EJBContainer\opr-webapp.log</p> <p>Linux : /opt/HP/BSM/log/EJBContainer/opr-webapp.log</p>
-forceReload	<p>標準設定ディレクトリ(< BSM ルート・ディレクトリ > /conf/opr/content/< ロケール > /)または -uploadFolder < ディレクトリ > オプションで指定したディレクトリにあるすべてのコンテンツ・パックが強制的に再ロードされます。カスタマイズされていないコンテンツは上書きされます。</p>
-h,-help	<p>コマンド・オプションのサマリを表示して、終了する。</p>
-skipCheck	<p>コンテンツ・パックの一貫性チェックが省略されます。コンテンツ・パックの一貫性チェックでは、別のコンテンツ・パックに含まれていない依存コンテンツが、コンテンツ・パック自体に含まれているのか、すでにインポートされているのかが検証されます。</p> <p>注意 : このオプションは、新しいバージョンのコンテンツ・パックにアップグレードする場合にのみ使用します。</p>

オプション	説明
- uploadFolder <ディレクトリ>	別のディレクトリからコンテンツ・パックをアップロードする場合、-uploadFolder <ディレクトリ> オプションを使用してディレクトリの場所を指定します。 例： ContentAutoUpload -a -uploadFolder c:\temp
-v, -verbose	詳細な出力が行われます。
-version	コマンドのバージョン情報が出力されて終了します。

ContentAutoUpload コマンドは、要求した処理の終了ステータスを表す次の値を表示します。

終了ステータス	説明
0	SUCCESS(1つ以上のコンテンツ・パックがインポートされ、エラーは発生しませんでした)
1	FAILURE(コンテンツ・パックが1つもインポートされない完全な失敗です)
2	FAILURE_PARTIAL(一部のコンテンツ・パックは正常にインポートされましたが、ほかのコンテンツ・パックでエラーが発生しました)
3	NO_OPERATION(アップロードする新しいコンテンツ・パックが見つかりませんでした)
4	NO_PERMISSION(ユーザにこのツールを実行する適切な権限がありません)
5	SYNTAX_ERROR(不正なコマンドライン引数が指定されました)

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、構成アイテムの作成、変更、有効化を含め(ただし、それだけに限定されない)、コンテンツ管理に関する問題のトラブルシューティングについて説明します。

コンテンツがコンテンツ・パックに含まれていない

含めるアクションを構成アイテム・タイプ階層の正しいレベルで実行して、選択した構成アイテム・タイプ(およびすべてのチャイルド)に割り当てられたすべての要素を同時に含める必要があります。

インポート時における CI への未解決な参照

ターゲット・システムに存在しない構成アイテムへの参照がコンテンツ・パックに含まれています。インポートを開始する前に、[オーバーライド]および[作成]オプションが正しく指定されていることを確認してください。

第17章

ダウンタイム管理

ダウンタイムまたはほかのスケジュールしたイベントによって CI データが不正になる可能性があります。イベント、警告、レポート、ビュー、SLA の計算からこのような期間を除外できます。ダウンタイムは、関連付けられている CI に基づいて設定されます。たとえば、物理ホストが一定期間停止することがわかっている特定のホスト CI の定期的な保守イベントや休日を除外できます。

BSM の[プラットフォーム管理]の[ダウンタイムの管理]ページを使用して、ダウンタイムを定義および管理します。

- 1 回、または週次や月次でダウンタイムが発生するように設定する。
- ダウンタイムの影響を受ける CI を複数選択する。

ダウンタイムを設定する場合、使用可能なビューから CI の特定のインスタンスを選択します。ダウンタイムには次の CI タイプの CI を選択できます。

- ノード
- 実行中ソフトウェア
- ビジネス・プロセス
- ビジネス・アプリケーション
- CI コレクション
- インフラストラクチャ・サービス
- ビジネス・サービス

ダウンタイム・アクション

ダウンタイムの設定で指定した CI に対してダウンタイム中に実行されるアクションを選択できます。ダウンタイムは次の要素に影響します。

- **警告とイベント** : イベントは抑制され、ダウンタイムに関連付けられている CI に対して CI ステータス警告、EUM警告、通知は送信されません。
- **KPI** : CI にアタッチされている KPI や影響を受ける CI は更新されず、CI のダウンタイムがサービス状況に表示されます。ダウンタイムの設定がサービス状況にどのような影響を与えるのかの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[KPI ステータスの色と定義](#)」を参照してください。
- **レポート** : エンド・ユーザ管理レポートが更新されず、CI のダウンタイムが表示されます。ダウンタイムの設定がレポートにどのような影響を与えるのかの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[レポートのダウンタイム情報](#)」を参照してください。
- **SLA** : 選択した SLA (CI にアタッチされている SLA) は更新されません。ダウンタイムに含める SLA を選択できます。ダウンタイムの設定がレポートにどのような影響を与えるのかの詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「[以前にさかのぼっての SLA データの修正](#)」を参照してください。
- **監視** : ダウンタイムに関連付けられている CI に対する Business Process Monitor および

SiteScope の監視は停止します。ダウンタイムの設定が SiteScope の監視にどのような影響を与えるのかの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[CI のダウンタイム](#)」を参照してください。

ダウンタイム・ウィザードで選択するオプションは、上記のアクションの組み合わせで、この順序でグループ化されています。つまり、各オプションにはリストした前のオプションが含まれています。ダウンタイム時に BSM で実行されるアクションは、ダウンタイムの設定時に選択したオプションによって異なります。

[オペレーション管理]のイベント

選択した CI のダウンタイム時にイベントを抑制するアクション・オプションを選択した場合、オペレーション管理アプリケーションの結果は、[オペレーション管理]でダウンタイムの動作をどのように設定したかによって異なります。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「[ダウンタイムの動作](#)」を参照してください。

ダウンタイム REST サービス

ゲートウェイ・サーバで実行されている RESTful Web サービスを使用して、ダウンタイムの取得、更新、作成、削除ができます。詳細については、[204 ページ「ダウンタイム REST サービス」](#)を参照してください。

CI のダウンタイムの作成方法と管理方法

このタスクでは、システムでの CI のダウンタイムの作成方法と管理方法について説明します。

1. 前提条件

システムのダウンタイムが CI にどのように影響するかの計画を立てます。ウィザードを実行する前に、次を行う必要があります。

- ダウンタイムが必要な CI を決定するときに、選択した CI に影響する CI を考慮します。場合によっては、これらの CI もダウンタイムの影響を受ける可能性があります。ダウンタイムの影響モデルを理解するには、『RTSM Modeling Studio』の「BSMDowntime_topology TQL」を参照してください。CI は次の CI タイプからのみ選択できます。
 - ノード
 - 実行中ソフトウェア
 - ビジネス・プロセス
 - ビジネス・アプリケーション
 - CI コレクション
 - インフラストラクチャ・サービス
 - ビジネス・サービス
- 各 CI に適用するアクションを決定します。ダウンタイム中のアクションには次のオプションがあります。
 - アクションは必要ありません
 - 警告の非表示イベントを閉じる
 - KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる
 - レポートおよび KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる
 - モニタリングの停止 (BPM および SiteScope)、レポートおよび KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示、イベントを閉じる(関連するすべての SLA に適用)

2. オペレーション管理でのイベントの処理方法の設定(任意)

ダウンタイム中の CI に関連付けられたイベントを処理する方法を管理できます。[管理]>[オペレーション管理]>[オペレーション管理の調整]>[ダウンタイムの動作]でこれを実行します。

このトピックの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「ダウンタイムの動作」を参照してください。

3. ダウンタイムの作成ウィザードの実行

[管理]>[プラットフォーム]>[ダウンタイム]に移動し、**ダウンタイムの作成** ボタンをクリックします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、210 ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」を参照してください。

4. 結果

ウィザードの実行後、ダウンタイムの詳細がダウンタイム・マネージャ・ページに表示されます。ダウンタイムの詳細を .pdf または Excel ファイルにエクスポートできます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、208 ページ「[\[ダウンタイムの管理\] ページ](#)」を参照してください。

ヒント: エクスポートされるファイルのダウンタイムを指定したダウンタイムに制限するには、ダウンタイム・マネージャに表示されるダウンタイムをフィルタして .pdf または Excel ファイルにエクスポートします。[名前], [CI], [ステータス], [アクション], [スケジュール設定], [次の発生時間], [更新者], [承認者], [計画済み], [カテゴリ]を含む、1 つ以上の列の任意の組み合わせでフィルタできます。

ダウンタイム REST サービス

ゲートウェイ・サーバで実行されている RESTful Web サービスを使用して、ダウンタイムの取得、更新、作成、削除ができます。REST クライアントの HTTP 要求や、HTTP 要求と XML コマンドの組み合わせをブラウザに入力できます。サービス認証は、基本認証に基づいています。

サポートされている HTTP 要求

ダウンタイム REST サービスでは、次の HTTP 要求がサポートされています。

注: CustomerID は、HP SaaS カスタマの場合を除いて常 1 です。

アクション	HTTP コマンド
すべてのダウンタイムを取得	http://<HPBSM サーバ>/topaz/bsmservices/customers/[customerID]/downtimes
特定のダウンタイムを取得	http://<HPBSM サーバ>/topaz/bsmservices/customers/[customerID]/downtimes/[downtimeID]
http PUT を使用してダウンタイムを更新	http://<HPBSM サーバ>/topaz/bsmservices/customers/[customerID]/downtimes/[downtimeID] + ダウンタイムの XML
http POST を使用してダウンタイムを作成	http://<HPBSM サーバ>/topaz/bsmservices/customers/[customerID]/downtimes + ダウンタイムの XML 注: ダウンタイムの作成に成功すると、新しく作成されたダウンタイムが XML 形式で返されます。これには、ダウンタイム ID が含まれています。
http DELETE を使用してダウンタイムを削除	http://<HPBSM サーバ>/topaz/bsmservices/customers/[customerID]/downtimes/[downtimeID]

許可されているダウンタイム・アクション

次のダウンタイム・アクション用にリストされている XML コマンドを使用します。

アクションの詳細	XML コマンド
アクションは必要ありません	<action name="REMINDER">
警告の非表示イベントを閉じる	<action name="SUPPRESS_NOTIFICATIONS"/>
KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる(監視は継続)。	<action name="ENFORCE_ON_KPI_CALCULATION"/>

アクションの詳細	XML コマンド
レポートおよびKPI計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる(監視は継続)	<code><action name="ENFORCE_ON_REPORTS"/></code>
レポートおよびKPI計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる(監視は継続)。すべてのSLAが含まれます。	<code><action name="ENFORCE_ON_REPORTS"> <propGroup name="SLA" value="ALL"/> </action></code>
レポートおよびKPI計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる(監視は継続)。特定のSLAが含まれます。	<code><action name="ENFORCE_ON_REPORTS"> <propGroup name="SLA" value="SELECTED"> <prop>dda3fb0b20c0d83e078035ee1c005201</prop> </propGroup> </action></code>
アクティブ モニタリングの停止 (BPM および SiteScope)、レポートおよびKPI計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる	<code><action name="STOP_MONITORING"/></code>

ダウンタイムXMLの例

次のフィールドは、指定した最大長を超えることはできません。

- Name: 200 文字
- Description: 2000 文字
- Approver: 50 文字

```
<downtime userId="1" planned="true"
id="8898e5a5dbcdc953e04037104bf5737c">
  <name>The name of the downtime</name>
  <action name="ENFORCE_ON_REPORTS">
  </action>
  <approver>The approver name</approver>
  <category>1</category>
  <notification>
    <recipients>
      <recipient id="24"/>
      <recipient id="22"/>
      <recipient id="21"/>
    </recipients>
  </notification>
  <selectedCIs>
    <ci>
      <id>ac700345b47064ed4fbb476f21f95a76</id>
      <viewName>End User Monitors</viewName>
```

```
</ci>
</selectedCIs>
<schedule xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:type="WeeklyScheduleType">
  <type>WEEKLY</type>
  <startDate>2010-06-10T15:40:00+03:00</startDate>
  <timeZone>Europe/Zurich</timeZone>
  <days>
    <selectedDays>WEDNESDAY</selectedDays>
    <selectedDays>THURSDAY</selectedDays>
    <selectedDays>FRIDAY</selectedDays>
    <selectedDays>SATURDAY</selectedDays>
  </days>
  <startTimeInSecs>52800</startTimeInSecs>
  <durationInSecs>300</durationInSecs>
</schedule>
</downtime>
```

スケジュール設定

ダウンタイムのスケジュールを設定する場合、次の点に留意してください。

- 以前のダウンタイムはサポートされない。次の操作はできない。
 - 過去にスケジュールされたダウンタイムを作成する。
 - 開始しているダウンタイムまたは過去に発生したダウンタイムを削除する。
 - 開始しているダウンタイムまたは過去に発生したダウンタイムを変更する。
- startDate / endDate の日付形式は **yyyy-MM-dd'T'HH:mm:ssZ**。
- 週次および月次のダウンタイムでは、startDate と endDate を深夜 0 時に定義する必要がある。
例：
 - <startDate>2010-07-24T00:00:00+03:00</startDate>
 - <endDate>2010-09-04T00:00:00+03:00</endDate>

1 回かぎりのダウンタイム・スケジュールの例

```
<schedule xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:type="OnceScheduleType">
  <type>ONCE</type>
  <startDate>2010-06-08T14:40:00+03:00</startDate>
  <endDate>2010-06-08T14:45:00+03:00</endDate>
  <timeZone>Asia/Tokyo </timeZone>
</schedule>
```

週次ダウンタイム・スケジュールの例

```
<schedule xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:type="WeeklyScheduleType">
  <type>WEEKLY</type>
  <startDate>2010-06-10T15:40:00+03:00</startDate>
  <timeZone>Europe/Zurich</timeZone>
  <days>
    <selectedDays>WEDNESDAY</selectedDays>
    <selectedDays>THURSDAY</selectedDays>
    <selectedDays>FRIDAY</selectedDays>
    <selectedDays>SATURDAY</selectedDays>
  </days>
  <startTimeInSecs>52800</startTimeInSecs>
  <durationInSecs>300</durationInSecs>
</schedule>
```

月次ダウンタイム・スケジュールの例

```
<schedule xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:type="MonthlyScheduleType">
  <type>MONTHLY</type>
  <startDate>2010-06-10T14:40:00+03:00</startDate>
  <timeZone>America/Montevideo</timeZone>
  <days>
    <selectedDays>WEDNESDAY</selectedDays>
    <selectedDays>THURSDAY</selectedDays>
    <selectedDays>FRIDAY</selectedDays>
    <selectedDays>SATURDAY</selectedDays>
  </days>
  <startTimeInSecs>52800</startTimeInSecs>
  <durationInSecs>300</durationInSecs>
</schedule>
```




[ダウンタイムの管理] ユーザ・インタフェース




[ダウンタイムの管理] ページ

関連付けられている CI に設定されたスケジュール済みダウンタイムのリストが表示されます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ダウンタイムの管理] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ダウンタイムを追加、編集、削除するには、ダウンタイム・リソースの管理者権限が必要です。また、ダウンタイムの CI が属するビューの表示権限が必要です。権限の詳細については、225ページ「権限」を参照してください。 このページに表示される値は参照専用です。ダウンタイムの値を編集するには、ダウンタイムを強調表示して[編集]をクリックします。ダウンタイム・ウィザードが開き、ページに表示される値を編集できます。 すでに発生しているダウンタイムの場合、次のフィールドのみを編集できます。 <ul style="list-style-type: none"> [プロパティ] ページ - すべてのフィールド [スケジュール設定] ページ - [繰り返す範囲] の [終了日] の日付 [通知] ページ - [選択済みの受信者] 各列には、列のコンテンツでリストをフィルタするためのオプションがあります。たとえば、カテゴリ・列でカテゴリ・タイプを選択して、そのカテゴリで設定したダウンタイムのみを表示できます。標準設定では、ステータスが[完了]のダウンタイムは除外されています。これらの設定を変更するには、ステータス・フィルタ・ボタンを開いて[完了]を選択します。
関連タスク	202ページ「CI のダウンタイムの作成方法と管理方法」
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規ダウンタイムを作成 :新しいダウンタイムを設定する新規ダウンタイム・ウィザードが開きます。詳細については、 210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」 を参照してください。
	ダウンタイムを編集 :既存のダウンタイムの設定を編集できるダウンタイム編集ウィザードが開きます。このウィザードでは、新規ダウンタイム・ウィザードと同じ画面が表示されます。詳細については、 210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」 を参照してください。
	ダウンタイムを複製 :既存のダウンタイムの設定を新しいダウンタイムに複製します。

UI 要素	説明
	ダウンタイムを削除 :選択したダウンタイムが削除されます。現在アクティブまたは過去の任意の時点でアクティブであったダウンタイムは、削除できません。これは、履歴データの消失を回避するための設計です。
	Excel へエクスポート :設定したダウンタイムのテーブルがExcel形式のファイルにエクスポートされます。
	PDF へエクスポート :設定したダウンタイムのテーブルがPDFファイルにエクスポートされます。
アクション	ダウンタイムのステータスが[アクティブ]の場合に実行されるアクション。新規ダウンタイム・ウィザードでダウンタイムのアクションを設定します。利用可能なアクションの詳細については、214ページ「[アクション]ページ」を参照してください。
CI	ダウンタイムに関連付けられているCI。これらは、ダウンタイムのステータスが[アクティブ]の場合に影響を受けるCIです。
更新者	ダウンタイムの設定を最後に作成または変更したユーザ。
名前	ダウンタイム・ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
次の発生時間	次にダウンタイムが発生する日時。このフィールドは自動的に更新されます。
スケジュール設定	次の項目が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> 日付, 時刻, タイム・ゾーン, 継続時間 定期的なダウンタイムの場合、次の項目も表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> 定期的なダウンタイムがスケジュールされている曜日または週 繰り返す範囲
ステータス	現在ダウンタイムかどうかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> アクティブ :CIは現在ダウンタイムで、ダウンタイム用に選択されたアクションが実行されています。 非アクティブ :ダウンタイムは設定されているが、現在ダウンタイムが実行される時間ではありません。 完了 :ダウンタイムの時間が経過して、ダウンタイム用に設定されたアクションが発生しました。
任意指定のカラム	
承認者	ダウンタイムの承認があるかどうかと承認者が示されます。

UI 要素	説明
カテゴリ	<p>ダウンタイムに割り当てられたカテゴリ。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • アプリケーションのインストール • アプリケーションのメンテナンス • ハードウェアのインストール • ハードウェアのメンテナンス • ネットワークのメンテナンス • オペレーティング・システムの再設定 • その他 • セキュリティの問題 <p>また、インフラストラクチャ設定を使用して、独自のカスタム・カテゴリを作成することもできます。</p> <p>カスタム・ダウンタイム・カテゴリを追加するには、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ファウンデーション]を選択します。 • [ダウンタイム]を選択します。 • [ダウンタイム - 一般設定]テーブルで、ダウンタイムのカスタム・カテゴリとして使用する名前になるように[ダウンタイム カテゴリ]の値を編集します。入力した名前は、使用可能なダウンタイム・カテゴリのリストのオプションとして表示されます。
計画済み	ダウンタイムが計画されているのか、計画されていないのかが示されます。

新規ダウンタイム・ウィザード

このウィザードでは、モデルのCIのダウンタイムを作成および編集できます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ダウンタイム]で[新規ダウンタイムを作成]ボタンをクリックするか、既存のダウンタイムを選択して[ダウンタイムを編集]ボタンをクリックします。
関連タスク	202ページ「CIのダウンタイムの作成方法と管理方法」
ウィザード・マップ	<p>新規ダウンタイム・ウィザードには次のものが含まれます。</p> <p>211ページ「[プロパティ]ページ」>211ページ「[CIの選択]ページ」>212ページ「[スケジュール設定]ページ」>214ページ「[アクション]ページ」>216ページ「[通知]ページ」>217ページ「[プレビュー]ページ」</p>
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

[プロパティ] ページ

このウィザード・ページでは、ダウンタイムの一般的なプロパティを設定できます。

重要な情報	すでに発生しているダウンタイムの場合でも、[プロパティ] ページのすべてのフィールドを編集できます。
ウィザード・マップ	この210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」には、次のページが含まれています。 [プロパティ] ページ > 211ページ「[CI の選択] ページ」 > 212ページ「[スケジュール設定] ページ」 > 214ページ「[アクション] ページ」 > 216ページ「[通知] ページ」 > 217ページ「[プレビュー] ページ」
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
ダウンタイム名	200 文字以下にする必要があります。
ダウンタイムの詳細	この説明は、『BSM ユーザ・ガイド』の「Downtime Information Area」にも記載されています。
承認者	このダウンタイムを承認した担当者や部署を入力できます。50 文字以下にする必要があります。
計画済み	このダウンタイムを計画済みとしてマークする場合に選択します。計画外のダウンタイムを作成できます。これは、情報提供のみを目的としています。
ダウンタイム カテゴリ	ドロップダウン・メニューからカテゴリを選択します。このカテゴリでは、ダウンタイムの理由が示されます。 また、インフラストラクチャ設定を使用して、独自のカスタム・カテゴリを作成することもできます。 カスタム・ダウンタイム・カテゴリを追加するには、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • [ファウンデーション] を選択します。 • [ダウンタイム] を選択します。 • [ダウンタイム - 一般設定] テーブルで、ダウンタイムのカスタム・カテゴリとして使用する名前になるように [ダウンタイム カテゴリ] の値を編集します。入力した名前は、BSM の再起動後に使用可能なダウンタイム・カテゴリのリストのオプションとして表示されます。

[CI の選択] ページ

このウィザード・ページでは、ダウンタイムの影響を受ける CI を選択できます。

重要な情報	すでに発生しているダウンタイムの場合、このページでは選択したCIを編集できません。
ウィザード・マップ	この210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」には、次のページが含まれています。 211ページ「[プロパティ]ページ」> [CIの選択]ページ> 212ページ「[スケジュール設定]ページ」> 214ページ「[アクション]ページ」> 216ページ「[通知]ページ」> 217ページ「[プレビュー]ページ」
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
利用可能な CI	<p>このダウンタイムの影響を受けるCIを含むビューをリストから選択します。 ボタンを使用して、使用可能なビューを参照および検索できます。</p> <p>ビューのCIを強調表示して、[選択済みのCI]リストに移動します。複数のCIを選択するには、Ctrl キーを押したままにします。</p> <p>ユーザは表示権限のあるすべてのビューを選択できます。次のCIタイプのCIのみを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ノード • 実行中ソフトウェア • ビジネス・プロセス • ビジネス・アプリケーション • CI コレクション • インフラストラクチャ・サービス • ビジネス・サービス
選択済みの CI	<p>CIが選択されると、[選択済みのCI]リストに表示されます。ダウンタイムからCIを削除するには、[選択済みのCI]のCIを選択し、戻る矢印をクリックして[利用可能なCI]リストに戻します。</p>

[スケジュール設定] ページ

このウィザード・ページでは、ダウンタイムのスケジュールを設定できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 過去のダウンタイムをスケジュールすることはできません。 すでに発生しているダウンタイムの場合、[スケジュール設定]ページの次のフィールドのみを編集できます。 [繰り返す範囲]の[終了日]の日付 <p>すでに1回以上発生している定期的なダウンタイムをキャンセルするには、ダウンタイムを編集してこのフィールドを変更します。</p>
ウィザード・マップ	<p>この210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>211ページ「[プロパティ]ページ」> 211ページ「[CIの選択]ページ」> [スケジュール設定]ページ> 214ページ「[アクション]ページ」> 216ページ「[通知]ページ」> 217ページ「[プレビュー]ページ」</p>
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
発生時間	<ul style="list-style-type: none"> 開始 :ドロップダウン・リストには、30分ごとに設定された時刻(時間と分)が含まれています。別の時刻を選択するには、最も近い30分ごとの時刻を選択し、フィールドを編集してダウンタイムを開始する実際の時刻を入力します。たとえば、2:10 am の場合、2:00 am を選択して 2:10 am を示すように分を編集します。 終了 :終了時刻を選択できます。継続時間は自動的に更新されます。または、継続時間を選択すると、終了時刻が自動的に更新されます。 継続時間 :5分から1週間のオプションがあります。ダウンタイムの継続時間は、5分単位で増やして、分、時、日、週の長さで定義する必要があります。 <p>指定した継続時間(1 1/2 時間など)が表示されない場合、終了時刻を入力すると継続時間が自動的に更新されます。</p> <p>1週間よりも長い時間を選択するには、1週間を選択して適切な週数になるようにフィールドを編集します。</p>
繰り返しパターン	<p>次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1回 :スケジュールされた1回のみダウンタイムが発生し、繰り返されません。カレンダーで発生日を選択します。 週次 :週次で発生するようにスケジュールする曜日を選択します。 月次 :月次で発生するようにスケジュールする日をドロップダウン・リストから選択します。
繰り返す範囲	<p>[週次]または[月次]を選択した場合 :</p> <ul style="list-style-type: none"> [開始]の日付を定義する必要があります。 [終了日]の日付または[終了日なし]を選択します。
タイムゾーン	GMT を基準にしてすべてのタイム・ゾーンが表示されます。

[アクション]ページ

このウィザード・ページでは、ダウンタイム中に実行される一連のアクションを定義できます。

重要な情報	すでに発生しているダウンタイムの場合、[アクション]ページのフィールドを編集できません。
ウィザード・マップ	この210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」には、次のページが含まれています。 211ページ「[プロパティ]ページ」 > 211ページ「[CIの選択]ページ」 > 212ページ「[スケジュール設定]ページ」 > [アクション]ページ > 216ページ「[通知]ページ」 > 217ページ「[プレビュー]ページ」
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アクションは必要ありません	<p>関連付けられているCI、CIの監視、警告、レポート、SLAに対して実行されるアクションはありません。</p> <p>注：このダウンタイム中は、影響を受けるCIのステータスが[ダウンタイム]に変更されません。CIステータス警告は、CIのステータスが変更された場合にトリガされるように設定されています。</p>
警告の非表示イベントを閉じる	<ul style="list-style-type: none"> ダウンタイムに関連付けられているCIに対して警告や関連する通知またはアクションは送信されません。 標準設定では、イベントは終了時に送信されます。OMiがインストールされている場合、ダウンタイムのイベント処理は[管理] > [オペレーション管理] > [オペレーション管理の調整] > [ダウンタイムの動作]で設定し、設定の上書きもここで行います。 監視は継続され、レポート、サービス状況のステータス、SLAが更新されます。 <p>注：ダウンタイム中に、影響を受けるCIのステータスに変更されることがあり、このステータスの変更によって、関連するCIステータス警告がトリガされる可能性があります。</p>

UI 要素	説明
KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる	<ul style="list-style-type: none"> ● KPI の計算の実行やサービス状況のステータスの更新は行われず、代わりにCIのダウンタイムが表示されます。 ● ダウンタイムに関連付けられているCIに対して警告や関連する通知またはアクションは送信されません。 ● 標準設定では、イベントは終了時に送信されます。OMi がインストールされている場合、ダウンタイムのイベント処理は[管理]>[オペレーション管理]>[オペレーション管理の調整]>[ダウンタイムの動作]で設定し、設定の上書きもここで行います。 ● レポートと監視は継続します。SLA は更新されます。
レポートおよび KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる	<ul style="list-style-type: none"> ● レポート・データは更新されず、関連付けられているCIのダウンタイムが表示されます。 ● 選択したSLA(ダウンタイムに関連付けられているCIの影響を受けるSLA)は更新されません。 ● KPI の計算の実行やサービス状況のステータスの更新は行われず、代わりにCIのダウンタイムが表示されます。 ● ダウンタイムに関連付けられているCIに対して警告や関連する通知またはアクションは送信されません。 ● 標準設定では、イベントは終了時に送信されます。OMi がインストールされている場合、ダウンタイムのイベント処理は[管理]>[オペレーション管理]>[オペレーション管理の調整]>[ダウンタイムの動作]で設定し、設定の上書きもここで行います。 ● 監視は継続されます。


UI 要素	説明
アクティブ モニタリングの停止 (BPM & SiteScope), レポートおよびKPI 計算のダウンタイム実行, 警告の非表示イベントを閉じる (関連するすべてのSLAに影響)	<ul style="list-style-type: none"> • Business Process Monitor と SiteScope の監視は停止します。 • レポート・データは更新されず, 関連付けられている CI のダウンタイムが表示されます。 • SLA(ダウンタイムに関連付けられている CI の影響を受ける SLA) は更新されません。 • KPI の計算の実行やサービス状況のステータスの更新は行われず, 代わりに CI のダウンタイムが表示されます。 • ダウンタイムに関連付けられている CI に対して警告や関連する通知またはアクションは送信されません。 • 標準設定では, イベントは終了時に送信されます。OMi がインストールされている場合, ダウンタイムのイベント処理は[管理]>[オペレーション管理]>[オペレーション管理の調整]>[ダウンタイムの動作]で設定し, 設定の上書きもここで行います。 <p>注 : アプリケーション CI (このデータは BPM の監視で更新される) のダウンタイム期間を設定する場合, ダウンタイム期間の開始時にダウンタイム・マネージャから BPM エージェントにイベントが自動的に送信されます。エージェントによって BSM へのサンプルの送信が停止されます。抑制されるサンプルは, トランザクション CI に対応する BPM サンプルです。トランザクション CI は, ダウンタイムを設定するアプリケーション CI の子 CI です。トランザクションごとに 1 つのサンプルがあります。</p>

[通知] ページ

このウィザード・ページでは, ダウンタイムの通知の受信者を選択できます。通知は, ダウンタイムの発生時と完了直後に電子メールで送信されます。電子メール・アドレスが定義されている受信者のみを選択できます。

重要な情報	すでに発生しているダウンタイムの場合でも, [通知] ページの[選択済みの受信者]を編集できます。
ウィザード・マップ	この210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」には, 次のページが含まれています。 211ページ「[プロパティ] ページ」> 211ページ「[CI の選択] ページ」> 212ページ「[スケジュール設定] ページ」> 214ページ「[アクション] ページ」> [通知] ページ> 217ページ「[プレビュー] ページ」
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	[指定可能な受信者]リストにまだ存在していない受信者を作成する[新規受信者]ダイアログ・ボックスが開きます。作成した受信者は、すべてのBSMの受信者として使用できます。受信者の作成の詳細については、325ページ「受信者の設定および管理方法」を参照してください。
指定可能な受信者	電子メール、SMS、ページャによるダウンタイムの通知に指定できる受信者がリストされます。
選択済みの受信者	電子メール、SMS、ページャによるダウンタイムの通知に選択した受信者がリストされます。1つ、2つ、3つすべての通知方法を選択できます。

[プレビュー]ページ

このウィザード・ページでは、ダウンタイムの設定のサマリをプレビューできます。

ウィザード・マップ	この210ページ「新規ダウンタイム・ウィザード」には、次のページが含まれています。 211ページ「[プロパティ]ページ」 > 211ページ「[CIの選択]ページ」 > 212ページ「[スケジュール設定]ページ」 > 214ページ「[アクション]ページ」 > 216ページ「[通知]ページ」 > [プレビュー]ページ
関連情報	200ページ「ダウンタイム管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
[プレビュー]テーブル	このダウンタイムに設定されたすべての値がリストされるテーブル。[戻る]ボタンをクリックすると、監視または削除する必要のある値が表示されたページに戻ることができます。 このページで[完了]をクリックすると、ダウンタイムがシステムに追加され、ダウンタイム・マネージャ・ページに表示されます。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、ダウンタイム・マネージャのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

ダウンタイムの編集

- ダウンタイム・ウィザードでダウンタイムを編集するときそのステータスが[アイドル]から[アクティブ]に変更された場合、ダウンタイムを保存できません。
- すでに1回以上発生している定期的なダウンタイムをキャンセルするには、[スケジュール設定]ページのダウンタイムの[終了日]の日付を編集します。

ダウンタイムと夏時間

夏時間(DST)が採用されているタイム・ゾーンでは、標準時間と夏時間の移行がダウンタイムの計算に考慮されます。これには、次のルールが使用されます。

注: 次の例では、米国の大部分で採用されている夏時間の変更が使用されています。

- 2010年3月14日 - 2:00 amになると、時計が3:00 amに繰り上がります。そのため、2:00 ~ 2:59 amの期間は存在しません。
- 2010年11月7日 - 2:00 amになると、時計が1:00 amに繰り下がります。そのため、1:00 ~ 1:59 amの期間が2回出現します。

ほかのタイム・ゾーンでも動作は同じですが、移行日時が異なる場合があります。

これらの例は、220ページ「ダウンタイムに影響するDSTの変更 — 各例のサマリ」の表にまとめられています。

春(標準時間から夏時間へ)

- ダウンタイムがDSTの変更前に開始して変更の翌日に終了すると、終了時刻は想定どおりになりますが、継続時間は定義した継続時間よりも1時間少なくなります。

例 1:

月次ダウンタイムは、14日の1:30 amに開始して15日の2:40 amに終了します。継続時間は1日と1時間10分です。

DSTが変更されない場合: ダウンタイムは14日の1:30 amに開始して15日の2:40 amに終了します。継続時間は1日と1時間10分です。

DSTが2010年3月14日に変更される場合: ダウンタイムは14日の1:30に開始して15日の2:40 amに終了しますが、継続時間は1日と0時間10分(定義した継続時間よりも1時間少ない)になります。

- ダウンタイムがDSTの変更前に開始して変更の当日の変更後に終了すると、終了時刻は定義した終了時刻よりも1時間遅くなりますが、継続時間は定義どおりになります。

例 2:

月次ダウンタイムは、13日の11 pm(23:00)に開始して、継続時間は5時間です。

DSTが変更されない場合: ダウンタイムは13日の23:00:00 amに開始して14日の04:00:00 amに終了します。

DSTが2010年3月14日に変更される場合: ダウンタイムは13日の11:00 pmに開始して14日の5:00 amに終了しますが、継続時間は5時間のままです。

- スキップされる時間中にダウンタイムが開始するように定義されていると、開始時刻は1時間遅れますが、定義された継続時間は保持されます。

例 3:

月次ダウンタイムは、14日の2:30 amに開始して、継続時間は2時間です。

DSTが変更されない場合: ダウンタイムは14日の02:30:00 amに開始して14日の04:30:00 amに終了します。

DSTが2010年3月14日に変更される場合: ダウンタイムは14日の3:30 amに開始して14日の5:30 amに終了しますが、継続時間は2時間のままです。

- ダウンタイムがDSTの変更前に開始して、スキップされる時間中に終了するように定義されていると、終了時刻は1時間遅れますが、定義された継続時間は保持されます。

例 4:

月次ダウンタイムは、13日の1:30 amに開始して、継続時間は1日と1時間10分です。

DSTが変更されない場合: ダウンタイムは13日の1:30 amに開始して14日の2:40 amに終了します。継続時間は1日と1時間10分です。

DSTが2010年3月14日に変更される場合: ダウンタイムは13日の1:30 amに開始して14日の3:40 amに終了しますが、継続時間は定義どおり1日と1時間10分のままです。

- スキップされる時間中にダウンタイムが開始および終了するように定義されている場合、ダウンタイムは定義されている時刻よりも1時間遅れます。

例 5:

月次ダウンタイムは、14日の2:00 amに開始して、継続時間は1時間です。

DSTが変更されない場合: ダウンタイムは14日の02:00:00 amに開始して14日の03:00:00 amに終了します。

DSTが2010年3月14日に変更される場合: ダウンタイムは14日の3:00 amに開始して14日の4:00 amに終了しますが、継続時間は定義どおり1時間のままです。

秋(夏時間から標準時間へ)

- ダウンタイムがDSTの変更後に開始および終了すると、終了時刻と継続時間は定義どおりになります。
- ダウンタイムがDSTの変更前(変更の当日または前日)に開始して、変更の当日の変更後に終了すると、終了時刻は想定よりも1時間早くなりますが、継続時間は定義どおりになります。

例 6:

2つの月次ダウンタイムは、両方とも7日の深夜0時に開始します。1つ目のダウンタイムの継続時間は1時間で、2つ目のダウンタイムの継続時間は2時間です。

DSTが変更されない場合: 1つ目のダウンタイムは7日の0:00から1:00 am(1時間の継続時間)で、2つ目のダウンタイムは7日の0:00から2:00 am(2時間の継続時間)です。

DST が2010年11月7日に変更される場合: 1つ目のダウンタイムは7日の0:00(夏時間)に開始して7日の1:00 am(夏時間)に終了し、継続時間は1時間です。2つ目のダウンタイムは7日の0:00(夏時間)に開始して7日の1:00 am(標準時間)に終了しますが、継続時間は2時間のままです。

例 7:

月次ダウンタイムは、7日の深夜0時に開始して、継続時間は4時間です。

DST が変更されない場合: ダウンタイムは7日の0:00に開始して7日の4:00 amに終了します。

DST が2010年11月7日に変更される場合: ダウンタイムは7日の0:00に開始して7日の3:00 amに終了しますが、継続時間は定義どおり4時間のままです。

例 8:

月次ダウンタイムは、6日の8:00 pm(20:00)に開始して、継続時間は7時間です。

DST が変更されない場合: ダウンタイムは6日の8:00 pmに開始して7日の3:00 amに終了します。

DST が2010年11月7日に変更される場合: ダウンタイムは6日の8:00 pmに開始して7日の2:00 amに終了しますが、継続時間は定義どおり7時間のままです。

- ダウンタイムがDSTの変更前に開始して変更の翌日に終了すると、終了時刻は想定どおりになりますが、継続時間は定義した継続時間よりも1時間多くなります。

例 9:

月次ダウンタイムは、7日の深夜0時(0:00)に開始して、継続時間は1日と1時間(25時間)です。

DST が変更されない場合: ダウンタイムは7日の0:00に開始して8日の1:00 amに終了します。

DST が2010年11月7日に変更される場合: ダウンタイムは7日の0:00に開始して8日の1:00 amに終了しますが、継続時間は26時間になります。

ダウンタイムに影響する DST の変更 — 各例のサマリ

ダウンタイムの設定 / DST の変更		開始時間	終了時刻	継続時間
1	設定	14日の1:30 am	15日の2:40 am	1日と1時間10分
	DST が変更される場合	14日の1:30 am	15日の2:40 am	1日と0時間10分
2	設定	13日の11:00 pm	14日の4:00 am	5時間
	DST が変更される場合	13日の11:00 pm	14日の5:00 am	5時間

例	ダウンタイムの設定 / DST の変更		開始時間	終了時刻	継続時間
3	設定		14日の2:30 am	14日の4:30 am	2時間
	DST が変更される場合		14日の3:30 am	14日の5:30 am	2時間
4	設定		13日の1:30 am	14日の2:40 am	1日と1時間10分
	DST が変更される場合		13日の1:30 am	14日の3:40 am	1日と1時間10分
5	設定		14日の2:00 am	14日の3:00 am	1時間
	DST が変更される場合		14日の3:00 am	14日の4:00 am	1時間
6	1つ目	設定	7日の0:00	7日の1:00 am	1時間
		DST が変更される場合	7日の0:00	7日の1:00 am	1時間
	2つ目	設定	7日の0:00	7日の2:00 am	2時間
		DST が変更される場合	7日の0:00	7日の1:00 am(標準時間)	2時間
7	設定		7日の0:00	7日の4:00 am	4時間
	DST が変更される場合		7日の0:00	7日の3:00 am	4時間
8	設定		6日の8:00 pm	7日の3:00 am	7時間
	DST が変更される場合		6日の8:00 pm	7日の2:00 am	7時間
9	設定		7日の0:00	8日の1:00 am	25時間
	DST が変更される場合		7日の0:00	8日の1:00 am	26時間

第4部分

ユーザ, 権限, および受信者

第18章

ユーザ管理

ユーザ管理 インタフェースの用途は、次のとおりです。

- **BSM グループおよびユーザの設定。** 権限を使用すると、事前定義した領域へのユーザのアクセス範囲を制限できます。権限はユーザに直接付与することも、ユーザ・グループに付与することもできます。ユーザをグループ化すると、ユーザ権限をさらに効果的に管理できます。アクセス権限を1人ずつ個別のユーザに割り当てる代わりに、同じ権限レベルが割り当てられたユーザを同じリソースでグループ化することができます。

BSM の異なるリソースに対するユーザのアクセス方法に基づいて、異なるグループを作成できます。次の例に、組織に関係するユーザのグループ化の条件を示します。

組織内での役割	場所と分野
カスタマ・サービス担当者	異なる販売分野で作業するユーザ
システム管理者	地理的な場所に基づいたユーザ
高レベル管理	異なる場所でネットワーク・サーバにアクセスするユーザ

ユーザ名 やパスワードなどのユーザのパラメータは、[一般]タブで変更できます。詳細については、310ページ「[一般]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。

グループおよびユーザの作成の詳細については、319ページ「[グループ/ユーザ]表示枠」を参照してください。

- **スーパーユーザの定義。** BSM のインストールごとに、1人のスーパーユーザが定義されます。このスーパーユーザのログイン名は `admin` で、このアカウントの初期パスワードはセットアップおよびデータベース設定ユーティリティで指定されます。ユーザ管理では元のスーパーユーザがユーザ間で表示されないため、このユーザのパスワードを変更できるのは、個人設定([管理]>[個人設定])の[一般設定]ページのみです。このタスクを実行するユーザ・インタフェースの詳細については、343ページ「[ユーザアカウント]ページ」を参照してください。

スーパーユーザは、システム内の他のユーザに適用できます。スーパーユーザ権限を持つこれらのユーザは、ユーザ管理で表示および変更できます。権限の適用の詳細については、240ページ「権限の割り当て方法」を参照してください。

- **ユーザへの受信者の割り当て。** 受信者をユーザに割り当てることができます。受信者は、警告や定期レポートを受信できます。受信者の詳細については、324ページ「受信者管理」を参照してください。
- **ユーザとグループへの権限の割り当て。** ユーザ管理インタフェースは、適切な権限を持つユーザのみが使用できます。ユーザの権限は、割り当てられたロールから継承されるか、パラメータの設定時に個別に付与されます。権限の詳細については、225ページ「権限」を参照してください。
- **グループとユーザ階層の設定。** ユーザをグループに追加し、グループを他のグループ内でネストすることができます。詳細については、229ページ「グループとユーザ階層」を参照してください。
- **ユーザ設定のカスタマイズ。** BSM へのログイン時にユーザに対して表示されるページを選択

し、BSM 全体のページで使用できるメニュー項目を選択します。詳細については、[231ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ」](#)を参照してください。

権限

BSM プラットフォームで定義したグループとユーザに権限を割り当てて、BSM の特定の領域へのアクセスを許可できます。

権限の付与には次のコンポーネントがあります。

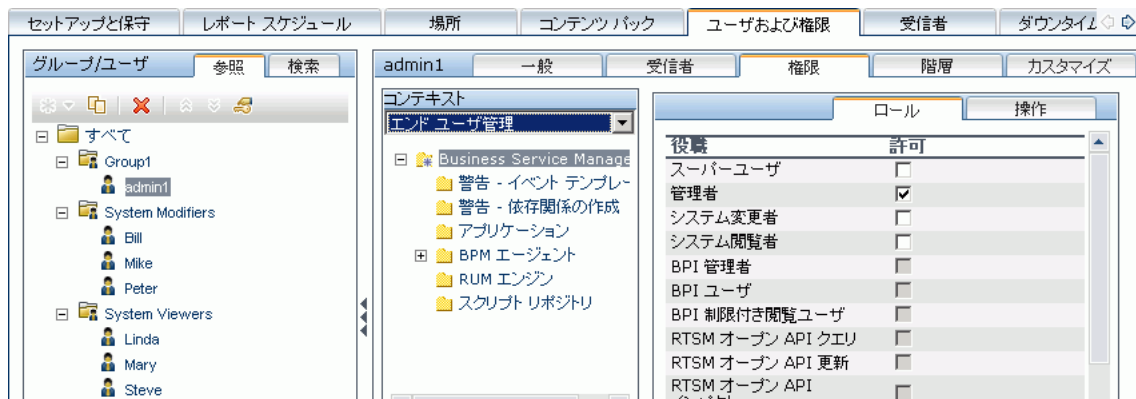
- ユーザ
- リソース
- 付与されるロールまたは操作

[権限] タブには、次の領域があります。

- ページの中央にあるリソース・ツリー領域：権限が割り当てられているコンテキスト、リソース、リソース・インスタンスが含まれています。詳細については、[225 ページ「権限のリソースについて」](#)を参照してください。
- ページの右側にあるロールおよび操作領域：ロールの詳細については、[227 ページ「ロール」](#)を参照してください。操作の詳細については、[228 ページ「操作」](#)を参照してください。

また、ページの左側には常に[グループ / ユーザ]表示枠が表示されます。

権限の許可の例を次に示します。



権限の割り当ての詳細については、[240 ページ「権限の割り当て方法」](#)を参照してください。

注:

- 以前のバージョンの BSM からアップグレードしていて、特定のユーザとセキュリティ・レベルが定義されている場合、それらのユーザとセキュリティ・レベルは[権限] タブの新しいロール機能にマップされます。詳細については、[227 ページ「ロール」](#)を参照してください。
- ユーザとグループは、割り当てられているロールとともに BSM マシンから別の BSM マシンにエクスポートできます。詳細については、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

権限のリソースについて

BSM では、リソース・レベルで権限を適用することで、権限管理を微調整できます。権限を適用できるリソースのすべてが、BSM プラットフォームを表す階層ツリー内で特定され、分類されています。

リソースやそのインスタンスは、**コンテキスト**と呼ばれる論理グループに従って編成されます。コンテキストにより、権限を適用するプラットフォームの領域を識別および選択しやすくなります。




リソースは、ユーザ・インターフェースで表示される場所ではなく、プラットフォーム内で機能するコンテキストに従って分割されます。

本項の内容

- 226ページ「リソースおよびリソース・インスタンス」
- 227ページ「リソース操作のガイドライン」

リソースおよびリソース・インスタンス

[権限管理]のリソースには次のタイプがあります。リソース・ツリーでは、各リソースが異なるアイコンで表されます。

	リソース・コレクション(インスタンスを持つことができるリソース)
	リソースのインスタンス
	権限リソース・ツリーでインスタンスを持つことができないリソース

リソースのインスタンスは、プラットフォームで定義されている場合にのみ表示されます。リソースのインスタンスは、アプリケーションで定義した名前でもリソースの子オブジェクトとしてツリーに表示されます。システムでリソースのインスタンスが定義されると、リソース・コレクションは、これらのインスタンスの親リソースとして機能します。

リソース・ツリー階層でほかのリソースを含むリソースもあります(異なるデータ・コレクタのプロファイルなど)。このようなサブリソース・タイプの一部は、プラットフォームで定義されたリソースのインスタンスがある場合にのみ表示されます(プロファイル・リソース内のモニタおよびトランザクション・リソースなど)。

権限ツリーでインスタンスを持つことができないリソースは、次のタイプに分類されます。

- ほかのインスタンスやタイプのないシステム内の機能またはオプションであるリソース。

例：

異常値リソースでは、ユーザが異常値のしきい値を編集できるかどうかが決まります。これには、インスタンスはありません。

- インスタンスのあるリソース。権限は、このリソース・タイプにのみ適用でき、リソースのすべてにインスタンスに影響します。

例：

カテゴリ・リソースには、[エンド ユーザ管理]で定義されたすべてのカテゴリが含まれます。カテゴリ・リソースに**変更**権限が付与されると、ユーザはシステムで定義されたすべてのカテゴリを変更できます。特定のカテゴリの権限を付与または削除することはできません。これらの操作は、[エンド ユーザ管理]で定義されたすべてのカテゴリに対してのみ行うことができます。

リソースおよびインスタンスの例

権限階層でリソースおよびインスタンスがどのように表示されるのかの例として、[エンド ユーザ管理] コンテキスト内のアプリケーション・リソース・コレクションが挙げられます。アプリケーション・リソースにインスタンスが含まれるのは、システムでアプリケーションが定義されている場合だけです。一部のインスタンスは標準設定で定義されていますが、ほかのインスタンスはユーザが定義した場合にのみ存在します。システムでアプリケーションが定義されている場合、各アプリケーションは、アプリケーション・リソースのインスタンスとして表示されます。

BPM, RUM, 警告は、アプリケーションごとにプラットフォームで定義されるため、BPM, RUM, 警告リソースはアプリケーション・リソースの各インスタンスの下に表示されます。

アプリケーション・リソース・レベルに権限を適用できます。これにより、ユーザはシステムで作成されたすべてのアプリケーションにアクセスできます。ユーザのアクセスをユーザのタスクに関連する特定のアプリケーションに制限するには、それらの特定のアプリケーションに権限を適用します。また、アプリケーションごとに特定のリソースの権限を適用または削除することもできます。

操作	許可	グループ/ロール/親から許可を
追加	<input type="checkbox"/>	
変更	<input type="checkbox"/>	
表示	<input checked="" type="checkbox"/>	
削除	<input type="checkbox"/>	
実行	<input type="checkbox"/>	
フルコントロール	<input type="checkbox"/>	

操作名の上にマウスカーソルを移動すると、強調表示されているリソースに対して当該操作がどのように適用されるか

リソース操作のガイドライン

- Business Service Management リソースでは、BSM のすべてのコンテキストが参照されます。
- 操作ではなくロールのみを Business Service Management リソースに適用できます。詳細については、227ページ「ロール」を参照してください。
- サブリソースの権限を管理するには、最低でも選択したリソースの親の表示権限をユーザに付与する必要があります。
- 追加権限は、リソースのインスタンスではなくリソースにのみ付与します。
- ユーザがリソースのインスタンスを定義または作成する場合 (ビジネス・プロセス・プロファイルを作成する場合など)、このユーザにはそのリソースのインスタンスとすべての子リソースのフルコントロール権限があります。

ロール

BSM では、組織内の特定のユーザまたはグループに対するロールを使用して権限を適用できます。これらのロールには、事前に設定された一連のリソースおよびそれらのリソースに適用する操作セットが含まれます。

ロールはコンテキスト別に分類されます。コンテキストは、どのリソースと操作を事前に設定してロールに含めるかを定義します。各操作が特定のリソースにどのように適用されるかの詳細については、228ページ「操作」を参照してください。

ロールは特定のリソースのみに適用できます。

- 複数のコンテキストからのリソースを含むロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。**Business Service Management** は、すべてのコンテキストで最初のリソース・コレクションとして表示されます。
- すべてのリソースが1つのコンテキスト内にあるロールは、そのコンテキスト内の特定のリソースに適用できます。

ロールを適用できるリソースの詳細を含む、各ロールの詳細については、[254ページ「BSM 全体に適用するユーザ管理ロール」](#)を参照してください。

操作

操作を行う場合には、次のことに留意してください。

- リソースの集合に適用できる操作はすべて、そのリソースのすべてのインスタンスに適用されます。**追加**操作は例外で、リソースのインスタンスには適用できません。
- **フル・コントロール**操作には、リソースで使用できる他のすべての操作が自動的に含まれます。フル・コントロールが適用されると、他の操作が自動的に選択されます。
- **フル・コントロール**操作がリソースに適用されると、そのリソースまたはリソース・インスタンスの削除権限がユーザに付与され、他のユーザまたはグループにも権限を付与できます。
- リソースで使用できる操作の1つが**表示**操作である場合、使用可能な他のいずれかの操作を選択すると、**表示**操作も自動的に選択されます。

BSM で使用できる操作の詳細については、[288ページ「ユーザ管理操作」](#)を参照してください。

セキュリティ担当者

セキュリティ担当者は、システム内の機密情報を表示するセキュリティ権限のあるユーザです。一般的に、セキュリティ担当者は通常のBSM ユーザではなく、特定の機密レポート情報にアクセスできます。Real User Monitor では、セキュリティ担当者は機密データを隠す設定を指定できます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「[\[機密データ\]領域](#)」を参照してください。

通常、このユーザはBSMのほかの領域にはアクセスできません。

システムに1人のセキュリティ担当者のみを割り当てることができます。スーパーユーザ権限のあるユーザのみが、最初にセキュリティ担当者を割り当てることができます。その後、セキュリティ担当者として割り当てられたユーザのみが、別のユーザへのセキュリティ担当者の指名の譲渡、または独自のパスワードの変更を実行できます。スーパーユーザは、セキュリティ担当者のステータスを割り当てることができなくなります。

セキュリティ担当者を指名するには、ユーザ管理ツリーでユーザを強調表示し、[\[セキュリティオフィサー\]](#)アイコンをクリックします。ユーザ・インターフェースの詳細については、[319ページ「\[グループ/ユーザ\]表示枠」](#)を参照してください。

システム内のほかのユーザは、セキュリティ担当者として割り当てられたユーザを削除できません。現在のセキュリティ担当者であるユーザをシステムから削除するには、そのセキュリティ担当者が別のユーザにセキュリティ担当者の指名を割り当てる必要があります。

セキュリティ担当者がシステムにアクセスできなくなり、別のユーザにセキュリティ担当者の指名を再割り当てできなくなる予想外の状況では、管理者がJMXコンソールを使用して、そのユーザからセキュリティ担当者の指名をクリアできます。このタスクの実行方法の詳細については、[244ページ「JMXコンソールを使用してセキュリティ担当者のステータスを削除する方法」](#)を参照してください。

グループとユーザ階層

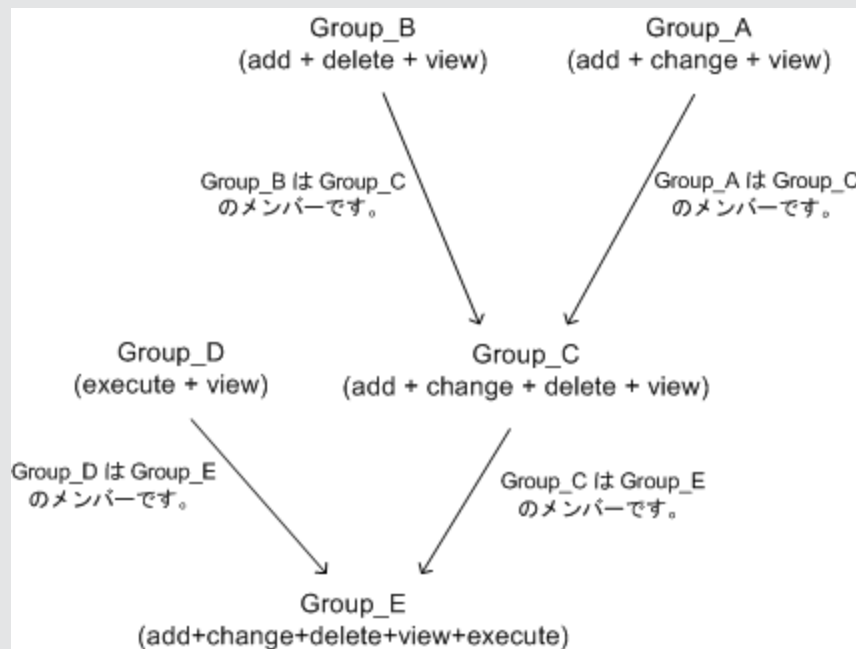
グループをネストすると、ユーザとグループの権限を簡単に管理できます。アクセス権限を1つずつ個別のグループに割り当てる代わりに、グループをネストして直接の親の権限を継承することができます。

グループのネスト時には、次のことに注意してください。

- 1つのグループは、複数のグループのメンバーになることができます。
- ネストされていない通常のグループとネストされたグループでは、権限が同じ方法で割り当てられます。ネストされたグループの権限の変更は、ユーザが次にログインしたときに有効になります。
- ネストされたグループのレベル数には上限はありません。

例：

次の例の Group_A と Group_B は、Group_C にネストされたメンバーです。Group_C は、両方のグループを組み合わせた権限を継承します。Group_C と Group_D は、Group_E にネストされたメンバーです。Group_E は、Group_C と Group_D の権限を直接継承し、Group_A と Group_B の権限を間接的に継承します。



ネストされたグループで権限の追加または削除を行うと、ネストされたグループの直接の親に変更内容が自動的に反映し、引き続き先に伝搬されます。たとえば、Group_B で delete 権限を削除すると、Group_C の権限は add + change + view になります。Group_E 権限は add + change + view + execute になります。

ネストされたグループの循環は無効です。たとえば、Group_A が Group_B のメンバーであり、Group_B が Group_C のメンバーであるとし、Group_C は Group_A のメンバーになることはできません。

注: 上記の例のすべての権限は、同じリソースを示しています。

ネストされたグループの設定の詳細については、[241ページ「グループとユーザ階層の設定方法」](#)を参照してください。

ユーザ・メニューのカスタマイズ

ユーザ・メニューを次のようにカスタマイズできます。

- BSM にログインしたときに特定のユーザに表示される標準設定のコンテキストを選択。
- BSM のそれぞれの場所で特定のユーザに表示される最初のページを指定。
- ユーザごとに非表示にするコンテキストおよびアプリケーション全体を選択。
- BSM 全体のページで利用可能なタブとオプションを指定。

最初のページ、メニュー項目、タブをカスタマイズすることで、BSM の特定のユーザに関連する領域のみをインタフェースに表示できます。

ユーザ・メニューのカスタマイズの詳細については、[247ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ方法」](#)を参照してください。

ユーザ・メニューのカスタマイズは[カスタマイズ]タブで行います。[カスタマイズ]タブのユーザ・インタフェースの詳細については、[309ページ「\[カスタマイズ\]タブ\(ユーザ管理\)」](#)を参照してください。

注: サービス状況およびオペレーション管理アプリケーションでは、アプリケーション・レベルでユーザ・アクセスを有効または無効にできますが、特定のページに対するユーザ・アクセスは定義できません。

ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー

このタスクでは、ユーザ管理アプリケーションの推奨作業順序について説明します。ほかの論理順序でユーザ管理設定を行うこともできます。

このタスクに関連する使用例シナリオについては、234ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — 使用例のシナリオ」を参照してください。


1. 前提条件

ユーザ管理ポータルを設定する前に、BSM で必要なユーザ、グループ、関連する権限レベルを詳細に計画して定義する必要があります。たとえば、スプレッドシートに次の情報を入力します。

- システムを管理するのに必要なユーザやサービス状況 およびレポートにアクセスするエンド・ユーザのリスト。該当するユーザの詳細(ユーザ名、ログイン名、初期パスワード、ユーザのタイム・ゾーンなど)を収集します。この段階でユーザを定義する必要はありませんが、ユーザの連絡先情報(電話番号、ページャ、電子メール・アドレスなど)も収集しておくくと便利です(連絡先情報は、HP Software-as-a-Service カスタマの場合に必要になります)。
- ユーザを各モード(オペレーションおよびビジネス)に分類する必要がある場合、各ユーザをどのユーザ・モードに分類するのかを指定します。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「ユーザ・モードのKPI」を参照してください。
- 各グループに属するユーザとロールのリスト(複数のユーザに類似するシステム権限が必要な場合)。
- 各ユーザまたはグループに必要な権限。[権限管理]ページを確認して、権限を付与できる各種コンテキストおよびリソースを把握することでこのプロセスが容易になります。詳細については、225ページ「権限のリソースについて」を参照してください。

2. グループの作成

次のように[グループ/ユーザ]表示枠でグループを作成します。

- a. 既存のグループまたはルート・グループを選択したら、[参照タブ]で[新しいグループ/ユーザ]ボタン  をクリックします。
- b. [グループの作成]を選択し、[グループの作成]ダイアログ・ボックスでグループの情報を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、308ページ「[グループの作成]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3. グループへの権限の割り当て

BSM では、システムに定義されている特定のリソースやそのインスタンスのグループおよびユーザに権限を適用できます。タスクの詳細については、240ページ「権限の割り当て方法」を参照してください。

4. ユーザの作成

ユーザを作成し、適切なグループに配置します。ユーザ・インタフェースの詳細については、319ページ「[グループ/ユーザ]表示枠」を参照してください。

5. ユーザおよびグループの階層の設定

[階層]タブで、ユーザをグループに追加したり、ほかのグループ内でグループをネストさせたりし

て、ユーザおよびグループの階層を設定します。タスクの詳細については、241ページ「グループとユーザ階層の設定方法」を参照してください。

6. ユーザ設定のカスタマイズ

[カスタマイズ] タブで、ユーザの各種コンテキストで表示されるメニュー項目をカスタマイズします。タスクの詳細については、247ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ方法」を参照してください。

7. 受信者の設定および管理

1つ以上の通知方法、警告通知に使用するテンプレート、およびレポートを受信するための通知スケジュールを定義して、受信者を作成します。受信者の作成および既存の受信者の管理は、[受信者] ページで行います。ユーザ・インターフェースの詳細については、325ページ「受信者の設定および管理方法」を参照してください。

ユーザおよび権限の設定方法 — 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、ユーザ管理ポータルでユーザおよびグループを設定する方法について説明します。

注: このシナリオに関連するタスクについては、232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」を参照してください。

1. ユーザおよびグループの詳細な計画


Jane Smith は、NewSoft 社のシステム管理者で、BSM を使用できるユーザやグループ、およびサービス状況やレポートにアクセスするエンド・ユーザを設定したいと考えています。これを行う前に、関連するスタッフ・メンバに次の準備情報を要求します。

- ユーザ名
- ログイン名
- 初期パスワード
- ユーザのタイム・ゾーン
- 連絡先情報(電話番号, ページャ, 電子メール・アドレスなど)

注: 連絡先情報は、HPSoftware-as-a-Service カスタマの場合にのみ必要になります。

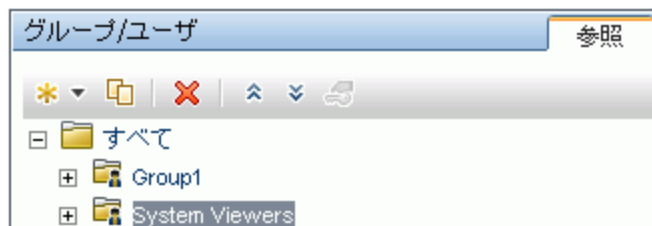
この情報を使用してシステム変更者の権限レベルがあるグループと、システム閲覧者の権限レベルがあるグループを作成することを決定します。また、いずれかのユーザを SiteScope 管理者の追加のロールに割り当てます。

2. グループの作成

Jane は、付与した権限レベルに従ってユーザをグループ化します。[グループ/ユーザ]表示枠の [新しいグループ/ユーザ] ボタン  をクリックし、次のグループを作成します。

- System Viewers
- System Modifiers

[グループ/ユーザ]表示枠は次のように表示されます。

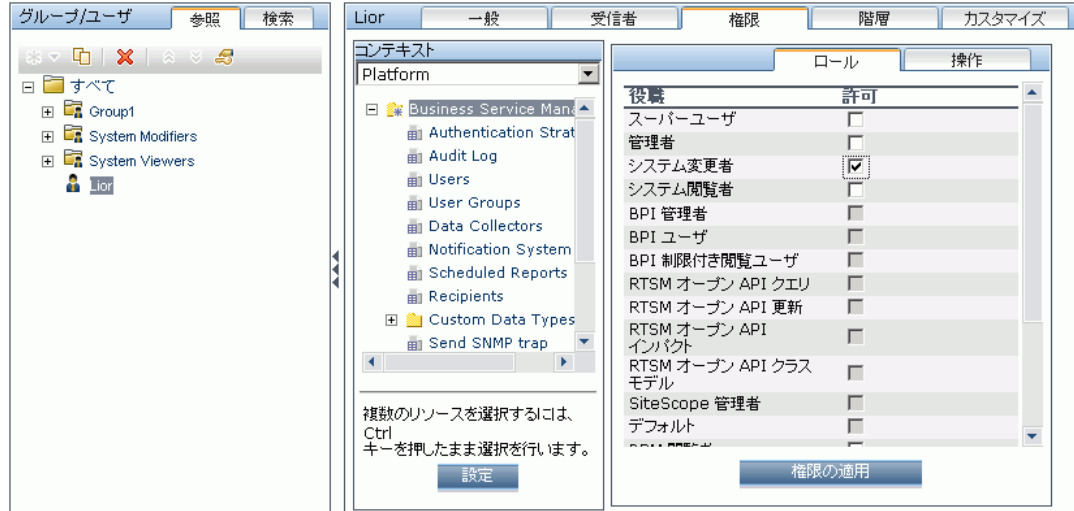


3. グループへの権限の割り当て


グループを作成したら、Jane は該当する権限レベルをグループに割り当てます。[グループ/ユーザ]表示枠で[System Modifiers]を選択した後で、[情報]表示枠の[権限]タブに移動し、任意のコンテキストのルート・インスタンス(Business Service Management)を選択します。

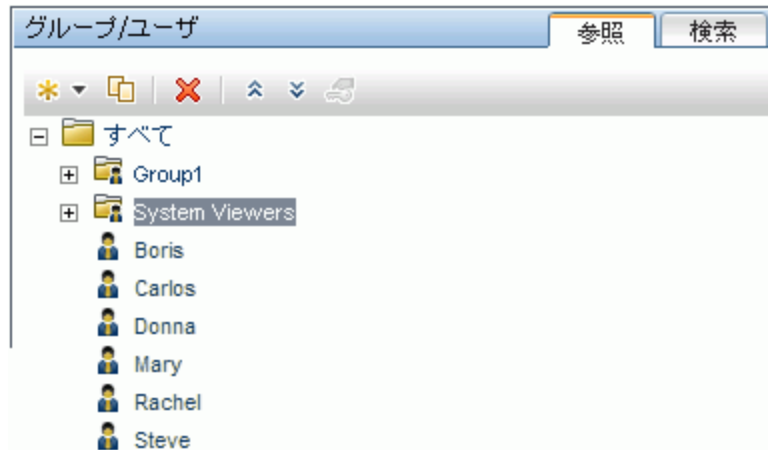
[ロール] タブで, [System Modifiers] を選択し, [権限の適用] をクリックします。[グループ/ユーザ] 表示枠で [System Viewers] を選択して [ロール] タブで [System Viewers] を選択し, [権限の適用] をクリックします。

[権限] タブには, 次のような結果が表示されます。



4. ユーザの作成

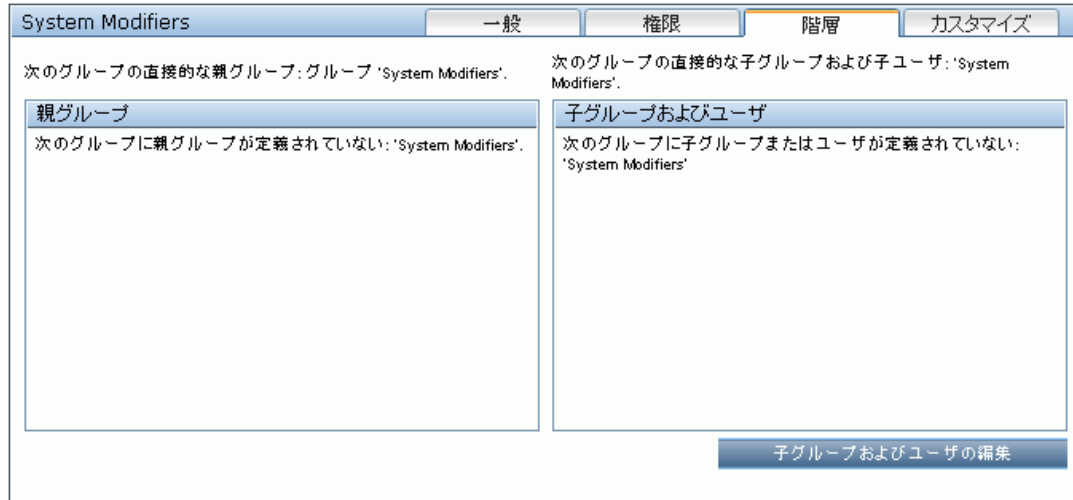
Jane は, 個々のユーザの目的の権限レベルに従ってグループ内でネストさせるユーザを作成する必要があります。[グループ/ユーザ] 表示枠で [新しいグループ/ユーザ] ボタン  をクリックし, ルート・グループ([すべて])で, [ユーザの作成] を選択して新しい各ユーザを設定します。[グループ/ユーザ] 表示枠は次のように表示されます。



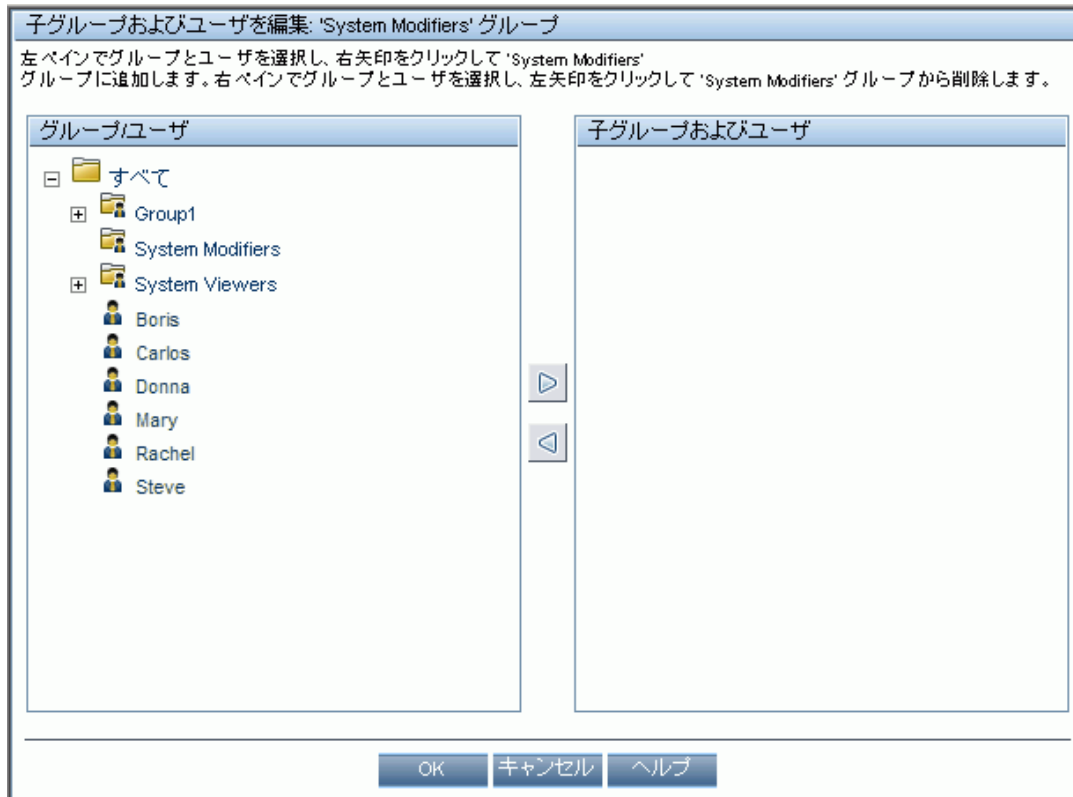
5. ユーザおよびグループの階層の設定

Jane は, BSM にアクセスできるユーザを作成したので, 適切なグループ内でユーザをネストさせて権限レベルを割り当てます。

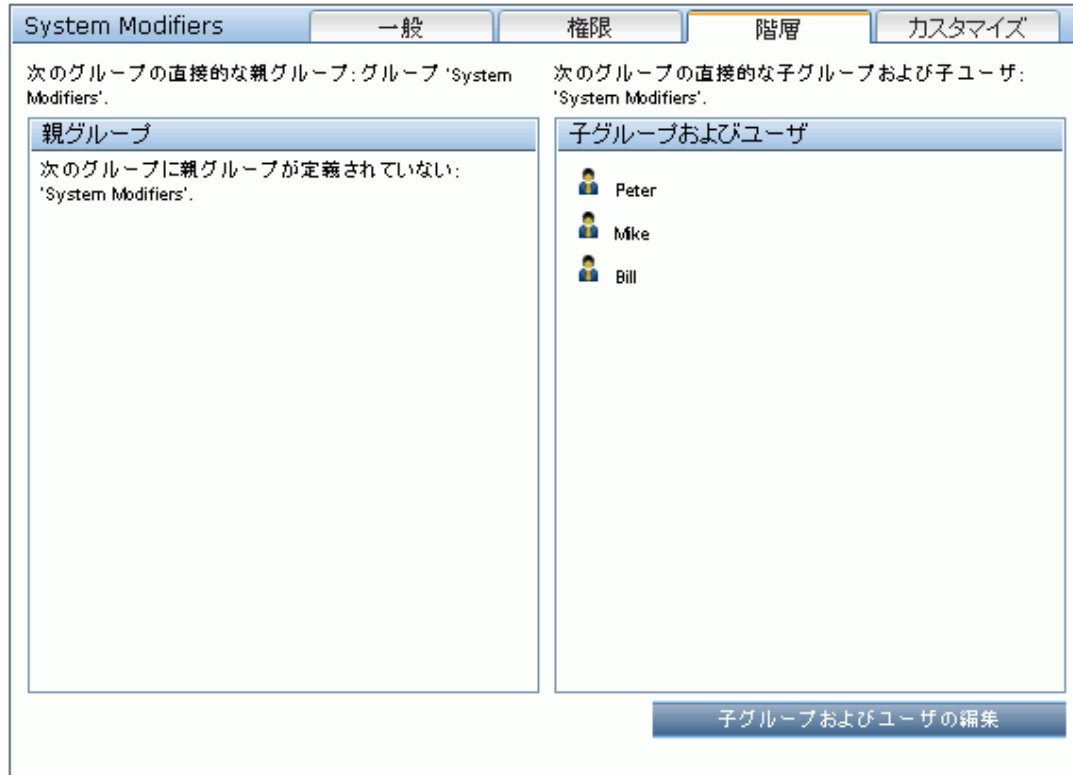
[グループ/ユーザ] 表示枠から [System Modifiers] グループを選択し, このグループ内で適切なユーザをネストさせます。Jane は, ページの右側にある [情報] 表示枠から [階層] タブを選択します。[階層] タブには, 次のように [System Modifiers] グループに子グループがないことが示されます。



Jane は、[子グループおよびユーザの編集] ボタンをクリックして [子グループおよびユーザの編集] ダイアログ・ボックスを開きます。



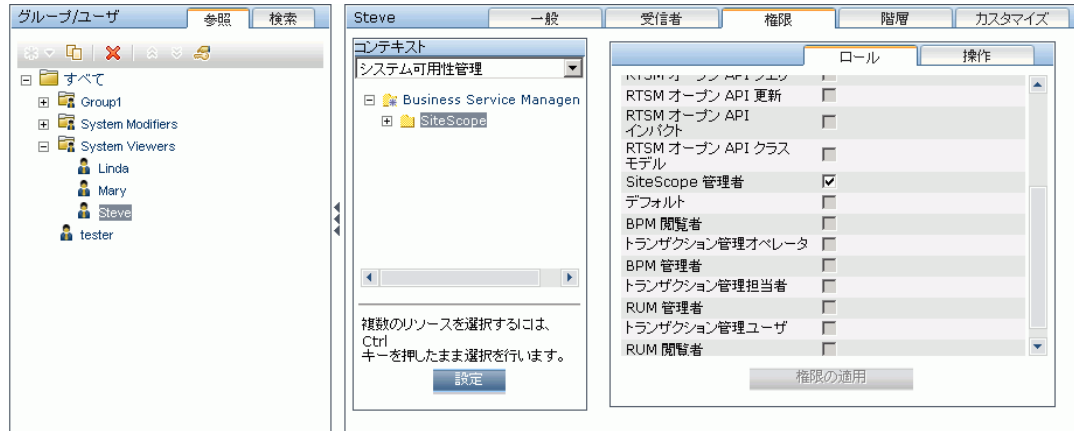
次に、[グループ/ユーザ] 表示枠から該当のユーザを選択し、右矢印をクリックしてユーザを [子グループおよびユーザ] 表示枠に移動します。[階層] タブには、次のように [System Modifiers] グループ内でこれらのユーザがネストされていることが示されます。



同じ手順を実行して該当のユーザを[System Viewers]グループ内でネストさせたら、[グループ/ユーザ]表示枠は次のように表示されます。



Steve には、追加された SiteScope 管理者の権限レベルがあるので、Jane は追加された SiteScope 管理者の権限レベルを付与するユーザのユーザ名を[グループ/ユーザ]表示枠で選択し、[権限]タブで[システム可用性管理]コンテキストを選択します。リソースを選択したら、[ロール]タブから[SiteScope 管理者]を選択し、[権限の適用]をクリックします。この結果、次のような画面が表示されます。

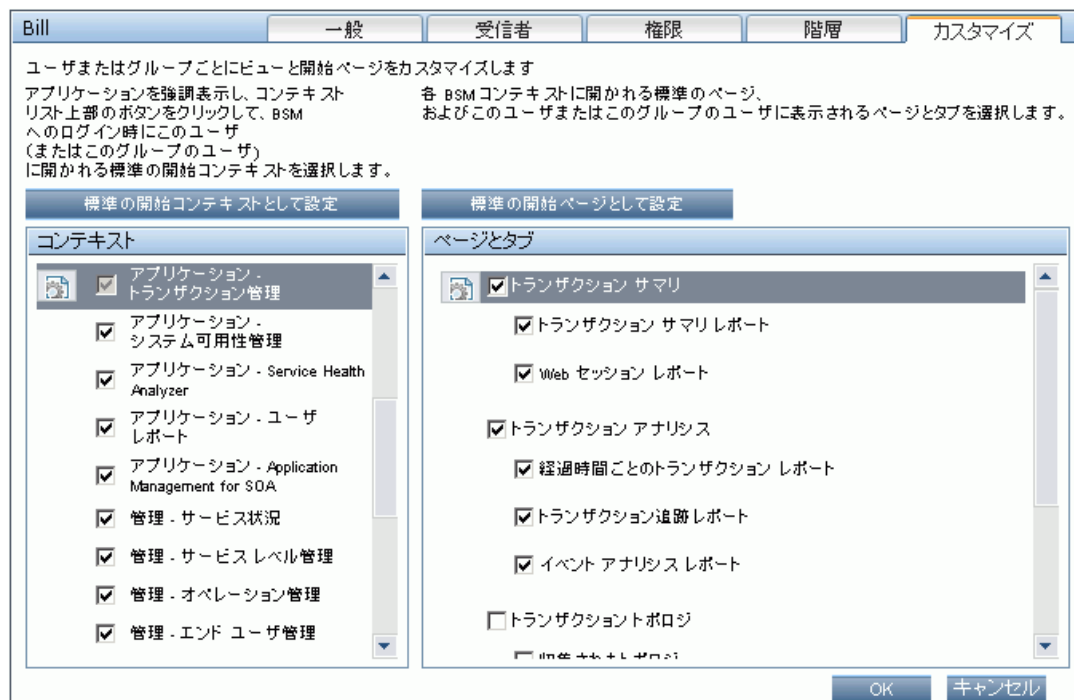


6. ユーザ設定のカスタマイズ

Jane は、BSM にログインしたときに各 ユーザに表示されるページと、BSM 全体のページで使用できるメニュー項目を設定します。各 ユーザを選択したら、[カスタマイズ] タブをクリックして次のパラメータを設定します。

- BSM にログインしたときにユーザに表示される開始 コンテキスト。たとえば、[管理 - エンド ユーザ管理] などです。
- 選択したコンテキストでユーザに表示される開始コンテキスト内のページ。たとえば、[レポート] などです。
- 該当するチェック・ボックスを選択またはクリアして表示できるようになる各 BSM ページのページおよびタブ。たとえば、ユーザがログインしたときに [アプリケーション - トランザクション管理] コンテキストに表示されないように、[トランザクションポロジ] および [ユーザが作成したレポート] ページはクリアされています。

[カスタマイズ] タブには、次のように行われた設定が表示されます。



カスタマイズされた設定に従ってユーザに表示されるログイン・ページは次のようになります。



権限の割り当て方法

このタスクでは、ユーザ管理でグループおよびユーザ権限を設定する方法について説明します。設定した権限が適用されるには、権限が付与または削除されたユーザがログアウトして、再度 BSM にログインする必要があります。

1. 前提条件

システムにグループおよびユーザが設定されていることを確認します。ユーザ・インタフェースの詳細については、319ページ「[グループ/ユーザ表示枠](#)」を参照してください。

2. グループまたはユーザの選択

ページの左側の[\[グループ/ユーザ\]](#)表示枠から、グループまたはユーザを選択します。

3. コンテキストの選択

ページ中央のリソース・ツリーの上にあるコンテキスト・リスト・ボックスから、コンテキストを選択します。利用可能なコンテキストの詳細については、314ページ「[リソース・ツリー表示枠](#)」を参照してください。

4. ロールの割り当て

権限はロールを使用して割り当てます。ページの右側の[\[ロール\]](#)タブで、選択したグループまたはユーザにロールを割り当てます。利用可能なロールの詳細については、254ページ「[BSM 全体に適用するユーザ管理ロール](#)」を参照してください。

5. 操作の割り当て(任意)

必要に応じて、グループまたはユーザが BSM で実行できる個々の操作を[\[操作\]](#)タブで割り当てることができます。利用可能な操作の詳細については、288ページ「[ユーザ管理操作](#)」を参照してください。

6. 権限の設定(任意)

必要に応じて、リソース・ツリーの下部で[\[設定\]](#)をクリックします。[\[権限設定の適用\]](#)ダイアログ・ボックスが開き、現在のセッションで適用する権限の設定を指定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、314ページ「[リソース・ツリー表示枠](#)」を参照してください。

グループとユーザ階層の設定方法

このタスクでは、ユーザとグループ階層を設定する方法について説明します。[階層]タブのユーザ・インタフェースの詳細については、312ページ「[階層]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。

1. 前提条件

[グループ/ユーザ]表示枠で少なくとも1つのグループと1人のユーザが設定済みであることを確認します。ユーザ・インタフェースの詳細については、319ページ「[グループ/ユーザ]表示枠」を参照してください。

2. グループとユーザ階層の表示

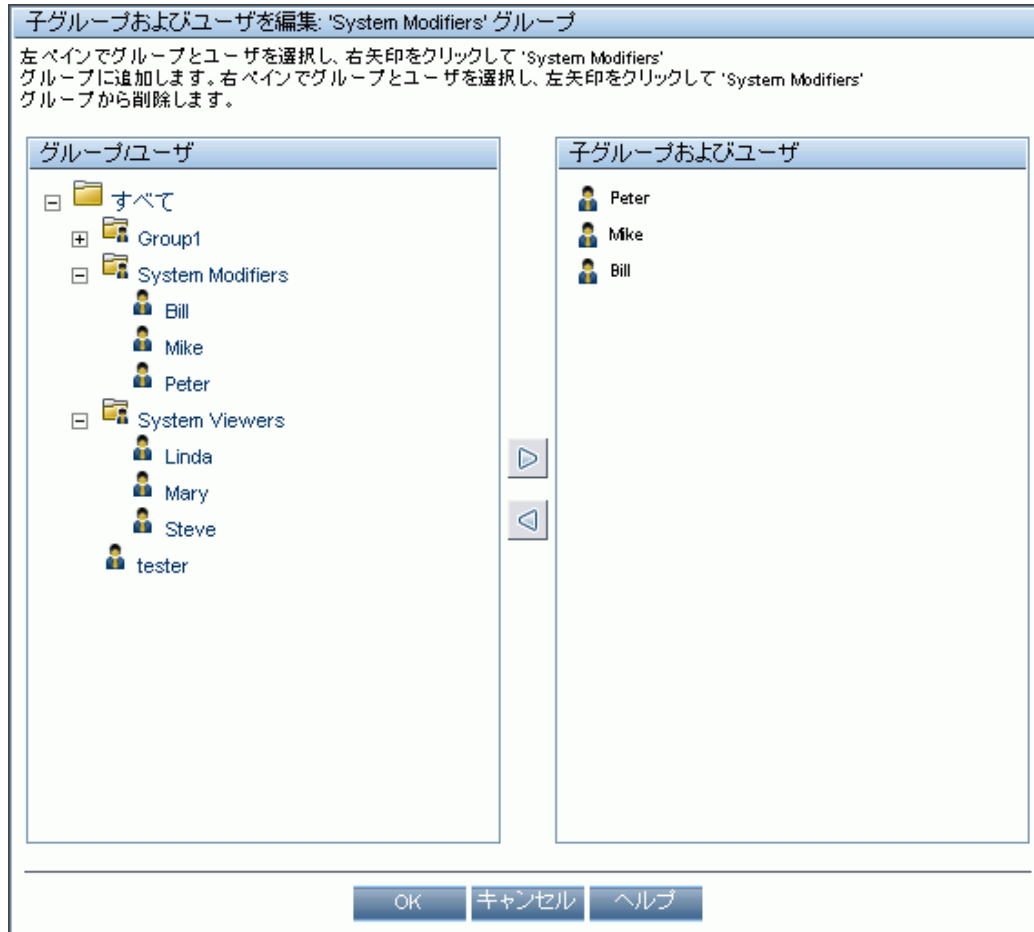
[グループ/ユーザ]表示枠でグループまたはユーザを選択し、ページの右側にある[階層]タブを選択してグループまたはユーザの親グループと子グループを表示します(該当する場合)。

3. グループとユーザのネスト

[グループ/ユーザ]表示枠でグループを選択し、グループとユーザを選択してその下にネストします。

- a. 画面の左側にある[グループ/ユーザ]表示枠の[参照]タブで、グループまたはユーザをクリックします。
- b. 画面の右側にある[階層]タブをクリックします。
- c. 管理するグループを[グループ/ユーザ]タブで選択し、[子グループおよびユーザの編集]ボタンをクリックします。[子グループおよびユーザの編集]ウィンドウが開きます。

[子グループおよびユーザの編集]ウィンドウを次に示します。



- d. ユーザを割り当てグループをネストするには、[グループ/ユーザ]表示枠でユーザまたはグループを選択し、右矢印をクリックしてグループまたはユーザを[子グループおよびユーザ]表示枠に移動します。

ユーザの割り当てを解除しネストされたグループを削除するには、[子グループおよびユーザ]表示枠でユーザまたはグループを選択し、左矢印をクリックします。

4. 結果

ネストされたグループとユーザが、[階層]タブの[子グループおよびユーザ]表示枠に表示されません。

例：

The screenshot displays the 'System Modifiers' user management interface. At the top, there are four tabs: '一般' (General), '権限' (Permissions), '階層' (Hierarchy), and 'カスタマイズ' (Customization). The '階層' tab is currently selected. Below the tabs, there are two main sections:

- 親グループ (Parent Groups):** This section contains the text: '次のグループの直接的な親グループ: グループ 'System Modifiers''. Below this, it states: '次のグループに親グループが定義されていない: 'System Modifiers''.
- 子グループおよびユーザー (Child Groups and Users):** This section contains the text: '次のグループの直接的な子グループおよび子ユーザー: 'System Modifiers''. Below this, there is a list of three users: Peter, Mike, and Bill, each represented by a small person icon.

At the bottom right of the interface, there is a button labeled '子グループおよびユーザーの編集' (Edit Child Groups and Users).

JMX コンソールを使用してセキュリティ担当者のステータスを削除する方法

このタスクでは、JMX コンソールを使用してユーザからセキュリティ担当者のステータスを削除する方法について説明します。セキュリティ担当者が自身のステータスを削除できない予想外の状況で、この処理が必要になる可能性があります。セキュリティ担当者が割り当てられると、[ユーザ管理] インタフェース内でほかのユーザはこのステータスの削除を実行できません。このトピックの詳細については、228 ページ「セキュリティ担当者」を参照してください。

セキュリティ担当者を削除するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザで JMX コンソールの URL(`http://<ゲートウェイまたはデータ処理サーバの名前>:8080/jmx-console/`) を入力します。
2. JMX コンソールの認証資格情報を入力します。認証資格情報がわからない場合、システム管理者にお問い合わせください。
3. 次の項目を探します。
 - ドメイン名: **Foundations**
 - サービス: **Infrastructure Settings Manager**
 - 設定: **setCustomerSettingDefaultValue**
4. パラメータ値を次のように変更します。
 - コンテキスト名: 「`security`」と入力
 - 設定名: 「`secured.user.login.name`」と入力
 - 新規値: 空白のまま
5. [Invoke] をクリックします。

JMX コンソールを使用したユーザ情報のエクスポートおよびインポート方法

このタスクでは、JMX コンソールを使用してユーザ、ロール、権限情報をソース・システムからターゲット・システムにコピーする方法について説明します。たとえば、新しいBSM データベースを設定する必要がある場合は、ユーザ情報を既存のデータベースからコピーする必要があります。

エクスポートするコンテキストの設定

エクスポートに含めるコンテキストを制限できます。JMX コンソールで使用できるコンテキストのリストを表示するには、次の手順を実行します。

1. ブラウザで、次の URL を入力します。
http://<ソース・サーバ>:8080/jmx-console/HtmlAdaptor?action=inspectMBean&name=Topaz%3AService%3DAuthorization+Service
2. JMX コンソールのユーザ名とパスワードを入力します。
3. [JMX MBean View] ページで、**java.util.Set listAuthorizationContexts()** の下にある[Invoke] ボタンをクリックします。JMX コンソールに、TAS のすべてのコンテキストが表示されます。

エクスポートに含めるコンテキストを制限する必要がある場合は、次の手順を実行します。

1. ソース・サーバで **HPBSM\conf\itas\exportedContexts.properties** ファイルを開きます。
2. **contexts-to-export** プロパティを変更します。
contexts-to-export プロパティ内のコンテキストは、スペースなしのカンマでのみ区切る必要があります。
3. 変更内容を保存します。

エクスポート

JMX コンソールを使用して、ユーザ、ロール、権限情報の.xml ファイルを含む.zip ファイルを作成します。

1. ブラウザで、次の URL を入力します。
http://<ソース・サーバ>:8080/jmx-console/HtmlAdaptor?action=inspectMBean&name=Topaz%3AService%3DAuthorization+Service+Data+Import+Export
2. [JMX MBean View] ページで、**java.util.Set listAuthorizationContexts()** の下にある[Invoke] ボタンをクリックし、ブラウザの戻るボタンをクリックして[JMX MBean View] ページに戻ります。
3. [ParamValue] フィールドの **void exportAllTasEntities()** の下で、ソース・サーバでのエクスポート・ファイルの場所とファイル名を入力します。ファイル名には、**C:\HPBSM\export.zip** のように.zip 拡張子を付ける必要があります。
4. **void exportAllTasEntities()** の下にある[Invoke] ボタンをクリックします。

転送

.zip エクスポート・ファイルをソース・サーバからターゲット・サーバにコピーする必要があります。

1. ソース・サーバで、上記で定義したエクスポート・ファイルを参照します。
2. ファイルをターゲット・サーバにコピーします。

インポート

ユーザ, ロール, 権限を .zip ファイルからターゲット BSM システムにインポートします。

注意: ユーザおよびグループ情報をインポートする前に, インポートする情報と互換性のないユーザ情報でレポート, プロファイル, モニタなどのリソースがターゲット・サーバで作成されていないことを確認します。

1. ブラウザで, 次の URL を入力します。
http://<ターゲット・サーバ>:8080/jmx-console/HtmlAdaptor?action=inspectMBean&name=Topaz%3AService%3DAuthorization+Service+Data+Import+Export
2. JMX コンソールのユーザ名とパスワードを入力します。
3. [ParamValue] フィールドの **void importAllTasEntities()** の下で, エクスポート・ファイルの場所とファイル名を入力し, [Invoke] ボタンをクリックします。

ユーザ・メニューのカスタマイズ方法

このタスクでは、BSM へのログイン時にユーザに対して表示される標準ページのカスタマイズ方法、およびシステム全体のページで使用できるメニュー項目の選択方法について説明します。

ヒント: このタスクに関連する使用例シナリオについては、249ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ方法 — 使用例のシナリオ」を参照してください。

個々のユーザまたはグループ内のすべてのユーザ(親グループの一部であるサブグループのすべてのメンバを含む)に対して、機能へのアクセスを制限したり、標準ページを設定したりできます。機能またはレポートへのアクセス制限をグループに対して行うと、そのグループのすべてのメンバがその機能にアクセスできなくなり、個々のユーザに対して設定を変更できなくなります。

グループ設定が適用されたグループにユーザまたはサブグループを追加すると、グループに適用されたアクセス制限が、サブグループのユーザまたはメンバに自動的に適用されます。

1. 前提条件

[グループユーザ]表示枠で少なくとも1人のユーザが設定済みであることを確認します。ユーザ・インタフェースの詳細については、319ページ「[グループユーザ]表示枠」を参照してください。

2. ユーザの選択

ページおよびメニュー項目をカスタマイズする[グループユーザ]表示枠の[参照]タブでユーザまたはグループを選択し、[カスタマイズ]タブを選択します。

3. 標準のコンテキストの割り当て

BSM へのログイン時に標準の開始コンテキストとしてこのユーザまたはグループ内のすべてのユーザに表示するコンテキストを[コンテキスト]表示枠から選択し、[標準の開始コンテキストとして設定]をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、309ページ「[カスタマイズ]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。

4. コンテキストとアプリケーションの表示 / 非表示の設定

[コンテキスト]表示枠で、このユーザまたはグループ内のすべてのユーザに対して表示しないコンテキストとアプリケーションのチェック・ボックスを選択解除します。標準設定では、すべてのコンテキストとアプリケーションが選択されます。

5. コンテキストのページとタブの選択

[ページとタブ]表示枠で、選択したコンテキストでユーザまたはグループに対して表示するページとタブのチェック・ボックスを選択します。ユーザまたはグループに対して表示しないページとタブについては、チェック・ボックスを選択解除します。


注: サービス状況およびオペレーション管理アプリケーションでは、アプリケーション・レベルでユーザ・アクセスを有効または無効にできますが、特定のページに対するユーザ・アクセスは定義できません。

6. 標準の開始ページの割り当て

選択したコンテキストに対して標準の開始ページとするページまたはタブを選択し、[標準の開

始 ページとして設定]をクリックします。

7. 結果

標準の開始 ボタン  は、標準の開始 コンテキストとページの横に表示されます。アプリケーションとコンテキストは、[コンテキスト]表示 枠で選択したユーザに対して表示されます。ページとタブは、[ページとタブ]表示 枠で選択したユーザに対して表示されます。

ユーザ・メニューのカスタマイズ方法 — 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、個々のユーザのユーザ・メニューをカスタマイズする方法について説明します。

注: このシナリオに関連するタスクについては、247ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ方法」を参照してください。

1. ユーザの選択

ABC 保険会社の管理者である Mary は、BSM の[ユーザ管理]セクションで複数のユーザを作成しています。Mary は、ユーザ John Smith は BSM の特定のページとタブのみを表示でき、John Smith が BSM にログインするときに特定のページが画面に表示されるようにすることを決定します。

2. 標準のコンテキストの割り当て

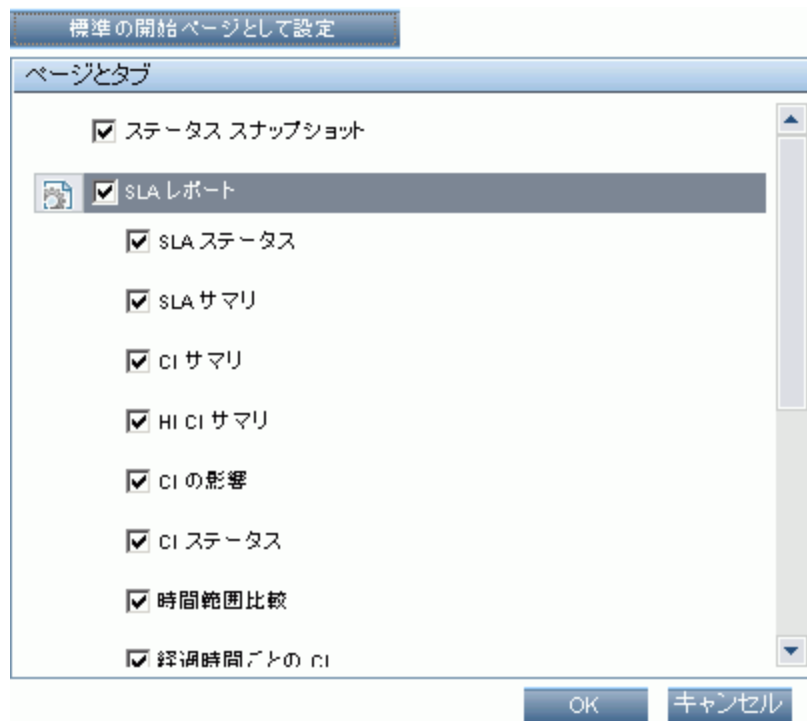
John の ABC における主な役割はサービス・レベル管理に関連しているため、Mary は[アプリケーション - サービスレベル管理] ページを標準の開始コンテキストとして指定します。Mary は、[コンテキスト]表示枠で[アプリケーション - サービスレベル管理]を選択し、[標準の開始コンテキストとして設定]をクリックします。次の図に示すように[アプリケーション - サービスレベル管理]コンテキストが標準の開始コンテキストとして指定され、標準エントリのアイコンが表示されます。



3. コンテキストのページとタブの選択

John はサービス停止レポートの表示を許可されていないため、このオプションは[ページとタブ]表示枠でクリアされています。残りのページとタブは、John が BSM にログインしたときに表示されるようにチェックが付いています。SLA レポートは ABC 保険で最も優先度が高いため、Mary はこれを最初のページに指定して、John がログイン時に確認できるようにします。[ページとタブ]表

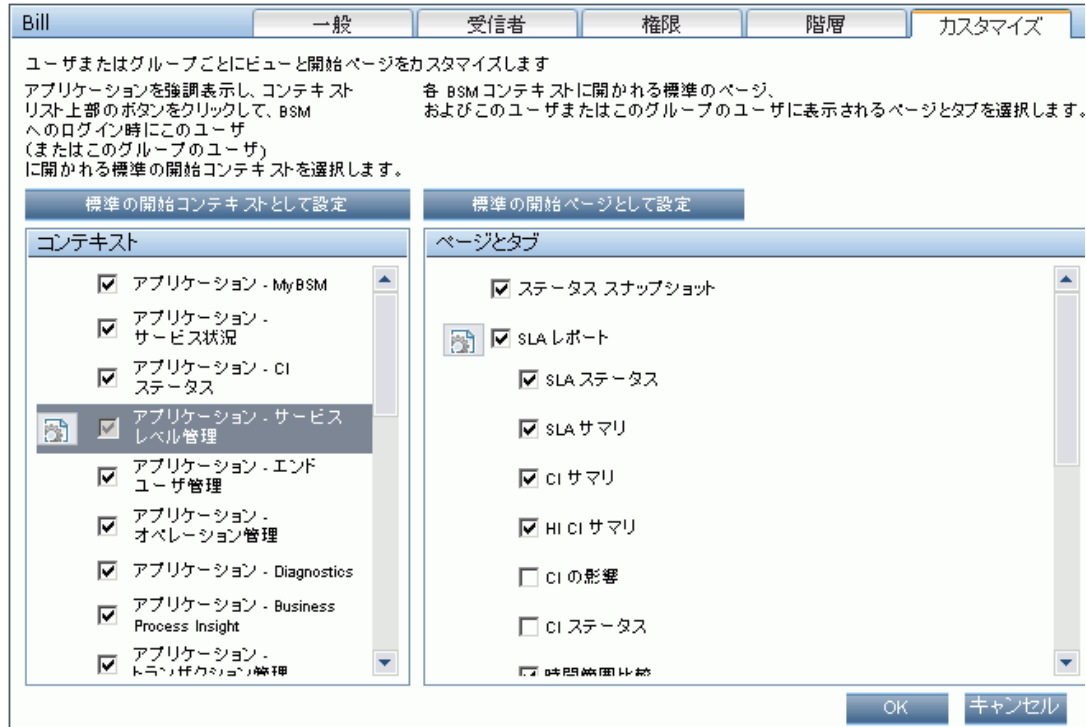
示枠で[SLA レポート]を選択し、[標準の開始ページとして設定]をクリックします。次の図に示すように[SLA レポート]が標準の開始ページとして指定され、標準エントリのアイコンが表示されます。



4. 結果

John Smith が BSM にログインしたときに開くコンテキストは、[アプリケーション]メニューの[サービスレベル管理]コンテキストです。[SLA レポート]ページが開き、[ステータス スナップショット]、[警告]、[SLA 管理]ページも使用できます。

次のように[ユーザ管理]で設定した[カスタマイズ]タブが表示されます。



BSM のログイン時に John に表示される画面 :



カスタム・ページまたは SMS サービス・プロバイダの追加方法

ページまたは SMS サービス・プロバイダが標準設定プロバイダ・リストに表示されておらず、プロバイダで電子メール・ゲートウェイを使用する場合、プロバイダを BSM に手動で追加できます。手動で追加した後にプロバイダがリストに表示されます。

電子メール・ゲートウェイを使用するプロバイダを追加するには、管理データベースに手動でゲートウェイ情報を追加します。必要に応じて、データベース管理者にサポートを依頼します。

電子メール・ゲートウェイを使用するプロバイダを追加するには、次の手順を実行します。

1. 管理データベースで [NOTIFICATION_PROVIDERS] テーブルを開きます。
2. [NP_NOTIFICATION_PROVIDER_NAME] 列で、リストの最後にプロバイダ名を追加します。
[受信者のプロパティ] ウィザードの [SMS] タブで開くプロバイダ・リストに表示させる名前を追加します。詳細については、[335ページ「\[SMS\] タブ」](#)を参照してください。
プロバイダに自動的に割り当てられた ID 番号をメモします。
3. [NOTIFICATION_PROVIDERS] テーブルを閉じ、[NOTIFPROVIDER_NOTIFTYPE] テーブルを開きます。
4. [NN_NOTIF_PROVIDER_ID] 列で、新しいプロバイダに割り当てられた ID 番号を追加します。
5. [NN_NOTIF_TYPE_ID] 列で、次のいずれかの通知タイプをプロバイダに割り当てます。
 - 102 - ページ・サービス・プロバイダ用
 - 101 - SMS サービス・プロバイダ用
6. [NOTIFPROVIDER_NOTIFTYPE] テーブルを閉じ、[NOTIFICATION_PROVIDER_PROP] テーブルを開きます。
7. [NPP_NOTIFICATION_PROVIDER_ID] 列で、新しいプロバイダに割り当てられた ID 番号を追加します。
2つの連続する行にこの ID 番号を追加します。
8. [NPP_NPROVIDER_PROP_NAME] および [NPP_NPROVIDER_PROP_VALUE] 列で、そのプロバイダ用の次の新しいプロパティ名と値を連続して入力します(例として既存のエントリを参照)。

プロパティ名	プロパティ値	説明
EMAIL_SUFFIX	<電子メール・サフィックス>	ゲートウェイの電子メール・サフィックス。たとえば、ゲートウェイの電子メール・アドレスが 12345@example.com の場合、EMAIL_SUFFIX のプロパティ値として example.com を入力します。

プロパティ名	プロパティ値	説明
EMAIL_MAX_LEN	<最大長>	電子メール・メッセージの本文の最大メッセージ文字数。たとえば, 500。 この値を決定するときに, サービス・プロバイダによる最大長の制限に加えて, ページャまたは携帯電話の制限も考慮します。

9. [NPP_NPROVIDER_PROP_DATATYPE_ID]列で, 次のように ID 値を指定します。
 - EMAIL_SUFFIX の場合 : 1
 - EMAIL_MAX_LEN の場合 : 2
10. BSM を再起動します。

BSM 全体に適用するユーザ管理ロール

次のロールは、BSM 内のすべてのコンテキストで適用できます。ロールを適用できるリソースの詳細については、次の各ロールの説明を参照してください。

特定のコンテキストに対してのみ適用できるロールの詳細については、284ページ「特定のコンテキストに適用するユーザ管理ロール」を参照してください。

スーパーユーザ

スーパーユーザ・ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用可能です。

このロールには、すべてのコンテキスト内のすべてのリソースに対するすべての利用可能な操作が含まれます。スーパーユーザのみが別のユーザにスーパーユーザ・ロールを適用できます。

注意: 標準設定のスーパーユーザは、UCMDB WS API から Business Service Management への書き込み権限はありません。その目的用の特定のロールがあります。詳細については、284ページ「特定のコンテキストに適用するユーザ管理ロール」および284ページ「特定のコンテキストに適用するユーザ管理ロール」を参照してください。

管理者

管理者ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

管理者は、システムへのプロファイルの追加、およびそれらのプロファイルに関連するリソースの管理を可能にする一連の権限があります。プロファイルが追加されると、管理者はそのプロファイル・インスタンス内のすべてのリソースに対するフル・コントロール権限を持ちます。

Business Process Insight

リソース	許可される操作
Business Process Insight アプリケーション	表示
Business Process Insight 管理	フル・コントロール

Diagnostics

リソース	許可される操作
Diagnostics	変更
	表示
	実行
	フル・コントロール

エンド・ユーザ管理

リソース	許可される操作
警告 - 依存関係の作成	変更
アプリケーション	追加
	表示
BPMエージェント	表示
RUM エンジン	表示
スクリプト・リポジトリ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

MyBSM

リソース	許可される操作
ユーザ・ページ	フル・コントロール
定義済みページ	表示
ユーザ・コンポーネント	フル・コントロール

MyBSM (レガシ)

リソース	許可される操作
モジュール	フル・コントロール
ポートレット定義	フル・コントロール

オペレーション管理

リソース	許可される操作
ユーザに割り当てられたイベント	作業/解決
	閉じる
	再度開く
	割り当て先
	オペレータのアクションを開始
	自動アクションを開始
	転送コントロール
	転送したものを閉じる
	イベントの関係を追加/削除
	重要度の変更
	優先度の変更
	タイトルの変更
	詳細の変更
	解決策の変更
	注釈の追加/削除/更新
カスタム属性の追加/削除/更新	

リソース	許可される操作
ユーザに割り当てられていないイベント	表示
	作業/解決
	閉じる
	再度開く
	割り当て先
	オペレータのアクションを開始
	自動アクションを開始
	転送コントロール
	転送したものを閉じる
	イベントの関係を追加/削除
	重要度の変更
	優先度の変更
	タイトルの変更
	詳細の変更
	解決策の変更
注釈の追加/削除/更新	
カスタム属性の追加/削除/更新	
状況インジケータ	リセット
管理 UI	表示
ツール・カテゴリ	実行

Operations Orchestration 統合

リソース	許可される操作
管理	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
実行	実行
	フル・コントロール

プラットフォーム

リソース	許可される操作
監査ログ	表示
	フル・コントロール
ユーザ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
ユーザ・グループ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
データ・コレクタ	変更
	表示
定期レポート	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
受信者	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
カスタム・データ・タイプ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
ダウンタイム	表示
	フル・コントロール
データベース	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

RTSM

リソース	許可される操作
表示	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
RTSM	フル・コントロール
CI 検索	フル・コントロール
データ修飾子	フル・コントロール

リソース	許可される操作
取得関連	フル・コントロール
ITU マネージャ	フル・コントロール
モデリング・スタジオ	フル・コントロール

Service Health Analyzer

リソース	許可される操作
管理	フル・コントロール
アプリケーション	フル・コントロール

サービス・レベル管理

リソース	許可される操作
SLA	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

SiteScope On demand Monitors

リソース	許可される操作
管理	追加 変更 表示 削除 フル・コントロール
実行	実行 フル・コントロール

システム可用性管理

リソース	許可される操作
SiteScope	追加

トランザクション管理

リソース	許可される操作
TransactionVision 処理 サーバ	変更
	フル・コントロール
TransactionVision アナライザ	変更
	実行
	フル・コントロール
TransactionVision ジョブ・マネージャ	変更
	実行
	フル・コントロール
TransactionVision クエリ・エンジン	変更
	実行
	フル・コントロール
管理	変更
	フル・コントロール
ユーザ・データ	表示
	フル・コントロール
アプリケーション	追加

ユーザ定義レポート

リソース	許可される操作
カスタム・レポート	追加
	変更
	表示
	フル・コントロール
トレンド・レポート	追加
	変更
	表示
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
カスタム・リンク	変更
	表示
	フル・コントロール
Excel レポート	変更
	表示
	フル・コントロール
標準設定のフッタ / ヘッダ	変更
	フル・コントロール
お気に入りフィルタ	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
注釈	変更
	削除
	フル・コントロール
サービス・レポート	変更
	削除
	フル・コントロール
カスタム・クエリ・レポート	追加
	表示
	フル・コントロール

システム変更者

システム変更者ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

システム変更者は BSM 内のあらゆるリソースを表示、変更できます。一部のリソースに対しては、表示または変更操作は適用できません。それらの操作が BSM で実行可能な場合のみ、システム変更者にその操作の権限が付与されます。

Business Process Insight

リソース	許可される操作
Business Process Insight アプリケーション	表示
Business Process Insight 管理	フル・コントロール

Diagnostics

リソース	許可される操作
Diagnostics	変更
	表示

エンド・ユーザ管理

リソース	許可される操作
警告 -通知テンプレート	変更
	表示
警告 - 依存関係の作成	変更
アプリケーション	変更
	表示
BPMエージェント	表示
RUM エンジン	表示
スクリプト・リポジトリ	表示
	フル・コントロール

MyBSM

リソース	許可される操作
定義済みページ	表示
ユーザ・ページ	フル・コントロール
ユーザ・コンポーネント	フル・コントロール

Operations Orchestration 統合

リソース	許可される操作
管理	変更
	表示

リソース	許可される操作
実行	実行

プラットフォーム

リソース	許可される操作
監査ログ	表示
ユーザ	変更
	表示
ユーザ・グループ	変更
	表示
データ・コレクタ	変更
	表示
定期レポート	変更
	表示
受信者	変更
	表示
カスタム・データ・タイプ	変更
	表示
SNMPトラップを送信	変更
実行可能ファイルを実行	変更
イベント・ビューアに記録	変更
ダウンタイム	フル・コントロール
データベース	変更
	表示
システム受信者テンプレート	変更
	表示

RTSM

リソース	許可される操作
表示	変更
	表示
CI 検索	フル・コントロール
取得関連	フル・コントロール
ITU マネージャ	フル・コントロール
モデリング・スタジオ	フル・コントロール

Service Health Analyzer

リソース	許可される操作
管理	フル・コントロール
アプリケーション	フル・コントロール

サービス・レベル管理

リソース	許可される操作
SLA	変更
	表示

SiteScope On demand Monitors

リソース	許可される操作
管理	変更
	表示
実行	実行

システム可用性管理

リソース	許可される操作
SiteScope	変更
	表示

トランザクション管理

リソース	許可される操作
TransactionVision 処理サーバ	変更
TransactionVision アナライザ	変更
	実行
TransactionVision ジョブ・マネージャ	変更
	実行
TransactionVision クエリ・エンジン	変更
	実行
管理	変更
アプリケーション	変更
	表示

ユーザ定義レポート

リソース	許可される操作
カスタム・レポート	追加
	変更
	表示
トレンド・レポート	追加
	変更
	表示
カスタム・リンク	変更
	表示
Excel レポート	変更
	表示
標準設定のフッタ/ヘッダ	変更
お気に入りフィルタ	変更
	表示
	削除

リソース	許可される操作
注釈	変更
	削除
サービス・レポート	変更
	削除
カスタム・クエリ・レポート	追加
	表示

システム閲覧者

システム閲覧者ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

システム閲覧者は BSM 内のリソースの表示のみが可能で、RUM エンジン・リソースを除き、リソースまたはリソース・インスタンスに対する変更、追加、削除の権限はありません。一部のリソースに対しては、表示操作は適用できません。システム閲覧者はそれらのリソースにはアクセスできません。

Business Process Insight

リソース	許可される操作
Business Process Insight アプリケーション	表示

Diagnostics

リソース	許可される操作
Diagnostics	表示

エンド・ユーザ管理

リソース	許可される操作
警告 -通知テンプレート	表示
アプリケーション	表示
BPMエージェント	表示
RUM エンジン	表示, 編集
スクリプト・リポジトリ	表示

MyBSM

リソース	許可される操作
定義済みページ	表示

Operations Orchestration 統合

リソース	許可される操作
管理	表示

プラットフォーム

リソース	許可される操作
監査ログ	表示
ユーザ	表示
ユーザ・グループ	表示
データ・コレクタ	表示
定期レポート	表示
受信者	表示
カスタム・データ・タイプ	表示
ダウンタイム	表示
データベース	表示
システム受信者テンプレート	表示

RTSM

リソース	許可される操作
表示	表示
CI 検索	フル・コントロール
取得関連	フル・コントロール
ITU マネージャ	フル・コントロール
モデリング・スタジオ	フル・コントロール

Service Health Analyzer

リソース	許可される操作
管理	フル・コントロール

リソース	許可される操作
アプリケーション	フル・コントロール

サービス・レベル管理

リソース	許可される操作
SLA	表示

SiteScope On demand Monitors

リソース	許可される操作
管理	表示

システム可用性管理

リソース	許可される操作
SiteScope	表示

トランザクション管理

リソース	許可される操作
アプリケーション	表示

ユーザ定義レポート

リソース	許可される操作
カスタム・レポート	追加
	表示
トレンド・レポート	追加
	表示
カスタム・リンク	表示
Excel レポート	表示
お気に入りフィルタ	表示
カスタム・クエリ・レポート	追加
	表示

カスタマ・スーパーユーザ

注: このロールは、HPSoftware-as-a-Service カスタマのみに適用できます。

カスタマ・スーパーユーザ・ロールは、**アクティブ・カスタマ**のリソース・インスタンスのみに適用されます。**アクティブ・カスタマ**のリソース・インスタンスは、HPSoftware-as-a-Service カスタマのみが利用可能で、権限リソース・ツリーの**カスタマ・レベル**を表します。すべてのコンテキストで利用可能で、すべてのコンテキストに適用されます(**Business Service Management** リソースと同様)。

Business Process Insight

リソース	許可される操作
Business Process Insight アプリケーション	表示
Business Process Insight アプリケーション	フル・コントロール

Diagnostics

リソース	許可される操作
Diagnostics	表示
	実行

エンド・ユーザ管理

リソース	許可される操作
警告 - 依存関係の作成	変更
	フル・コントロール
アプリケーション	追加
	変更
	表示
	削除
	実行
	フル・コントロール
BPM エージェント	表示
RUM エンジン	表示

リソース	許可される操作
スクリプト・リポジトリ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

MyBSM

リソース	許可される操作
定義済みページ	フル・コントロール
ユーザ・ページ	フル・コントロール
ユーザ・コンポーネント	フル・コントロール

MyBSM (レガシ)

リソース	許可される操作
モジュール	フル・コントロール
ポートレット定義	フル・コントロール

プラットフォーム

リソース	許可される操作
監査ログ	表示
	フル・コントロール
ユーザ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
ユーザ・グループ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
データ・コレクタ	変更
	表示
セントラル・リポジトリ・サービス	追加
	変更
	表示
	削除
	実行
	フル・コントロール
通知システム	表示
	実行
	フル・コントロール
パッケージ作業操作	変更
	フル・コントロール
定期レポート	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
受信者	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
カスタム・データ・タイプ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
カスタマ受信者テンプレート	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
ダウンタイム	表示
	フル・コントロール

RTSM

リソース	許可される操作
表示	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
RTSM	フル・コントロール
CI 検索	フル・コントロール
データ修飾子	フル・コントロール

リソース	許可される操作
取得関連	フル・コントロール
ITU マネージャ	フル・コントロール
モデリング・スタジオ	フル・コントロール

Service Health Analyzer

リソース	許可される操作
管理	フル・コントロール
アプリケーション	フル・コントロール

サービス・レベル管理

リソース	許可される操作
SLA	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

システム可用性管理

リソース	許可される操作
SiteScope	追加
	変更
	表示
	削除
	実行
	フル・コントロール

ユーザ定義レポート

リソース	許可される操作
カスタム・レポート	追加
	変更
	表示
	フル・コントロール
トレンド・レポート	追加
	変更
	表示
	フル・コントロール
カスタム・リンク	変更
	表示
	フル・コントロール
Excel レポート	変更
	表示
	フル・コントロール
標準設定のヘッダ / フッタ	変更
	フル・コントロール
お気に入りフィルタ	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
注釈	変更
	削除
	フル・コントロール
サービス・レポート	変更
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
カスタム・クエリ・レポート	追加
	表示
	フル・コントロール

カスタマ管理者

注: このロールは、HPSoftware-as-a-Service カスタマのみに適用できます。

カスタマ管理者ロールは、**アクティブ・カスタマ**のリソース・インスタンスのみに適用されます。アクティブ・カスタマのリソース・インスタンスは、HP Software-as-a-Service カスタマのみが利用可能で、権限リソース・ツリーのカスタマ・レベルを表します。すべてのコンテキストで利用可能で、すべてのコンテキストに適用されます(**Business Service Management** リソースと同様)。

カスタマ管理者には、選択リソースのフル・コントロール、およびその他のリソースの表示や実行権限が付与されます。このユーザはすべてのタイプのプロファイルを追加可能で、作成したプロファイルへのフル・コントロール権限があります。ただし、ほかのユーザが作成したプロファイルに対しては、そのプロファイルが同じカスタマ向けの場合でも権限は付与されません。**MyBSM** リソースの場合、このロールのユーザはほかのユーザが定義したリソースを変更できます。

Business Process Insight

リソース	許可される操作
Business Process Insight アプリケーション	表示
Business Process Insight 管理	フル・コントロール

Diagnostics

リソース	許可される操作
Diagnostics	表示
	実行

エンド・ユーザ管理

リソース	許可される操作
警告 - 依存関係の作成	変更
	フル・コントロール
アプリケーション	追加
	表示

リソース	許可される操作
BPM エージェント	表示
RUM エンジン	表示

MyBSM

リソース	許可される操作
定義済みページ	表示
ユーザ・コンポーネント	フル・コントロール
ユーザ・ページ	フル・コントロール

マイ BSM (レガシー)

リソース	許可される操作
モジュール	フル・コントロール
ポートレット定義	フル・コントロール

プラットフォーム

リソース	許可される操作
監査ログ	表示
	フル・コントロール
ユーザ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
ユーザ・グループ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
セントラル・リポジトリ・サービス	追加
	変更
	表示
	削除
	実行
	フル・コントロール
通知システム	表示
	実行
	フル・コントロール
パッケージ作業操作	変更
	フル・コントロール
定期レポート	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
受信者	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
カスタム・データ・タイプ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
カスタマ受信者テンプレート	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
ダウンタイム	表示
	フル・コントロール

RTSM

リソース	許可される操作
表示	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
RTSM	フル・コントロール
CI 検索	フル・コントロール
データ修飾子	フル・コントロール
取得関連	フル・コントロール
ITU マネージャ	フル・コントロール
モデリング・スタジオ	フル・コントロール

Service Health Analyzer

リソース	許可される操作
管理	フル・コントロール
アプリケーション	フル・コントロール

サービス・レベル管理

リソース	許可される操作
SLA	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

システム可用性管理

リソース	許可される操作
SiteScope	追加

ユーザ定義レポート

リソース	許可される操作
カスタム・レポート	追加
	変更
	表示
	フル・コントロール
トレンド・レポート	追加
	変更
	表示
	フル・コントロール
カスタム・リンク	変更
	表示
	フル・コントロール
Excel レポート	変更
	表示
	フル・コントロール
標準設定のヘッダ/フッタ	変更
	フル・コントロール

リソース	許可される操作
お気に入りフィルタ	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール
注釈	変更
	削除
	フル・コントロール
サービス・レポート	変更
	削除
	フル・コントロール
カスタム・クエリ・レポート	追加
	表示
	フル・コントロール

BPM 閲覧者

BPM 閲覧者 ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

これらのユーザには表示権限がありますが、トランザクションしきい値の設定とトランザクションの詳細の変更もできます。

以前のバージョンの特定のBPMプロファイルでユーザとして追加された通常のユーザは、そのプロファイルのBPM 閲覧者ロールにアップグレードされます。

リソース	許可される操作
アプリケーション	表示
BPMエージェント	表示
スクリプト・リポジトリ	表示

BPM 管理者

BPM管理者 ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

BPM 管理者は、プラットフォームのBPMプロファイルのすべて(すべてのプロファイルでの権限を含む)を管理できます。

以前のバージョンの特定のBPMプロファイルでユーザとして追加された管理者は、そのプロファイルのBPMプロファイル管理者にアップグレードされます。これに加えて、上記のように管理者ロールとしても割り当てられます(詳細については、254ページ「管理者」を参照してください)。

リソース	許可される操作
アプリケーション	追加
	変更
	表示
	削除
	実行
	フル・コントロール
BPMエージェント	表示
スクリプト・リポジトリ	追加
	変更
	表示
	削除
	フル・コントロール

RUM 管理者

RUM 管理者ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

リソース	許可される操作
アプリケーション	追加
	変更
	表示
	削除
	実行
	フル・コントロール
RUM エンジン	表示

RUM 閲覧者

RUM 閲覧者ロールは、**Business Service Management** リソースのみに適用できます。

これらのユーザには表示権限がありますが、トランザクションしきい値の設定とトランザクションの詳細の変更もできます。

以前のバージョンの特定の RUM プロファイルでユーザとして追加された通常のユーザは、そのプロファイルの **RUM 閲覧者** ロールにアップグレードされます。

リソース	許可される操作
アプリケーション	表示
RUM エンジン	表示

特定のコンテキストに適用するユーザ管理ロール

次のロールは、BSM 内の特定のコンテキストに対してのみ適用できます。ロールを適用できるリソースとコンテキストの詳細については、次の各ロールの説明を参照してください。

BSM 全体に適用できるロールの詳細については、254ページ「BSM 全体に適用するユーザ管理ロール」を参照してください。

BPIAdministrator

BPIAdministrator ロールは、**Business Process Insight** コンテキストの **Business Process Insight 管理** リソースに対してのみ適用できます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
Business Process Insight	Business Process Insight アプリケーション	フル・コントロール
	Business Process Insight 管理	フル・コントロール

BPIUser

BPIUser ロールは、**Business Process Insight** コンテキストの **Business Process Insight アプリケーション** リソースに対してのみ適用できます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
Business Process Insight	Business Process Insight アプリケーション	表示
	Business Process Insight プロセス管理	表示

BPIRestrictedViewUser

BPIRestrictedViewUser ロールは、**Business Process Insight** コンテキストの **Business Process Insight アプリケーション** リソースに対してのみ適用できます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
Business Process Insight	Business Process Insight アプリケーション	表示権限が付与されたデプロイ済みの BPI プロセスのみを表示。
	Business Process Insight プロセス管理	

CMDB オープン API クエリ

CMDB オープン API クエリ ロールは、**RTSM** コンテキストの **RTSM オープン API** リソースに対してのみ適用できます。

このロールは、サードパーティ・アプリケーションとの通信に使用する CMDB(構成管理データベース)のクエリをユーザに対して有効にします。

コンテキスト	リソース	許可される操作
RTSM	RTSM オープン API	表示

CMDB オープン API 更新

CMDB オープン API 更新 ロールは、RTSM コンテキストの RTSM オープン API リソースに対してのみ適用できます。

このロールは、サードパーティ・アプリケーションとの通信に使用する CMDB(構成管理データベース)の更新をユーザに対して有効にします。

コンテキスト	リソース	許可される操作
RTSM	RTSM オープン API	変更

CMDB オープン API インパクト

CMDB オープン API インパクト ロールは、RTSM コンテキストの RTSM オープン API リソースに対してのみ適用できます。

このロールでは、CMDB での操作に影響を与えることができます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
RTSM	RTSM オープン API	表示

CMDB オープン API クラス・モデル

CMDB オープン API クラス・モデル ロールは、RTSM コンテキストの RTSM オープン API リソースに対してのみ適用できます。

このロールでは、CIT で操作を実行できます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
RTSM	RTSM オープン API	表示

SiteScope 管理者

SiteScope 管理者 ロールは、システム可用性管理 コンテキストの SiteScope リソースまたはリソースの特定のインスタンスに対してのみ適用できます。

このロールがリソース収集レベルで付与されていると、SiteScope 上の権限を含め、プラットフォームのすべての SiteScope を SiteScope 管理者が管理できます。このロールがインスタンス・レベルで付与されていると、特定の SiteScope インスタンスに関連付けられているリソースのみに管理対象が限定されます。

以前のバージョンの特定の SiteScope でユーザとして追加された管理者は、その SiteScope に対して SiteScope 管理者にアップグレードされます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
システム可用性管理	SiteScope	追加
		変更
		表示
		削除
		実行
		フル・コントロール

標準設定

他のロールが選択されていない場合は、標準設定ロールが自動的に割り当てられます。有効な権限は非常に限られており、主にユーザー定義レポート・コンテキストでカスタム・レポートとトレンド・レポートの追加および表示が有効になります。

注: 意味のあるレポートを作成するには、特定のアプリケーションまたは構成アイテムに対して追加の権限がユーザーに必要です。

コンテキスト	リソース	許可される操作
ユーザー定義レポート	カスタム・レポート	追加
	トレンド・レポート	追加

TransactionManagementOperator

TransactionManagementOperator ロールは、トランザクション管理 コンテキストの TransactionVision アナライザ・リソースに対してのみ適用できます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
トランザクション管理	TransactionVision アナライザ	実行
	TransactionVision ジョブ・マネージャ	実行
	TransactionVision クエリ・エンジン	実行
	管理	変更
	アプリケーション	表示

TransactionManagementAdministrator

TransactionManagementAdministrator ロールは、トランザクション管理 コンテキストの TransactionVision 処理サーバ・リソースに対してのみ適用できます。

TransactionManagementAdministrator ロールは、ユーザーに対して TransactionVision 管理にはフル・コントロール・アクセスを有効にし、ユーザー・データ・リソースにはアクセス無効にすることによって、セキュリティ強化するのに効果的です。

コンテキスト	リソース	許可される操作
トランザクション管理	TransactionVision 処理 サーバ	変更
		フル・コントロール
	TransactionVision アナライザ	変更
		実行
		フル・コントロール
	TransactionVision ジョブ・マネージャ	変更
		実行
		フル・コントロール
	TransactionVision クエリ・エンジン	変更
		実行
		フル・コントロール
	管理	変更
		フル・コントロール
	アプリケーション	追加
		変更
		表示
フル・コントロール		

TransactionManagementUser

TransactionManagementUser ロールは、トランザクション管理 コンテキストのアプリケーション・リソースに対してのみ適用できます。

コンテキスト	リソース	許可される操作
トランザクション管理	アプリケーション	表示

ユーザ管理操作

以下に示す各コンテキストでは、次の内容を含む表を示します。

- すべてのリソース
- そのリソースに適用できる操作
- 有効になる操作の説明

Business Process Insight

Business Process Insight コンテキストは、システム内で設定されている Business Process Insight インスタンスに権限を割り当てるために使用します。

リソース	操作	説明
Business Process Insight アプリケーション	表示	Business Process Insight アプリケーションを開始できます。
Business Process Insight 管理	フル・コントロール	Business Process Insight 管理で利用可能なすべての操作の実行と、他のユーザに対する権限の付与および削除を有効にします。
Business Process Insight プロセス定義	表示	Business Process Insight アプリケーションでプロセスを表示できます。

Diagnostics

Diagnostics コンテキストでは、Diagnostics アプリケーションに対して許可される操作を定義できます。

リソース	操作	説明
Diagnostics	変更	Diagnostics 管理の表示とDiagnostics の設定を有効にします。
	表示	BSM からDiagnostics にアクセスしたときに、Diagnostics を表示できます。
	実行	Diagnostics UI の設定(しきい値の設定など)を変更できます。
	フル・コントロール	Diagnostics ですべての操作を実行できるようにし、それらの操作の権限を割り当てたり解除できます。

エンド・ユーザ管理

エンド・ユーザ管理 コンテキストでは、エンド・ユーザ管理 アプリケーションに対して許可される操作を定義できます。フォルダに割り当てた操作は、その下にあるすべてのフォルダに影響します。

リソース	操作	説明	
警告 - 通知テンプレート	変更	カスタマ固有の通知テンプレートのプロパティを編集できます。	
	表示	通知テンプレートのプロパティを表示できます。	
	フル・コントロール	通知テンプレートで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。	
警告 - 依存関係の作成	変更	警告間の依存関係を作成および削除できます。	
	フル・コントロール	警告間の依存関係の作成および削除と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。	
アプリケーション	追加	アプリケーションを追加できます。	
	変更	アプリケーションまたはその特定のインスタスを編集できます。	
	表示	アプリケーションまたはその特定のインスタスを表示できます。	
	削除	アプリケーションまたはその特定のインスタスを削除できます。	
	実行	アプリケーションまたはその特定のインスタスを起動および停止できます。	
	フル・コントロール	アプリケーションまたはその特定のインスタスで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。	
アプリケーション(特定のインスタンス)	BPM	追加	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、ビジネス・プロセス設定を作成できます。
		変更	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、ビジネス・プロセス設定を編集できます。
		表示	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、ビジネス・プロセス設定を表示できます。
		削除	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、ビジネス・プロセス設定を削除できます。
		実行	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、ビジネス・プロセス設定をアクティブ化および無効化できます。
		フル・コントロール	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、ビジネス・プロセス設定で利用可能なすべての操作を実行できます。

リソース	操作	説明	
	RUM	追加	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、Real User Monitor 設定を作成できます。
		変更	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、Real User Monitor 設定を編集できます。
		表示	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、Real User Monitor 設定を表示できます。
		削除	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、Real User Monitor 設定を削除できます。
		実行	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、Real User Monitor 設定をアクティブ化および無効化できます。
		フル・コントロール	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、Real User Monitor 設定で利用可能なすべての操作を実行できます。
	警告	表示	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、警告設定を表示できます。
		フル・コントロール	アプリケーションの特定のインスタンスに対して、警告設定で利用可能なすべての操作を実行できます。
BPMエージェント	表示	BPM エージェントの表示と、それらのエージェントでのモニタの管理を有効にします。	
RUM エンジン	表示	Real User Monitor エンジンの表示と、それらのエンジンでの RUM 設定の管理を有効にします。	
スクリプト・リポジトリ	追加	スクリプト・リポジトリで新しいフォルダを作成できます。	
	変更	スクリプト・リポジトリ・フォルダ名と、それらのフォルダにあるスクリプトを変更できます。	
	表示	スクリプト・リポジトリ・フォルダと、それらのフォルダにあるスクリプトを表示できます。	
	削除	スクリプト・リポジトリ内のフォルダを削除できます。	
	フル・コントロール	スクリプト・フォルダおよびスクリプト・リポジトリ内のスクリプトで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。	

RTSM

RTSM コンテキストでは、IT ユニバース管理で定義され、モデル・エクスプローラ、サービス状況、サービス・レベル管理で表示されるビューに対して許可される操作を定義できます。

ヒント: RTSM のビューに対する権限をユーザが持っている、そのビューに含まれるプロファイルに対して権限がなくてもすべてのプロファイルがユーザに対して表示されます。ビューへのアクセスを有効にしなが、権限を持たないプロファイルの表示を禁止するには、そのビューでユーザが権限を持つ構成アイテムおよびユーザに権限を付与する構成アイテムのみを含むビューをユーザに対して作成します。

リソース	操作	説明
表示	追加	ビューを追加および複製できます。
	変更	ビューを編集できます。
	表示	ビューを表示できます。
	削除	ビューを削除できます。
	フル・コントロール	ビューで利用可能なすべての操作を実行できます。
RTSM	フル・コントロール	ITU マネージャおよびモデリングスタジオを除く、すべての Run-time Service Model (RTSM) に関連する管理操作を有効にします。
CI 検索	フル・コントロール	RTSM 内の任意の場所からの、CI 検索オプションを有効にします。
データ修飾子	フル・コントロール	RTSM 内の任意の場所からの、データ修飾子オプションを有効にします。
取得関連	フル・コントロール	RTSM 内の任意の場所からの、関連する CI の取得オプションを有効にします。
ITU マネージャ	フル・コントロール	ITU マネージャにユーザが入れるようにします。中に入ると、ITU ユニバース マネージャ内で利用可能な機能は、ビュー上でユーザに付与されている権限によって異なります。
モデリング・スタジオ	フル・コントロール	モデリング・スタジオにユーザが入れるようにします。中に入ると、ITU ユニバース マネージャ内で利用可能な機能は、ビュー上でユーザに付与されている権限によって異なります。
RTSM オープン API	変更	RTSM オープン API で更新を実行できます。
	表示	RTSM オープン API でクエリを実行できます。

オペレーション管理

注: オペレーション管理 コンテキストは、BSM マシンに OMi をインストールした場合にのみ利用

可能です。OMi コンテキストの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[ユーザの\[コンテキスト\] ペイン](#)」を参照してください。

Operations Manager i (OMi) コンテキストでは、Operations Manager コンテキストの操作権限を割り当てることができます。Operations Manager i (OMi) コンテキストで利用可能な操作の詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[ユーザの\[操作\] タブ](#)」を参照してください。

リソース	操作	説明
ユーザに割り当てられたイベント	作業/解決	割り当てられているイベントのライフサイクル状態を[作業]または[解決]に設定できます。
	閉じる	割り当てられているイベントのライフサイクル状態を[解決済み]に設定できます。
	再度開く	割り当てられている解決済みイベントのライフサイクル状態を[未解決]に設定できます。これによって、さらに調査を行って解決するための再割り当てが可能になります。 注：要因が閉じられているとき、症状イベントを未解決に戻すことはできません。
	割り当て先	割り当て済みのイベントを特定のユーザに割り当てるできます。
	オペレータのアクションを開始	イベントに割り当てられたイベント関連アクションを含む HP Operations Manager オペレータ・アクションを実行できます。

リソース	操作	説明
ユーザに割り当てられたイベント	自動アクションを開始	イベントに割り当てられたイベント関連アクションを含むHP Operations Manager 自動アクションを実行できます。
	転送コントロール	イベント・ブラウザで、イベントに割り当てられたコントロールを外部マネージャに転送できます。
	転送したものを閉じる	イベント ブラウザで、外部マネージャに制御が転送されたイベントに割り当てられたイベントをイベント・ブラウザで閉じることができます。
	イベントの関係を追加/削除	イベント ブラウザで、イベントに割り当てられたイベント間の関係を追加および削除できます。
	重要度の変更	イベントに割り当てられた重大度を変更できます。
	優先度の変更	イベントに割り当てられた優先度を変更できます。
	タイトルの変更	イベントに割り当てられたタイトルを変更できます。
	詳細の変更	イベントに割り当てられた説明を変更できます。
	解決策の変更	イベントに割り当てられた解決策を変更できます。
	注釈の追加/削除/更新	イベントに割り当てられた注釈を作成、変更、削除できます。
	カスタム属性の追加/削除/更新	イベントに割り当てられたカスタム属性を作成、変更、削除できます。

リソース	操作	説明
ユーザに割り当てられていないイベント	表示	割り当てられていないイベントを表示できます。
	作業/解決	割り当てられていないイベントのライフサイクル状態を[作業]または[解決]に設定できます。
	閉じる	割り当てられていないイベントのライフサイクル状態を[解決済み]に設定できます。
	再度開く	割り当てられていない解決済みイベントのライフサイクル状態を[未解決]に設定できます。これによって、さらに調査を行って解決するための再割り当てが可能になります。 注: 要因が閉じられているとき、症状イベントを未解決に戻すことはできません。
	割り当て先	割り当てられていないイベントを特定のユーザまたはグループに割り当てることができます。
	オペレータのアクションを開始	イベントに割り当てられていないイベント関連アクションを含む HP Operations Manager オペレータ・アクションを実行できます。
	自動アクションを開始	イベントに割り当てられていないイベント関連アクションを含む HP Operations Manager 自動アクションを実行できます。
	転送コントロール	イベント・ブラウザで、イベントに割り当てられていないコントロールを外部マネージャに転送できます。

リソース	操作	説明
ユーザに割り当てられていないイベント	転送したものを閉じる	イベント ブラウザで、外部 マネージャに制御が転送されたイベントに割り当てられていないイベントをイベント・ブラウザで閉じることができません。
	イベントの関係を追加/削除	イベント ブラウザで、イベントに割り当てられていないイベント間の関係を追加および削除できます。
	重要度の変更	イベントに割り当てられていない重大度を変更できます。
	優先度の変更	イベントに割り当てられていない優先度を変更できます。
	タイトルの変更	イベントに割り当てられていないタイトルを変更できます。
	詳細の変更	イベントに割り当てられていない説明を変更できます。
	解決策の変更	イベントに割り当てられていない解決策を変更できます。
	注釈の追加/削除/更新	イベントに割り当てられていない注釈を作成、変更、削除できます。
	カスタム属性の追加/削除/更新	イベントに割り当てられていないカスタム属性を作成、変更、削除できます。
状況インジケータ	リセット	状況インジケータの現在のステータスをクリアして、標準設定のヘルス・インジケータ値で指定されたステータスにリセットできます。
管理 UI	表示	<p>オペレーション管理の管理の次の管理機能へのアクセスを付与します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 相関処理ルール・マネージャ • コンテンツ・パック・マネージャ • パフォーマンス・グラフ・マネージャ • ビュー・マッピング・マネージャ • イベント処理のカスタマイズ • カスタム・アクション <p>オペレーション管理 管理への読み取りアクセス権がないユーザは、オペレーション管理 管理機能や、管理マネージャの起動時のエラー・メッセージを表示できません。</p>

リソース	操作	説明
ツール・カテゴリ	実行	ツール・カテゴリへのアクセスを付与する。ユーザは、アクセス権のあるツール・カテゴリに属するすべてのツールを実行できます。
カスタム・アクション	実行	カスタム・アクションへのアクセスを付与する。ユーザは、アクセス権のあるすべてのカスタム・アクションを実行できます。

Operations Orchestration 統合

Operations Orchestration 管理コンテキストでは、Operations Orchestration 管理アプリケーションに対して許可される操作を定義できます。

リソース	操作	説明
管理	追加	ラン・ブックを追加できます。
	表示	ラン・ブック管理を表示できます。
	変更	ラン・ブック管理を編集できます。
	削除	ラン・ブックを削除できます。
	フル・コントロール	ラン・ブックの管理で利用可能なすべての操作の実行と、他のユーザに対する権限の付与または削除を有効にします。
実行	実行	ラン・ブックを実行できます。
	フル・コントロール	ラン・ブックの実行で利用可能なすべての操作の実行と、他のユーザに対する権限の付与または削除を有効にします。

プラットフォーム

プラットフォーム・コンテキストには、プラットフォームの管理に関するすべてのリソースが含まれています。

リソース	操作	説明
認証方法	変更	[認証方法]ページの[設定]ボタンが有効になり、認証方法ウィザードで設定を変更できます。
	表示	認証方法ウィザードを表示できます。
	フル・コントロール	認証方法ウィザードで利用可能なすべての操作を実行できます。

リソース	操作	説明
監査ログ	表示	監査ログを表示できます。
	フル・コントロール	監査ログの表示と、監査ログの表示権限の付与および削除を有効にします。
ユーザ	追加	ユーザをシステムに追加できます。
	変更	ユーザの詳細を変更できます。
	表示	ユーザの詳細を表示できます。
	削除	ユーザをシステムから削除できます。
	フル・コントロール	ユーザで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
ユーザ・グループ	追加	ユーザ・グループをシステムに追加できます。
	変更	ユーザ・グループの詳細を変更できます。
	表示	ユーザ・グループの詳細を表示できます。
	削除	ユーザ・グループを削除できます。
	フル・コントロール	ユーザ・グループで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
データ・コレクタ	変更	リモート・アップグレードおよびリモート・アンインストールの実行と、[データコレクタの保守]でのデータ・コレクタの更新設定を有効にします。
	表示	[データコレクタの保守]でデータ・コレクタを表示できます。
	削除	データ・コレクタ・インスタンスを削除できます。
	フル・コントロール	[データコレクタの保守]で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
通知システム	表示	システム・チケットの詳細を表示できます。
	実行	システムでシステム・チケットを実行できます。
	フル・コントロール	システム・チケットで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
定期レポート	追加	新しい定期レポートを作成できます。
	変更	定期レポートを変更できます。
	表示	定期レポートを表示できます。
	削除	定期レポートを削除できます。
	フル・コントロール	定期レポートで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
受信者	追加	受信者をプラットフォームに追加できます。
	変更	受信者の詳細を編集できます。
	表示	受信者およびその詳細を表示できます。
	削除	受信者をプラットフォームから削除できます。
	フルコントロール	受信者で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
カスタム・データ・タイプ	追加	カスタム・データ・タイプをシステムに追加できます。
	変更	システムでカスタム・データ・タイプを変更できます。
	表示	システムでカスタム・データ・タイプを表示できます。
	削除	システムでカスタム・データ・タイプを削除できます。
	フルコントロール	サンプル・タイプで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
SNMPトラップを送信	変更	警告時にSNMPトラップを送信するためのオプションの選択、SNMPトラップ・アドレスの編集、警告時にSNMPトラップを送信するためのオプションの選択解除を有効にします。
	フルコントロール	警告時のSNMPトラップの送信で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
実行可能ファイルを実行	変更	警告時にプログラム・ファイルを実行するためのオプションの選択, 警告時に実行するプログラム・ファイルの選択と編集, 警告時にプログラム・ファイルを実行するためのオプションの選択解除を有効にします。
	フルコントロール	警告時のプログラム・ファイルの実行で利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
イベント・ビューアに記録	変更	Windows の[管理ツール]からアクセスする[イベント ビューア]に, 警告のログを記録するかしないかを選択できます。
	フルコントロール	Windows の[イベント ビューア]に警告のログを記録するかしないかの選択と, その操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
ダウンタイム	表示	ダウンタイムのプロパティを表示できます。
	フルコントロール	ダウンタイムで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
データベース	追加	プロフィール・データベースをシステムに追加できます。
	変更	データベース管理でプロフィール・データベースの詳細を変更できます。
	表示	プロフィール・データベース管理の詳細を表示できます。
	削除	プロフィール・データベースをシステムから削除できます。
	フル・コントロール	データベース管理のプロフィール・データベースで利用可能なすべての操作の実行, パージ・マネージャの操作, およびそれらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
システム受信者テンプレート	追加	システム受信者テンプレートを作成および複製できます。
	変更	システム受信者テンプレートのプロパティを編集できます。
	表示	システム受信者テンプレートのプロパティを表示できます。
	削除	システム受信者テンプレートを削除できます。
	フル・コントロール	システム受信者テンプレートで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
カスタマ受信者テンプレート	追加	カスタマ固有の受信者テンプレートを追加できます。
	変更	カスタマ固有の受信者テンプレートを編集できます。
	表示	カスタマ固有の受信者テンプレートのプロパティを表示できます。
	削除	カスタマ固有の受信者テンプレートを削除できます。
	フルコントロール	カスタマ固有の受信者テンプレートで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
パッケージ作業操作 (HPSoftware-as-a-Serviceのみ)	変更	パッケージの場所の変更, パッケージ名の変更, パッケージ通知受信者の選択を有効にします。
	表示	パッケージの詳細を表示できます。
	削除	パッケージを場所から削除できます。
	フルコントロール	パッケージ情報で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

サービス状況

リソース	操作	説明
ユーザ・ページ	追加	ユーザ・ページを追加できます。
	変更	ユーザ・ページを編集できます。
	表示	ユーザ・ページを表示できます。
	削除	ユーザ・ページを削除できます。
	フルコントロール	ユーザ・ページで利用可能なすべての操作を実行できます。

リソース	操作	説明
定義済みページ	表示	定義済みページを表示できます。
ユーザ・コンポーネント	追加	コンポーネントの定義を追加および複製できます。
	変更	コンポーネントの定義を編集できます。
	表示	コンポーネントの定義を表示できます。
	削除	コンポーネントの定義を削除できます。
	フル・コントロール	コンポーネントの定義で利用可能なすべての操作を実行できます。

サービス・レベル管理

サービス・レベル管理 コンテキストは、すべての SLA または特定のインスタンスに権限を割り当てるために使用します。

リソース	操作	説明
SLA	追加	SLA を追加できます。
	変更	SLA の名前の変更、SLA への説明の追加、管理ページでの SLA 設定の表示、SLA 設定の変更を有効にします。
	表示	SLA のレポートとカスタム・レポートを生成および表示できます。
	削除	SLA を削除できます。
	フル・コントロール	SLA で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

システム可用性管理

システム可用性管理 コンテキストは、システム内で設定されているさまざまな SiteScope に権限を割り当てるために使用します。

注: システム可用性管理 コンテキストで付与される権限は、SiteScope のスタンドアロンのインタフェースで付与された権限レベルをすべてオーバーライドします。

リソース	操作	説明
SiteScope	追加	SiteScope プロファイルを システム可用性管理 に追加できます。
	変更	ユーザがこれらのリソースに対する権限を持つ場合、システム可用性管理 での SiteScope プロファイルの編集、SiteScope ルート・ノード(グループ、警告、レポート)の内容の追加、および SiteScope ルート・ノード(警告、レポート)の内容の変更を有効にします。
	表示	システム可用性管理 で SiteScope プロファイルを表示できます。
	削除	ユーザがこれらのリソースに対する権限を持つ場合、システム可用性管理 から SiteScope プロファイルの削除、および SiteScope ルート・ノード(警告、レポート)の内容の削除を有効にします。
	実行	ユーザがこれらのリソースに対する権限を持つ場合、SiteScope ルート・ノード(警告、レポート)の内容の実行を有効にします。
	フル・コントロール	SiteScope プロファイルおよび SiteScope ルート・ノードで利用可能なすべての操作を実行できます。

トランザクション管理

リソース	操作	説明
TransactionVision 処理サーバ	変更	TransactionVision 処理サーバを変更できます。
	フル・コントロール	TransactionVision 処理サーバで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
TransactionVision アナライザ	変更	TransactionVision アナライザを変更できます。
	実行	TransactionVision アナライザを起動および停止できます。
	フル・コントロール	TransactionVision アナライザで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
TransactionVision ジョブ・マネージャ	変更	TransactionVision ジョブ・マネージャを変更できます。
	実行	TransactionVision ジョブ・マネージャを起動および停止できます。
	フル・コントロール ロール	TransactionVision ジョブ・マネージャで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
TransactionVision クエリ・エンジン	変更	TransactionVision クエリ・エンジンを変更できます。
	実行	TransactionVision クエリ・エンジンを起動および停止できます。
	フル・コントロール ロール	TransactionVision クエリ・エンジンで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
管理	変更	管理上の変更を有効にします。TransactionVision 固有の変更は含まれません。
	フル・コントロール ロール	管理で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
ユーザ・データ	表示	レポートおよびイベント詳細でユーザ・データを表示できます。
	フル・コントロール ロール	ユーザ・データで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
アプリケーション	追加	アプリケーションを追加できます。
	変更	アプリケーションを変更できます。
	表示	アプリケーションを表示できます。
	フル・コントロール ロール	アプリケーションで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

ユーザ定義レポート

ユーザ定義レポート・コンテキストは、各種ユーザ定義レポートとその設定に権限を割り当てるために使用します。


リソース	操作	説明
カスタム・レポート	追加	カスタム・レポートを追加できます。
	変更	カスタム・レポートを作成, 編集, 削除できます。
	表示	カスタム・レポートを表示できます。
	フル・コントロール	カスタム・レポートで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
トレンド・レポート	追加	トレンド・レポートを作成できます。
	変更	トレンド・レポートを作成, 編集, 削除できます。
	表示	トレンド・レポートを表示できます。
	フル・コントロール	トレンド・レポートで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
カスタム・リンク	変更	カスタム・リンクを作成および削除できます。
	表示	カスタム・リンクを表示できます。
	フル・コントロール	カスタム・リンクで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
Excel レポート	変更	Excel オープン API レポートを追加, 削除, 更新できます。
	表示	Excel オープン API レポートを表示できます。
	フル・コントロール	Excel オープン API レポートで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
標準設定のヘッダ/フッタ	変更	カスタム・レポートおよびトレンド・レポートの標準設定のヘッダを変更できます。
	フル・コントロール	カスタム・レポートおよびトレンド・レポートの標準設定のヘッダ/フッタの変更と, 変更権限の付与および削除を有効にします。
お気に入りフィルタ	変更	お気に入りフィルタを編集できます。
	削除	お気に入りフィルタを削除できます。
	フル・コントロール	お気に入りフィルタで利用可能なすべての操作の実行と, それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

リソース	操作	説明
注釈	変更	注釈を編集できます。
	削除	注釈を削除できます。
	フル・コントロール	注釈で利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。
サービス・レポート	変更	サービス・レポートを編集できます。
	削除	サービス・レポートを削除できます。
	フル・コントロール	サービス・レポートで利用可能なすべての操作の実行と、それらの操作に対する権限の付与および削除を有効にします。

ユーザ管理のユーザ・インタフェース

[グループの作成]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、グループを作成できます。


アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]を選択し、[作成]  ボタンをクリックして[グループの作成]を選択します。
関連情報	229ページ「グループとユーザ階層」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループの詳細	グループの説明。 注：このフィールドは任意指定です。 構文の例外： <ul style="list-style-type: none"> 99文字以下にする必要があります
グループ名	グループの名前。 構文の例外： <ul style="list-style-type: none"> 40文字以下にする必要があります 次の文字はサポートされていません。" \ / [] : < > + = ; , ? * % & 名前は一意である必要があります

[ユーザの作成]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ユーザとそのユーザにリンクされた受信者を作成できます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]を選択し、[選択したグループのユーザグループを作成します]  ボタンをクリックして[ユーザの作成]を選択します。
重要な情報	[ユーザの作成]ダイアログ・ボックスには、次のタブが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ユーザアカウント：詳細については、310ページ「[一般]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 受信者：詳細については、312ページ「[受信者]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」 247ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ方法」
関連情報	223ページ「ユーザ管理」



[カスタマイズ]タブ(ユーザ管理)

このタブでは、BSM にログインしたときにユーザに表示されるページを選択し、BSM 全体のページで利用可能なメニュー項目を選択できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理]を選択し、[グループユーザ]表示枠からノードを選択して[CUSTOMIZE]タブをクリックします。
重要な情報	プロパティは、ノードの階層に基づいて継承されます。コンテキストが選択解除されている(非表示)の場合、その子ノードは選択できません。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」 247ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ方法」
関連情報	231ページ「ユーザ・メニューのカスタマイズ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
コンテキスト	<p>BSM コンテキストを選択します。コンテキストでは、次のアクションを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> [コンテキスト]表示枠で、指定したユーザまたはグループに表示するコンテキストおよびアプリケーションを選択。コンテキストまたはアプリケーションを非表示にするには、チェック・ボックスを選択解除します。標準設定では、すべてのコンテキストが表示されます。 [ページとタブ]表示枠で、指定したユーザまたはグループに表示するページとタブを選択。標準設定では、すべてのページとタブが表示されます。 [標準の開始コンテキストとして設定]ボタンをクリックして、ユーザがBSMにログインしたときに表示されるコンテキストに設定。 <p>BSM コンテキストの詳細については、314ページ「リソース・ツリー表示枠」を参照してください。</p>
ページとタブ	<ul style="list-style-type: none"> [コンテキスト]表示枠で選択したBSM コンテキストで表示するページとタブを選択します。 [コンテキスト]表示枠で選択したコンテキストで開く標準設定ページとして、ページまたはタブを割り当てます。 <p>注：サービス状況およびオペレーション管理アプリケーションでは、アプリケーション・レベルでユーザ・アクセスを有効または無効にできますが、特定のページに対するユーザ・アクセスは定義できません。</p>

UI 要素	説明
標準の開始コンテキストとして設定	<p>[コンテキスト] 表示枠で選択したコンテキストを、BSMにログインしたときにユーザに表示される開始コンテキストとして設定します。</p> <p>注: 指定したコンテキストの横に標準の開始コンテキスト・アイコン  が表示されます。</p>
標準の開始ページとして設定	<p>[コンテキスト] 表示枠で選択したコンテキストで開く標準設定ページとして、指定したページまたはタブを割り当てます。</p> <p>注: 指定したページまたはタブの横に標準の開始ページ・アイコン  が表示されます。</p>

[一般]タブ(ユーザ管理)

このタブには、選択したユーザまたはグループのパラメータが表示されます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理] > [一般]タブを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ユーザまたはグループのパラメータを編集するには、[一般]タブの該当のフィールドを編集します。 [グループ名]および[グループの詳細]フィールドは、[グループユーザ]表示枠でグループが選択されている場合にのみ表示されます。ほかのすべてのフィールドは、[グループユーザ]表示枠でユーザが選択されている場合にのみ表示されます。
関連タスク	232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 223ページ「ユーザ管理」 308ページ「[グループの作成]ダイアログ・ボックス」 308ページ「[ユーザの作成]ダイアログ・ボックス」 319ページ「[グループ/ユーザ]表示枠」

左側の表示枠でユーザを選択した場合のユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
パスワード確認	[パスワード]フィールドに入力した編集済みのパスワードを再入力します。
電子メール	ユーザの電子メール・アドレス。

UI 要素	説明
ログイン名	<p>ユーザがBSMにログインするために使用する名前。</p> <p>構文の例外:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 99文字以下にする必要があります • 次の文字はサポートされていません。" \ / [] : < > + = ; , ? * % & <空白文字> • 名前は一意である必要があります <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> • [グループユーザ]表示枠の[参照]タブにあるユーザ名の上にマウスを置くと、ログイン名がツールチップとして表示されます。 • ログイン名は変更できません。
パスワード	<p>BSMにログインするために使用するユーザのパスワード。</p> <p>構文の例外:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 20文字以下にする必要があります <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> • セキュリティ上の予防策として、[全般]タブではこのフィールドは空白として表示されます。パスワードを変更するには、新しいパスワードを入力して、[パスワードの確認]フィールドに再入力します。 • セキュリティ担当者として割り当てられたユーザのみがパスワードを変更できます。
タイムゾーン	<p>[ユーザの作成]ダイアログ・ボックスで指定されたユーザの場所のタイム・ゾーン。</p> <p>注:タイム・ゾーンを変更する場合、リンクされた受信者のGMTからのオフセットも変更の確定後に更新されます。</p>
ユーザモード	<p>[ユーザの作成]ダイアログ・ボックスで設定されたユーザ・モード。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 未指定。ユーザに特定のモードを指定しません。このオプションは、次の場合に選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ BSMがユーザ・モードを使用して動作しており、サービス状況ビューの両方のモードでこのユーザに対してKPIを表示する場合 ■ システムがユーザ・モードを使用して動作していない場合 • 操作ユーザ。ユーザに対してKPIの操作バージョンを表示できます。 • ビジネス・ユーザ。ユーザに対してKPIのビジネス・バージョンを表示できます。

UI 要素	説明
ユーザ名	[ユーザの作成]ダイアログ・ボックスで設定されたユーザの名前。 構文の例外: <ul style="list-style-type: none"> 50文字以下にする必要があります 次の文字はサポートされていません。" \ / [] : < > + = ; , ? * % &

左側の表示枠でグループを選択した場合のユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループの詳細	[グループの作成]ダイアログ・ボックスで設定されたグループの詳細。 注: このフィールドは任意指定です。
グループ名	[グループの作成]ダイアログ・ボックスで設定されたグループの名前。

[受信者]タブ(ユーザ管理)

このタブでは、受信者、受信者の電子メール、ページャ、SMS 情報、および受信者に警告通知を送信するために使用するテンプレートや定期レポートを定義できます。

概念の詳細については、324ページ「[受信者管理](#)」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、330ページ「[\[新規受信者\]または\[受信者の編集\]ダイアログ・ボックス](#)」を参照してください。



[階層]タブ(ユーザ管理)

このタブでは、グループへのユーザの割り当て、グループからのユーザの割り当て解除、他のグループへのグループのネストを行うことができます。

アクセス方法	<p>[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理]を選択し、[グループ/ユーザ]表示枠でグループまたはユーザを選択して[階層]タブをクリックします。</p> <p>[階層]タブの表示内容は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 親グループ: 選択したグループがネストされているグループです。 子グループおよびユーザ: 選択したグループの直下でネストされているグループとユーザです。
--------	--



重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ユーザをネストするには、ネスト先となるグループを選択して[子グループおよびユーザの編集]ボタンをクリックする必要があります。 ネストされたグループを親から削除しても、グループ自体は削除されません。 親グループを削除しても、子グループとユーザは削除されません。 BSM グループが外部 LDAP サーバのグループと同期している場合は、グループ間で BSM ユーザを削除できず、グループのみがインタフェースに表示されます。グループの同期の詳細については、376ページ「ユーザの同期」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」 241ページ「グループとユーザ階層の設定方法」
関連情報	229ページ「グループとユーザ階層」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	選択したグループまたはユーザがネストされているグループを示します。
	選択したグループの下でネストされているユーザを示します。
子グループおよびユーザ	[グループ/ユーザ]表示枠で選択したグループの直下でネストされているグループとユーザを表示します。
子グループおよびユーザの編集	[子グループおよびユーザの編集]ウィンドウを開くと、選択したグループからグループとユーザをネストしたり削除したりできます。詳細については、 312ページ「[階層]タブ(ユーザ管理)」 を参照してください。 注: このボタンは、[グループ/ユーザ]表示枠でグループを選択した場合にのみ表示されます。
親グループ	[グループ/ユーザ]表示枠で選択したグループまたはユーザが直下でネストされているグループを表示します。

[子グループおよびユーザの編集]ダイアログ・ボックス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	グループまたはユーザを[子グループおよびユーザ]表示枠に移動し、グループまたはユーザを指定のグループの下でネストします。
	グループまたはユーザを[グループ/ユーザ]表示枠に移動し、指定のグループの下でネストされているグループまたはユーザを削除します。

UI 要素	説明
子グループおよびユーザ	指定のグループから削除するグループまたはユーザを選択します。
グループユーザ	指定のグループの下でネストするグループまたはユーザを選択します。




[権限]タブ(ユーザ管理)

このタブでは、システムに定義されている特定のリソースとそのリソースのインスタンスに関してグループおよびユーザに権限を適用できます。




アクセス方法	<p>[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]>[権限]タブを選択します。</p> <p>[権限]タブは、次の領域に分かれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ページの左側にある[グループユーザ]表示枠。詳細については、319ページ「[グループ/ユーザ]表示枠」を参照してください。 ページの中央にあるリソース・ツリー表示枠。詳細については、314ページ「リソース・ツリー表示枠」を参照してください。 ページの右側にある[ロール]タブ。詳細については、317ページ「[ロール]タブ」を参照してください。 ページの右側にある[操作]タブ。詳細については、317ページ「[操作]タブ」を参照してください。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> 一度に1つのユーザまたはグループに対してのみ権限を付与できます。 [操作]タブで[追加]権限を割り当てても、リソースに[表示]権限が自動的に付与されるわけではありません。 権限付与の対象ユーザが多い場合は、[階層]タブを使用してユーザを論理グループに整理することをお勧めします。詳細については、312ページ「[階層]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> 232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」 240ページ「権限の割り当て方法」
関連情報	225ページ「権限」

リソース・ツリー表示枠

このタブには、権限を設定した各 BSM コンテキスト内で利用可能なインスタンスとリソースが表示されます。

アクセス方法	<p>[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]>[権限]タブを選択します。</p> <p>リソース・ツリー表示枠には次のリソース・タイプが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インスタンスを含むリソース  • リソースのインスタンス  <p>注: ユーザがリソースのインスタンスを定義または作成する場合(ビジネス・プロセス・プロファイルを作成する場合など), このユーザにはそのリソースのインスタンスとすべての子リソースのフル・コントロール権限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インスタンスを含まないリソース 
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • Business Service Management リソースは BSM 内のすべてのコンテキストを参照し, それに適用されているロールのみを持つことができます。 • リソースは, ユーザ・インタフェースで表示される場所ではなく, プラットフォーム内で機能するコンテキストに従って分割されます。 • インスタンスを選択している場合のみ複数のリソースを選択できます。インスタンスの詳細については, 225ページ「権限のリソースについて」を参照してください。
関連タスク	240ページ「権限の割り当て方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 225ページ「権限のリソースについて」 • 314ページ「リソース・ツリー表示枠」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	リソースのインスタンス。
	インスタンスを含まないリソース。
	インスタンスを含むリソース(リソース・コレクション)。
コンテキストの選択	権限を設定する BSM コンテキストを選択します。BSM コンテキストの詳細については, 314ページ「リソース・ツリー表示枠」を参照してください。

UI 要素	説明
設定	<p>ユーザ管理セッションの設定に特定の権限設定を適用します。次のオプションから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 別のリソースを選択した際に、権限を自動的に適用する: このオプションを選択した場合、各操作の後に[権限の適用]ボタンをクリックする必要はありません。このオプションを選択しない場合、次の操作に進む前に[権限の適用]をクリックする必要があります。 リソースから VIEW 権限を削除するとき警告メッセージを表示しない: ユーザのリソースから表示操作を削除した場合、そのユーザはそのリソースおよびその子リソースやインスタンスにアクセスできません。そのため、標準設定では表示権限を削除するときに警告メッセージが表示されます。このオプションを選択すると、その警告メッセージが表示されなくなります。 <p>注: 権限を適用する設定を選択した場合、選択したオプションは現在の BSM セッションのみに適用されます。</p>

リソースのコンテキスト

含まれているコンテキストは次のとおりです。

UI 要素	説明
Business Process Insight	Business Process Insight アプリケーションの操作および管理権限を有効にするリソースを含みます。
Diagnostics	Diagnostics に関連するすべてのリソースを含みます。
エンド ユーザ管理	エンド・ユーザ管理 アプリケーションの操作および管理に関連するすべてのリソースを含みます。
MyBSM	ユーザ・ページ、定義済みページ、ユーザ・コンポーネントの管理に必要なリソースを含みます。
マイ BSM (レガシー)	モジュールおよびポートレット定義の管理に必要なリソースを含みます。
オペレーション管理	オペレーション管理 アプリケーションに関連するすべてのリソースを含みます。
Operations Orchestration 統合	Operations Orchestration 管理 アプリケーションの操作および管理権限を有効にするリソースを含みます。
プラットフォーム	プラットフォームを管理するすべてのリソースを含みます。
RTSM	Run-time Service Model(RTSM) のすべてのリソースを含みます。
Service Health Analyzer	Service Health Analyzer アプリケーションに関連するすべてのリソースを含みます。
サービスレベル管理	SLA リソースを含みます。

UI 要素	説明
SiteScope On Demand Monitors	
システム可用性管理	さまざまな SiteScope グループを含みます。
トランザクション管理	TransactionVision アプリケーションの操作に関連するリソースを含みます。
ユーザ定義レポート	カスタム・レポート、トレンド・レポート、カスタム・リンク、Excel レポートのリソースを含みます。

[ロール]タブ

BSM のグループとユーザに設定できるロールが表示されます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]>[権限]タブを選択します。
関連タスク	240ページ「権限の割り当て方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 225ページ「権限のリソースについて」 254ページ「BSM 全体に適用するユーザ管理ロール」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
権限の適用	ロールに設定された権限を適用します。
許可	指定したロールをグループまたはユーザに割り当てるには、このチェック・ボックスを選択します。
役割	選択したリソースまたはインスタンスで、グループまたはユーザに割り当てることができるロール。割り当て可能なロールの詳細については、254ページ「BSM 全体に適用するユーザ管理ロール」を参照してください。

[操作]タブ

BSM のグループとユーザに設定できる定義済みの操作が表示されます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]>[権限]タブを選択します。
関連タスク	240ページ「権限の割り当て方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> 225ページ「権限のリソースについて」 288ページ「ユーザ管理操作」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
権限の適用	リソースに設定された権限を適用します。
許可	指定した操作をグループまたはユーザに割り当てるには、このチェック・ボックスを選択します。
グループ/ロール/親から許可を継承	グループ、ロール、または親リソースから継承された権限を表示します。 注： <ul style="list-style-type: none"> これらの権限は個別には削除できませんが、追加権限を付与できます。 グループ、ロール、または親リソースから継承された権限を削除するには、そのグループ、ロール、または親リソース・レベルで変更する必要があります。
継承	選択したリソース内のすべての子リソースに操作を継承するには、[継承]列のチェック・ボックスを選択します。 注： <ul style="list-style-type: none"> 選択したリソースの[継承]チェック・ボックスのみが有効になります。 標準設定では、特定のリソース・インスタンスに操作を割り当てたときに[継承]チェック・ボックスが選択されます。選択したリソース内のすべての子リソースに操作が継承されることを避けるには、[継承]オプションを削除します。
操作	選択したリソースまたはインスタンスで、グループまたはユーザに割り当てることができる操作。利用可能な操作の詳細については、288ページ「ユーザ管理操作」を参照してください。

ユーザ管理のメイン・ページ

このページには、BSM へのアクセス用に設定されたグループおよびユーザに関する情報が表示されません。表示情報には、それぞれの権限レベルも含まれます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理]を選択します。
--------	---


重要な情報	<p>[ユーザ管理] ページに初めてアクセスするか、カーソルが[すべて] ノードに置かれていると、ページに次の内容が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [グループ/ユーザ] 表示枠。詳細については、319ページ「[グループ/ユーザ] 表示枠」を参照してください。 • [ワークフロー] 表示枠。[ワークフロー] ページには、ユーザ管理アプリケーションに関する概要、およびグループとユーザの設定に推奨されるワークフローが表示されます。 <p>[ユーザ] を選択すると、ページに次のタブが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 一般 : 詳細については、310ページ「[一般] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • 受信者 : 詳細については、312ページ「[受信者] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • 権限 : 詳細については、314ページ「[権限] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • 階層 : 詳細については、312ページ「[階層] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • カスタマイズ : 詳細については、309ページ「[カスタマイズ] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 <p>[グループ] を選択すると、ページに次のタブが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 一般 : 詳細については、310ページ「[一般] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • 権限 : 詳細については、314ページ「[権限] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • 階層 : 詳細については、312ページ「[階層] タブ(ユーザ管理)」を参照してください。
関連タスク	<p>232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 223ページ「ユーザ管理」 • 319ページ「[グループ/ユーザ] 表示枠」










[グループ/ユーザ] 表示枠

この表示枠には、BSM にアクセスするために設定されたユーザとユーザ・グループのリストが表示されます。

アクセス方法	<p>[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザ管理]を選択します。[グループ/ユーザ]表示枠がページの左側に表示され、ユーザ管理アプリケーションのすべてのタブで表示されます。</p> <p>[グループ/ユーザ]表示枠は、次のタブで構成されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 参照 : 設定されたユーザとグループのリストが表示され、ユーザとグループを作成または削除できます。 ● 検索 : ユーザとグループのテーブル・ビューが表示され、次の条件でユーザまたはグループを検索できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ名 ■ ログイン名 ■ ユーザ名 ■ ユーザの最終ログイン <p>ボックスの上にある列見出しをクリックして列を並べ替えることができます。</p> <p>検索にはワイルドカード(*)を使用できます。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ● 複数のユーザまたはグループを選択してパラメータを変更した場合、その変更は最初に選択したユーザのみに適用されます。例外として、[削除]オプションでは複数のユーザが同時に削除されます。 ● グループの作成時に、グループのユーザによってアクセス権限が自動的に継承されます。 ● グループ上のカーソルでユーザを作成した場合、そのユーザは自動的にそのグループ内にネストされます。
関連タスク	232ページ「ユーザおよび権限の設定方法 — ワークフロー」
関連情報	318ページ「ユーザ管理のメイン・ページ」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>ユーザまたはグループを作成します。</p> <p>ユーザとグループのどちらを選択したかに応じて、[ユーザの作成]または[グループの作成]ウィンドウが開きます。</p> <p>新しいグループまたはユーザを作成すると、[グループ/ユーザ]表示枠が更新されて新しく作成されたグループまたはユーザが選択されます。</p> <p>注 : Firefox では、更新後にすべてのノードが選択されます。</p> <p>詳細については、308ページ「[ユーザの作成]ダイアログ・ボックス」または308ページ「[グループの作成]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
	既存のユーザまたはグループの設定を新しいユーザまたはグループに複製します。
	選択したユーザまたはグループを削除します。 注: ユーザを削除すると、リンクされた受信者も削除されます。
	階層ツリーで選択したグループを展開または折りたたみます。 注: 以前にロードされたノードのみが展開されます。
	[グループのマッピング]を選択してローカルグループをLDAPサーバで設定されたグループにマップするか、[無効なユーザの削除]を選択してLDAPサーバでの設定が解除されたBSMユーザを削除します。[無効なユーザの削除]の選択後、Ctrl ボタンを押しながらユーザを選択することで、一度に複数のユーザを削除できます。 詳細については、321ページ「[グループのマッピング]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: このボタンは、認証方法ウィザードでマッピング・オプションが有効になっている場合にのみ表示されます。詳細については、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。
	セキュリティ担当者を割り当てまたは表示します。セキュリティ担当者は、特定のレポート(セッションの詳細、セッション・アナライザなど)にどのRUMトランザクション・パラメータを含めるか除外するかなど、システム内の特定の機密レポート情報を設定できるユーザです。 システムに1人のセキュリティ担当者のみを割り当てることができます。スーパーユーザ権限のあるユーザのみが、最初にセキュリティ担当者を割り当てることができます。セキュリティ担当者として割り当てられたユーザのみが、別のユーザへのセキュリティ担当者の割り当て、または独自のパスワードの変更を実行できます。このトピックの詳細については、228ページ「セキュリティ担当者」を参照してください。
	設定されたユーザ
	設定されたグループ
	セキュリティ担当者
	ルート・ノード


[グループのマッピング]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、BSM で設定されたグループを、LDAP サーバで設定されたグループにマップングできます。

アクセス方法	<p>[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理] を選択します。[グループ/ユーザ] 表示枠で、[LDAP の設定] ボタン  をクリックして [グループのマッピング] を選択します。</p> <p>[グループのマッピング] ダイアログ・ボックスには、次の表示枠があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [コーポレート ディレクトリ] 表示枠。詳細については、321ページ「[グループのマッピング] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [リモート グループの BSM ローカル リポジトリ: <グループ名>] 表示枠。詳細については、321ページ「[グループのマッピング] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [ローカル グループからリモート グループへのマッピング] 表示枠。LDAP グループおよびそれらが割り当てられた BSM グループのテーブルを表示します。LDAP グループは [リモート グループ名] 列に表示され、BSM グループは [ローカル グループ名] 列に表示されます。
重要な情報	<p>注: このダイアログ・ボックスは、認証ウィザードで LDAP モードが有効になっている場合にのみアクセスできます。詳細については、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。</p> <p>1つの LDAP サーバから別の LDAP サーバに切り替えた場合は、既存のすべてのグループ・マッピングを元の LDAP サーバから削除してから、新しいサーバにマッピングしてください。</p>


[コーポレート ディレクトリ] 表示枠

この表示枠では、BSM グループを LDAP グループに割り当て、LDAP グループのユーザを表示できます。

説明	<p>[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] を選択し、[グループ/ユーザ] 表示枠で [LDAP の設定] ボタン  をクリックして [グループのマッピング] を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • LDAP グループと BSM グループを同期するには、[グループの割り当て] をクリックして [リモート グループのローカルグループを選択] ダイアログ・ボックスを開きます。 • 該当する LDAP グループに関連付けられたユーザのリストを表示するには、[ユーザの一覧] をクリックします。 <p>また、グループを右クリックして、これらのいずれかのオプションを選択することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • LDAP グループが BSM グループにマッピングされると、BSM グループは LDAP インタフェースによってのみ管理されます。つまり、[ユーザおよび権限] インタフェースでは次のフィールドが影響を受けます。 <ul style="list-style-type: none"> ▪ [ユーザの作成] フィールドは無効になります。 ▪ [ユーザ名] フィールドは無効になります。 ▪ [パスワード] フィールドは非表示になります。 ▪ [階層] タブはグループに対してのみ有効になり、ユーザに対しては無効になります。

[リモート グループのBSM ローカルリポジトリ: <グループ名>]表示 枠

この表示 枠には, [コーポレート ディレクトリ] 表示 枠で選択した LDAP グループにマッピングされている BSM が表示され, マッピングされた BSM グループを削除 できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] を選択し, [グループ/ユーザ] 表示 枠で [LDAP の設定] ボタン  をクリックして [グループのマッピング] を選択 します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none">グループを削除するには, 削除対象のグループを選択して [グループの削除] をクリック します。Ctrl キーを押しながらグループを選択すると, 複数のグループを一度に削除 できます。

第19章

受信者管理

受信者をユーザーに割り当てることができます。受信者定義には、受信者との通信方法に関する情報が含まれています。受信者は、トリガされた警告や定期レポートを受信できます。

- **警告**：受信者ごとに、1つ以上の通知方法(電子メール、ページャ、またはSMS)および警告通知に使用するテンプレートを定義します。警告のトリガ時に特定の受信者が警告に関する情報を受信するように警告を設定できます。詳細については、[396ページ「警告配信システムの設定」](#)を参照してください。
- **定期レポート**：レポート・マネージャで、受信者がレポートまたはレポート項目を受信する定期間隔を設定することもできます。電子メールを受信するように設定された受信者のみが、定期レポートの受信対象として選択できます。これらの受信者は、定期レポートの設定時に[選択可能な受信者]に表示されます。定期レポート詳細については、[393ページ「レポート・スケジュール管理」](#)を参照してください。

受信者を設定および管理する方法の詳細については、[328ページ「\[受信者\]ページ」](#)を参照してください。

受信者の設定および管理方法

このタスクでは、受信者の管理に推奨される作業順序について説明します。

1つ以上の通知方法、警告通知に使用するテンプレート、およびレポートを受信するための通知スケジュールを定義して、受信者を作成します。受信者の作成および既存の受信者の管理は、[受信者]ページで行います。ユーザ・インターフェースの詳細については、[328ページ「\[受信者\]ページ」](#)を参照してください。

ユーザの設定中に受信者を作成することもできます。これらの受信者は、[管理]>[プラットフォーム]>[受信者]>[受信者管理]の[受信者]ページにある受信者リストに自動的に追加されます。

[受信者]ページで作成した受信者は、[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]でユーザを設定するときに選択可能な受信者として自動的に表示されます。

カスタム・ページまたは SMS サービス・プロバイダの追加方法

ページまたは SMS によって送信される警告を設定していて、ページまたは SMS サービス・プロバイダが標準設定のプロバイダ・リストに表示されず、そのプロバイダが電子メール・ゲートウェイを使用する場合、そのプロバイダを BSM に手動で追加できます。手動で追加した後にプロバイダがリストに表示されます。

電子メール・ゲートウェイを使用するプロバイダを追加するには、管理データベースに手動でゲートウェイ情報を追加します。必要に応じて、データベース管理者にサポートを依頼します。

電子メール・ゲートウェイを使用するプロバイダを追加するには、次の手順を実行します。

1. 管理データベースで[NOTIFICATION_PROVIDERS]テーブルを開きます。
2. [NP_NOTIFICATION_PROVIDER_NAME]列で、リストの最後にプロバイダ名を追加します。

[受信者のプロパティ]ウィザードの[SMS]タブで開くプロバイダ・リストに表示させる名前を追加します。詳細については、[335ページ「\[SMS\]タブ」](#)を参照してください。

プロバイダに自動的に割り当てられた ID 番号をメモします。

3. [NOTIFICATION_PROVIDERS]テーブルを閉じ、[NOTIFPROVIDER_NOTIFTYPE]テーブルを開きます。
4. [NN_NOTIF_PROVIDER_ID]列で、新しいプロバイダに割り当てられた ID 番号を追加します。
5. [NN_NOTIF_TYPE_ID]列で、次のいずれかの通知タイプをプロバイダに割り当てます。
 - 102 - ページ・サービス・プロバイダ用
 - 101 - SMS サービス・プロバイダ用

6. [NOTIFPROVIDER_NOTIFTYPE]テーブルを閉じ、[NOTIFICATION_PROVIDER_PROP]テーブルを開きます。

7. [NPP_NOTIFICATION_PROVIDER_ID]列で、新しいプロバイダに割り当てられた ID 番号を追加します。

2つの連続する行にこの ID 番号を追加します。

8. [NPP_NPROVIDER_PROP_NAME]および[NPP_NPROVIDER_PROP_VALUE]列で、そのプロバイダ用の次の新しいプロパティ名と値を連続して入力します(例として既存のエントリを参照)。

プロパティ名	プロパティ値	説明
EMAIL_SUFFIX	<電子メール・サフィックス>	ゲートウェイの電子メール・サフィックス。たとえば、ゲートウェイの電子メール・アドレスが 12345@xyz.com の場合、EMAIL_SUFFIX のプロパティ値として xyz.com を入力します。

プロパティ名	プロパティ値	説明
EMAIL_MAX_LEN	<最大長>	電子メール・メッセージの本文の最大メッセージ文字数。たとえば, 500。 この値を決定するときに, サービス・プロバイダによる最大長の制限に加えて, ページャまたは携帯電話の制限も考慮します。

9. [NPP_NPROVIDER_PROP_DATATYPE_ID]列で, 次のようにID 値を指定します。
 - EMAIL_SUFFIX の場合 : 1
 - EMAIL_MAX_LEN の場合 : 2
10. BSM を再起動します。


[受信者管理] ユーザ・インタフェース

本項の内容

- 328ページ「[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックス」
- 328ページ「[受信者]ページ」
- 330ページ「[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス」

[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、選択した受信者にアタッチするユーザを選択できます。

アクセス方法	[管理]> [プラットフォーム]> [受信者]> [受信者管理]タブを選択します。[受信者]ページでテーブル内の受信者を選択し、[選択した受信者にユーザをアタッチする]  ボタンをクリックします。
関連情報	229ページ「グループとユーザ階層」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ユーザログイン	BSM へのログインに使用する名前。
ユーザ名	[ユーザ管理]ページで設定されたユーザの名前。
選択	選択した受信者にユーザを割り当てるには、ユーザを選択して[選択]をクリックします。







[受信者]ページ

受信者情報(対応するユーザおよび電子メール、SMS、ページャ情報を含む)を作成または編集できます。適切な権限がある場合は、ユーザからの現在の受信者のデタッチ、ユーザへの既存の受信者のアタッチ、アタッチされている受信者の削除も実行できます。

アクセス方法	[管理]> [プラットフォーム]> [受信者]> [受信者管理]を選択します。
--------	---

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • [受信者]ページへのアクセス方法とページの表示内容は、ユーザの権限によって異なります。詳細については、314ページ「[権限]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • テーブルに表示される情報をフィルタするには、関連する列の上部にあるボックスに文字列を入力して ENTER キーを押します。テーブルの該当する行のみが表示されます。フィルタをリセットするには、情報をフィルタするために使用した文字列を消去して ENTER キーを押します。 • ユーザと受信者間は一対一リレーションシップです。受信者を割り当て可能なユーザ数は1人または0人で、ユーザとリンク可能な受信者は1人または0人です。
関連タスク	325ページ「受信者の設定および管理方法」
関連情報	324ページ「受信者管理」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規受信者を追加する : [新規受信者]ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、330ページ「[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	選択した受信者を編集する : [受信者の編集]ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、330ページ「[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	選択したユーザにアタッチされている受信者を削除する : 受信者をデタッチして現在の受信者を削除します。
	選択した受信者にユーザをアタッチする : リストから受信者を選択し、このボタンをクリックして適切なユーザを選択できる[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、328ページ「[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	選択した受信者からユーザをデタッチする : 現在の受信者を対応するユーザ(ページ内に表示)からデタッチします。確認メッセージが表示されます。
	LDAP からの選択した電子メール アドレスを更新する : このアイコンは、LDAP が BSM アプリケーションに接続されている場合にのみ表示されます。クリックするとユーザ・データが同期されます。つまり、受信者にリンクされているユーザに対応して、特定のユーザのユーザ・リポジトリに保存された電子メール情報で電子メールの受信者情報が更新されます。
電子メール	[一般]タブで定義された受信者の電子メール・アドレス。
リンクユーザ	<p>受信者にリンクされたユーザの名前。</p> <p>重要 :49 文字以下にする必要があります。</p> <p>構文の例外 : 次の文字はサポートされていません。`~!@#% ^ & * - + = [] { } \ / ? . , " ' : ; < > ` ~ ! @ # \$ % ^ & * - + = [] { } \ / ? . , " ' : ; < ></p>



UI 要素	説明
ページャ	<p>受信者のページャ番号。</p> <p>構文の例外：</p> <ul style="list-style-type: none"> 次の文字はサポートされていません。@ & "' ... 次の特殊文字は許可されません。()-_+=[]{ :;<>.,()-_+=[]{ :;<>.,
受信者名	<p>受信者の名前。</p> <p>重要：49文字以下にする必要があります。</p> <p>構文の例外：次の文字はサポートされていません。`~!@#\$\$%^&* -+=[]{ /?.,"':;<>`~!@#\$\$%^&* -+=[]{ /?.,"':;<></p>
SMS	<p>受信者のSMS番号。</p> <p>構文の例外：</p> <ul style="list-style-type: none"> 次の文字はサポートされていません。@ & "' ... 次の特殊文字は許可されません。()-_+=[]{ :;<>.,()-_+=[]{ :;<>.,



[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス

このタブでは、受信者、受信者の電子メール、ページャ、SMS、および受信者に警告通知を送信するために使用するテンプレートを定義できます。

アクセス方法	<p>このページには次の方法でもアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [管理]>[プラットフォーム]>[受信者]>[受信者管理]タブを選択し、 をクリックする。 • [管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]を選択し、ユーザを選択して[受信者]タブをクリックする。 • [管理]>[個人設定]>[受信者]を選択する。 • CI ステータス警告の新規警告作成ウィザードで、[テンプレートと受信者]ページの[新規受信者]ボタンをクリックする。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[テンプレートと受信者]ページ」を参照してください。 • SLA 警告の新規警告作成ウィザードで、[テンプレートと受信者]ページの[新規受信者]ボタンをクリックする。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[テンプレートと受信者]ページ」を参照してください。 • イベント・ベースの警告で、[受信者のアタッチ]ダイアログ・ボックスの[受信者を作成します]ボタンをクリックする。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[受信者のアタッチ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 • [レポート マネージャメイン]ページの[新規受信者]ボタンをクリックする。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「レポート・マネージャのメインページ」を参照してください。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • [受信者]ページへのアクセス方法とページの表示内容は、ユーザの権限によって異なります。詳細については、314ページ「[権限]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。 • ユーザと受信者間は一対一リレーションシップです。受信者を割り当て可能なユーザ数は1人または0人で、ユーザとリンク可能な受信者は1人または0人です。
関連タスク	325ページ「受信者の設定および管理方法」
関連情報	324ページ「受信者管理」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>選択した受信者にユーザをアタッチする：リストから受信者を選択し、このボタンをクリックして適切なユーザを選択できる[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、328ページ「[受信者をユーザにアタッチ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：このボタンは、[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]からダイアログ・ボックスにアクセスした場合にのみ表示されます。</p>
	<p>選択した受信者からユーザをデタッチする：現在の受信者に対応するユーザ(ページ内に表示)からデタッチします。確認メッセージが表示されます。</p> <p>注：このボタンは、[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]からダイアログ・ボックスにアクセスした場合にのみ表示されます。</p>

UI 要素	説明
	<p>選択したユーザにアタッチされている受信者を削除する: 受信者をユーザからデタッチして削除します。</p> <p>注: このボタンは, [管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理] からダイアログ・ボックスにアクセスした場合にのみ表示されます。</p>
	<p>LDAP からの選択した電子メールアドレスを更新する: このアイコンは, LDAP が BSM アプリケーションに接続されている場合にのみ表示されます。クリックするとユーザ・データが同期されます。つまり, 受信者にリンクされているユーザに対応して, 特定のユーザのユーザ・リポジトリに保存された電子メール情報で電子メールの受信者情報が更新されます。</p>
<p>EUM 警告通知テンプレート</p>	<p>EUM 警告通知に使用するテンプレート, またはすでに作成済みのカスタム・テンプレートを選択します。</p> <p>注: ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更すると, その変更は同じページ内の[電子メール], [ページャ], [SMS]タブに伝搬されます。[電子メール], [ページャ], または[SMS]タブにある[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更した場合, [警告受信スケジュール]は[混合値]に変更されます。ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を再度変更すると, その変更は同じページ内の[電子メール], [ページャ], [SMS]タブに伝搬され, [混合値]ボタンはクリアされます。</p> <p>EUM 警告通知テンプレートおよびカスタム・テンプレートの作成の詳細については, 418ページ「EUM 警告の通知テンプレートの設定方法」を参照してください。</p> <p>注: このフィールドは, イベント・ベースの警告のみに関連します。</p> <p>警告通知テンプレートおよびカスタム・テンプレートの作成の詳細については, 424ページ「[通知テンプレート]ページ」を参照してください。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> 標準設定のテンプレートは[LONG]です。 各テンプレートに表示されるパラメータの詳細については, 337ページ「[ページャ]タブ」を参照してください。 このフィールドには標準設定のテンプレートとカスタム・テンプレートが表示されます。 警告通知テンプレートを選択して, 警告の受信者の警告通知スケジュールを指定する必要があります。定期レポートのみを受信する受信者にはこの手順を実行する必要はありません。
<p>次のユーザにリンク</p>	<p>このフィールドは, 次の方法でこのページにアクセスした場合のみ表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> [管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理] を選択し, ツリーでユーザを選択して[受信者]タブをクリックする。 [管理] > [個人設定] > [受信者] を選択する。

UI 要素	説明
受信者名	<p>受信者の名前。</p> <p>重要 :49文字以下にする必要があります。</p> <p>構文の例外 :次の文字はサポートされていません。`~!@#\$%^&*~+[]{} /?"' "<></p>
警告受信スケジュール	<p>[一般]タブの[警告受信スケジュール]で、受信者の[通知メソッドごと]スケジュール・オプションを選択した場合に有効になります。</p> <p>次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 混合値 : ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更すると、その変更は同じページ内の[電子メール], [ページャ], [SMS]タブに伝搬されます。[電子メール], [ページャ], または[SMS]タブにある[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更した場合, [警告受信スケジュール]は[混合値]に変更されます。ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を再度変更すると、その変更は同じページ内の[電子メール], [ページャ], [SMS]タブに伝搬され, [混合値]ボタンはクリアされます。 ● 全日 : 受信者が電子メール・メッセージを一日中受信する場合に選択します。 ● 開始/終了 : 受信者が電子メール・メッセージを指定した期間内に受信する場合に選択します。 <p>時間範囲は、その受信者に対して選択された GMT オフセットに基づいて計算されます。</p> <p>定期レポートは、受信者に対して設定されたスケジュールではなく、[定期レポート]ページで設定されたスケジュールに基づいて送信されます。詳細については、『BSM ユーザガイド』の「レポートのスケジュール方法」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
タイムゾーン	<p>受信者のタイム・ゾーンを選択します。Business Service Management はタイム・ゾーンを使用して、警告通知およびHPSoftware-as-a-Service通知を選択した受信者に送信します。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> 受信者に対して選択したタイム・ゾーンは、受信者が受け取る警告通知のタイム・ゾーンとして指定されます。たとえば、警告が世界各地でトリガされて通知が送信される場合、警告の日付と時間は受信者のローカル時間に変換されます。警告には受信者の GMT オフセットも指定されます。 受信者への通知スケジュールを定義している場合、その受信者に対して選択したタイム・ゾーンは、受信者への通知タイミングの計算に BSM が使用するタイム・ゾーンでもあります。たとえば、受信者が 9:00 AM ~ 9:00 PM にページャ警告を受信するように設定して GMT オフセットで -5 時間を選択した場合、受信者は東部標準時の 9:00 AM ~ 9:00 PM のみにページャの警告を受信します。 <p>定期レポートは、受信者に対して設定されたスケジュールではなく、[定期レポート] ページで設定されたスケジュールに基づいて送信されます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「レポートのスケジュール方法」を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 受信者が割り当てられているユーザのタイム・ゾーンを変更した場合、そのタイム・ゾーンの変更を受信者の GMT からのオフセットにも伝搬するかどうかの確認メッセージが表示されます。受信者の GMT からのオフセットを変更した場合、受信者が割り当てられているユーザのタイム・ゾーンには影響しません。

[通信方法] 領域

重要な情報	<p>この領域には次のタブがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 334 ページ「[電子メール] タブ」 335 ページ「[SMS] タブ」 337 ページ「[ページャ] タブ」
-------	--

[電子メール] タブ

受信者に対する複数の電子メール・アドレス、ページ内でグローバル・レベルで選択した通知テンプレートをオーバーライドする通知テンプレート・タイプ、電子メール通知の送信スケジュール、およびセキュリティ証明書(必要な場合)を指定できます。

アクセス方法	<p>[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理] を選択し、ツリーでユーザを選択して [受信者] タブをクリックします。ユーザの [通信方法] 表示枠で [電子メール] タブをクリックします。</p>
--------	--

重要な情報	<p>電子メールを受信するように設定された受信者のみが定期レポートの受信用 に選択でき、定期レポートの設定時に[選択可能な受信者]に表示されま す。</p> <p>注 :任意のサポート言語および関連言語での記述が可能な、ユーザが挿入 するフィールドは除き、電子メール・メッセージにはラテン文字のみ表示できま す。これらのフィールドには、警告名、警告の説明、KPI 名などがあります。</p>
--------------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
電子メール・アド レス	1つ以上の電子メール・アドレスを入力します。複数のエントリはセミコロン(;)で区切ります。
セキュア メールを 有効にする	<p>受信者が暗号化された電子メールを受信する場合に、このオプションを選択 します。その場合、オプションの下にあるテキスト・ボックスに、受信電子メール・ メッセージをセキュリティ保護するために受信者が使用する証明書の内容をコ ピーする必要があります。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 暗号化された電子メール・オプションは、警告用にのみサポートされます。 暗号化された電子メールは、定期レポートまたはサブスクリプション通知 (HP Software-as-a-Service カスタマのみ)ではサポートされません。 暗号化された電子メール・オプションは、BSM データ処理サーバが Windows マシンにインストールされている場合にのみサポートされます。
EUM 警告通知 テンプレート	<p>使用するテンプレートを選択します。詳細については、416ページ「EUM 警告 通知テンプレート」を参照してください。</p> <p>注 :ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更 すると、その変更は同じページ内の[電子メール]、[ページャ]、[SMS]タブに 伝搬されます。[電子メール]、[ページャ]、[SMS]タブで[EUM 警告通知テ ンプレート]フィールドの選択内容を変更すると、[警告受信スケジュール]が [混合値]に変わります。ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィール ドの選択内容をもう1度変更すると、同じページの[電子メール]、[ペー ジャ]、[SMS]タブに変更が伝搬され、[混合値]ボタンがクリアされます。</p>
電子メール通知 受信スケジュー ル	電子メールの受信に使用するスケジュールを選択します。詳細について は、 330ページ「新規受信者」 または [受信者の編集]ダイアログ・ボックス の [警告受信スケジュール]を参照してください。

[SMS]タブ

このタブでは、SMS(ショート・メッセージ・サービス) サービス・プロバイダ、SMS 番号、ページのグローバ
ル・レベルで選択した通知テンプレートを上書きする通知テンプレートのタイプ、警告通知をSMSに
送信するスケジュールを指定できます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[ユーザ管理]を選択し、ツリーでユーザを選択して[受信者]タブをクリックします。ユーザの[通信方法]表示枠で、[SMS]タブをクリックします。
重要な情報	<p>SMS は、多くの GSM ベース携帯電話プロバイダによって提供されるテキスト・メッセージング・サービスです。SMS メッセージは、モバイル・スタッフまたは電子メールやページにアクセスできないスタッフに通知する場合に便利です。通常、SMS テキスト・メッセージの最大長は 160 文字です。</p> <p>注：標準設定リストに表示されていないページまたは SMS サービス・プロバイダを使用できます。詳細については、326ページ「カスタム・ページまたは SMS サービス・プロバイダの追加方法」を参照してください。</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
EUM 警告通知テンプレート	<p>使用するテンプレートを選択します。詳細については、416ページ「EUM 警告通知テンプレート」を参照してください。</p> <p>注：ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更すると、その変更は同じページ内の[電子メール]、[ページ]、[SMS]タブに伝搬されます。[電子メール]、[ページ]、[SMS]タブで[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更すると、[警告受信スケジュール]が[混合値]に変わります。ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容をもう1度変更すると、同じページの[電子メール]、[ページ]、[SMS]タブに変更が伝搬され、[混合値]ボタンがクリアされます。</p>
プロバイダ	<p>リストから SMS サービス・プロバイダを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Genie-UK • Itineris • SFR-France • GoSMS-Israel • MtnSMS-Global <p>注：プロバイダが標準設定プロバイダ・リストに表示されておらず、プロバイダで電子メール・ゲートウェイを使用する場合、プロバイダを BSM に手動で追加できます。詳細については、326ページ「カスタム・ページまたは SMS サービス・プロバイダの追加方法」を参照してください。</p>
SMS 通知受信スケジュール	SMS テキスト・メッセージを受信するスケジュールを選択します。詳細については、330ページ「[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス」の[警告受信スケジュール]を参照してください。
SMS 番号	1つ以上の SMS アクセス番号をボックスに入力します。複数のエントリはセミコロン(;)で区切ります。

[ページャ]タブ

このタブでは、ページャのサービス・プロバイダ、ページャ番号、ページ内でグローバル・レベルで選択した通知テンプレートをオーバーライドする通知テンプレート・タイプ、およびページャへの警告通知の送信スケジュールを指定できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [ユーザ管理]を選択し、ツリーでユーザを選択して[受信者]タブをクリックします。ユーザの[通信方法]表示枠で[ページャ]タブをクリックします。
重要な情報	標準設定のリストに表示されないページャを使用できます。詳細については、326ページ「カスタム・ページャまたはSMS サービス・プロバイダの追加方法」を参照してください。 注:任意のサポート言語および関連言語での記述が可能な、ユーザが挿入するフィールドは除き、ページャ・メッセージにはラテン文字のみ表示できます。これらのフィールドには、警告名、警告の説明、KPI名などがあります。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
EUM 警告通知テンプレート	使用するテンプレートを選択します。詳細については、416ページ「EUM 警告通知テンプレート」を参照してください。 注:ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更すると、その変更は同じページ内の[電子メール]、[ページャ]、[SMS]タブに伝搬されます。[電子メール]、[ページャ]、[SMS]タブで[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容を変更すると、[警告受信スケジュール]が[混合値]に変わります。ページ上部の[EUM 警告通知テンプレート]フィールドの選択内容をもう1度変更すると、同じページの[電子メール]、[ページャ]、[SMS]タブに変更が伝搬され、[混合値]ボタンがクリアされます。
ページャ番号	1つ以上のページャ・アクセス番号を入力します。複数のエントリはセミコロン(;)で区切ります。 注:ページャが数値のみの場合は、警告ウィザードで警告スキームを作成するときに、数値のユーザ・メッセージのみを入力できます。
ページャ通知受信スケジュール	ページャ・メッセージの受信に使用するスケジュールを選択します。詳細については、330ページ「[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス」の[警告受信スケジュール]を参照してください。

UI 要素	説明
タイプ	<p>ページのサービス・プロバイダを選択します。次のプロバイダがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • MetroCall • Arch • AirTouch • PageMci • SkyTel • PageNet • PageMart • AmeriPage • Nextel • PageOne

標準設定の通知テンプレート

重要な情報	<p>各テンプレートでは、特定のパラメータに対応する選択情報を通知に表示できます。</p> <p>各テンプレートに表示されるパラメータの詳細については、420ページ「[通知テンプレートプロパティ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
-------	---

標準設定の次の通知テンプレートを使用できます。

UI 要素	説明
DEFAULT_LOG_FORMAT	レポートに対応する標準設定の長い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。
DEFAULT_POSITIVE_FORMAT	肯定的な警告または補足警告用に、標準設定の長い形式の通知の作成に必要なすべての要素が含まれます。補足警告の詳細については、419ページ「クリア警告通知のテンプレートの設定方法」を参照してください。
LONG	標準設定の長い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。
SHORT	標準設定の短い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。

第20章

個人設定

個人設定では、個々のユーザに対するBSMからの情報の表示方法をカスタマイズできます。

個人設定を構成することにより、個々のユーザはBSMのユーザ関連の特定の動作をカスタマイズできます。

[個人設定]タブには、次のオプションがあります。

- **一般設定**：詳細については、339ページ「ユーザ・アカウント」を参照。
- **メニューのカスタマイズ**：詳細については、339ページ「メニューのカスタマイズ」を参照。

ユーザ・アカウント

[一般設定]タブでは、次の個人設定を構成できます。

- ユーザ名
- ユーザ・モード
- レポートの表示時に使用するタイム・ゾーン
- パスワード
- レポートの更新頻度
- カスタマイズしたメニュー項目

パスワードの変更および個人設定の更新用のユーザ・インタフェースの詳細については、343ページ「[ユーザアカウント]ページ」を参照してください。

メニューのカスタマイズ

[メニューのカスタマイズ]タブでは、次の操作を実行できます。

- BSM へのログイン時に表示される標準設定のコンテキストを指定する。
- BSM の異なる各部分に表示される最初のページを指定する。
- BSM 全体のページで利用可能なタブとオプションを指定。

開始ページ、メニュー項目、タブをカスタマイズすると、BSMの該当する領域のみをインタフェースで表示できるようになります。[メニューのカスタマイズ]のユーザ・インタフェースの詳細については、344ページ「[メニューのカスタマイズ]ページ」を参照してください。

BSM のメニューおよびページのカスタマイズ方法 - ワークフロー

このタスクでは、BSM へのログイン時に表示されるページのカスタマイズ方法、および BSM 全体のページで使用できるメニュー項目の選択方法について説明します。

ヒント: このタスクに関連する使用例シナリオについては、341ページ「BSM メニューおよびページのカスタマイズ方法 — 使用例のシナリオ」を参照してください。

1. 標準のコンテキストの割り当て

BSM へのログイン時に標準の開始コンテキストとして表示するコンテキストを[コンテキスト]表示枠から選択し、[標準の開始コンテキストとして設定]をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、344ページ「[メニューのカスタマイズ]ページ」を参照してください。

2. コンテキストのページとタブの選択

[ページとタブ]表示枠で、選択したコンテキストでユーザに対して表示するページとタブのコンテキストを選択します。ユーザに対して表示しないページとタブについては、チェック・ボックスを選択解除します。

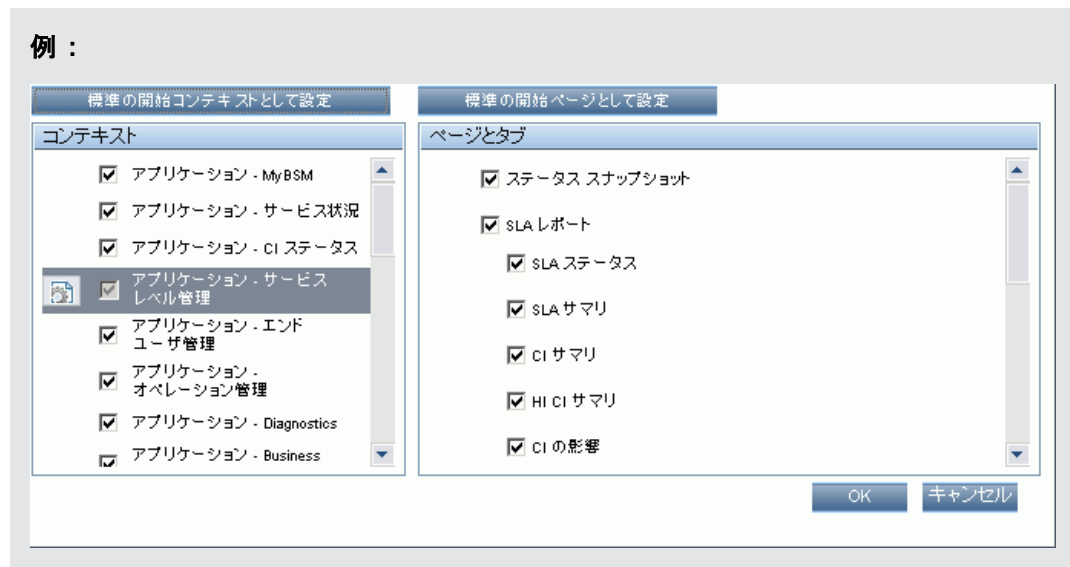
3. 標準の開始ページの割り当て

選択したコンテキストに対して標準の開始ページとするページまたはタブを選択し、[標準の開始ページとして設定]をクリックします。

4. 結果

標準の開始アイコンは、標準の開始コンテキストとページの横に表示されます。ページとタブは、[ページとタブ]表示枠で選択したユーザに対して表示されます。ページとタブは、[ページとタブ]表示枠で選択解除したユーザに対しては表示されません。

例 :



BSM メニューおよびページのカスタマイズ方法 — 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、個々のユーザのユーザ・メニューをカスタマイズする方法について説明します。

注: このシナリオに関連するタスクについては、340ページ「BSM のメニューおよびページのカスタマイズ方法 - ワークフロー」を参照してください。

1. 標準のコンテキストの割り当て

John Smith は、ABC 保険会社の登録された BSM ユーザです。サービス・レベル管理 アプリケーション・インタフェースをログイン時に表示される標準設定の Business Service Management コンテキストとして設定したいと考えています。[管理]>[個人設定]を選択して[個人設定]オプションに移動し、[メニューのカスタマイズ]を選択して[メニューのカスタマイズ]ページを開きます。[コンテキスト]表示枠で[アプリケーション - サービスレベル管理]を選択し、[標準の開始コンテキストとして設定]をクリックします。[アプリケーション - サービスレベル管理]オプションが標準の開始コンテキストとして指定されます。

The screenshot shows the 'Menu Customization' page with the following content:

- Navigation tabs: ユーザアカウント, 受信者, **メニューのカスタマイズ**
- Text: ユーザまたはグループごとにビューと開始ページをカスタマイズします
アプリケーションを強調表示し、コンテキスト リスト上部のボタンをクリックして、BSM へのログイン時にこのユーザ (またはこのグループのユーザ) に関われる標準の開始コンテキストを選択します。
- Buttons: 標準の開始コンテキストとして設定
- Section: **コンテキスト**
- List of contexts (all checked):
 - アプリケーション - MyBSM
 - アプリケーション - サービス状況
 - アプリケーション - CI ステータス
 - アプリケーション - サービスレベル管理**
 - アプリケーション - エンド ユーザ管理
 - アプリケーション - オペレーション管理
 - アプリケーション - Diagnostics
 - アプリケーション - トランザクション管理
 - アプリケーション - システム可用性管理
 - アプリケーション - Service Health Analyzer
 - アプリケーション - ユーザ レポート
 - アプリケーション - Application Management for SOA
 - 管理 - サービス状況
 - 管理 - サービスレベル管理
 - 管理 - オペレーション管理
 - 管理 - エンド ユーザ管理

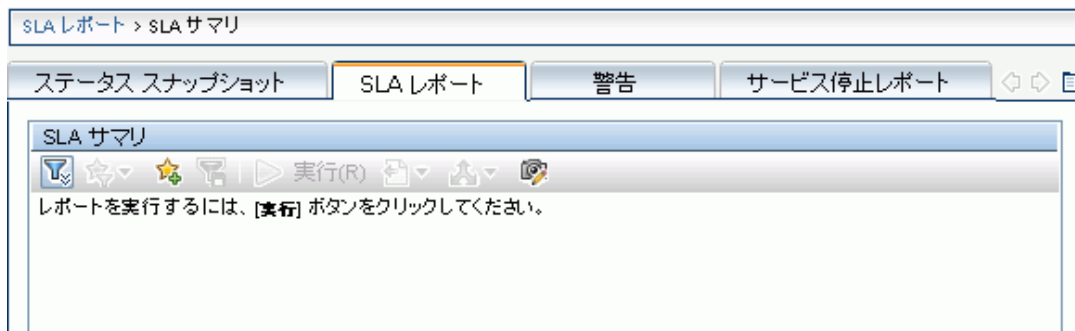
2. コンテキストのページとタブの選択

John は、自分の作業に関連するページとタブのみが表示されて、BSM にログインしたらずくにサービス・レベル・アグリーメント (SLA) サマリ・レポートが表示されるようにしたいと考えています。[SLA 管理] タブに表示される情報は自分の作業に関係がないため、[ページとタブ] 表示枠で [SLA 管理] オプションを選択解除します。[SLA サマリ] オプションを選択し、[標準の開始ページとして設定] をクリックします。[SLA サマリ] ページが、BSM のログイン時に John に表示される標準の開始ページとして指定されます。



3. 結果

John Smith が BSM にログインしたときに開くコンテキストは、[アプリケーション] メニューの [サービスレベル管理] コンテキストです。[SLA サマリ レポート] ページが [SLA レポート] タブに表示されます。



[個人設定] ユーザ・インタフェース

本項の内容

- 343ページ「[ユーザアカウント]ページ」
- 344ページ「[メニューのカスタマイズ]ページ」
- 345ページ「[受信者]タブ」

[ユーザアカウント] ページ

このページでは、ユーザ名、ユーザ・モード、タイム・ゾーン、パスワード、更新頻度設定を設定できます。

アクセス方法	[管理] > [個人設定] > [ユーザアカウント]を選択します。 注：サイト・マップの[標準設定ページの変更]をクリックして[個人設定]タブにアクセスすることもできます。
重要な情報	BSM では、定義されているユーザごとにこれらの設定が保存されます。変更内容は、そのユーザに対してのみ今後のすべての Web セッションで有効になります。
関連情報	339ページ「個人設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
パスワード確認	[パスワード]フィールドで指定したパスワードを再入力します。
ログイン名	BSM へのログインに使用する名前。 注：このフィールドのエントリは変更できません。
パスワード	BSM にアクセスするときに使用するパスワードを入力します。
自動更新頻度の選択	BSM でブラウザを自動更新しデータベースから最新データをロードする頻度を選択します。 注：この設定は、レポートの[過去 1 日]または[過去 1 時間]の時間分解能に対してのみ有効です。
タイムゾーン	ユーザの場所に従って、適切なタイム・ゾーンを選択します。

UI 要素	説明
ユーザモード	<p>次のオプションからユーザのユーザ・モードを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 未指定。ユーザに特定のモードを指定しません。このオプションは、次の場合に選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ BSM がユーザ・モードを使用して動作しており、サービス状況ビューの両方のモードでこのユーザに対して KPI を表示する場合 ■ システムがユーザ・モードを使用して動作していない場合 ● 操作ユーザ。ユーザに対して KPI の操作バージョンを表示できます。 ● ビジネス・ユーザ。ユーザに対して KPI のビジネス・バージョンを表示できます。 <p>注：ユーザ・モードの詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「ユーザ・モードの KPI」を参照してください。</p>
ユーザ名	<p>ユーザのユーザ名。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 入力可能な最大文字数は 50 文字です。 ● "\/[]: <>+=; , ? * % & 以外の特殊文字はすべて有効です。



[メニューのカスタマイズ] ページ

このページでは、ユーザごとにビューと開始ページをカスタマイズできます。次を指定できます。

- BSM へのログイン時に表示される標準設定のコンテキスト。
- BSM のそれぞれの異なる場所で表示される最初のページ。
- BSM 全体のページで利用可能なタブとオプション。

アクセス方法	<p>[管理] > [個人設定] > [メニューのカスタマイズ]</p> <p>注：サイト・マップの[標準設定ページの変更]をクリックして[個人設定]タブにアクセスすることもできます。</p>
関連タスク	340ページ「BSM のメニューおよびページのカスタマイズ方法 - ワークフロー」
関連情報	339ページ「個人設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
コンテキスト	<p>BSM コンテキストを選択します。コンテキストでは、次のアクションを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ページとタブ] 表示 枠で、指定したユーザに表示するページとタブを選択。 • [標準の開始コンテキストとして設定] ボタンをクリックして、ユーザがBSMにログインしたときに表示されるコンテキストに設定。
ページとタブ	<ul style="list-style-type: none"> • [コンテキスト] 表示 枠で選択した BSM コンテキストで表示するページとタブを選択します。 • [コンテキスト] 表示 枠で選択したコンテキストで開く標準設定ページとして、ページまたはタブを割り当てます。
標準の開始コンテキストとして設定	<p>[コンテキスト] 表示 枠で選択したコンテキストを、BSM にログインしたときにユーザに表示される開始コンテキストとして設定します。</p> <p>注：指定したコンテキストの横に標準の開始コンテキスト・アイコン  が表示されます。</p>
標準の開始ページとして設定	<p>[コンテキスト] 表示 枠で選択したコンテキストで開く標準設定ページとして、指定したページまたはタブを割り当てます。</p> <p>注：指定したページまたはタブの横に標準の開始ページ・アイコン  が表示されます。</p>

[受信者]タブ

このタブでは、受信者、受信者の電子メール、ページ、SMS 情報、および受信者に警告通知を送信するために使用するテンプレートを定義できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、330ページ「[新規受信者]または[受信者の編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

第21章

認証方法

BSMの認証は、認証方法の概念に基づいています。各方法では、特定の認証サービスに対して認証を処理します。BSMでは、任意のタイミングで1つの認証サービスのみを設定できます。

BSMにログインするための標準設定の認証方法は、BSMの内部認証サービスです。ログインページからBSMのユーザ名とパスワードを入力すると、BSMデータベースによって資格情報が保存されて検証されます。BSMの認証プロセスについては、[26ページ「BSM ログイン・フロー」](#)を参照してください。

ライトウェイト・ディレクトリ・アクセス・プロトコル(LDAP)を使用して認証を設定できます。BSMでは、LDAPサーバを使用してユーザの資格情報を検証します。LDAPの詳細については、[374ページ「LDAP 認証およびマッピング」](#)を参照してください。

認証方法は、認証管理ウィザードで設定します。認証管理ウィザードの詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。

SSO 認証方法の設定

シングル・サインオン(SSO)は、アクセス制御方法の1つで、ユーザは一度ログインすれば、再度ログインすることなく複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできます。設定されたソフトウェア・システム・グループ内のアプリケーションでは認証が信頼されるため、アプリケーションの切り替え時に追加の認証は必要ありません。

BSM の標準設定のシングル・サインオン認証方法は、ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO)です。LW-SSO は BSM に組み込まれ、認証に外部マシンを必要としません。LW-SSO の詳細については、363ページ「ライトウェイト・シングル・サインオン方法」を参照してください。

BSM の外部で設定されたアプリケーションでは LW-SSO はサポートされません。より強力なシングル・サインオン実装を実現するには、認証管理ウィザードを使用して ID 管理シングル・サインオン(IDM-SSO)を設定します。シングル・サインオン方法として IDM-SSO を有効にする場合、IDM-SSO は認証システムとしても機能します。IDM-SSO で認証されるユーザは、[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックスの[ユーザフィルタ]フィールドで定義された条件を満たすことで BSM にログインできます。詳細については、359ページ「[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

クライアント・アプリケーションへのすべての要求は、SSO 認証を介してチャンネルされます。サポートされるアプリケーションでは、認証されるユーザの名前のみを把握している必要があります。

IDM-SSO 認証方法の詳細については、370ページ「Identity Management Single Sign-On の認証」を参照してください。

LDAP 認証の設定

ライトウェイト・ディレクトリ・アクセス・プロトコル(LDAP)は、電子メールやほかのプログラムで外部サーバから情報を検索するインターネット・プロトコルです。LDAPは、次のいずれかの方法でBSMに設定できます。

- BSM へのユーザ・ログインの認証メカニズムを使用する。
- グループをマップしてBSMユーザを外部LDAPサーバで設定したユーザと同期することで、BSM管理者によるユーザ管理プロセスを簡素化する。詳細については、[380ページ「グループのマップ方法とユーザの同期方法」](#)を参照してください。

LDAPを有効、無効にするには、認証管理ウィザードを使用します。詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。

BSM の認証モード

次の表に、BSM で使用される認証方法を示します。この認証方法は、認証管理ウィザードで選択したシングル・サインオン・モードとLDAP モードの両方で定義されます。

シングル・サインオン・モード	LDAP モード	認証システム
無効	無効	BSM 内部
	有効	LDAP
LW-SSO	無効	BSM 内部
	有効	LDAP
IDM-SSO	無効	IDM-SSO
	有効	IDM-SSO

[認証方法] ユーザ・インタフェース

本項の内容

- 350ページ「[認証方法] ページ」
- 359ページ「[LDAP ベンダの属性] ダイアログ・ボックス」
- 351ページ「認証 ウィザード」

[認証方法] ページ

このページには、BSM にログインするための現在の認証方法およびシングル・サインオン設定が表示されます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [認証管理] を選択します。
重要な情報	[認証管理] ページへのアクセスは、次の権限レベルによって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> • 表示：[認証管理] ページを表示できます。 • 変更：認証管理 ウィザードにアクセスして設定を変更できます。[設定] ボタンが有効になります。 権限は、[ユーザおよび権限] インタフェースで設定します。詳細については、240ページ「権限の割り当て方法」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> • 346ページ「認証方法」 • 92ページ「インフラストラクチャ設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
設定	<p>クリックすると認証 ウィザードが開きます。ここでは、認証方法を設定します。認証 ウィザードの詳細については、351ページ「認証 ウィザード」を参照してください。</p> <p>[設定] ボタンをクリックしてアクセスするウィザードを使用して、[Single Sign-On 設定] と [Lightweight Directory Access Protocol 設定] の両方のパラメータを設定します。一度に両方のパラメータ・セットを設定することも、これらを個別に設定することもできます。</p>
Lightweight Directory Access Protocol 設定	<p>このセクションには、次の項目が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 名前。[ライトウェイト ディレクトリ アクセス プロトコル] パラメータの名前。 • 値。ウィザードで設定した [ライトウェイト ディレクトリ アクセス プロトコル] パラメータの値。
Single Sign-On 設定	<p>このセクションには、次の項目が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 名前。[シングル サインオン] パラメータの名前。 • 値。ウィザードで設定した [シングル サインオン] パラメータの現在の値。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
設定	クリックすると認証ウィザードが開きます。ここでは、認証方法を設定します。認証ウィザードの詳細については、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。
名前	[シングルサインオン]または[ライトウェイト ディレクトリアクセスプロトコル]パラメータの名前。
値	指定した[シングルサインオン]または[ライトウェイト ディレクトリアクセスプロトコル]パラメータの値。


認証ウィザード

このウィザードでは、BSMにログインするための認証方法を作成できます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[ユーザおよび権限]>[認証管理]を選択し、[設定]をクリックします。
重要な情報	BSMのバージョンをアップグレードした後でユーザ・インタフェースが適切に回答しない場合(ページがロードされない、エラー・メッセージが表示されるなど)、クライアントPCで次の手順に従ってJavaキャッシュを消去します。 <ol style="list-style-type: none"> [スタート]>[コントロールパネル]>[Java]に移動します。 [インターネット一時ファイル]セクションで、[設定]をクリックします。 [一時ファイルの設定]ダイアログ・ボックスで、[ファイルの削除]をクリックします。 このウィザードに関する一般情報は、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 <p>認証ウィザード > 351ページ「[シングルサインオン]ページ」 > (354ページ「[SAML2設定]ダイアログ・ボックス」) > 356ページ「[LDAPの全般設定]ページ」 > (359ページ「[LDAPベンダの属性]ダイアログ・ボックス」) > 360ページ「[LDAPユーザの同期設定]ページ」 > 361ページ「[サマリ]ページ」</p>

[シングルサインオン]ページ

このウィザード・ページでは、シングル・サインオン方法を設定できます。[シングルサインオン]ページに表示される要素は、選択したシングル・サインオン・モードによって決まります。


重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。 ウィザードのいずれかのフィールドの値が空白または無効な場合、フィールドのセルにエラー・アイコン  が表示されます。エラーの説明は、次のいずれかの方法で表示できます。 <ul style="list-style-type: none"> エラー・アイコンの上にマウス・ポインタを置いて、エラー・メッセージが記載されたツールチップを表示する。 ログ・ファイル <HPBSM> /log/EJBContainer/login.log にアクセスする。
ウィザード・マップ	<p>351ページ「認証ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>351ページ「認証ウィザード」 > [シングルサインオン]ページ > (354ページ「[SAML2 設定]ダイアログ・ボックス」) > 356ページ「[LDAP の全般設定]ページ」 > (359ページ「[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックス」) > 360ページ「[LDAP ユーザの同期設定]ページ」 > 361ページ「[サマリ]ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
無効	シングル・サインオン(SSO) 認証方法を無効にする場合に選択します。
IdentityManagement	<p>ID 管理シングル・サインオン(IDM-SSO) 認証方法を設定にする場合に選択します。このページに表示される要素の詳細については、次を参照してください。このトピックの詳細については、370ページ「Identity Management Single Sign-On の認証」を参照してください。</p> <p>注：このオプションを選択している場合、認証ではなくグループ・マッピングにのみ LDAP を設定できます。</p>
ライトウェイト	ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO) 認証方法を設定にする場合に選択します。このページに表示される要素の詳細については、次を参照してください。このトピックの詳細については、363ページ「ライトウェイト・シングル・サインオン方法」を参照してください。

ID 管理シングル・サインオン(IDM-SSO) の設定


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	説明
	<p>指定したフィールドの値が空白または無効であることを示します。</p> <p>このアイコンの上にマウス・ポインタを置くと、エラーの説明が記載されたツールチップが表示されます。</p>

UI 要素	説明
ヘッダ名	ID 管理シングル・サインオンで渡されるトークン名のヘッダ名を入力します。 例: sso_user 注: この情報を入力する前に, ID 管理シングル・サインオン方法で BSM リソースが保護されていることを確認してください。
URL のログアウト	代替ログアウト URL (BSM からログアウトしたときに表示されるメインログイン・ページ以外のページ) を入力します。 例: \<代替ログアウト URL> .NET 注: このフィールドは任意指定です。

ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO) の設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	指定したフィールドの値が空白または無効であることを示します。 このアイコンの上にマウス・ポインタを置くと, エラーの説明が記載されたツールチップが表示されます。
追加	保護されたホスト / ドメインのリストにホスト / ドメインが追加されます。
SAML2 認証スキーマを有効にする	セキュリティ・アサーション・マークアップ言語 2.0 プロトコルを使用した認証を有効にする場合に選択します。
HP Business Service Management ドメイン	関連する BSM ドメインを入力します。これはトークンの作成に使用されます。ドメインを自動的に解析できない場合 (エイリアスを使用している場合など), 複数ドメインや正規化された URL に対応するためにこのフィールドが必要になります。 例: devlab.ad
自動的に解析	BSM ドメインを自動的に解析する場合にクリックします。
SAML2 設定	[SAML2 設定] ダイアログ・ボックスのパラメータを設定する場合にクリックします。
トークン作成キー (initString)	initString 値を入力します。この値は, LW-SSO トークンの暗号化および復号化に使用されます。この値を変更する場合, LW-SSO 統合に参加しているすべての HP 製品の値と同じになるように initString を設定する必要があります。 例: Xy6stqZ

UI 要素	説明
信頼されたホスト / ドメイン	<p>LW-SSO 統合に参加している信頼されたホストおよびドメインのリストが表示されます。</p> <p>信頼されたホストのリストには、DNS ドメイン名 (myDomain.com)、NetBIOS 名 (myServer)、特定のサーバの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名 (myServer.myDomain) などが含まれます。</p> <p>信頼されたホスト / ドメインのリストにホストまたはドメインを追加するには、[追加] アイコン  をクリックして、[信頼されたホスト/ドメイン] の下にあるテキスト・ボックスにホストまたはドメインの名前を入力し、[タイプ] ドロップダウン・ボックスからホスト名またはドメイン名のタイプを選択します。</p> <p>例 : mercury.global, emea.hpqcorp.net, devlab.ad</p> <p>信頼されたホスト/ドメインのリストからホストまたはドメインを削除するには、それらを選択して [削除] ボタン  をクリックします。</p>

[SAML2 設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックス・ページでは、ライトウェイト・シングル・サインオン設定の SAML 認証パラメータを変更できます。

アクセス方法	<p>認証管理ウィザードでシングル・サインオン・ページに移動し、[Lightweight] を選択して [SAML2 認証スキーマを有効にする] チェック・ボックスを選択します。SAML 設定をクリックして SAML 設定ダイアログ・ボックスを開きます。</p> <p>SAML 設定ダイアログ・ボックスは次によって構成されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SAML2 作成 : BSM から SAML 認証要求を送信する SAML2 認証パラメータを変更します。 • SAML2 検証 : BSM で受信した SAML 要求を復号化する SAML2 認証パラメータを変更します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • このウィザードに関する一般情報は、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。 • BSM の標準設定では SAML が有効になっています。SAML 認証を無効にするには、[SAML2 認証スキーマを有効にする] チェック・ボックスをクリアします。
ウィザード・マップ	<p>351ページ「認証ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>351ページ「認証ウィザード」 > 351ページ「[シングルサインオン] ページ」 > ([SAML2 設定] ダイアログ・ボックス) > 356ページ「[LDAP の全般設定] ページ」 > (359ページ「[LDAP ベンダの属性] ダイアログ・ボックス」) > 360ページ「[LDAP ユーザの同期設定] ページ」 > 361ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
復元	SAML2 設定の属性を BSM の現在のセッション・ログイン時の状態に復元します。

[SAML2 作成] セクション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
キーストア ファイル名	BSM のキーストアのファイル名。 <ul style="list-style-type: none"> [クラスパスのキーストアを検索]が選択されていない場合、この値はキーストアの場所の完全パス(C:\mystore\java.keystore など)で指定する必要があります。 [クラスパスのキーストアを検索]が選択されている場合、この値はキーストアのファイル名のみ(java.keystore など)で指定する必要があります。
キーストア パスワード	SAML 認証要求時の暗号化に使用される秘密鍵に含まれるキーストアにアクセスできるパスワード。
クラスパスの キーストアを 検索	クラスパスのキーストアを検索するライトウェイト・シングル・サインオン・フレームワークを選択します。 注 : このオプションが選択されている場合、[キーストアファイル名]フィールドに実際のキーストア・ファイルの名前のみを入力します。
プライベート キー エイリア ス	SAML 認証要求時の暗号化に使用される秘密鍵のエイリアスを指定します。
プライベート キー パスワー ド	SAML 認証要求時の暗号化に使用される秘密鍵のパスワードを指定します。

[SAML2 検証] セクション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
クラスパスの キーストアを 検索	クラスパスのキーストアを検索するライトウェイト・シングル・サインオン・フレームワークを選択します。 注 : このオプションが選択されている場合、[キーストアファイル名]フィールドに実際のキーストア・ファイルの名前のみを入力します。

UI 要素	説明
キーストア ファイル名	BSM のキーストアのファイル名。 <ul style="list-style-type: none"> • [クラスパスのキーストアを検索]が選択されていない場合、この値はキーストアの場所の完全パス(C:\mystore\java.keystore など)で指定する必要があります。 • [クラスパスのキーストアを検索]が選択されている場合、この値はキーストアのファイル名のみ(java.keystore など)で指定する必要があります。
キーストアパ スワード	SAML 認証要求時の暗号化に使用される公開鍵のパスワードを指定します。


[LDAP の全般設定] ページ

このウィザードでは、外部 LDAP サーバを使用して認証情報(ユーザ名とパスワード)を保存し、LDAP ユーザと BSM ユーザを同期できます。

アクセス方法	<p>[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [認証管理] を選択し、[設定] をクリックします。[LDAP の全般設定] ページに移動します。</p> <p>次の LDAP モードを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 有効 • 無効 <p>注：ウィザードの [Single Sign-On 設定] ページで [Identity Management] を選択した場合、LDAP は認証に使用できません。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> • このウィザードに関する一般情報は、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。 • LDAP パラメータを設定する場合は、LDAP 管理者に相談してください。
ウィザード・マップ	<p>351ページ「認証ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>351ページ「認証ウィザード」 > 351ページ「[シングルサインオン] ページ」 > (354ページ「[SAML2 設定] ダイアログ・ボックス」) > [LDAP の全般設定] ページ > 360ページ「[LDAP ユーザの同期設定] ページ」 > 361ページ「[サマリ] ページ」</p>

[LDAP の全般設定] セクション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>指定したフィールドの値が空白または無効であることを示します。</p> <p>エラーの説明は、次のいずれかの方法で表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none">エラー・アイコンの上にマウス・ポインタを置いて、エラー・メッセージが記載されたツールチップを表示する。ログ・ファイル < HPBSM のルート・ディレクトリ > \log\EJBContainer\login.log にアクセスする。
詳細設定	[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックスを開いて、選択した LDAP ベンダの設定を変更できます。詳細については、359ページ「[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
識別名 (DN) 解決	<p>LDAP 検索ユーザ資格情報の入力を有効にする場合に選択します。</p> <p>注：LDAP サーバへの接続を確認するために LDAP でユーザ資格情報が必要な場合、この UI では有効なユーザ資格情報がない LDAP サーバ URL は許可されないため、JMX コンソールで users-remote-repository サービスを使用して資格情報を入力する必要があります。</p>
検索権限を持つユーザの識別名	<p>LDAP ディレクトリ・サーバでの検索権限を持つユーザの識別名 (DN) を定義します。</p> <p>注：匿名ユーザの場合はこのエントリを空白のままにします。</p>

UI 要素	説明
LDAP サーバの URL	<p>LDAP(または Active Directory ユーザの場合はグローバル・カタログ [AD GC]) サーバの URL を入力します。</p> <p>同じフォレストの異なるツリーを表すには、複数の DN をセミコロンで区切って入力します。</p> <p>フェイルオーバーを許可するには、複数の LDAP (AD GC) サーバ URL をセミコロンで区切って入力します。</p> <p>必要な形式は <code>ldap://machine_name:port/scope??sub</code> です。</p> <ul style="list-style-type: none"> LDAP サーバは通常はポート 389 を使用し、AD GC サーバは通常はポート 3268 またはセキュリティで保護されたポート 3269 を使用します。 スコープの候補値は sub、one、または base で、大文字と小文字を区別します。 BSM では、2つの疑問符間に属性が存在する場合はその属性は無視されます。 ポート番号とスコープ値が空の場合、標準設定値が使用されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 通常の通信の標準設定のポート番号 : 389 ■ SSL 通信の標準設定のポート番号 : 636 ■ 標準設定のスコープ値 : sub <p>例 :</p> <p>単一 DN, 単一 LDAP サーバ: <code>ldap://my.ldap.server:389/ou=People,o=myOrg.com??sub</code></p> <p>複数の DN : <code>ldap://my.ldap.server:389/ou=People,o=myOrg.com??sub;</code> <code>ldap://my.ldap.server:389/ou=Staff,o=my2ndOrg.net??sub</code></p> <p>複数の LDAP サーバ: <code>ldap://my.ldap.server:389/ou=People,o=myOrg.com??sub;</code> <code>ldap://my.2ndldap.server:389/ou=People,o=myOrg.com??sub</code></p> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>注: URL を入力した後、赤の X が次のポップアップ・テキストとともに表示されることがあります。</p> <p>エラー - sun.security.validator.ValidatorException : PKIX パスの作成に失敗しました : sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException : 要求されたターゲットへの有効な証明パスが見つかりません</p> <p>これは、LDAP サーバに対して信頼関係を確立する必要があることを示します。詳細については、384ページ「SSL による LDAP サーバと BSM サーバ間のセキュリティで保護された通信方法」を参照してください。</p> </div>

UI 要素	説明
LDAP ベンダタイプ	<p>使用する LDAP ベンダを入力します。次から選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一般的な LDAP Microsoft Active Directory その他 <p>注: [詳細設定] をクリックして [LDAP ベンダの属性] の設定を変更した場合、このフィールドの値は自動的に [その他] に変更されます。</p>
検索権限を持つユーザのパスワード	<p>グループの LDAP サーバ・エンティティを検索できるユーザのパスワードを定義します。</p> <p>注: 匿名ユーザの場合はこのエントリを空白のままにします。</p>

[DN 解決のテスト] セクション

設定された LDAP パラメータと指定されたユーザ資格情報の両方が有効であることを確認できます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
パスワード	<p>[UUID] フィールドで資格情報が入力されたユーザのパスワード。</p> <p>注: このフィールドは任意指定です。空の場合は匿名ユーザが使用されます。</p>
テスト	<p>LDAP 設定とユーザ資格情報の有効性をテストします。検証に成功したかどうかを示すメッセージが表示されます。</p>
UUID	<p>確認する LDAP ユーザの実際のログイン名 (一意のユーザ ID)。</p>

[LDAP ベンダの属性] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックス・ページでは、選択したベンダに固有の LDAP 標準設定を変更できます。

アクセス方法	<p>[認証管理] ウィザードの [LDAP の全般設定] ページで [詳細設定] をクリックします。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は、351 ページ「認証ウィザード」を参照してください。 LDAP ベンダ属性を変更すると、[LDAP の全般設定] ページの [LDAP ベンダタイプ] フィールドの値が [その他] に自動的に変更されます。
ウィザード・マップ	<p>351 ページ「認証ウィザード」には、次のページが含まれています。</p> <p>351 ページ「認証ウィザード」 > 351 ページ「[シングルサインオン] ページ」 > (354 ページ「[SAML2 設定] ダイアログ・ボックス」) > 356 ページ「[LDAP の全般設定] ページ」 > ([LDAP ベンダの属性] ダイアログ・ボックス) > 360 ページ「[LDAP ユーザの同期設定] ページ」 > 361 ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
グループ クラス オブジェクト	LDAP サーバでグループとみなされる LDAP エンティティを定義します。
グループ メンバの属性	LDAP グループのメンバとみなされる LDAP グループのエンティティを決める特定の属性を定義します。
現在値の復元	LDAP ベンダ属性を, BSM の現在のセッションへのログイン時の状態に復元します。
ユーザフィルタ	BSM にログインできる LDAP ユーザを定義します。
ユーザのオブジェクト クラス	LDAP サーバでユーザとみなされる LDAP エンティティを定義します。
UUID 属性	LDAP サーバに表示される, BSM へのログインに使用する属性。 例 : uid, メール

[LDAP ユーザの同期設定] ページ

このウィザード・ページでは, LDAP ユーザを BSM ユーザと同期するように LDAP サーバを設定できます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [認証方法] を選択し, [設定] をクリックします。[LDAP ユーザの同期設定] ページに移動します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> このウィザードに関する一般情報は, 351 ページ「認証ウィザード」を参照してください。 このページは, [LDAP の全般設定] ページが正しく設定されている場合のみ有効になります。
ウィザード・マップ	<p>351 ページ「認証ウィザード」には, 次のページが含まれています。</p> <p>351 ページ「認証ウィザード」 > 351 ページ「[シングルサインオン] ページ」 > (354 ページ「[SAML2 設定] ダイアログ・ボックス」) > 356 ページ「[LDAP の全般設定] ページ」 > (359 ページ「[LDAP ベンダの属性] ダイアログ・ボックス」) > [LDAP ユーザの同期設定] ページ > 361 ページ「[サマリ] ページ」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	指定されたフィールドに入力された値が無効であることを示します。

UI 要素	説明
ユーザの同期の有効化	BSM へのログイン時にユーザの同期を有効にし、LDAP ユーザを BSM ユーザと同期します。 重要 : このチェック・ボックスを選択する前に、LDAP グループを BSM グループにマップしていることを確認してください。グループのマッピングを実行していない場合、すべてのユーザはルート・グループ内にネストされ、閲覧者権限が割り当てられます。グループのマッピングの詳細については、380ページ「グループのマッピング方法とユーザの同期方法」を参照してください。
グループ ベース識別名	グループ検索の開始元となる LDAP エンティティの識別名 (DN)。
グループ検索フィルタ	グループ検索にどの属性を含めるかを示す、関連パラメータを入力します。
ルート グループのベース DN	マップされたグループの階層ツリーの最上位となる LDAP グループの識別名 (DN)。この値は、グループ・ベース識別名のサブセットである必要があります。
ルート グループフィルタ	LDAP グループの階層ベースとなる LDAP エンティティを決定するパラメータを入力します。指定したエンティティは、BSM のグループにマップ可能になります。
テスト	LDAP グループ構造を定義するために入力したパラメータが有効であることを確認します。
[テスト グループの設定]表示枠	BSM グループにマップ可能なグループと、LDAP グループの階層構造を表示します。表示されるグループは、[LDAP ユーザの同期設定]ページのフィールドに入力したパラメータによって決定されます。

[サマリ] ページ

このウィザード・ページには、認証管理ウィザードで設定した認証方法のサマリが表示されます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [認証管理] を選択し、[設定] をクリックします。[シングルサインオン] および [LDAP] ページで情報を入力し、[サマリ] ページに移動します。
重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、351ページ「認証ウィザード」を参照してください。
ウィザード・マップ	351ページ「認証ウィザード」には、次のページが含まれています。 351ページ「認証ウィザード」 > 351ページ「[シングルサインオン] ページ」 > (354ページ「[SAML2 設定] ダイアログ・ボックス」) > 356ページ「[LDAP の全般設定] ページ」 > (359ページ「[LDAP ベンダの属性] ダイアログ・ボックス」) > 360ページ「[LDAP ユーザの同期設定] ページ」 > [サマリ] ページ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
LDAP の全般設定	ウィザードの[LDAP の全般設定]ページで設定した[LDAP の全般設定]パラメータが表示されます。
LDAP ユーザの同期設定	ウィザードの[LDAP ユーザの同期設定]ページで設定した[LDAP ユーザの同期設定]パラメータが表示されます。
Single Sign-On 設定	ウィザードで設定した[シングルサインオン]パラメータが表示されます。

第22章

ライトウェイト・シングル・サインオン方法

BSMの標準設定のシングル・サインオン認証方法は、ライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO)です。LW-SSOはBSMに組み込まれ、認証に外部マシンを必要としません。BSMは現在バージョン2.4のLW-SSOを使用しています。

シングル・サインオン方法の概要については、[347ページ「SSO 認証方法の設定」](#)を参照してください。

BSMでLW-SSOを設定するには、認証ウィザードを使用します。認証ウィザードの詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。

JMXコンソールを使用して、クライアント側の認証証明書を受け入れるようにLW-SSOを設定できます。証明書が認識されると、LW-SSOはほかのアプリケーションで使用されるトークンを作成します。詳細については、[367ページ「クライアント側の認証証明書を使用してBSMへのユーザ・アクセスを保護する方法」](#)を参照してください。

LW-SSOの操作に関する制限事項の詳細については、[387ページ「LW-SSO 認証 - 一般的な参照情報」](#)を参照してください。

複数ドメインおよびネストされたドメインをインストールするための LW-SSO 設定

認証ウィザード(詳細については、351ページ「認証ウィザード」を参照)で設定される LW-SSO 設定は、BSM インストールのアーキテクチャによって異なります。

リバース・プロキシ、ロード・バランサ、または NAT などの man-in-the-middle を介して BSM にログインすると、BSM ドメインが man-in-the-middle のドメインになります。

BSM ゲートウェイに直接ログインすると、BSM ドメインが BSM ゲートウェイのドメインになります。

BSM ドメイン以外のドメインに存在する別のアプリケーションを LW-SSO で操作するには、これらのすべてのドメインが LW-SSO 設定の[信頼されたホスト / ドメイン]リストに表示される必要があります。

BSM ドメインおよび統合アプリケーションがネストされたドメインに存在する場合は、両方のアプリケーションに対する LW-SSO ドメインとしてドメインのサフィックスを定義する必要があります。また、ドメインの自動計算(認証ウィザードの[自動的に解析])を無効にし、ドメインのサフィックスを明示的に示す必要もあります。

例 1 :

```
BSM gateway server is located in emea.hp.com  
TransactionVision server is located in cnd.hp.com  
Disable automatic domain calculation and set domain name = hp.com
```

例 2 :

```
BSM gateway server is in corp.ad.example.com  
NNMi server is in sdc.example.com  
Load balancer is in example.com  
Disable automatic domain calculation and set domain name = example.com
```

[未知のユーザ処理モード]の設定方法

このタスクでは、BSMにログインしようとしている未知のユーザ(ホスト・アプリケーションで認証されているが、BSM ユーザ・リポジトリに存在しないユーザ)を処理する方法について説明します。

[未知のユーザ処理モード]を設定するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] > [ファウンデーション] > [Single Sign On]を選択します。
2. [Single Sign On - Lightweight (LW-SSO)]フィールドで[未知のユーザ処理モード]エントリを見つけ、次のいずれかのオプションを選択します。
 - **統合ユーザ**：ログインを試行したユーザの代わりに[統合ユーザ]という名前のユーザが作成されます。このユーザには、システム閲覧者の権限があります。
 - **許可**：ユーザは、新しいBSM ユーザとして作成され、システムへのアクセスが許可されます。このユーザには、システム閲覧者の権限があります。標準設定のパスワードはログイン名です。
 - **否認**：ユーザは、BSM へのアクセスが拒否され、ログイン・ページに移動します。
この変更は、ただちに有効になります。

注：BSM とLDAP サーバ間でユーザの同期が有効になっている場合、未知のユーザは常にBSM へのログインが拒否されます。

JMX コンソールを使用した LW-SSO パラメータの変更方法

このタスクでは、LW-SSO で使用されるオプションおよびパラメータを JMX コンソールで変更する方法について説明します。

また、BSM からロックアウトされ、SSO パラメータを変更してアクセスできるようにする必要がある場合も、JMX コンソールを使用できます。

JMX コンソールを使用してライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO) パラメータを変更するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザで、JMX コンソールの URL (<http://<サーバ名>:8080/jmx-console/>) を入力します。
2. JMX コンソールの認証資格情報を入力します。認証資格情報がわからない場合、システム管理者にお問い合わせください。
3. ライトウェイト・シングル・サインオンの次のコンテキストを見つけます。
 - a. ドメイン名: **Topaz**
 - b. サービス: **LW-SSO 設定**
4. パラメータを適宜変更します。

この変更は、ただちに有効になります。

クライアント側の認証証明書を使用して BSM へのユーザ・アクセスを保護する方法

クライアント側の認証証明書を使用して BSM へのユーザ・アクセスを保護できます。JMX コンソールを使用して、そのような証明書を受け入れるように LW-SSO を設定します。証明書が受け入れられたら、ユーザは BSM にログインします。クライアント側の認証証明書を使用すれば、ログイン画面でユーザ資格情報を入力することなく、同様のことを安全に実現できます。

クライアント側の認証証明書と連携するように LW-SSO を設定するには、次の手順を実行します。

1. 認証に使用されるクライアント側の証明書のフィールドや属性 (**SubjectDN** の **EMAILADDRESS** など) を決定します。これを行うには、クライアント証明書の詳細を表示して、**Subject** または **SubjectAlternativeName** フィールドを参照します。使用する属性を決定します。
2. Web ブラウザで JMX コンソールの URL (<http://<ゲートウェイまたはデータ処理サーバの名前>:8080/jmx-console/>) を入力します。
3. JMX コンソールの認証資格情報を入力します。
4. ドメイン名 **Topaz** に下にある **service=LW-SSO Configuration** を見つけます。
5. クライアント側の認証を有効にするには、属性 **ClientCertificateInboundHandlerEnabled** を **true** に設定します。

注: 必要な場合にのみクライアント側の認証を有効にすることを強くお勧めします。それ以外の場合、この値は明示的に **false** に設定してください。

6. ユーザ識別子を含むフィールドを定義するには、属性 **ClientCertificateUserIdentifierRetrieveField** を見つけて、ユーザ識別子のある認証証明書フィールドの名前 (**SubjectDN** や **SubjectAlternativeName** など) を入力します。
7. フィールドからユーザ識別子を取得する方法を定義するには、属性 **ClientCertificateUserIdentifierRetrieveMode** を見つけて、適切なユーザ識別子の取得モード (**EntireField** または **FieldPart**) を入力します。
8. ユーザ識別子を含む User Identifier Retrieve フィールドの部分を定義するには、属性 **ClientCertificateUserIdentifierRetrieveFieldPart** を見つけて、ユーザ識別子のある User Identifier Retrieve フィールドの部分の名前 (**EMAILADDRESS** など) を入力します。

注: **userIdentifierRetrieveMode** が **FieldPart** に設定されている場合や、**userIdentifierRetrieveField** が **SubjectAlternativeName** に設定されている場合、属性 **ClientCertificateUserIdentifierRetrieveFieldPart** を指定する必要があります。それ以外の場合、空白のままにできます。

9. [変更の適用] をクリックします。
10. BSM UI で、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。[ファウンデーション] をクリックし、ドロップダウン・リスト・ボックスから [シングルサインオン] を選択します。
11. [未知のユーザ処理モード] を [Deny] に設定します。

外部認証ポイントを使用して BSM へのユーザ・アクセスをセキュリティ保護する方法

LW-SSO 2.4 を使用すると外部認証ポイントの使用が可能になり、LDAP、専用のユーザ/パスワード・データベース、カスタム SSO ソリューションなどのカスタマが希望する認証テクノロジーに対して独自の資格情報検証をプラグインできます。

外部認証ポイントは、ユーザ認証を実際に行う外部 URL です。外部認証ポイントでは、ユーザ資格情報の取得 (通常はユーザ名とパスワードですが、ユーザのクラス B 証明書や専用の SSO トークンなどの場合もあります)、これらの資格情報の検証、「認証アサーション」の作成が行われます。「認証アサーション」は、認証されたユーザを示すトークンであり、通常、ユーザの認証方法に関する情報も提供します。

LW-SSO 2.4 で外部認証ソリューションを使用するには、次の手順を実行します。

1. LDAP を使用している場合は、BSM と認証ポイント・サーバで同じユーザ・リポジトリが使用されていることを確認します。LDAP を使用していない場合は、BSM でユーザを手動で作成します。
2. BSM と同じ `initString` を使用するように、認証ポイント・サーバ側で LW-SSO 構成を設定します。
3. BSM ゲートウェイ・サーバの LW-SSO 構成で、JMX コンソールを使用して次の操作を行います。
 - a. 認証ポイント・サーバの URL を指定する
 - b. `validationPoint enabled` を `true` に設定する
 - c. **[変更の適用]** をクリックします。
 - d. BSM ゲートウェイ・サーバを再起動します。
4. 外部認証ポイントから BSM にログインできることを確認します。ログインできない場合は、[369 ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」](#)を参照してください。
5. 特定の URL でこの機能を使用できないようにするには、JMX コンソールを使用して、LW-SSO 構成のセキュリティ保護されない URL のリストに該当する URL を追加します。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、ライトウェイト・シングル・サインオンのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

LW-SSO のパラメータが変更されたために BSM にアクセスできない

BSM からロックアウトされた場合、BSM に組み込まれたアプリケーション・サーバの JMX コンソールを使用して、選択したライトウェイト・シングル・サインオン(LW-SSO) のパラメータをリモートで更新できません。

BSM インタフェースの外部から LW-SSO のパラメータを変更する方法の詳細については、366ページ「JMX コンソールを使用した LW-SSO パラメータの変更方法」を参照してください。

LW-SSO 使用時のユーザの同期

LW-SSO では、統合されたアプリケーション間のユーザの同期は保証されていません。そのため、LDAP を有効にし、統合されたアプリケーションでグループのマッピングを設定してユーザを監視する必要があります。グループのマッピングとユーザの同期に失敗すると、セキュリティ違反が発生してアプリケーションに悪影響を及ぼす可能性があります。アプリケーション間のユーザのマッピングの詳細については、380ページ「グループのマッピング方法とユーザの同期方法」を参照してください。

外部認証ポイントを使用した場合に BSM にログインできない

外部認証ポイント(AP)を有効にしているにもかかわらずそこからログインできない場合、入力している資格情報を持つユーザが BSM のユーザとして定義されていることを確認してください。

第23章

Identity Management Single Sign-On の認証

LW-SSOで提供されるものよりセキュリティ保護された接続を必要とする場合、またはBSM外で設定されたアプリケーションでLW-SSOがサポートされない場合は、Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO)を実装します。IDMサーバは単一の中央ポリシーサーバで監視され、ユーザリポジトリ、ポリシーストア(どちらもポリシーサーバとして同じサーバに存在できます)、およびポリシーサーバと通信するアプリケーションの各WebサーバにインストールされたWebサーバエージェントで構成されます。IDMサーバは、組織の各種リソースへのユーザアクセスを制御し、個人およびビジネスの機密情報を未承認ユーザから保護します。詳細については、IDMベンダのドキュメントを参照してください。

BSMでは、HTTP要求のヘッダとして利用できるユーザ情報を格納するIDMベンダが必要です。ヘッダ名とIDM-SSO方法は、いずれも認証ウィザードで設定します。詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。

BSMでIDM-SSOを設定する前に、BSMログイン画面の前にIDMログインダイアログが表示されることを確認してください。

表示されない場合は、IDM管理者にお問い合わせください。同じLDAPがIDMの場合と同様にBSMで定義されている場合は、同じ資格情報を使用してIDMとBSMの両方のログイン画面で認証できます。そうでない場合は、BSMでのLDAP設定がIDMで使用されるものと一致していることを確認します。これで、BSMでIDM-SSOを設定する準備ができました。設定で使用する正しいIDMヘッダを判断するためにヘッダのダンプに関する助けが必要な場合は、セッションを閉じずにBSMログイン画面に戻り、`/DumpSession.jsp`をログインURLに追加します。結果のリストでログインIDを探します。ログインIDの前には、IDMで提供されるヘッダ名があります。これは、同じユーザセッションで`http://<HP BSM サーバ>/topaz/verifyIDM.jsp`を使用して確認できます。正しいことが確認されたら、認証管理ウィザードで使用できます。

IDM-SSO での BSM リソースのセキュリティ保護

IDM-SSO をシングル・サインオン方法として使用する場合、フォームまたは基本認証スキームで BSM リソースを保護したり、非保護のままにしたりできます。

アプリケーション・ユーザがアクセスするリソース

アプリケーション・ユーザがアクセスする BSM リソースを IDM-SSO を使用してセキュリティ保護するには、次のリソースでフォーム認証を使用します。

- /filters/*
- /hpbsm/*
- /mam-images/*
- /mcrcs/*
- /MercuryAM/*
- /odb/*
- /opal/*
- /opr-admin-server/*
- /opr-console/*
- /opr-gateway/*
- /opr-web/*
- /ovpm/*
- /topaz/*
- /topazSettings/*
- /tv/*
- /tvb/*
- /ucmdb-ui/*
- /uim/*
- /utility_portlets/*
- /webinfra/*

データ・コレクタがアクセスするリソース

マシン間の通信でデータ・コレクタがアクセスする BSM リソースを IDM-SSO を使用してセキュリティ保護するには、資格情報の引き渡しが可能された認証方法または基本認証を使用します。

次のリソースはデータ・コレクタで使用されます。

- /ext/* - RUM で使用
- /mam/* - RTSM で使用

- /topaz/topaz_api/* - BSM のバージョンやサーバ時間などを取得するためにすべてのデータ・コレクタで使用

Web サービスがアクセスするリソース(必須)

BSM で IDM-SSO を使用する場合は、次のリソースを**基本認証**で保護する必要があります。これは、リソースがさまざまな BSM Web サービスで使用されるからです。

- /opr-admin-server/rest/*
- /opr-console/rest/*
- /opr-gateway/rest/*
- /topaz/bam/*
- /topaz/bsmservices/*
- /topaz/eumopenapi/*
- /topaz/servicehealth/*
- /topaz/slm/*

基本認証で保護する他のリソース

- /topaz/rfw/directAccess.do - レポートに発行済みの URL で使用
- /topaz/sitescope/* - BSM UI に組み込まれた SAM Admin で使用

非保護

次のリソースは**非保護**のままにします。

- /mam-collectors
- /topaz/Charts
- /topaz/images
- /topaz/lmgs/chartTemp
- /topaz/js
- /topaz/rfw/static
- /topaz/services/technical/time
- /topaz/static
- /topaz/stylesheets
- /tvb/rest
- /ucmdb-api

ロード・バランサを使用している場合は、次のリソースも**非保護**にします。

- /topaz/topaz_api/loadBalancerVerify_core.jsp
- /topaz/topaz_api/loadBalancerVerify_centers.jsp

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、IDM-SSO 関連のトラブルシューティング・ヘルプについて説明します。

認証ウィザードで IDM-SSO ヘッダを入力したときのエラー

正しいヘッダが使用されていることを確認します。すべてのヘッダをダンプし、使用するヘッダと一致するものを探そう SiteMinder 管理者に依頼します。たとえば、電子メール・アドレスをログイン・ユーザー名として使用する場合は、電子メール・アドレスのみを含むフィールドを探します。または、HTTP_SEA のような場合には、名前から HTTP_ を削除し、sea をヘッダ名にします。

正しいユーザ ID の検証

指定したヘッダで正しいユーザ ID が取得できることを確認するには、<https://<HPBSM サーバ>/topaz/verifyIDM.jsp?headerName=sea> (sea がヘッダの場合) に移動します。

第24章

LDAP 認証およびマッピング


認証目的でユーザ情報(ユーザ名とパスワード)を保存するために、内部 BSM サービスを使用する代わりに外部 LDAP サーバを使用できます。LDAP サーバは、BSM と LDAP ユーザの同期にも使用できます。最適なパフォーマンスを得るには、LDAP サーバを残りの BSM サーバと同じサブネット内に置くことをお勧めします。最適なセキュリティを確保するには、BSM ゲートウェイサーバと LDAP サーバ間に SSL 接続を設定するか、BSM サーバと LDAP サーバを同じセキュリティで保護された内部ネットワーク・セグメントに置くことをお勧めします。

認証は LDAP サーバによって実行され、承認は BSM サーバによって処理されます。

LDAP サーバで認証とユーザの同期を設定するには、認証ウィザードを使用します。認証ウィザードの詳細については、[351ページ「認証ウィザード」](#)を参照してください。

SSL による LDAP サーバと BSM サーバ間のセキュリティで保護された通信の詳細については、[384ページ「SSL による LDAP サーバと BSM サーバ間のセキュリティで保護された通信方法」](#)を参照してください。

グループのマッピング

グループをマップすることで、LDAP ユーザとBSM ユーザ間のユーザの同期を有効にできます。グループのマッピング機能は、[ユーザおよび権限] インタフェースで **[LDAP Synchronization]** ボタン  をクリックして **[グループのマッピング]** を選択することでアクセスできます。このボタンは、次の条件を満たす場合のみ有効になります。

- [認証方法] ページで **[LDAP モード]** が **[有効]** に設定されている。
- ユーザに管理者権限が付与されている。

ユーザの同期が有効な場合の[ユーザ管理] インタフェースには、次の制限事項があります。

- ユーザを作成できません。
- 各ユーザの[ユーザ名] フィールドと[ログイン名] フィールドは無効になります。
- [パスワード] フィールドは非表示になります。
- [階層] タブを使用して、手動でユーザをグループに割り当てることはできません。

注: グループに割り当てられていないユーザは、**[LDAP の設定]** にある **[インフラストラクチャ設定]** の **[自動作成ユーザロール]** で定義されたロールでルート(すべての)レベルに表示されます。ユーザ権限をより詳細に制御するには、[379ページ「標準設定のユーザ権限割り当てに対する微調整の実行」](#)を参照してください。

注: ユーザの作成は自動的に行い、そのユーザの適切な BSM グループへの割り当ては手動で行うことが好ましい場合があります。ただし、上述のように、ユーザの同期を有効にした場合は手動でのグループの割り当ては BSM で無効になります。

LDAP ユーザの同期が有効になっている場合に手動でユーザを適切な BSM グループに割り当てるには、次の手順を実行します。

- 1) **[グループのマッピング]** でユーザの同期を無効にします。
- 2) **[階層]** タブを使用して、手動でユーザをグループに割り当てます。
- 3) **[グループのマッピング]** でユーザの同期を再度有効にします。

必要に応じて、複数の BSM グループへの単一 LDAP グループのマッピング、または単一 BSM グループへの複数の LDAP グループのマッピングを実行できます。

グループ・マッピング機能を有効にした場合、LDAP サーバに存在する任意の一意のユーザ属性(電子メール・アドレスなど)で BSM にログインできます。詳細については、[383ページ「BSM へのログインに使用される属性の変更方法」](#)を参照してください。

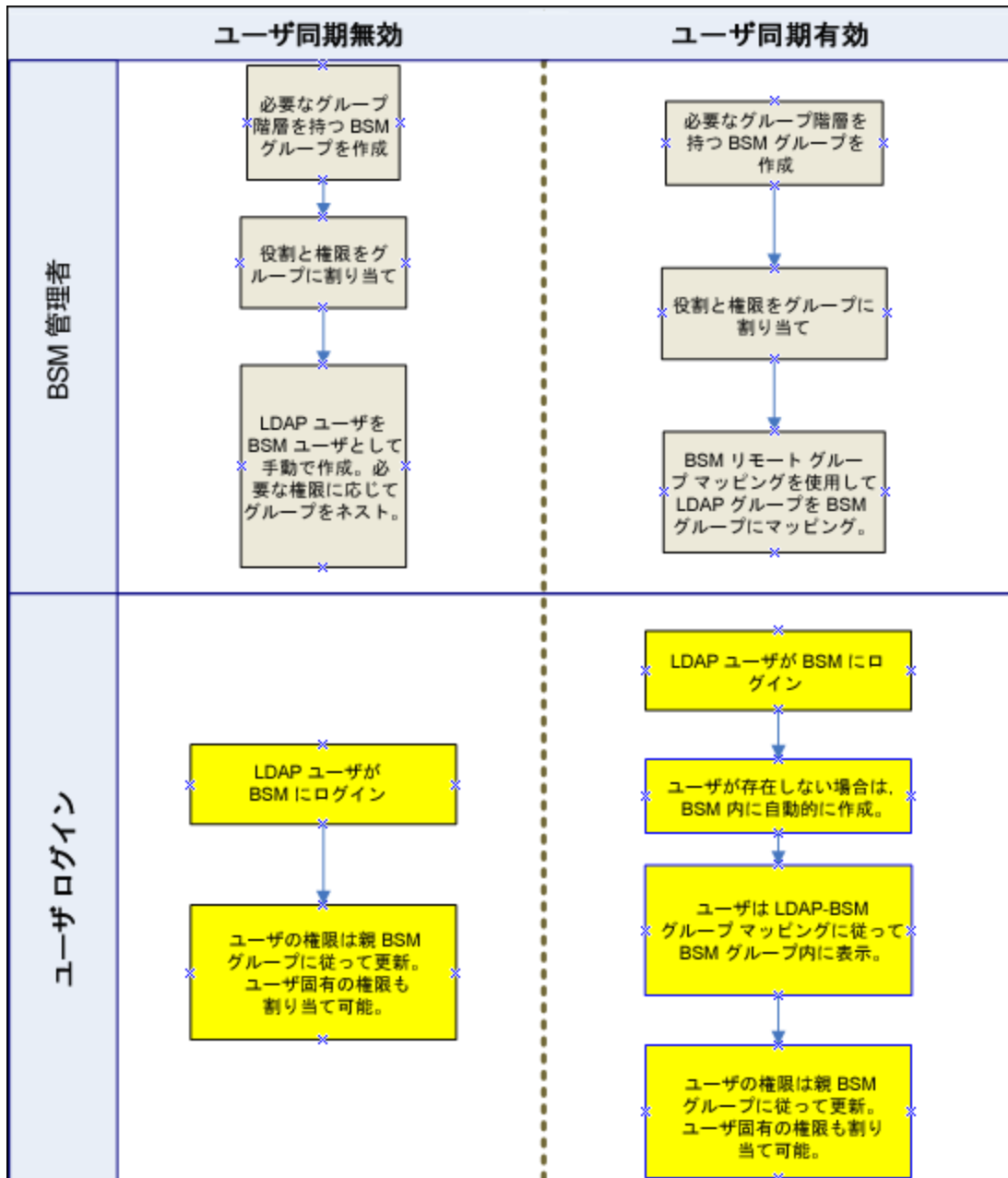
ユーザの同期

ユーザの同期機能は、LDAP サーバのユーザを BSM のユーザにマップします。これによりすべてのユーザ管理機能が LDAP サーバで実行されるため、BSM のユーザ管理プロセスが簡素化されます。BSM のグループ・レベルで権限を付与してから、該当する権限レベルのグループにユーザをネストすることをお勧めします。ユーザを LDAP グループ間で移動した場合、BSM へのログイン後に、対応するマップされた BSM のグループ間でそのユーザが移動されます。

BSM に存在しない LDAP ユーザがログインした場合、BSM ユーザとして作成されます。このユーザのステータスは次のように決定されます。

- マップされた LDAP グループにユーザが属する場合、ユーザはその LDAP グループにマップされた BSM グループに自動的に割り当てられます。
- ユーザのグループが BSM グループにマップされていない場合、またはユーザが LDAP グループに属さない場合、ユーザはルート・グループにネストされ、システム閲覧者権限を持つ BSM ユーザとして作成されます。ユーザの権限と階層は、[ユーザ管理] インタフェースで変更できます。

BSM 管理者、およびユーザがログインしたときの BSM 自体による、LDAP が有効な場合のユーザ管理の実行プロセスを次のフローチャートに示します。



LDAP ユーザが BSM にログインする場合、そのユーザは認証ウィザードの[LDAP の全般設定]ダイアログ・ボックスにある[ユーザフィルタ]で定義された条件に一致する必要があります。[LDAP の全般設定]ページの詳細については、359ページ「[LDAP ベンダの属性]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: ユーザ・フィルタの条件に一致するすべての新しい LDAP ユーザは、最初のログイン時に BSM ユーザとして作成されます。適切なユーザのみが BSM にアクセスできるようにするため、LDAP 管理者に問い合わせてフィルタ定義の条件を絞り込んでください。

LDAP サーバから削除されたユーザは、LDAP ユーザとしての登録が解除されて BSM にはログインできませんが、引き続き BSM ユーザとして表示されます。これらのユーザは無効なユーザと呼ばれます。

す。BSM から無効なユーザを削除する方法の詳細については、385ページ「使用されなくなったユーザの削除方法」を参照してください。

LDAP ユーザとBSM ユーザの同期の詳細については、380ページ「グループのマッピング方法とユーザの同期方法」を参照してください。

以前のバージョンのBSM からアップグレードした後のグループの同期の詳細については、378ページ「以前のバージョンのBSM からアップグレードした後のユーザの同期」を参照してください。

以前のバージョンのBSM からアップグレードした後のユーザの同期

以前のバージョンのBSM からアップグレードした場合、[インフラストラクチャ設定]の[ユーザの同期の有効化]設定は標準で[False]に設定されます。これにより、[ユーザおよび権限]インタフェースの[LDAP の設定]ボタンを使用して、LDAP グループをBSM のグループにマップできます。グループをマップしない場合、すべてのBSM グループはルート・ディレクトリ内にネストされます。

LDAP とBSM グループがマップされたら、ユーザがBSM にログインしたときに同期されるように[インフラストラクチャ設定]の[ユーザの同期の有効化]設定を[True]に変更する必要があります。

このタスクの実行の詳細については、382ページ「以前のバージョンのBSM からアップグレードした後にユーザを同期する方法」を参照してください。

標準設定のユーザ権限割り当てに対する微調整の実行

現在マップされているグループに適合しないすべてのユーザに対する標準設定のグループ・マッピングが必要で、標準設定の BSM ユーザ・ロール [LDAP の設定]にあるインフラストラクチャ設定の[自動作成ユーザロール]で定義)では必要な詳細が指定できない場合は、BSM の動的 LDAP グループ機能を使用します。

BSM LDAP の設定で指定したのと同じユーザ・フィルタに基づいて、動的 LDAP グループを作成するように企業 LDAP サーバ管理者に依頼してください。

このユーザ・フィルタは、企業 LDAP の動的グループのメンバを自動的に読み込んで保持します。

BSM で、標準設定で必要なロールと権限を割り当てたローカル・グループを作成します。企業 LDAP で作成された動的グループを BSM ローカル・グループにマップします。BSM へのログインが許可されていて、ほかのマップされているグループに属さないユーザは、標準設定のグループに含まれません。この標準設定のグループが存在しない場合、これらのユーザはユーザ管理ツリーのルート・レベルに作成され、権限を個別に設定する必要があります。

BSM で動的 LDAP グループを有効にするには、[インフラストラクチャ設定]に移動し、[LDAP の設定]コンテキストを選択して[動的グループの有効化]を true に設定します。この変更は、ただちに有効になります。

動的グループを有効にするまで、[ユーザおよび権限]での[グループのマッピング]ダイアログ・ボックスの[ユーザをリスト]には動的グループのメンバは表示されません。

注: 企業 LDAP グループは非常に大きくなる可能性があるため、[ユーザをリスト]には最初の 100 ユーザまでが表示されます。完全なユーザ・リストを表示する場合や特定のユーザを検索する場合は、標準の LDAP ブラウザを使用します。

グループのマッピング方法とユーザの同期方法

このタスクでは、BSM グループへの LDAP グループのマッピング方法、および BSM ユーザと LDAP ユーザの同期方法について説明します。

1. LDAP サーバでのグループのマッピングの設定

LDAP サーバでグループのマッピングを有効にするには、認証ウィザードを使用します。タスクの詳細については、351 ページ「認証ウィザード」を参照してください。

2. BSM グループおよび階層の作成


適切なロールが割り当てられた BSM のローカルグループ(ユーザをネストし、ユーザはグループの権限レベルを継承)を作成します。タスクの詳細については、319 ページ「[グループ/ユーザ] 表示枠」を参照してください。

3. BSM グループへの LDAP グループのマッピング

BSM のグループに LDAP サーバのユーザ・グループをマッピングします。

注意: LDAP サーバを有効にしてからグループのマッピングとユーザの同期を設定するまでの間にログアウトした場合、BSM からロックアウトされることを避けるため、管理者が次のいずれかを実行する必要があります。

- ユーザの同期を有効にした後に BSM にログインできるように、独自のグループをマッピングしていることを確認する。
- スーパーユーザ権限のある BSM のアカウントを作成する。

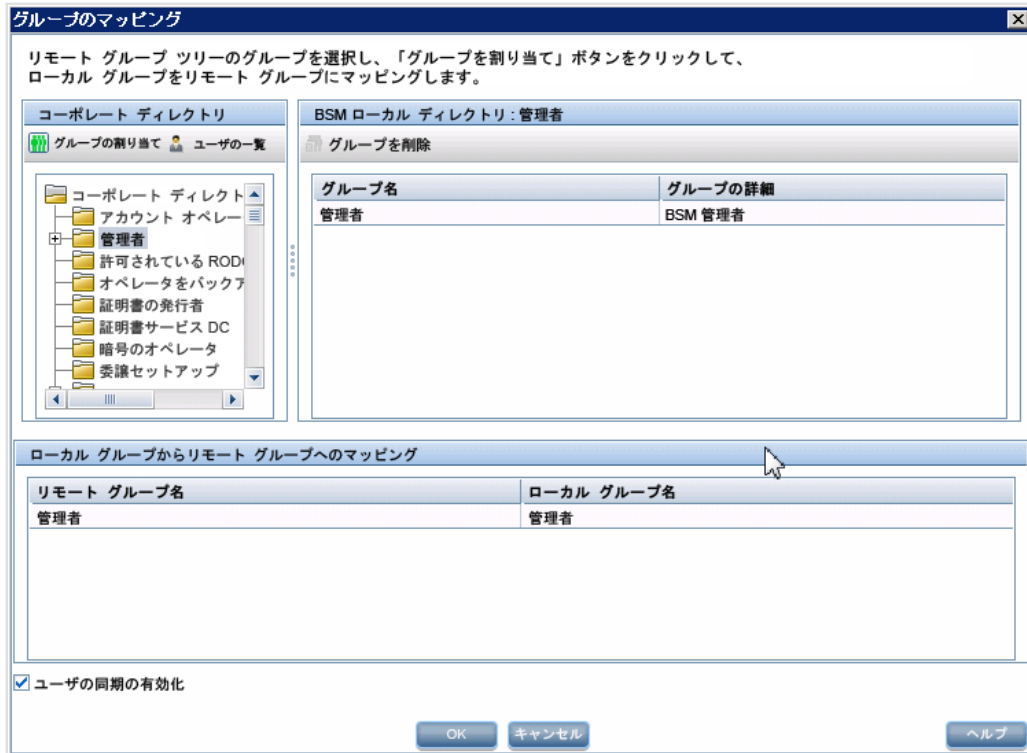
a. [ユーザおよび権限] インタフェースで [グループ/ユーザ] 表示枠に移動し、[LDAP の設定] ボタン  をクリックして [グループのマッピング] を選択し、[グループのマッピング] ダイアログ・ボックスを開きます。

b. [<リポジトリ名> リモート リポジトリ] 表示枠で、LDAP サーバ・グループを選択して [グループを割り当て] をクリックします。

選択した LDAP グループにマッピングされた BSM グループは、[BSM リモート グループのローカル リポジトリ: <グループ名>] 表示枠に表示されます。

すべての LDAP グループの既存のマッピングは、[ローカル グループからリモート グループへのマッピング] 表示枠に表示されます。

ローカル・グループからリモート・グループへのマッピング:



4. ユーザの同期の有効化

LDAP サーバのユーザ・グループとBSM のユーザ・グループの同期を有効にするには、認証ウィザードの[LDAP ユーザの同期設定]表示枠で関連する設定を指定します。

- ユーザの同期を有効にする前に、独自のLDAP ユーザ・ログインに一致するBSM のスーパーユーザ・アカウントを作成しているか、[スーパーユーザ]ロールが割り当てられたBSM グループに適切なLDAP グループがマップされていることを確認します。これが行われていない場合、LDAP を有効にしてからグループのマッピングが完了してユーザの同期を有効にするまでの間にBSM からログアウトすると、指定したBSM スーパーユーザ・アカウントがBSM からロックアウトされます。
- ユーザの同期を無効にして、BSM の[ユーザ管理]インタフェースによるユーザの管理を有効にするには、[ユーザ管理]>[LDAP]>[グループのマッピング]ユーザ・インタフェースの[LDAP ユーザの同期設定]ページにある[ユーザの同期の有効化]チェック・ボックスをクリアします。

認証ウィザードによるユーザの同期の詳細については、360ページ「[LDAP ユーザの同期設定]ページ」を参照してください。

以前のバージョンの BSM からアップグレードした後にユーザを同期する方法

以前のバージョンの BSM からアップグレードした後に LDAP と BSM ユーザを同期するには、次の手順を実行します。

1. BSM 7.50 より前のバージョンからアップグレードしている場合、認証ウィザードの[LDAP Users Synchronization]ページにある[ユーザの同期の有効化]チェック・ボックスがクリアされていることを確認します。
2. LDAP グループが BSM グループにマップされていることを確認します。このタスクの実行の詳細については、[380ページ「グループのマッピング方法とユーザの同期方法」](#)を参照してください。
3. 認証ウィザードの[LDAP Users Synchronization]ページに移動し、[ユーザの同期の有効化]チェック・ボックスを選択します。

BSM へのログインに使用される属性の変更方法

このタスクでは、BSM へのログインに使用する LDAP 属性の変更方法について説明します。

BSM へのログインに使用する LDAP 属性を変更するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [認証方法] に移動します。
2. [設定] ボタンをクリックして、認証方法 ウィザードをアクティブ化します。
3. [LDAP の全般設定] ページに移動して [詳細設定] ボタンをクリックします。
4. [UUID 属性] 属性を、LDAP サーバに表示されるログインで使用する属性に変更します。

SSL による LDAP サーバと BSM サーバ間のセキュリティで保護された通信方法

1. LDAP サーバでセキュリティ保護接続を必要とする場合は、次の手順を実行します。
 - a. LDAP サーバ証明書を発行した認証局からルート CA 証明書を取得します。
 - b. (JRE および JRE64 の両方について) BSM ゲートウェイごとに、それを JVM のトラストストアにインポートします。
 - c. BSM ゲートウェイ・サーバを再起動します。

例：

```
cd C:\HPBSM\JRE64\bin
```

```
keytool -import -trustcacerts -alias myCA -file c:\RootCA.cer -keystore ..\lib\security\cacerts
```

```
cd C:\HPBSM\JRE\bin
```

```
keytool -import -trustcacerts -alias myCA -file c:\RootCA.cer -keystore ..\lib\security\cacerts :
```

2. 次のように、認証管理ウィザードを使用して、LDAP サーバと BSM サーバ間の通信が SSL で有効であることを確認します。
 - a. [管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] > [認証管理] を選択して認証管理ウィザードに移動し、[設定] をクリックして [LDAP 一般] ページに移動します。
 - b. 次の構文に従って LDAP サーバの URL を入力します：ldaps://machine_name:port/<スコープ> ??sub。

プロトコルが ldaps:// で、ポート番号が LDAP サーバで設定されている SSL ポート(標準設定は 636)に従って設定されていることを確認します。

3. [LDAP の全般設定] ページの関連フィールドに既知の LDAP ユーザの UUID とパスワードを入力して、設定をテストします。[テスト] をクリックしてユーザを認証します。詳細については、[356ページ「\[LDAP の全般設定\] ページ」](#)を参照してください。


使用されなくなったユーザの削除方法

このタスクでは、LDAP サーバに存在していない BSM ユーザを削除する方法について説明します。

このオプションは、次の条件を満たす場合にのみ有効です。

- [認証方法] ページの [リモート ユーザリポジトリモード] が [有効] に設定されている。
- ユーザに削除権限がある。

使用されなくなったユーザを削除するには、次の手順を実行します。

1. [管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] を選択し、[グループ/ユーザ] 表示枠の [LDAP の設定] ボタン  をクリックして、[無効なユーザの削除] を選択します。
2. 削除するユーザを選択します。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、ライトウェイト・ディレクトリ・アクセス・プロトコル(LDAP) 認証のトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- LDAP サーバ URL の設定時に次のエラーを含む赤の十字が表示されることがあります。

エラー - sun.security.validator.ValidatorException : PKIX パスの作成に失敗しました:
sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException : 要求されたターゲットへの有効な証明パスが見つかりません

この場合、LDAP サーバへのセキュリティで保護された通信が設定されていません。この設定方法の詳細については、『HP Business Service Management Hardening Guide』PDF の「Securing Communication Between an LDAP Server and BSM Server Over SSL」を参照してください。

- BSM が Oracle データベースとともにインストールされていて、LDAP Active Directory サーバでユーザの同期が有効になっている場合、LDAP サーバで設定されているのと同じ UID(正しい大文字と小文字)で BSM にログインしていることを確認します。これが必要な理由は、Oracle データベースは大文字と小文字を区別し、LDAP Active Directory は大文字と小文字を区別しないため、大文字と小文字が正しくない UID でログインすると予期しない結果につながる可能性があるためです。

たとえば、ユーザが LDAP Active Directory に存在する **testuser** を呼び出して BSM にログインした場合、BSM ユーザ **testuser** が自動的に作成され、このユーザに BSM の[ユーザ管理]インタフェースで権限を割り当てることができます。その後 BSM に **Testuser** としてログインした場合、(Active Directory は大文字と小文字を区別しないため) LDAP Active Directory サーバからユーザの存在を確認したことが通知され、このユーザに BSM へのログインが許可されます。ただし、(Oracle データベースは大文字と小文字を区別するため) Oracle データベースはこのユーザを **testuser** として識別しないため、ユーザ **Testuser** は新しいユーザとみなされ、**testuser** に割り当てられた権限は適用されません。

第25章

LW-SSO 認証 - 一般的な参照情報

LW-SSO は、ユーザが1回ログオンすれば再ログオンを求めるプロンプトを表示することなく複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法です。設定済みのソフトウェア・グループに属するアプリケーションでは認証が信頼されるため、1つのアプリケーションから別のアプリケーションに移動する場合に他の認証は必要ありません。

本項の情報は、LW-SSO バージョン 2.4 に適用されます。

LW-SSO トークンの有効期限

LW-SSO トークンの有効期限の値により、アプリケーション・セッションの有効性が決まります。このため、有効期限の値は、アプリケーション・セッションの有効期限の値と少なくとも同じである必要があります。

LW-SSO トークンの有効期限に関する推奨設定

LW-SSO を使用する各アプリケーションでは、トークンの有効期限を設定する必要があります。推奨値は60分です。高レベルのセキュリティを必要としないアプリケーションでは、300分の値を設定できます。

GMT 時間

LW-SSO 統合に関係しているすべてのアプリケーションでは、最大差異が15分である同じ GMT 時間を使用する必要があります。

複数ドメイン機能

複数ドメイン機能において異なる DNS ドメインのアプリケーションと統合する必要がある場合は、LW-SSO 統合に関係しているすべてのアプリケーションで `trustedHosts` 設定 (または `protectedDomains` 設定) を行う必要があります。また、設定の `lwssso` 要素に正しいドメインを追加する必要があります。

URL 用の SecurityToken 取得機能

他のアプリケーションから URL 用の SecurityToken として送信された情報を受け取るには、ホスト・アプリケーションで設定の `lwssso` 要素に正しいドメインを設定する必要があります。

LW-SSO のシステム要件

次の表に、LW-SSO の設定要件を示します。

アプリケーション	バージョン	コメント
Java	1.5 以上	
HTTP Sevlets API	2.1 以上	
Internet Explorer	6.0 以上	ブラウザで HTTP セッション・クッキーと HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要があります。
FireFox	2.0 以上	ブラウザで HTTP セッション・クッキーと HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要があります。
JBoss 認証	JBoss 4.0.3 JBoss 4.3.0	
Tomcat 認証	スタンドアロン Tomcat 6.0.29 スタンドアロン Tomcat 5.0.28 スタンドアロン Tomcat 5.5.20	
Acegi 認証	Acegi 0.9.0 Acegi 1.0.4	
Spring Security 認 証	Spring Security 2.0.4	
Web サービス・エンジン	Axis 1 - 1.4 Axis 2 - 1.2 JAX-WS-R1 2.1.1	

LW-SSO セキュリティ警告

本項では、LW-SSO 設定に関連するセキュリティ警告について説明します。

- **LW-SSO の `initString` 機密パラメータ。** LW-SSO では、対称暗号化を使用して LW-SSO トークンの検証と作成が行われます。設定内の `initString` パラメータは、秘密キーの初期化に使用されます。アプリケーションでトークンが作成され、同じ `initString` パラメータを使用する各アプリケーションでトークンが検証されます。

注意:

- `initString` パラメータを設定せずに LW-SSO を使用することはできません。
 - `initString` パラメータは機密情報であるため、公開、トランスポート、永続性などに関してもそのように取り扱う必要があります。
 - `initString` パラメータは、LW-SSO を使用して相互統合されているアプリケーション間でのみ共有する必要があります。
 - `initString` パラメータの最小長は 12 文字です。
- **認証セキュリティのレベル。** 最も脆弱な認証フレームワークを使用しており、統合済みの他のアプリケーションで信頼されている LW-SSO トークンを発行するアプリケーションにより、すべてのアプリケーションに対する認証セキュリティのレベルが決まります。

厳密かつセキュリティ保護された認証フレームワークを使用するアプリケーションのみが LW-SSO トークンを発行することをお勧めします。

- **対称暗号化の影響。** LW-SSO では、対称暗号化を使用して LW-SSO トークンの発行と検証が行われます。このため、LW-SSO を使用するどのアプリケーションでも、同じ `initString` パラメータを共有する他のすべてのアプリケーションで信頼されるトークンを発行できます。`initString` を共有するアプリケーションが信頼できない場所に存在するか、信頼できない場所からアクセスされる場合には、潜在的なリスクが伴います。
- **ユーザ・マッピング(同期)。** LW-SSO フレームワークでは、統合されたアプリケーション間のユーザ・マッピングが保証されません。このため、統合されたアプリケーションでユーザ・マッピングを監視する必要があります。統合されたすべてのアプリケーションで、同じユーザ・レジストリ(LDAP/AD)を共有することをお勧めします。

ユーザ・マッピングが行われないと、セキュリティ違反の原因となりアプリケーションの動作に支障が生じる可能性があります。たとえば、同じユーザ名がさまざまなアプリケーションで異なる実在のユーザに割り当てられる可能性があります。

また、ユーザがアプリケーション(AppA)にログオンしてから、コンテナまたはアプリケーション認証を使用する2つ目のアプリケーション(AppB)にアクセスする場合、ユーザ・マッピングが行われないと AppB への手動ログオンとユーザ名の入力が強制されます。AppA へのログオンに使用したユーザ名と異なるユーザ名を入力した場合は、次の動作が発生します。ユーザがその後、AppA または AppB から3つ目のアプリケーション(AppC)にアクセスした場合、AppA または AppB へのログオンで使用したそれぞれのユーザ名を使用して AppC にアクセスされます。

- **ID マネージャ。** 認証目的に使用されます。ID マネージャ内の非保護のリソースはすべて、LW-SSO 設定ファイルの `nonsecureURLs` 設定を使用して設定する必要があります。

トラブルシューティングおよび制限事項

既知の問題

本項では、LW-SSO 認証に関する既知の問題について説明します。

- **セキュリティ・コンテキスト。** LW-SSO セキュリティ・コンテキストでは、属性名ごとに1つの属性値のみをサポートしています。

このため、SAML2トークンから同じ属性名に対して複数の値を送信しても、LW-SSO フレームワークで受け入れられる値は1つのみです。

同様に、同じ属性名に対して複数の値を送信するように IdM トークンが設定されていても、LW-SSO フレームワークで受け入れられる値は1つのみです。

- **Internet Explorer 7 を使用した場合の複数ドメインのログアウト機能。** 使用しているブラウザが Explorer 7 であり、アプリケーションでログアウト手順の HTTP 302 リダイレクト動詞を3回続けて呼び出すと、複数ドメインのログアウト機能に失敗することがあります。

この場合、Internet Explorer 7 で HTTP 302 リダイレクト応答の処置を誤り、[Internet Explorer ではこのページは表示できません] エラー・ページが表示されることがあります。

回避策として、ログアウト・シーケンスでアプリケーションのリダイレクト・コマンド数を削減する(可能な場合)ことをお勧めします。

制限事項

LW-SSO 認証を操作する場合、次の制限事項に注意してください。

- **アプリケーションへのクライアント・アクセス。**

LW-SSO 設定でドメインが定義されている場合：

- アプリケーション・クライアントは、ログイン URL で完全修飾ドメイン名 (FQDN) を指定してアプリケーションにアクセスする必要があります。たとえば、`http://myserver.companydomain.com/WebApp` のように指定します。
- LW-SSO では、IP アドレスを含む URL (`http://192.168.12.13/WebApp` など) をサポートできません。
- LW-SSO では、ドメインのない URL (`http://myserver/WebApp` など) をサポートできません。

LW-SSO 設定でドメインが定義されていない場合： クライアントは FQDN を含まないログイン URL でアプリケーションにアクセスできます。この場合、LW-SSO セッション・クッキーが、単一のマシン用にドメイン情報なしで作成されます。このため、クッキーは別のブラウザに委任されず、同じドメインにある他のコンピュータにも渡されません。つまり、LW-SSO は同じドメインでは動作しません。

- **LW-SSO フレームワークの統合。** LW-SSO フレームワーク内でアプリケーションが事前に統合されている場合に限り、アプリケーションで LW-SSO 機能を利用できます。
- **複数ドメインのサポート。**
 - 複数ドメイン機能は、HTTP の参照元を基にしています。このため、LW-SSO では1つのアプリケーションから他のアプリケーションへのリンクをサポートしており、両方のアプリケーションが同じドメインに存在する場合を除き、ブラウザ・ウィンドウでの URL の入力をサポートしていません。
 - HTTP POST を使用した最初のクロスドメイン・リンクはサポートしていません。

複数ドメイン機能では、2つ目のアプリケーションに対する最初の HTTP POST 要求をサポートしていません(HTTP GET 要求のみをサポートしています)。たとえば、2つ目のアプリケーションに対する HTTP リンクがアプリケーションに存在する場合、HTTP GET 要求はサポートされますが、HTTP FORM 要求はサポートされません。最初の要求の後のすべての要求では、HTTP POST または HTTP GET のいずれかを使用できます。

- LW-SSO トークンのサイズ:

LW-SSO で1つのドメインの1つのアプリケーションから別のドメインの別のアプリケーションに転送できる情報量は、15個のグループ/役割/属性(各項目は平均15文字)に制限されています。

- 複数ドメイン・シナリオでの保護(HTTPS)から非保護(HTTP)へのリンク:

複数ドメイン機能は、保護(HTTPS)ページから非保護(HTTP)ページにリンクする場合には動作しません。これは、保護リソースから非保護リソースにリンクする場合に参照元のヘッダが送信されないというブラウザの制限です。

- Internet Explorer でのサードパーティ・クッキーの動作:

Microsoft Internet Explorer 6 には、「Platform for Privacy Preferences (P3P) Project」をサポートするモジュールが含まれています。つまり、サードパーティ・ドメインのクッキーは、標準設定によりインターネットのセキュリティ・ゾーンでブロックされます。IE ではセッション・クッキーもサードパーティ・クッキーとみなされるためブロックされ、その結果、LW-SSO の動作が停止します。

この問題を解決するには、起動されたアプリケーション(または *.mydomain.com としての DNS ドメインのサブセット)をお使いのコンピュータのイントラネット/信頼済みゾーンに追加します(たとえば、Microsoft Internet Explorer で[メニュー]> [ツール]> [インターネット オプション]> [セキュリティ]> [ローカル イントラネット]> [サイト]> [詳細設定]を選択します)。これにより、クッキーが受け入れられるようになります。

注意: LW-SSO セッション・クッキーは、ブロックされたサードパーティ・アプリケーションで使用されるクッキーの1つにすぎません。

- SAML2 トークン。

- ログアウト機能は、SAML2 トークンが使用されている場合にはサポートされません。

このため、SAML2 トークンを使用して2つ目のアプリケーションにアクセスする場合、最初のアプリケーションからログアウトしたユーザは、2つ目のアプリケーションからログアウトされません。

- SAML2 トークンの有効期限は、アプリケーションのセッション管理に反映されません。

このため、SAML2 トークンを使用して2つ目のアプリケーションにアクセスする場合、各アプリケーションのセッション管理を個別に処理する必要があります。

- JAAS レルム。Tomcat の JAAS レルムはサポートされません。

- Tomcat ディレクトリでのスペースの使用。Tomcat ディレクトリではスペースを使用できません。

Tomcat インストール・パス(フォルダ)にスペースが含まれており(Program Files など)、LW-SSO 設定ファイルが common\classes Tomcat フォルダに存在する場合は、LW-SSO を使用できません。

- ロード・バランサの設定。LW-SSO でデプロイされたロード・バランサは、固定セッションを使用するように設定する必要があります。

第5部分

レポート管理と警告管理

第26章

レポート・スケジュール管理









管理者権限のあるユーザは、レポート・スケジュール管理で定期レポートの編集、削除、再開、または一時停止を実行できます。レポート・マネージャでお気に入りフィルタユーザ・レポート(カスタム・レポート、トレンド・レポート、サービス・レポート)およびお気に入りフィルタをスケジュールし、定期的に定義された間隔で、指定したレポートを電子メールによって特定の受信者に自動的に送信できます。ユーザ・レポートのスケジュールの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「レポート・マネージャを使用したユーザ・レポートの作成方法と管理方法」を参照してください。

レポート・スケジュール管理のメイン・ページ

このページでは、レポート・マネージャのお気に入りフィルタで設定されたスケジュールを管理できます。

アクセス方法	[管理]>[プラットフォーム]>[レポート スケジュール]を選択します。
重要な情報	レポート・スケジュール管理のメイン・ページからは新しいスケジュールを作成できません。スケジュールの作成の詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「レポート・マネージャを使用したユーザ・レポートの作成方法と管理方法」を参照してください。
関連タスク	『BSM ユーザ・ガイド』の「レポート・マネージャを使用したユーザ・レポートの作成方法と管理方法」。

ユーザ・インターフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	[スケジュールの編集]ダイアログ・ボックスを開いて、スケジュール設定を編集します。詳細については、「[新規スケジュールの作成]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	<レポート名>に対する[スケジュールの編集]ダイアログ・ボックスを開いて、選択したスケジュールを編集できます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[新規スケジュールの作成]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: このダイアログ・ボックスでは、既存のスケジュールの編集のみ可能です。新しいスケジュールはレポート・マネージャ・インターフェースで作成します。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[新規スケジュールの作成]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	選択したスケジュールを削除します。
	選択したスケジュールを再開します。
	選択したスケジュールを一時停止します。
	[レポート スケジュール管理]ページを更新します。
	列の幅を標準設定にリセットします。
	テーブルに表示する列を選択できます。
生成時間	スケジュールが生成される時間(指定されたタイム・ゾーン)。
受信者	スケジュールされた間隔でレポートまたはレポート項目を受信するようにレポート・マネージャで設定した受信者。スケジュールの設定の詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[新規スケジュールの作成]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
繰り返し	選択したスケジュールの繰り返しパターン。

UI 要素	説明
レポート名	スケジュールが設定されているレポートの名前。
レポート タイプ	スケジュールが設定されているレポートのタイプ。
ステータス	スケジュールのステータス。使用可能な値は、 <ul style="list-style-type: none">• アクティブ• 一時停止

第27章

警告配信システムの設定

BSM 警告では、事前定義のパフォーマンス制限に違反しているときに警告をトリガして先行的に通知します。

タスクの詳細については、400ページ「警告配信システムの設定方法」を参照してください。

本項の内容

- 396ページ「警告の受信者」
- 396ページ「通知テンプレート」
- 396ページ「警告スキーマ」
- 397ページ「OM でイベントを開く」
- 397ページ「警告の履歴」
- 397ページ「警告の配信」

警告の受信者

指定した受信者に通知を送信するように警告を設定できます。受信者の設定の詳細については、324ページ「受信者管理」を参照してください。

通知テンプレート

各受信者に対して、警告通知に使用する通知方法(電子メール、ページャ、SMSの任意の組み合わせ)とテンプレートを指定できます。警告の通知スケジュールを作成することもできます。詳細については、418ページ「EUM 警告の通知テンプレートの設定方法」を参照してください。

警告スキーマ

警告スキーマごとに、固有の警告プロパティ・セットを定義します。警告スキーマを作成したら、適切な警告ユーザ・インタフェースで警告スキーマを表示、編集します。詳しいヒントとガイドラインについては、399ページ「効果的な警告スキーマの計画」を参照してください。

警告を設定して、その警告の受信者を割り当てることができます。

- **ビュー内の CI** : CI ステータス警告は、選択した設定項目 (CI) での事前定義されたステータスの変更がビジネス・ロジック・エンジンで検出された場合にトリガされます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「CI ステータス警告管理の概要」を参照してください。
- **HP Service Manager** は、CI ステータス警告が BSM でトリガされたときに自動的にインシデントを開きます。詳細については、HP ソフトウェア統合サイトの [BSM プラットフォーム] セクションにある HP Service Manager を参照してください。
- **SLA** : SLA ステータス警告は、SLA の主要管理指標ステータスへの変更によってトリガされます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「SLA 警告の概要」を参照してください。
- **EUM 警告** : EUM 警告は、トランザクション応答時間、可用性、成功または失敗、完了時間などの、事前定義された条件に一致したときにトリガされます。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「EUM 警告管理の概要」を参照してください。

OM でイベントを開く

CI ステータス警告, SLA 警告, または EUM 警告が BSM でトリガされたときに, 自動的に OM でイベントを開くことができます。詳細については, [HP ソフトウェア統合サイトの「BSM プラットフォーム」セクションにある「Operations Manager」](#)を参照してください。

警告の履歴

警告の履歴は, 次の場所に表示できます。

- **[CI ステータス警告レポート] タブ**: 指定した時間範囲内にトリガされた, すべての CI ステータス警告を一覧表示できます。詳細については, 『BSM ユーザ・ガイド』の「[構成アイテム・ステータス警告レポート](#)」を参照してください。
- **[SLA 警告レポート] タブ**: 指定した時間範囲内にトリガされた, すべてのサービス・レベル管理警告を一覧表示できます。詳細については, 『BSM ユーザ・ガイド』の「[警告ログ・レポート](#)」を参照してください。
- **[EUM 警告レポート] タブ**: 次のレポートにアクセスできます。
 - **警告ログ・レポート**: 指定した時間範囲内に BSM によって送信された, EUM 警告のすべての詳細を追跡できます。詳細については, 『BSM ユーザ・ガイド』の「[警告ログ・レポート](#)」を参照してください。
 - **経過時間ごとの警告数レポート**: 警告の頻度の概要を表示できます。詳細については, 『BSM ユーザ・ガイド』の「[経過時間ごとの警告数レポート](#)」を参照してください。

警告の配信

オンライン・コンポーネントでダウンタイムが発生した場合, 警告アプリケーションは標準設定で1時間データをバス内に保管します。コンポーネントがオンラインに戻ったときに, 警告エンジンがバス内のデータから警告を生成します。

警告およびダウンタイム

CI ステータス警告の設定時にダウンタイムが発生すると、CI に影響して CI データにゆがみが発生する可能性があります。

Business Process Monitor からのデータまたは SiteScope データ・ソースにステータスが基づく CI に対する EUM 警告スキーマの設定時にダウンタイムが発生すると、CI に影響して CI データにゆがみが発生する可能性があります。

ダウンタイム時に CI ステータス警告または EUM 警告をトリガするかどうかを指定できます。ダウンタイムの概念の詳細については、200ページ「[ダウンタイム管理](#)」を参照してください。

ダウンタイム時の CI ステータス警告および EUM 警告の処理方法を指定するには、[管理]> [プラットフォーム]> [ダウンタイム]を選択し、次のいずれかのオプションを選択します。

- **アクションは必要ありません**
- **警告の非表示イベントを閉じる**
- **KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる**
- **レポートおよび KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる**
- **アクティブ モニタリングの停止 (BPM および SiteScope)、レポートおよび KPI 計算のダウンタイム実行、警告の非表示イベントを閉じる(関連するすべての SLA に影響)**

スケジュールされたダウンタイム中の CI ステータスまたは CI の EUM 警告は、上記の[アクションは必要ありません]オプション以外のすべてのオプションでは送信されません。

CI のステータスが[ダウンタイム]ステータスに変化した場合は警告をトリガするように設定した場合、上記のいずれかのオプション([アクションは必要ありません]オプションは除く)が選択されている場合でも、CI 警告が送信されます。ユーザ・インターフェースの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「[\[一般\]ページ](#)」を参照してください。

タスクの詳細については、400ページ「[警告配信システムの設定方法](#)」を参照してください。

ユーザ・インターフェースの詳細については、208ページ「[\[ダウンタイムの管理\]ページ](#)」を参照してください。

効果的な警告スキーマの計画

警告スキーマを作成する前に、パフォーマンスの問題をユーザに警告する最も効果的な方法を検討する必要があります。次に示す情報は、効果的な警告を計画するのに役立ちます。

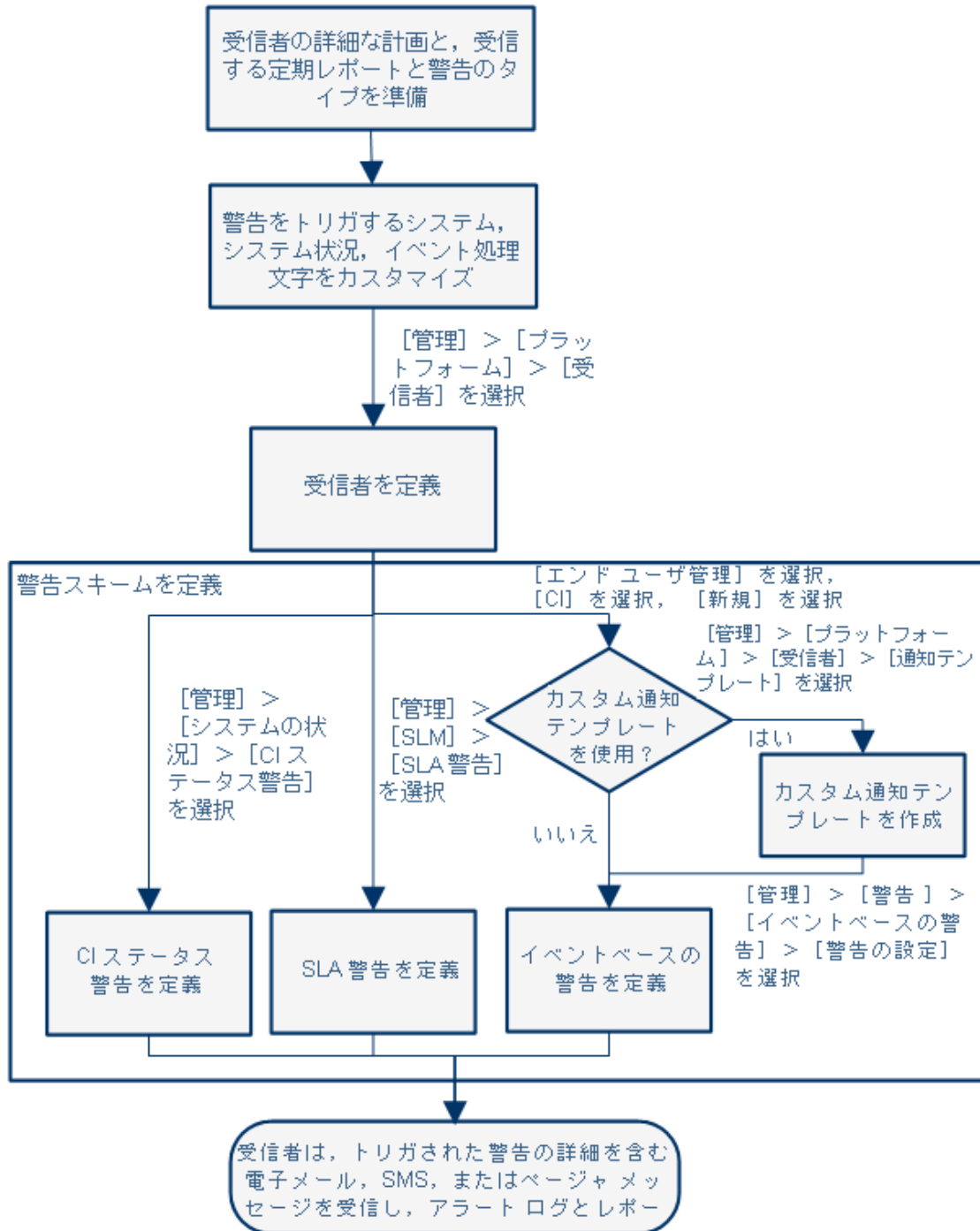
注: HP プロフェッショナル・サービスでは、この問題についてのベスト・プラクティスのコンサルティングを提供しています。このサービスのご利用方法については、HP の担当者へお問い合わせください。

- 警告スキーマを作成する場合、重大度別に警告を分類します。即座の修正対応が必要なイベント(トランザクションの失敗や重要なトランザクションの過度に長い応答時間など)には致命的な警告を作成します。早期に通知する必要のあるイベント(応答時間の遅延など)には致命的以外の警告を作成します。
- 各種警告を受信するユーザを決定して、警告タイプに最適な配信方法を検討します。たとえば、致命的な警告を配信する場合、電子メールよりもページャの方が効果的です。配信方法を決定したら、時間帯も考慮します。たとえば、営業時間外では電子メール警告は効果的ではありません。
- 1 回かぎりのイベントではなく定期的な問題を警告するように BSM を設定します。定期的な警告は、アプリケーションの問題の最も正確なインジケータです。一般的に、定期的なイベントの数と監視している Business Process Monitor の場所の数を比較します。たとえば、5 つの場所を監視していてそのすべてに障害がある場合は致命的ですが、100 個の場所を監視していて 3 つの場所に障害があっても致命的にはなりません。

警告配信システムの設定方法

このタスクおよび関連するフローチャートでは、受信者に警告を配信するようにシステムを設定する方法について説明します。

警告配信システムの設定 - フローチャート



1. 警告受信者要件の計画

推奨事項を次に示します。

- 必要な警告受信者をリストする(連絡先情報や受信者への配信方法(電子メール, SMS, ページャ)を含む)。進め方の推奨事項については、399ページ「効果的な警告スキーマの計画」を参照してください。
- 配信する警告タイプを詳細に計画する。警告タイプの詳細については、400ページ「警告配信システムの設定方法」を参照してください。

2. 適切なユーザ権限の指定

次の適切なユーザ権限を指定します。

■ EUM 警告

- アプリケーションごとに表示またはフル・コントロール権限をユーザに付与できます。[管理]> [プラットフォーム]> [ユーザおよび権限]> [ユーザ管理]を選択してユーザを作成 / 編集し、[権限]をクリックします。[エンド ユーザ管理]コンテキストで、[Business Service Management]> [アプリケーション]> [<アプリケーション>]> [警告]コンテキストを選択します。
- CEM イベント・テンプレートの権限も指定する必要があります。[管理]> [プラットフォーム]> [ユーザおよび権限]> [ユーザ管理]を選択してユーザを作成 / 編集し、[権限]をクリックします。[エンド ユーザ管理]コンテキストで、[警告 - 通知テンプレート]を選択します。

- CI ステータス警告 : ビューごとに変更, 表示, 削除, フル・コントロール権限をユーザに付与できます。[管理]> [プラットフォーム]> [ユーザおよび権限]> [ユーザ管理]を選択してユーザを作成 / 編集し、[権限]をクリックします。[RTSM]コンテキストで、[Business Service Management]> [ビュー]> [<ビュー名>]コンテキストを選択します。

- SLA 警告 : SLA ごとに追加, 変更, 表示, 削除, フル・コントロール権限をユーザに付与できます。[管理]> [プラットフォーム]> [ユーザおよび権限]> [ユーザ管理]を選択してユーザを作成 / 編集し、[権限]をクリックします。[サービスレベル管理]コンテキストで、[Business Service Management]> [SLA]> [<SLA 名>]コンテキストを選択します。

- 警告の外部アクション([実行可能ファイルを実行], [SNMPトラップを送信], [イベントビューアに記録]): グローバル・レベルで変更またはフル・コントロール権限をユーザに付与できます。[管理]> [プラットフォーム]> [ユーザおよび権限]> [ユーザ管理]を選択してユーザを作成 / 編集し、[権限]をクリックします。[プラットフォーム]コンテキストで、[Business Service Management]> [実行可能ファイルを実行], [SNMPトラップを送信], [イベントビューアに記録]コンテキストを個別に選択します。

- 警告に指定できる通知テンプレート : テンプレートの追加, 変更, 表示, 削除, フル・コントロール権限をユーザに付与できます。これを行うには、[管理]> [プラットフォーム]> [ユーザおよび権限]> [ユーザ管理]を選択してユーザを作成 / 編集し、[権限]をクリックします。[エンド ユーザ管理]コンテキストで、[Business Service Management]> [システム受信者テンプレート]を選択します。これらの権限はグローバル・レベルで定義されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、228ページ「操作」を参照してください。

3. ダウンタイム時の警告のトリガ方法の指定

ステータスが Business Process Monitor や SiteScope データ・ソースのデータに基づいている CI の CI ステータス警告または EUM 警告スキーマを設定する場合、ダウンタイムが CI に影響して CI データにゆがみが発生する可能性があります。

ダウンタイム時にCI ステータス警告またはEUM 警告をトリガするかどうかを指定できます。ダウンタイム時のCI ステータス警告およびEUM 警告の処理方法を指定するには、[管理]>[プラットフォーム]>[ダウンタイム]を選択し、使用可能なオプションのいずれかを選択します。

概念の詳細については、398ページ「警告およびダウンタイム」を参照してください。

ユーザ・インターフェースの詳細については、208ページ「[ダウンタイムの管理]ページ」を参照してください。

4. 警告をトリガするシステム、警告のシステム状況、イベント処理文字のカスタマイズ(任意)

警告をトリガするシステム、システム状況、イベント処理文字をカスタマイズします。詳細については、403ページ「警告のカスタマイズ方法」を参照してください。

5. 受信者の定義

[受信者]ページで、警告(SiteScope 警告以外)のシステム受信者を定義します。配信方法として電子メール、SMS、ページャを指定できます。必要に応じて、特定の警告配信スケジュールを入力します(夜間や週末ではなく営業時間中に警告を受信する受信者など)。詳細については、312ページ「[受信者]タブ(ユーザ管理)」を参照してください。

6. カスタム通知テンプレートの作成(任意)

EUM 警告を定義するときに、必要に応じて形式や警告電子メールに含める情報をカスタマイズするカスタム通知テンプレートを作成できます。詳細については、418ページ「EUM 警告の通知テンプレートの設定方法」を参照してください。

7. BSM で警告がトリガされた場合に Operations Manager やオペレーション管理でイベントを開くための設定

BSM で警告がトリガされた場合に Operations Manager やオペレーション管理でイベントを開くように設定できます。詳細については、HP ソフトウェア統合サイトの「BSM プラットフォーム」セクションにある「Operations Manager」を参照してください。

8. 結果 - 警告スキーマの定義

警告スキーマの計画、該当する受信者の設定、警告の一般設定および通知テンプレートのカスタマイズが完了しました。これで、必要な警告スキーマを定義できます。

- **CI ステータス警告** : 特定のCI のKPI ステータスの変更を受信者に警告するために必要なCI ステータス警告とサービス状況で監視されるKPI を定義します。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「CI ステータス警告スキーマを作成してCI にアタッチする方法」を参照してください。
- **SLA 警告** : サービス・アグリーメントの現在のステータスおよび予測ステータスの変更を受信者に警告するために必要なSLA 警告を定義します。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「SLA の警告スキーマの定義方法」を参照してください。
- **EUM 警告** : Real User Monitor エンティティとBusiness Process Monitor トランザクションのパフォーマンスの差異を受信者に警告するために必要なEUM 警告を定義します。詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「EUM 警告スキーマの作成方法」を参照してください。

警告のカスタマイズ方法

注: このタスクでのすべての手順は省略可能であり、どの順番で実行してもかまいません。

このタスクでは、CI ステータス、SLA、EUM 警告で実行できるカスタマイズについて説明します。

イベントの処理方法の変更

イベントの処理方法を変更するには、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。

- [ファウンデーション]を選択します。
- [警告]を選択します。
- [警告 - イベント処理]テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - 許容可能なイベント遅延 (分): 警告の標準設定の遅延を指定します。警告が破棄されるまでの標準設定の遅延(60分)を変更します。
 - 計算の永続性: 計算の永続性を有効または無効にします。計算の永続性が有効になっている場合、システムがダウンする前に計算されたデータがシステムの起動後のデータの計算に使用されます。計算の永続性を無効にするには[false]を選択し、計算の永続性を有効にするには[true]を選択します。

システムの状況の警告パラメータの変更

イベントの処理方法を変更するには、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。

- [ファウンデーション]を選択します。
- [警告]を選択します。
- [警告 - システムの状況]テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - 通知キュー・モニタのエラーしきい値: 通知キューのステータスがエラーに変更される条件を指定します。通知キュー・モニタの警告キューで待機できる最大メッセージ数を入力します。この最大数に達すると、通知キュー・モニタのステータスが[エラー]になります。
 - 通知キュー・モニタの注意域しきい値: 通知キューのステータスが注意域に変更される条件を指定します。通知キュー・モニタの警告キューで待機できる最大メッセージ数を入力します。この最大数に達すると、通知キュー・モニタのステータスが[注意域]になります。
 - 警告キュー・モニタのエラーしきい値: 警告キューのステータスがエラーに変更される条件を指定します。警告キュー・モニタの警告キューで待機できる最大メッセージ数を入力します。この最大数に達すると、警告キュー・モニタのステータスが[エラー]になります。
 - 警告キュー・モニタの注意域しきい値: 警告キューのステータスが注意域に変更される条件を指定します。警告キュー・モニタの警告キューで待機できる最大メッセージ数を入力します。この最大数に達すると、警告キュー・モニタのステータスが[注意域]になります。

警告をトリガする標準設定の変更

イベントの処理方法を変更するには、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。

- [ファウンデーション]を選択します。
- [警告]を選択します。
- [警告 -トリガされた警告]テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - **コマンド・ラインの実行タイムアウト (秒)**: コマンド・ラインの警告アクションが実行されていない場合の標準設定のアクションのタイムアウト(30秒)を変更できます。
 - **標準設定のSNMPターゲット・アドレス, 標準設定のSNMPポート**: [標準設定のSNMPターゲットアドレス]パラメータにIPアドレスまたはサーバ名を入力し、[標準設定のSNMPポート]パラメータにポート番号を入力することで、標準設定のSNMPトラップ・ホスト・アドレスを変更できます。

注: 1つのSNMPターゲット・アドレスのみを指定できます。SNMPトラップの標準設定のホスト・アドレスは、[新規SNMPトラップの作成]/[SNMPトラップの編集]ダイアログ・ボックスの[対象ホスト入力]ボックスに自動的に表示されます。詳細については、『BSMアプリケーション管理ガイド』の「[新規SNMPトラップの作成]/[SNMPトラップの編集]ダイアログ?ボックス」または『BSMアプリケーション管理ガイド』の「[SNMPトラップの作成]/[SNMPトラップの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。SNMPトラップの作成または編集時に標準設定のホスト・アドレスを選択した後に、インフラストラクチャ設定でそのアドレスを変更した場合、作成したすべてのSNMPトラップのアドレスは新しい値で更新されます。送信されるすべての警告で、SNMPトラップが新しい標準設定アドレスに送信されます。

HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様へ: ログイン時にユーザを選択することで、ユーザごとに標準設定のホスト・アドレスを設定できます。更新されたホスト・アドレスは、その特定のユーザのみに定義されます。また、グローバル・ホスト・アドレスを定義することもできます。

- **コマンド・ラインの代替ペア**: EUM警告の実行可能ファイル・アクションでコマンドを指定するときに、コマンドの実行準備中に実際の値で置き換えられる特殊なトークンを使用できます。これらの値には、コマンド・ラインがオペレーティング・システムで不適切に解釈される可能性のある、二重引用符(")またはその他のトークンが含まれる場合があります。これらの誤った解釈を避けるため、[コマンドラインの代替ペア]インフラストラクチャ設定の標準設定値を次のように変更できます。
 - 各ペアを|a|b|形式で記述します。
 - aの文字はbで置き換えられます。
 - 複数のペアはカンマ(,)で区切ります。
例: |a|b|, |c|d|, |e|f|。
- **CI間での警告依存関係を有効にする**: CI間での警告依存関係を有効にするために使用します。次のいずれかを選択します。
 - **false**: (標準設定)CI間での警告依存関係は許可されません。
 - **true**: CI間での警告依存関係が許可されます。
- **警告タイマのリセットを有効化**: 通知頻度タイマのリセットに使用します。次のいずれかを選択します。

- **false** : (標準設定) 警告が特定の条件によってトリガされると、その警告をトリガした条件は取り除かれます。[許容可能なイベント遅延]パラメータで指定した期間が終了する前に警告をトリガした条件が再度発生した場合、その警告は送信されません。
- **true** : 警告が特定の条件によってトリガされると、その警告をトリガした条件は取り除かれます。[許容可能なイベント遅延]パラメータで指定した期間が終了する前に警告をトリガした条件が再度発生した場合、そのトリガ条件で通知頻度タイマがリセットされるため、警告が送信されます。
- **DB へのログ記録を有効化** : データベースへの警告と通知のログ記録を有効にします。このカスタマイズは、EUM 警告でのみ利用可能です。次のいずれかを選択します。
 - **true** : (標準設定) 警告と通知のログがプロフィール・データベースに記録されます。
 - **false** : 警告と通知のログはプロフィール・データベースに記録されません。ログの詳細については、410ページ「警告ログ」を参照してください。
- **通知とアクションの有効化** : アクションを実行して通知を送信する警告エンジンを有効にします。このカスタマイズは、EUM 警告でのみ利用可能です。次のいずれかを選択します。
 - **true** : (標準設定) 警告エンジンによってアクションが実行され、通知が送信されます。
 - **false** : アクションは実行されず、通知はユーザに送信されません。
- **レガシー SNMP ターゲット・アドレス、レガシ SNMP ポート** : EUM 警告の標準設定の SNMP トラップ・ホスト・アドレスを変更します。[標準設定の SNMP ターゲット アドレス]パラメータに IP アドレスまたはサーバ名を入力し、[標準設定の SNMP ポート]パラメータにポート番号を入力することで、標準設定の SNMP トラップ・ホスト・アドレスを変更します。

注: 1つの SNMP ターゲット・アドレスのみを指定できます。SNMP トラップの標準設定のホスト・アドレスは、[新規 SNMP トラップの作成]/[SNMP トラップの編集]ダイアログ・ボックスの[対象ホスト入力]ボックスに自動的に表示されます。詳細については、『BSM アプリケーション管理ガイド』の「[新規 SNMP トラップの作成]/[SNMP トラップの編集]ダイアログ?ボックス」または『BSM アプリケーション管理ガイド』の「[SNMP トラップの作成]/[SNMP トラップの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。SNMP トラップの作成または編集時に標準設定のホスト・アドレスを選択した後に、インフラストラクチャ設定でそのアドレスを変更した場合、作成したすべての SNMP トラップのアドレスは新しい値で更新されます。送信されるすべての警告で、SNMP トラップが新しい標準設定アドレスに送信されます。

HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様へ : ログイン時にユーザを選択することで、ユーザごとに標準設定のホスト・アドレスを設定できます。更新されたホスト・アドレスは、その特定のユーザのみに定義されます。また、グローバル・ホスト・アドレスを定義することもできます。

- **通知実行の再試行回数** : 通知の再試行回数を指定します。このカスタマイズは、EUM 警告でのみ利用可能です。標準設定では、通知は 1 回のみ送信されます。[通知実行の再試行回数]パラメータを使用して標準設定を変更します。指定した数に 1 を足した数が実行される再試行回数になります。
- **通知 URL** : 通知に埋め込まれる URL をカスタマイズします。
- **Symphony 要求のタイムアウト (秒)** : 警告アクションがタイムアウトするまでの秒数を指定しま

す。

- **再試行間の待機間隔 (秒)**: 通知実行の各試行回数間の秒数を指定します。
- **デフォルト EXE パス**: EUM 警告の標準設定の実行可能ファイルへの標準設定のパスを指定します。
- **既定 URL**: EUM 警告の標準設定の URL アドレスを指定します。
- **テンプレートの受信情報フォーマット**: 電子メールまたは SMS の受信者リストを表示する方法を変更します。次の値を割り当てることができます。

- **アドレス**: 電子メールまたは SMS 通知の[To]フィールドに受信者の完全な電子メールを表示します。たとえば、[テンプレートの受信情報フォーマット]を[アドレス]に設定し、テンプレートにパラメータ To: <<Recipients>>, プロファイル名: <<Profile Name>>, 重大度: <<Severity>> が含まれている場合、電子メールは次のようになります。

To: gaz@devlab.ad;shifv@devlab.ad;aahhh.hhheee@hp.com
プロファイル名: forAlert
重要度: 重大

- **論理名**: 電子メールおよび SMS 通知の[To]フィールドに受信者の論理名を表示します。たとえば、[テンプレートの受信情報フォーマット]を[論理名]に設定し、テンプレートに上記の例と同じパラメータが含まれている場合、電子メールは次のようになります。

To: aa;bac admins
プロファイル名: forAlert
重要度: 重大

電子メールによる警告の送信方法の変更

電子メール警告の処理方法を変更するには、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。

- [ファウンデーション]を選択します。
- [プラットフォーム管理]を選択します。
- [プラットフォーム管理 - 警告電子メールの設定]テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - **許可された電子メール送信用のパスワード**: 許可された電子メール警告送信用の標準設定パスワードを変更します。
 - **SMTP サーバ (Windows のみ)**: 使用するプライマリ SMTP サーバを指定します。Windows NT で、SMTP を使用して送信する場合は <SMTPSVC> と設定します。
 - **SMTP サーバ・ポート (Windows のみ)**: SMTP サーバ・ポートを指定します。
 - **許可された電子メール送信用のユーザ**: 許可された電子メール警告送信用の標準設定ユーザを変更します。設定されていない場合、電子メール警告は許可なしで送信されます。

ページャによる警告の送信方法の変更

ページャ警告の処理方法を変更するには、[管理]>[プラットフォーム]>[セットアップと保守]>[インフラストラクチャ設定]を選択します。

- [ファウンデーション]を選択します。
- [プラットフォーム管理]を選択します。

- [プラットフォーム管理 - 警告 ページの設定] テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - 許可されたページ送信用のパスワード : 許可されたページ警告送信用の標準設定パスワードを変更します。
 - SMTP サーバ (Windows のみ) : 使用するプライマリ SMTP サーバを指定します。Windows NT で、SMTP を使用して送信する場合は <SMTPSVC> と設定します。
 - SMTP サーバポート (Windows のみ) : SMTP サーバポートを指定します。
 - 許可されたページ送信用のユーザ : 許可されたページ警告送信用の標準設定ユーザを変更します。設定されていない場合、ページ警告は許可なしで送信されます。

SMS による警告の送信方法の変更

SMS 警告の処理方法を変更するには、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。

- [ファウンデーション] を選択します。
- [プラットフォーム管理] を選択します。
- [プラットフォーム管理 - 警告 SMS の設定] テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - 許可された SMS 送信用のパスワード : 許可された SMS 警告送信用の標準設定パスワードを変更します。
 - SMTP サーバ (Windows のみ) : 使用するプライマリ SMTP サーバを指定します。Windows NT で、SMTP を使用して送信する場合は <SMTPSVC> と設定します。
 - SMTP サーバポート (Windows のみ) : SMTP サーバポートを指定します。
 - 許可された SMS 送信用のユーザ : 許可された SMS 警告送信用の標準設定ユーザを変更します。設定されていない場合、SMS 警告は許可なしで送信されます。

通知の処理方法の変更

通知の処理方法を変更するには、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。

- [ファウンデーション] を選択します。
- [プラットフォーム管理] を選択します。
- [プラットフォーム管理 - 受信者通知 サービス] テーブルで、次のパラメータを見つけて変更します。
 - 警告電子メールの送信者アドレス : 電子メールで使用する標準設定の送信者電子メール・アドレスを変更します。データ処理サーバをインストールするときに設定された、BSM で警告を送信するときに [From] フィールドに表示される標準設定値 (HP_BSM_Alert_Manager) を変更する場合にはこのパラメータを使用します。
 - 代替 SMTP サーバポート (Windows のみ)、代替 SMTP サーバ (Windows のみ) : 代替 SMTP サーバを変更します。
 - 定義したポート番号の指定サーバ : [代替 SMTP サーバ] フィールドの値として SMTP 電子メールを送信するサーバ名を入力し、[代替 SMTP サーバ] フィールドにサーバのポート番号を入力します。
 - Microsoft の SMTP サービス : [SMTP サーバ] または [代替 SMTP サーバ] フィールドの値とし

て <SMTPSVC> を入力します。

制限事項 : 次の文字はサポートされていません。 _ . -

- **電子メール通知文字セット** : 警告がトリガされたときに、生成された警告の受信者に電子メール、SMS、またはページャ・メッセージで通知できます。次のいずれかの文字セットを選択できます。
 - **UTF-8** : 標準設定の文字セットです。
 - **ISO-2022-JP**

HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様へ : 本項で説明されている設定はユーザーにより異なります。

- **電子メールの送信者** : 警告電子メールの送信者名を指定します。
- **受信者通知の有効化** : 受信者に通知を送信しない場合、[false]に設定します。受信者に通知を送信する場合、[true]に設定します。
- **ページャ通知文字セット** : ページャ通知メッセージの送信に使用する文字セットを定義します。次のいずれかの文字セットを選択できます。
 - **UTF-8** : 標準設定の文字セットです。
 - **ISO-2022-JP**

HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様へ : 本項で説明されている設定はユーザーにより異なります。

- **許可されたメッセージ送信用のパスワード** : 許可されたメッセージ送信の標準設定パスワードを指定します。設定されていない場合、メッセージは許可なしで送信されます。
- **SMS 通知文字セット** : SMS 通知メッセージの送信に使用する文字セットを定義します。次のいずれかの文字セットを選択できます。
 - **UTF-8** : 標準設定の文字セットです。
 - **ISO-2022-JP**

HPSoftware-as-a-Service をご利用のお客様へ : 本項で説明されている設定はユーザーにより異なります。

- **SMTP サーバ (Windows のみ)** : 使用するプライマリ SMTP サーバを指定します。Windows NT で、SMTP を使用して送信する場合は <SMTPSVC> と設定します。
- **SMTP サーバポート (Windows のみ)** : SMTP サーバポートを指定します。
- **SMTP サーバソケット接続タイムアウト (秒) (Windows のみ)** : SMTP サーバソケットが切断されるまでの標準設定のタイムアウト (60 秒) を変更します。

注 : これは Windows オペレーティング・システムのみで使用されます。

- **許可されたメッセージ送信用のユーザー** : 許可されたメッセージ送信の標準設定ユーザーを指定しま

す。設定されていない場合、メッセージは許可なしで送信されます。

警告ログ

次のログを使用して, CI ステータス, SLA, EUM 警告をデバッグできます。

警告のタイプ	ログへのパスおよび ログレベル・セットアップのプロ パティ・ファイルへのパス	説明
すべての警告	ログ: < BSM データ処理 サー バ> \log\alerts\ alerts.ejb.log セットアップ: < BSM データ 処理 サーバ> \conf\ core\Tools\log4j\EJB\ alerts.properties	MercuryAs プロセスでの警告および通知処 理
	ログ: < BSM ゲートウェイ・ サーバ> \log\alerts\ alerts.reports.log セットアップ: < BSM ゲート ウェイ・サーバ> \conf\core\ Tools\log4j\EJB\ alerts.properties	すべての警告レポート

警告のタイプ	ログへのパスおよび ログ・レベル・セットアップのプロ パティ・ファイルへのパス	説明
CI ステータス警告 および SLA 警告	ログ: < BSM データ処理サー バ> \log\ marble_worker_ 1\status.alerts.log セットアップ: < BSM データ 処理サーバ> \conf\ core\Tools\log4j\marble_ worker\ cialerts.properties	MAR ビジネス・ロジック・エンジン・ワーカ・プロ セスでの警告の初期化および計算
	ログ: < BSM データ処理サー バ> \log\ marble_worker_ 1\status.alerts.downtime.log セットアップ: < BSM データ 処理サーバ> \conf\ core\Tools\log4j\marble_ worker\ acialerts.properties	MAR ビジネス・ロジック・エンジン・ワーカ・プロ セスでの警告のダウンタイム処理
	ログ: < BSM ゲートウェイ・ サーバ> \log>alerts\ alertui.log セットアップ: < BSM ゲート ウェイ・サーバ> \conf\core\ Tools\log4j\EJB\ alerts.properties	警告管理


警告のタイプ	ログへのパスおよび ログ・レベル・セットアップのプロ パティ・ファイルへのパス	説明
EUM 警告	ログ: < BSM データ処理サーバ> \log\alerts\ alert.rules.log セットアップ: < BSM データ処理サーバ> \conf\core\ Tools\log4j\marble_worker\ alerts-rules.properties	MAR ビジネス・ロジック・エンジン・ワーカ・プロセスでの警告の計算
	ログ: < BSM データ処理サーバ> \log\alerts\ alerts.rules.init.log セットアップ: < BSM データ処理サーバ> \conf\core\ Tools\log4j\marble_worker\ alerts-rules.properties	MAR ビジネス・ロジック・エンジン・ワーカ・プロセスでの警告の初期化
	ログ: < BSM データ処理サーバ> \log\alerts\ alerts.downtime.log セットアップ: < BSM データ処理サーバ> \conf\ core\Tools\log4j\marble_ worker\ alerts-rules.properties	MAR ビジネス・ロジック・エンジン・ワーカ・プロセスでの警告のダウンタイム処理

注: 特定の BSM 処理サーバでログのプロパティ・ファイルを変更した場合, その BSM 処理サーバ上のログにのみ変更が適用されます。

警告の詳細レポート

このレポートには、警告に使用可能なトリガ情報が表示されます。警告時の実際の条件も、このページに表示されます。
警告の詳細レポートの例を次に示します。

警告の詳細	
警告の詳細	
時間:	9/4/08 7:05 PM
重大度:	危険域
警告名:	Event.Fail
警告アクション:	電子メール送信先: sanity_recipient;
警告時のアクション ステータス	
警告時のアクションはありません。	
警告メッセージ	
Profile Name: Default Client_SanityBPM_1	
Severity: Critical	
Alert Name: Event.Fai	
Trigger Condition: ----- Transactions failed	
Current Description: ----- Transaction tx_2_failed failed.	
Triggered at location "labm1bac22_to_labm1amrnd42_2" on Thu Sep 04 7:05:42 PM 2008 (+0300) Triggered by host "labm1bac22_to_labm1amrnd42_2" (Group "Group1") Triggered during run of script "tx_fail" (Transaction "tx_2_failed")	
Transaction Error Message: 1.Action1.c(15): Error: error message for tx_2 failed	
User Message: N/A	
Mercury Application Management Web Site URL: Mercury AM URL	

アクセス方法	[CI ステータス警告] ページ, [SLA ステータス警告] ページ, または [警告ログ] レポートで,  をクリックします。
---------------	--

重要な情報	<p>CI ステータス警告の[警告の詳細]ページの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「構成アイテム・ステータス警告の通知レポート」を参照してください。</p> <p>SLA ステータス警告の[警告の詳細]ページの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「SLA ステータス警告の通知レポート」を参照してください。</p> <p>EUM 警告の[警告の詳細]ページの詳細については、『BSM ユーザ・ガイド』の「警告の詳細」を参照してください。</p>
--------------	--

トラブルシューティングおよび制限事項

このセクションでは、警告のトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

警告のトリガ条件が満たされている場合でも受信者が電子メールを受信していない

受信者が電子メールを受信していない場合、次の内容を確認します。

- 警告の定義が不適切な可能性があります。関連する警告管理で警告の定義を確認してください。
- データが期待どおりに処理されていないため、警告のトリガ条件が存在しない可能性があります。警告の計算ログを確認するか、特定のデータの元のログおよびレポートを確認してください。詳細については、[410ページ「警告ログ」](#)を参照してください。
- SMTP 電子メール・サーバとの接続に問題がある可能性があります。telnet <SMTP サーバのホスト名または IP アドレス> 25 を実行して、サーバが正常に動作することを確認してください。
- 受信者の電子メール・アドレスが無効な可能性があります。ユーザ・インタフェースで受信者の定義を調べて、手動で受信者に電子メールを送信してアドレスの有効性を確認してください。
- 受信者が警告電子メールをスパム扱いしている可能性があります。受信者の管理者に連絡して、スパム・フィルタの再設定を依頼してください。

第28章

EUM 警告通知テンプレート

定義済みのテンプレートを選択するか、通知に独自のテンプレートを設定して、EUM 警告通知のコンテンツと外観を決めることができます。

警告通知テンプレートは、BSM でさまざまなタイプの警告通知を送信するときに含める情報を指定します。使用可能な標準設定のテンプレートは、警告通知の各セクションで選択したパラメータで事前に設定されています。標準設定のテンプレートに含まれる情報の詳細については、[424ページ「\[通知テンプレート\]ページ」](#)を参照してください。

また、カスタム・テンプレートを作成することもできます。たとえば、警告通知の配信方法(電子メール、ページ、SMS)や受信者に応じて、異なるテンプレートを作成できます。カスタム・テンプレートは、[\[通知テンプレート プロパティ\]ページ](#)で定義されます。警告通知の各セクションには、選択可能なパラメータのリストが含まれています。カスタム・テンプレートに含めることができる情報の詳細については、[424ページ「\[通知テンプレート\]ページ」](#)を参照してください。

HPSoftware-as-a-Service カスタマ向けの注：通知テンプレートのリストには、標準設定の通知テンプレートが含まれています。これらの通知テンプレートは、HPSoftware-as-a-Service の担当者によって作成されたものや、組織で作成されたものです。

クリア警告通知テンプレート

警告スキーマを設定する場合、クリア警告通知を自動的に送信するように警告スキーマを設定できます。警告スキーマの作成時にこのオプションを選択する場合の詳細については、「EUM 警告スキーマの作成方法」を参照してください。

BSM では、クリア警告通知の標準設定テンプレートが自動的に使用されます。BSM で標準設定テンプレートが使用されないようにするには、独自のクリア警告テンプレートを作成します。クリア警告テンプレートは、既存の通知テンプレートに基づいている必要があります。次のような場合に、作成したクリア警告通知テンプレートが BSM で使用されます。

- 警告がトリガされている場合
- 既存のテンプレート(標準設定またはユーザ定義)に基づいて受信者に通知が送信される場合
- クリア警告を送信するように警告スキーマが設定されている場合

クリア警告通知テンプレートの設定の詳細については、419ページ「クリア警告通知のテンプレートの設定方法」を参照してください。

EUM 警告の通知テンプレートの設定方法

定義済みのテンプレートの選択, 既存のテンプレートの変更, または独自の通知テンプレートの作成を行って, 警告通知のコンテンツと外観を決めることができます。通知テンプレートの詳細については, 416ページ「EUM 警告通知テンプレート」を参照してください。

カスタム・テンプレートの作成

BSM では, プラットフォームで定義された異なる警告スキーマと受信者に対して異なる通知テンプレートを柔軟に作成できます。

すべてのテンプレートは, セクションに分類されています。各セクションに表示する情報を指定します。詳細については, 420ページ「[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

既存のテンプレートの管理

時間が経つうちに, 組織, 通知ポリシー, サービス・レベル監視契約などの変更に伴って, 作成した通知テンプレートの変更が必要になる場合があります。[通知テンプレート]ページを使用して, BSM で定義された通知テンプレートを編集, 複製, 削除します。詳細については, 424ページ「[通知テンプレート]ページ」を参照してください。

クリア警告通知のテンプレートの設定方法

定義済みのクリア警告通知のテンプレートの選択, 既存のテンプレートの変更, または独自のクリア警告通知のテンプレートの作成を行って, クリア警告通知のコンテンツと外観を決めることができます。通知テンプレートの詳細については, [417ページ「クリア警告通知テンプレート」](#)を参照してください。

注: 受信者に対して選択した通知テンプレートには, 通知テンプレート名に基づいたクリア警告テンプレートがあります。クリア警告テンプレートの命名の詳細については, [420ページ「\[通知テンプレート プロパティ\]ダイアログ・ボックス」](#)を参照してください。クリア警告の詳細については, 『BSM ユーザ・ガイド』の「[\[詳細設定\]タブ](#)」を参照してください。

クリア警告通知のテンプレートを作成, 変更, 管理するには, [424ページ「\[通知テンプレート\]ページ」](#)を参照してください。


EUM 警告通知テンプレートのユーザ・インタフェース

本項の内容

- 420ページ「[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックス」
- 424ページ「[通知テンプレート]ページ」

[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい警告通知テンプレートを定義できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none">• 新しいテンプレートを作成する方法 : [通知テンプレート] ページで [新規テンプレート] ボタンをクリックします。• 既存のテンプレートを編集する方法 : [通知テンプレート] ページで既存のテンプレートを選択して  をクリックします。
重要な情報	<p>クリア警告通知 : クリア警告通知を設定するには、クリア警告テンプレートのベースとして使用する通知テンプレートを選択して複製します。クリア警告通知を受信する可能性の高いユーザに選択した通知テンプレートに基づいて決定を行います。テンプレート名を変更するには、Copy of を削除して <code>_FOLLOWUP</code> (すべて大文字の1語) を追加します。テンプレートの詳細を必要に応じて編集します。クリア警告電子メールの件名、ヘッダ、警告固有の情報を含めることをお勧めします。</p> <p>例 : LONG 標準設定テンプレートに基づいてクリア警告テンプレートを作成する場合、クリア警告テンプレートに <code>LONG_FOLLOWUP</code> という名前を付けます。クリア警告テンプレートが <code>MyTemplate</code> というユーザ定義のテンプレートに基づいている場合、クリア警告テンプレートの名前は <code>MyTemplate_FOLLOWUP</code> になります。</p> <p>標準設定値 : <code>_FOLLOWUP</code> 文字列は、BSM によってクリア警告メッセージのテンプレート名として識別される標準設定の文字列です。</p> <p>カスタマイズ : <code>_FOLLOWUP</code> 文字列をカスタマイズできます。詳細については、419ページ「クリア警告通知のテンプレートの設定方法」を参照してください。</p>
関連タスク	419ページ「クリア警告通知のテンプレートの設定方法」

[全般情報]領域

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されません)。

UI 要素	説明
<挿入>	<p>セクションに追加するパラメータを選択します。必要なだけリストからテキスト・パラメータを繰り返し追加します。</p> <p>テキスト・パラメータの前後にフリー・テキストを追加します。このセクションで使えるテキスト・パラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">● 警告名 : 警告スキーマで定義された警告の名前。● 重大度 : 警告スキーマの警告に割り当てられる重大度のラベル。● HP BSM URL : BSM Web サイトの URL。● エンティティ名 : 警告にアタッチされている CI の名前。● エンティティタイプ : 警告にアタッチされている CI のタイプ。● 警告ユーザの説明 : 警告スキーマで指定した説明。● アクション結果 : 警告スキーマで指定した警告アクションの結果の説明。
メッセージ形式	メッセージの形式 ([テキスト]または[HTML])を選択します。
名前	<p>テンプレートの名前を入力します。</p> <p>可能であれば、使用するテンプレートの警告タイプ(電子メール、ページャ、SMS)や、このテンプレートを使用して警告を受信する受信者の情報を含むわかりやすい名前を使用します。</p>
件名	<p>BSM で電子メール、ページャ・メッセージ、SMS メッセージの件名に含める情報を指定します。</p> <p><件名 / ヘッダ / フッタの挿入リスト> でパラメータやフリー・テキストを追加して、カスタマイズした件名を作成します。必要なだけリストのパラメータを使用します。</p>

[ヘッダ]領域

この領域を使用して、警告通知の上部に表示される情報を指定します。<挿入>リストからパラメータを選択し、カスタマイズしたヘッダを作成するフリー・テキストを選択します。必要なだけリストのパラメータを使用します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されません)。

UI 要素	説明
<挿入>	<p>セクションに追加するパラメータを選択します。必要なだけリストからテキスト・パラメータを繰り返し追加します。</p> <p>テキスト・パラメータの前後にフリー・テキストを追加します。このセクションで使用できるテキスト・パラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">● 警告名 : 警告スキーマで定義された警告の名前。● 重大度 : 警告スキーマの警告に割り当てられる重大度のラベル。● HP BSM URL : BSM Web サイトの URL。● エンティティ名 : 警告にアタッチされている CI の名前。● エンティティタイプ : 警告にアタッチされている CI のタイプ。● 警告ユーザの説明 : 警告スキーマで指定した説明。● アクション結果 : 警告スキーマで指定した警告アクションの結果の説明。● エンティティ ID : 警告にアタッチされている CI の ID。

[警告固有の情報]領域

この領域を使用して、警告情報を通知に追加します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されず)。

UI 要素	説明
<<警告固有の情報の挿入リスト>>	<p>セクションに追加するテキスト・パラメータを選択します。必要なだけリストからテキスト・パラメータを繰り返し追加します。</p> <ul style="list-style-type: none">● トリガ条件 : 警告スキーマで指定した警告トリガ条件の説明。● 実際の詳細 : 警告時の実際の条件の説明。

[トランザクション]領域

この領域を使用して、BPM 警告タイプにのみ関連する BPM トランザクションの詳細を指定します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されず)。

UI 要素	説明
<挿入>	<p>セクションに追加するパラメータを選択します。必要なだけリストからテキスト・パラメータを繰り返し追加します。テキスト・パラメータの前後にフリー・テキストを追加します。このセクションで使用できるテキスト・パラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データ・コレクタ名 : 警告に関連するトランザクションを実行するデータ・コレクタの名前。 • スクリプト名 : 警告に関連するトランザクションを含むスクリプトの名前。 • トランザクション時間 : 警告の日時。 • トランザクションの詳細 : トランザクションの説明 (システム可用性管理で定義されている場合)。 • トランザクション名 : 警告に関連するトランザクションの名前。 • トランザクション・エラー : 警告時にトランザクション・エラーが発生した場合にトランザクションのデータ・コレクタによって生成されるエラー・メッセージ。 • 場所名 : 警告に関連するトランザクションを実行するデータ・コレクタの場所。

[フッタ] 領域

この領域を使用して、警告通知の下部に表示される情報を指定します。<挿入> リストからパラメータを選択し、カスタマイズしたフッタを作成するフリー・テキストを選択します。必要なだけリストのパラメータを使用します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します(ラベルのない要素は山括弧内に表示されません)。



UI 要素	説明
<挿入>	<p>セクションに追加するパラメータを選択します。必要なだけリストからテキスト・パラメータを繰り返し追加します。</p> <p>テキスト・パラメータの前後にフリー・テキストを追加します。このセクションで使用できるテキスト・パラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 警告名 : 警告スキーマで定義された警告の名前。 • 重大度 : 警告スキーマの警告に割り当てられる重大度のラベル。 • HP BSM URL : BSM Web サイトの URL。 • エンティティ名 : 警告にアタッチされている CI の名前。 • エンティティ・タイプ : 警告にアタッチされている CI のタイプ。 • 警告ユーザの説明 : 警告スキーマで指定した説明。 • アクション結果 : 警告スキーマで指定した警告アクションの結果の説明。 • エンティティ ID : 警告にアタッチされている CI の ID。



[通知テンプレート] ページ

このページには、標準設定テンプレートと定義済みのカスタム・テンプレートがリストされます。ここでは、標準設定テンプレートやカスタム・テンプレートの管理、新しいテンプレートの作成、クリア警告通知テンプレートの編集を行うことができます。

アクセス方法	[管理] > [プラットフォーム] > [受信者] > [EUM通知テンプレート]
重要な情報	<p>警告スキーマを設定する場合、クリア警告通知を送信して自動的に警告を補足するようにBSMに指示できます。警告スキーマの作成時にこのオプションを選択する場合の詳細については、419ページ「クリア警告通知のテンプレートの設定方法」を参照してください。</p> <p>BSMでは、クリア警告通知の標準設定テンプレートが自動的に使用されます。標準設定テンプレートが使用されないようにするには、独自のクリア警告テンプレートを作成します。既存の通知テンプレートを複製し、複製したテンプレートを変更することをお勧めします。</p> <p>次のような場合に、作成したクリア警告通知テンプレートがBSMで使用されず。</p> <ul style="list-style-type: none">警告がトリガされている場合既存のテンプレート(標準設定またはユーザ定義)に基づいて受信者に通知が送信される場合クリア警告を送信するように警告スキーマが設定されている場合受信者に選択した通知テンプレート(DEFAULT_POSITIVE_FORMAT)に通知テンプレートの名前に基づいたクリア警告テンプレートがある場合
関連タスク	418ページ「EUM 警告の通知テンプレートの設定方法」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	通知テンプレートを複製する場合にクリックします。選択した通知テンプレートが複製されます。複製した通知を編集できる[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、420ページ「[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	通知テンプレート・プロパティを変更する場合にクリックします。選択したテンプレートを編集する場合にクリックします。詳細については、420ページ「[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	<p>通知テンプレートを削除する場合にクリックします。選択したテンプレートが同時に削除されます。</p> <p>複数のテンプレートを同時に削除するには、各チェック・ボックスを選択し、テンプレート・リストの下部にある  ボタンをクリックします。</p>
新規テンプレート	<p>[新規テンプレート]ボタンをクリックすると、[通知テンプレート プロパティ]ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、420ページ「通知テンプレート プロパティダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
通知テンプレート名	<p>標準設定テンプレートおよびカスタム・テンプレートがリストされます。標準設定テンプレートは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">• DEFAULT_LOG_FORMAT : レポートに対応する標準設定の長い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。• DEFAULT_POSITIVE_FORMAT : ポジティブ警告またはクリア警告に対応する標準設定の長い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。クリア警告の詳細については、419ページ「クリア警告通知のテンプレートの設定方法」を参照してください。• LONG : 標準設定の長い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。• SHORT : 標準設定の短い形式の通知を作成するのに必要なすべての要素が含まれています。 <p>注 : 各テンプレートに表示されるパラメータの詳細については、420ページ「通知テンプレート プロパティダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

第6部分

トラブルシューティング

第29章

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、BSMの[プラットフォーム管理]領域で作業しているときに発生する可能性がある一般的な問題について説明します。

トラブルシューティング情報の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents) を使用してください。

本項の内容

- 427ページ「データ・コレクタ(RUM, TV, BPI, Diagnostics) から RTSM にアクセスするためのパスワードを変更する必要がある」
- 428ページ「[RTSM 管理] ページが読み込まれない」
- 427ページ「トラブルシューティングおよび制限事項」
- 428ページ「Java アプレットで読み込みに失敗する」
- 428ページ「ロード・バランサ経由で接続した後 UI が断続的に使えなくなる」
- 428ページ「ロード・バランサ経由で接続した場合に BSM ログイン・ページが表示されない」
- 428ページ「BSM のダイアログ・ボックスとアプレット(認証ウィザードなど) が正しく読み込まれない」
- 429ページ「BSM はインストールされているが、[ダウンロード] ページが空である」
- 429ページ「ポートに関する一般的な接続問題」
- 429ページ「BSM の接続がダウンしているが、Tomcat サーブレット・エンジンとJBoss アプリケーション・サーバは動作しているように見える」
- 430ページ「BSM にログインできず、JBoss アプリケーション・サーバの初期化に失敗する」
- 430ページ「ブラウザで BSM にアクセスできず、ヒープ領域不足に関するエラーが表示される」
- 431ページ「ブラウザが BSM にアクセスできないか、.jsp のソース・コードがブラウザのウィンドウに表示される」
- 431ページ「BSM がプロキシの背後に存在し、サーバ名がプロキシによって認識されない」
- 431ページ「ゲートウェイ・サーバまたはデータ処理サーバのホスト名が変更された」
- 431ページ「自動フェールオーバー後にプロセスで再起動が自動的に再開されない」

データ・コレクタ(RUM, TV, BPI, Diagnostics) から RTSM にアクセスするためのパスワードを変更する必要がある

デプロイメント時に必要に応じて[RTSM アクセス用パスワード]を設定し、BSM データ・コレクタ(Real User Monitor, Business Process Insight, TransactionVision など)とRun-time Service Model間の通信をセキュリティ保護することができます。このパスワードは、JMX コンソールを使用して後から変更できます。

JMX コンソールを使用して RTSM アクセス用パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザで JMX コンソールの URL(<http://<ゲートウェイまたはデータ処理サーバの名前>:8080/jmx-console/>) を入力します。(詳細については、25 ページ「JMX コンソールの使用」を参照)。
2. JMX コンソールの認証資格情報を入力します。認証資格情報がわからない場合、システム管理者にお問い合わせください。
3. [Foundations] ドメインで、サービス「RTSM passwords manager」を選択します。
4. `changeDataCollectorsOdbAccessPwd` を変更します。カスタム ID と新しいパスワードがパラメータとして取得され、すべてのデータ・コレクタのパラメータが新しいパスワードに変わります。

[RTSM 管理] ページが読み込まれない

[RTSM 管理] からのリンクが動作しない場合、次のいずれかの原因が考えられます。

- BSM ゲートウェイ・サーバから、アプリケーション・ユーザ URL の標準仮想サーバにアクセスできることを確認します。この URL は [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] にあります。[ファウンデーション] フィールドで、[プラットフォーム管理] を指定します。URL は、[ホストの設定] テーブルにあります。
- リバース・プロキシまたはロード・バランサを使用している場合は、上記の URL からログインしていることを確認します。

Java アプレットで「クラスが見つからない」エラーが表示され、読み込みに失敗する

プロファイル・データベースが作成済みであることを確認します。このデータベースは、プラットフォーム管理で手動で作成する必要があります。詳細については、70 ページ「データベース管理」を参照してください。

Java アプレットで読み込みに失敗する

[コントロールパネル] > [Java] > [インターネット一時ファイル] > [設定] を開き、[コンピュータに一時ファイルを保持する] チェック・ボックスが選択されていることを確認します。問題が解決しない場合は、同じ場所の [ファイルの削除] をクリックして Java キャッシュをクリアします。

ロード・バランサ経由で接続した後 UI が断続的に使えなくなる

BSM ではユーザ用の固定セッションが必要です。持続性の設定が **セッションによるセッション維持をオン** または **Destination Address Affinity** (ロード・バランサによって異なる) に設定されていることを確認します。

ロード・バランサ経由で接続した場合に BSM ログイン・ページが表示されない

- KeepAlive URI を確認します。詳細については、「ゲートウェイ・サーバの負荷分散」を参照してください。
- LW-SSO が動作するには、完全修飾ドメイン名 (IP ではない) を使用して仮想ホストとロード・バランサを設定する必要があります。

BSM のダイアログ・ボックスとアプレット (認証ウィザードなど) が正しく読み込まれない考えられる原因

クライアント PC の Java ファイルが古いことが考えられます。

解決方法 :

次の手順に従って Java キャッシュを消去します。

- [スタート] > [コントロールパネル] > [Java] に移動します。
- [インターネット一時ファイル] セクションで, [設定] をクリックします。
- [一時ファイルの設定] ダイアログ・ボックスで, [ファイルの削除] をクリックします。

BSM はインストールされているが, [ダウンロード] ページが空である

考えられる原因

コンポーネントのセットアップ・ファイルが, [ダウンロード] ページにインストールされていません。

解決方法:

[ダウンロード] ページにコンポーネントのセットアップ・ファイルをインストールします。Windows プラットフォームでコンポーネントのセットアップ・ファイルをインストールする方法の詳細については, 「コンポーネント・セットアップ・ファイルのインストール」を参照してください。

ポートに関する全般的な接続問題

BSM サーバによって使用されるポートがすべて, 同じマシン上のほかのアプリケーションによって使用されていないことを確認します。確認するには, コマンド・プロンプト・ウィンドウを開き, netstat (またはポート情報を表示できる任意のユーティリティ) を実行します。使用するポートを検索します。

<HPBSM ルート・ディレクトリ> \log\EJBContainer

jboss_boot.log で, 使用中のポートを検索することもできます。jboss_boot.log で「Port <> in use」と報告されているにもかかわらず, netstat ユーティリティを実行したときに該当するポートが使用中であることを確認できない場合は, サーバを再起動してから, BSM を起動します。

BSM に必要なポートの詳細については, 『BSM Hardening Guide』の「Port Usage」を参照してください。

ヒント: ポートの使用に関する問題のトラブルシューティングを行うには, 使用中のポートと, それらのポートを使用しているアプリケーションの一覧を表示するユーティリティを使用します。

BSM の接続がダウンしているが, Tomcat サーブレット・エンジンと JBoss アプリケーション・サーバは動作しているように見える

接続の問題としては, BSM にログインできない, Business Process Monitor がゲートウェイ・サーバに接続できないなどの問題があります。

考えられる原因

この問題は, TopazInfra.ini ファイルが空か壊れている場合に起こることがあります。

これが原因かどうかを確認するには, 次の手順を実行します。

1. ブラウザで「http://<ゲートウェイ・サーバ>:8080/web-console」と入力して JMX コンソールに接続します。

指示があった場合は, JMX コンソール認証アカウント情報を入力します(これらのアカウント情報がない場合は, システム管理者に問い合わせてください)。

2. [System] > [JMX MBeans] > [Topaz] の下で, [Topaz:service=Connection Pool Information] を選択します。
3. ページ下部にある [showConfigurationSummaryInvoke] ボタンをクリックします。[Operation Result] ページが空の場合は, TopazInfra.ini ファイルが壊れているか空になっています。

解決方法 :

この問題を解決するには、セットアップおよびデータベース設定ユーティリティを再度実行し、既存の管理データベースに再接続するか、または新しい管理データベースを定義します。TopazInfra.ini ファイルに問題が見つからない場合は、HP ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

BSM にログインできず、JBoss アプリケーション・サーバの初期化に失敗する

データベース・スキーマ検証プログラムを実行し、管理データベースが配置されているデータベース・サーバが稼動していることを確認します。詳細については、『BSM Database Guide』の「Database Schema Verification」を参照してください。

ブラウザで BSM にアクセスできず、ヒープ領域不足に関するエラーが表示される

BSM を利用できないため、後でログインを試行するように促すメッセージ・ボックスが開きます。

考えられる原因 1

<HPBSM ルート・ディレクトリ> \log ディレクトリ内のログ・ファイルにエラーがないかを確認します。

Windows 2003 Service Pack 1、および Windows XP Professional x64 Edition 用の Microsoft Security Update 921883 のために、700 MB を超える連続したメモリを使用しているアプリケーションにエラーが発生する場合があります。BSM JVM で使用されるヒープ・サイズは、768 MB のメモリを超えています。Security Update 921883 の詳細については、<http://www.microsoft.com/technet/security/Bulletin/MS06-040.mspx> を参照してください。

BSM サーバがダウンする場合は、サービスまたはプロセスの再起動時に、<HPBSM サーバのルート・ディレクトリ> \log\jboss_boot.log で、次のエラーを探してください。

```
Error occurred during initialization of VM (VM の初期化中にエラーが発生しました)
```

```
Could not reserve enough space for object heap (オブジェクト・ヒープのために十分な領域を予約できませんでした)
```

解決方法 :

Microsoft では、Microsoft サポートの利用者専用 Hotfix を用意していますが、次の Service Pack がリリースされるのを待つことをお勧めします。この Hotfix の詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/924054> を参照してください。

Security Update 921883 がすでにインストールされている場合は、次の手順を実行します。

- サイトにとって Security Update が重要でない場合
 - アンインストールして、Microsoft の次の Service Pack を待ちます。
 - Windows の自動更新を無効にして、Security Update 921883 が再びインストールされないようにします。
- サイトにとって Security Update が重要な場合は、Hotfix をインストールします。

考えられる原因 2

ページ・ファイルのサイズが小さすぎます。

解決方法 :

ページ・ファイルのサイズを、RAM のサイズの少なくとも 150% に設定します。サーバを再起動します。

ブラウザが BSM にアクセスできないか、.jsp のソース・コードがブラウザのウィンドウに表示される

BSM ページが存在しないことを示すメッセージ・ボックスが表示されます。

解決方法：

Jakarta フィルタ・パスが正しいことを確認します。BSM サーバをアンインストールしてから別のディレクトリに再インストールした場合などに、パスが正しくなくなることがあります。この場合、Jakarta フィルタ・パスは更新されず、リダイレクションで問題が生じる原因となります。

Jakarta フィルタ・パスを更新するには、次の手順を実行します。

1. IIS インターネット・サービス・マネージャを開きます。
2. ツリー内のマシン名を右クリックし、[プロパティ]を選択します。
3. [マスタプロパティ]リストに「WWW サービス」が表示された状態で、[編集]をクリックします。
4. [ISAPI フィルタ]タブを選択します。
5. [jakartaFilter]を選択して、[編集]をクリックします。
6. [フィルタのプロパティ]ダイアログ・ボックスで、現在インストールされている BSM のドライブとディレクトリを指すようにパスを更新します。
7. 変更内容を適用し、インターネット・サービス・マネージャを終了します。
8. IIS サービスを再起動します。

BSM がプロキシの背後に存在し、サーバ名がプロキシによって認識されない

この問題は Microsoft IIS サーバと Apache Web サーバの両方で発生します。

考えられる原因

Web サーバがブラウザ・ページを URL にリダイレクトするために、ユーザが入力したサーバ名がリダイレクト先の URL に置き換えられています。

解決方法：

プロキシ・サーバ・マシンの <Windows システム・ルート・ディレクトリ>\system32\drivers\etc\hosts ファイルに BSM サーバの名前を追加します。

ゲートウェイ・サーバまたはデータ処理サーバのホスト名が変更された

ホスト名が変更されたサーバにインストールされていた BSM にはそれ以上アクセスできず、サーバの名前を変更する必要があります。HP ソフトウェアのセルフ・ソルブ技術情報の記事 KM522738 (<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/document/KM522738>) を参照してください。

自動フェールオーバー後にプロセスで再起動が自動的に再開されない

高可用性コントローラの自動フェールオーバー・モードが有効になっており、管理データベースがしばらくの間ダウンした場合、一部のプロセスが停止し、管理データベースが通常の運用に戻っても自動的に再開しないことがあります。BSM ステータス・ページ (Windows オペレーティング・システムの [スタート] > [プログラム] > [HP Business Service Management] > [Administration] > [HP Business Service Management Status] からアクセスできる <HPBSM ルート・ディレクトリ> \AppServer\webapps\myStatus.war\myStatus.html) では、これらのプロセスのステータスに [STARTING] と表示されます。

解決方法：

管理データベースが再び使用できるようになったら、これらのプロセスを再起動します。